悪の大臣

kuma383

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪の大臣

【Ｎコード】
Ｎ９４２６Ｗ

【作者名】
ｋｕｍａ３８３

【あらすじ】
魔術師オリバーと、その仲間たちがリバー王国の悪の大臣に立ち向かう物語です。

むかしむかし、リバー王国という国では悪い大臣が王様を殺し、王女様を塔の中に閉じ込めてしまいました。大臣の悪い政治のせいで、国民は苦しんでいました。

そんなある日、一人の魔術師が二人の弟子を連れてリバー王国にやってきました。彼は大臣の魔の手から何とか逃げ延びた王族の一人に依頼され、大臣を倒すためにやってきたのです。彼は弟子や頼りになる仲間たちとともに大臣に立ち向かいます。

～物語に際して～（前書き）

リバー王国の王族、オットー様からの極秘の手紙をもらったオリバーは、悪の大臣、ギル大臣を倒すためリバー王国へ向かいました。行く手をさえぎる魔獣、禁じられた洞窟と王家の秘宝、闇の魔術師たちとの戦い、そして仲間との絆…。

果たしてオリバーたちはリバー王国の平和を取り戻すことができるのでしょうか？

～物語に際して～

この物語は、リバー王国という架空の国を舞台に起こる、魔術師オリバーとその仲間たちの活躍を描いた物語です。

なにぶん作者が素人で、その上無学なので、お見苦しい文章になるかもしれませんが、どうぞお許しください。

なお、某ＶＯＣＡＬＯＩＤの楽曲とは一切関係ないので、題名で期待された方はがっかりされると思います。

無駄に長い物語ですが、マイペースに更新して行くのでよろしくお願いします。

それでは物語の始まりです。

なお、この物語はフィクションです。実在の人物等にはまったく関連していません。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「1．冒険の序章」（前書き）

これははるか昔、リバー王国で起こったお話。

リバー王国は賢い王様が良い政治を行っていたため、人々はみんな幸せでした。

しかし、悪い大臣が王様を殺し、まだ若い皇女様を塔に閉じ込めてしまいました。それから大臣は自分に反対する者は家来だろうと民衆だろうと容赦なく殺し、人々は恐怖におののいていました。

物語は事件の三年後から始まります。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「1．冒険の序章」

一人の真っ黒いマントを身にまとった男がまだ若い二人のお供をつれて、ある一軒の崩れそうな小屋の前に立っていました。

（？）「オットー・フランツ様、魔術師オリバー・ローゼンハイン、ただ今参上いたしました。」

すると、中から一人の女性が慌てて出てきました。

（？）「シーッ。お静かにっ。」

（？）「…これは失礼いたしました。」

黒マントの男は深々と頭を下げました。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～

三人は中に通されました。薄暗い部屋の中で、一人の男性がベッドに横たわっていました。やつれてはいますが、どこか気品のある男性です。

このお方は悪い大臣に殺されそうになりましたがそれを振り切って何とか逃げることができたリバー王国の諸侯であり、王族のオットー・フランツ様です。入ってきた男は床にひざまずくと、丁寧に挨拶しました。

（？）「オットー様、魔術師オリバー・ローゼンハイン、只今参上いたしました。」

（オットー）「おお…、あなたがオリバー・ローゼンハイン殿か…。顔を見せてくれ。」

（？）「はっ。」

促され顔を上げたのは魔術師のオリバー・ローゼンハイン、この物語の主人公です。

（オットー）「遠路はるばる御苦労であった。まずは椅子にかけていただきたい。…その二人は？」

（オリバー）「はっ。私の弟子でございます。まだまだ未熟ではございますが…。ほら、お前たち、名前くらい自分で名乗ったらどうだ。」

オリバーに促され、二人の弟子は慌てて自己紹介をしました。

（ハンス）「ハンス・アルノルトでございます。」

（ペーター）「ペーター・ヘルマンでございます。」

（オリバー）「私の一番弟子と二番弟子です。…とはいえ、弟子はこの二人しかおりませんが…。」

（オットー）「ほう、意外だな。高名なローゼンハイン殿のこと、もっと大勢の弟子がおいでかと。」

（オリバー）「高名などとは…そんな、もったいない。」

（オットー）「謙遜するでない。でなければ余がわざわざ遠国からあなたに依頼したりなどはしない…。」

そこでオットー様は急に咳きこみました。

（オリバー）「オットー様、お体の具合が…。」

（オットー）「うむ…、気候が不安定で、少々体調を崩してしまったのだ…。だがこんなものは何でもない。それよりも依頼の件だ…。…しかし、依頼の内容をいっさい伝えていないのに、よく来てくれたな…。」

（オリバー）「リバー王国の窮状はかねがね耳にはさんでおりましたので。そこへ王族のあなたからの依頼が舞い込んでまいりました。行かぬわけにはゆかない、と…。」

（オットー）「かたじけない…。…余の依頼は、リバー王国王家の再興、だ。この国のどこかの洞窟に隠されているという初代王、リバール王の秘宝を探し出し、更に塔の牢獄に幽閉されているヘルガ王女を助け、圧政を続けるギル大臣を倒してほしいのだ。」

（ハンス）「そ、そんな！」

（ペーター）「そんなこと、自分の国の人でやれば、」

（オリバー）「ハンス！ペーター！黙れ！…申し訳ございません。この者たちがご無礼なことを…。」

文句を言う二人の弟子を、オリバーは叱り飛ばしました。

（オットー）「いや、お供の言うことが正論だ。…しかし、知っての通りこの国はヨーゼフ王が殺されて以来、あのギル大臣の専制政治化にある。国民はその怒りを恐れ、何も抵抗できないのだ…。」

（オリバー）「…それで外部の人間である我々に依頼した、と？」

（オットー）「そうだ。それに、ギル大臣の部下には魔獣を扱う者もいる。この国にはそのようなものと渡り合えるものがそういないのだ…。」

（オリバー）「なるほど…。状況は把握しました。」

（オットー）「依頼を…受けてくれるか？無論、あなたの意見は尊重するつもりだ。断るのならそれでも一向に構わない。」

オリバーは笑顔を見せると答えました。

（オリバー）「もちろんお請けさせていただきます。専制政治で苦しむ国民を見捨てるわけにはいきません。」

（オットー）「そうか…、ありがたい。」

オットー様はまた激しく咳きこみました。

（オリバー）「オットー様！」

（オットー）「…大丈夫だ。何もないが、今日はここに泊まり、明日街へ旅立つといい。」

（オリバー）「いえ、我々も旅の生活には慣れております。少しでも先に進んで早めに街に入り、まずは情報を集めたいと思います。」

弟子の二人が今日は部屋の中で眠れると思ったのに…とブツブツ言っていたので、オリバーは弟子たちの足を思い切り踏みました。

（オットー）「そうか…。それならばオーベルクという街のこの宿屋に行くといい。拠点にするには調度いい。余の名前も使える。…それでは前金として、当面の資金を与えよう。クララ、持ってくるのだ。」

（クララ）「はい。」

オットー様に呼ばれて部屋に入ってきたのは、先ほどオリバーたち

を案内した女性です。

（オットー）「妻のクララだ。余が倒れた後もしっかりと看病してくれる。」

（クララ）「…これを。」

クララ様がオリバーに木箱を与えました。

（オットー）「これでしばらく宿代は困らないはずだ。足りなくなったらまた言ってくれ。…それと、これが推薦状だ。宿屋で見せるといい。」

（オリバー）「ありがとうございます。…では、私たちはこれにて失礼させていただきます。」

（オットー）「よろしく頼んだ。」

オットー様とオリバーはしっかりと握手をしました。そして、オリバーは一礼すると、小屋を後にしました。

～～～

～～～

街道を歩いていた三人はやがて峠に差し掛かりました。すると、前から一人の農夫がものすごい勢いで走ってきました。

（ペーター）「どうしたんだ…？」

「助けてくれーっ！魔獣に追われてるんだーっ！」

（ハンス）「魔獣に！？」

（オリバー）「下がっていてください！ハンス！ペーター！行くぞ！」

（ハンス・ペーター）「はいっ！」

ハンスは槍を、ペーターは剣を抱えて狼のような魔獣に向かって行きました。

（三匹…四匹…五匹だな）

オリバーは状況を確認すると、横からハンスに噛みつこうとする魔

獣に向かって指を向け、叫びました。

（オリバー）「カースアタック！」

すると、オリバーに指を向けられた魔獣が急に苦しみ出しました。
オリバーは次々に叫びます。

（オリバー）「カースアタック！」

苦しみ出した魔獣にハンスとペーターがとどめを刺して行きます。
あっという間に魔獣たちはみんな倒されてしまいました。

（オリバー）「ふうっ…。大丈夫でしたか？」

「ありがとう。助かったよ。」

農夫は心からオリバーたちにお礼を言いました。

（ペーター）「この辺は魔獣がたくさんいるんですか？」

「ギル大臣が国を治めるようになってからだね。よくわからねぇけ

ど、リバール王の秘宝を探すのに必死になって、間違って禁じられた洞窟の封印を解いちまったらしい。それ以来、魔獣がうろうろするようになっちまってさ…。」

（オリバー）「禁じられた洞窟？それはいったいどこにあるんですか？」

「北の山脈のふもとの樹海の中らしいよ。まあ、洞窟というよりは縦穴って感じらしいけどな。」

（いずれ行ってみるか…。何か手掛かりがあるかもしれないしな）

（オリバー）「ありがとう。じゃあ、お気をつけて。」

オリバーたちは農夫と別れました。

～～～

（ペーター）「何か拍子抜けだなぁー。」

（オリバー）「バカを言うな。あれは最下級の魔獣だ。…まだ魔術師として駆け出しの頃に最上級クラスの魔獣と戦ったときの話をしただろ？」

（ハンス）「俺、詳しくは聞いてませんよ。何があったんですか？」

（オリバー）「何とか勝つことはできたんだがな、優秀な指揮官に率いられていたにも関わらず、百人ほどで向かって、生き残ったのは六人だ。そこでペーターの兄貴も死んだ。…生き残った中でも一人は片腕を失い、別のやつは未だにベッドから起き上がることができない。」

（ペーター）「…先生、よく生き残れましたよね。」

（オリバー）「悪運だけは強かったからな。…しかし、この魔獣退治はなかなかいい資金稼ぎの材料になりそうだ。お前たちも経験を積める。それと…もっと仲間も必要だな。」

（ハンス）「俺たちだけじゃ不足ですか？」

（オリバー）「ああ。」

（ハンス）「即答って…。」

（オリバー）「まあ、現地に詳しい仲間がいるとこちらもやりやすい。…もっとも、現状を聞いた段階ではなかなか難しいかもしれないがな。…どうやら天気が悪くなってきたようだな。少し急ぐぞ。」

オリバーたち三人は少し足を速めて峠道を歩いて行きました。

～～～

～ハンス・アルノルト～
・「一番弟子」。
・１４歳。
・槍で戦う。剣も少しだけなら扱える。
・一人称は「俺」。
・ペーターより年下だが、弟子になったのはハンスが先。魔術師によって荒廃した村からオリバーが彼を保護し、弟子にした。初恋の相手はペーターの妹だが、口が裂けても言えない。まだまだ未熟なため、騙されやすい面もある。やさしい性格なので後々に登場する女性メンバーからもけっこう信頼されている。

～ペーター・ヘルマン～
・「二番弟子」
・１６歳。
・剣で戦う。やりも少しだけなら扱える。
・一人称は「俺」。
・オリバーの親友の弟。まだまだ経験不足だが、オリバーの期待にはいつもしっかりと応える。ただ、少し相手を見くびりやすい傾向もあり、仲間たちには子ども扱いされている。実際大人になるにはまだまだ時間がかかりそう。少し不真面目な性格なので後々に登場する女性メンバーからの信頼を得るにはまだまだ時間がかかりそう。

＊オットー・フランツ、クララ・フランツに関しては後々紹介いたします。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「1．冒険の序章」（後書き）

さあ、ついに冒険が始まりました！！オリバーたちはギル大臣を倒すことができるでしょうか？

次話ではオリバーたちがリバー王国の商業都市・オーベルクに到着します。そこでは物語の間ずっとオリバーたちをサポートしてくれるある人物との出会いがあります。どうぞお楽しみに！

…ちなみに魔術の名称が安直なものになってしまっていますが…、もう少しよく考えればよかったかなと後悔しています。

では次話をお楽しみに！！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「2．宿の主人」（前書き）

リバー王国諸侯のオットー様から悪の大臣ギルを倒すことを依頼されたオリバーたちは大きな街に到着しました。はたしてこの街ではどんなことが起こるのでしょうか？

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「2．宿の主人」

オットー様の隠れ家を出て二日目、オリバーたちは街道沿いの大きな街に着きました。

（オリバー）「うん…。ここは何本か大きな街道も集まっているから交通の便もいい。しばらく拠点とするにはちょうどいい場所だな。」

（ペーター）「それにしても先輩…、何してるんですかね?宿を探しに行ってからかなり経つのに…。」

ペーターが心配そうに言うと、前からハンスが走ってきました。

（ハンス）「先生!先生!」

（ペーター）「遅いッスよ、先輩!」

（オリバー）「どうだ、オットー様に言われた宿屋は見つかったか?」

（ハンス）「ばっちりですよ!行きましょう。」

～～～

（ヴォルフ）「あんた、長旅の人かい？」

（オリバー）「まあ、そんなところかな。しばらくはここに滞在するつもりだけど。」

（ヴォルフ）「そうかい。…ここの街の名前はオーベルクだ。賑わってるだろ？」

（オリバー）「ああ、そうだな。」

（ヴォルフ）「…数年前まではもっとすごかったんだぜ？ここには四方から街道が集まってるからな、あちこちの品がここに集まって、毎日のように市が開かれてた。だが…、」

（オリバー）「ギル大臣が政務をおこなうようになってからはおかしくなった、と…。」

（ヴォルフ）「…ああ、そうだ。いろんな品物に高い税金をかけたからな。東西南北の交流も、衰退しちまったわけだ。」

少し声を小さくしたヴォルフは、それからオリバーをジロジロ見ま

した。

（ヴォルフ）「…それにしても、あんた普通の旅人じゃないね？弟子が持っている武器、護身用にしちゃあやけに立派すぎる。それにあんたのその指輪…。」

ヴォルフはオリバーの指に光る黒い指輪を見て言いました。

（ヴォルフ）「…あんた、魔術師だね。しかも、相当経験を積んでる。」

（オリバー）「ハハッ、なかなか鋭いね。…話に夢中になってこれを出すのをすっかりと忘れてた。」

オリバーは鞄からオットー様からもらった推薦状を出し、ヴォルフに渡しました。

（ヴォルフ）「オットー様!?これは…いや、確かにオットー様の文字だ。そうか…。あんた、オットー様に依頼されて…。…ここで話すよりもあんたの部屋で話そう。何かと物騒だからな。リリー、ここを代わってくれ。」

ヴォルフは床を掃除していた女性に声をかけました。

（リリー）「はいよ。」

（ヴォルフ）「妻のリリーだ。」

（オリバー）「しばらくお世話になります。」

（リリー）「はいはい、備品を壊したりしないでね。」

～～～

（ヴォルフ）「もともと交通の要衝だからな、いろんな情報が集まってくる。ただ…最近は関所の審査が厳しくなっちまったからな…。」

（ペーター）「ああ、関所かぁ…。」

彼らもここへ来るときに関所を通ってきていました。

（ハンス）「通行するだけであんなに税金を取られるなんて…。」

（ヴォルフ）「ギル大臣が民衆から巻き上げてるからな。人の流れも悪くなっちまったよ。」

（オリバー）「つまり、仲間を探すには自分たちで待つよりもこっちから行った方が安全なわけだ。」

（ヴォルフ）「そうだな。…わざわざオットー様が依頼したやつだ、信用もおけるんだろう。旅に出るときは言ってくれ。関所の通行料くらいは出してやる。」

（ペーター）「じゃあ、宿代も！」

（ヴォルフ）「おいおい、そこまで無料奉仕するつもりはないぜ？まあ、格安の値段にはしてやるがな。」

（オリバー）「ありがとう、助かるよ。…あと、この街にも仲間に出来そうなやつがいたら教えてくれないか？」

（ヴォルフ）「うーん…、剣士が一人はいるが、あいつは気まぐれだからなぁ…。いつどこにいるか全く見当がつかん。時々ひょっこりここに来るんだが。」

（オリバー）「そうか。ここに来るならその時に声でもかけてみればいいか。…それと、この辺で簡単に金を稼げるとしたら、やっぱり魔獣狩りか？」

（ヴォルフ）「手っ取り早いのはそうだな。やつらは最近街の近くにも現れるようになった。俺のところにもそれくらいの情報は入ってくる。もし情報が入ったら声をかけることにするか？」

（オリバー）「そうしてもらえると助かる。」

（ヴォルフ）「ま、出来る範囲でなら俺も協力はしてやるよ。そういうことだ、俺は晩飯の仕込みをしてくるよ。」

ヴォルフはそういうと、部屋を出て行きました。

～～～

（ヴォルフ）「毎日作ってりゃあ、嫌でもうまくなるさ。」

その時、奥からリリーがやってきました。

（リリー）「お客さん、これから長くここにいるんでしょ？お近づきの印に、これ食べてよ。私がつくったんだけどね。」

リリーがテーブルに置いたものを見て、オリバーたちは言葉を失いました。

（ペーター）「あのー…、これは？」

（リリー）「見てわからない？クッキーだよ。」

それはクッキーというより、『焦げ付いた何か』でした。リリーは何故か延し棒を持ったまま笑っています。ヴォルフがオリバーの耳元で、

（ヴォルフ）「食えっ、食ってくれっ。じゃないと血の雨が…。」

と言っています。

（オリバー）「…ハンス、食え。」

オリバーの言葉に、ハンスは顔を真っ青にしました。

（ハンス）「ええっ!?でも俺よりペーターの方が弟弟子…、」

（オリバー）「お前が一番年下だ。食え。」

自分の先生の言うことには逆らえません。ハンスは意を決してそのクッキーを食べました。

（リリー）「どう?おいしい?」

ハンスは涙をこらえながら首を縦に振っています。

（リリー）「よかった!まだまだたくさんあるから、食べたかったらいつでも言ってね。」

リリーは意気揚々と引き揚げて行きました。

（ハンス）「せっ、先生！外に行ってきます！」

ハンスは顔を真っ青にして外へ飛び出して行きました。気の毒そうにハンスを見送るヴォルフに、オリバーが問いかけました。

（オリバー）「…リリーは侍女長だったんだろ？」

（ヴォルフ）「…料理だけは担当外だ。」

（オリバー）「ああ…なるほど…。」

（ペーター）「先輩、大丈夫かな…？」

～～～

ハンスがふと顔を上げると、宿の窓から中を覗いている人影が見えました。

（女の子…？）

（ハンス）「…ねえ、何してるの？」

ハンスが声をかけると、その人影はピクッと体を震わせました。そしてハンスを見ると、慌てて走り去ってしまいました。

（ハンス）「あ、ちょっと、ねえ！…一体なんだったんだ？」

ハンスは首をかしげました。そして宿の中に戻ろうとしましたが、あまりの気持ちの悪さに座り込んでしまい、それからしばらく立ち上がることができませんでした。

～～～

～ヴォルフ・ザックス～
・「宿の主人」
・３６歳。
・一人称は「俺」
・オリバーたちがオーベルクで滞在する宿の主人。もともとはオットー様直属の護衛兵だった。家来の中でも最もオットー様に忠義を尽くす男であり、オットー様も彼に全幅の信頼を置いている。とても強い男だったのだが、オットー様を逃がす時に怪我をしてからはあまり戦うことができない。料理が上手い。

～リリー・ザックス～
・「ヴォルフの妻」
・３８歳。
・一人称は「私」
・ヴォルフと共にオーベルクで宿をやっている。料理は下手。元はオットー様のお城の侍女長。料理は下手。世話好きでみんなに好かれている。料理は下手。傷ついて帰って来た仲間たちの手当てもしてくれる。料理は下手。ヴォルフはリリーの尻の下に敷かれているらしい。料理は下手。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「2．宿の主人」（後書き）

今回登場したヴォルフとリリーは、冒険の仲間にはなりませんが、物語の最後までオリバーたちをサポートしてくれます。

次話ではついにオリバーたちに最初の冒険の仲間が加わります。はたしてどんな仲間でしょうか…？どうぞお楽しみに！

それにしても、リリーの料理は一体どんな味がするのでしょうね…？

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「3．最初の仲間」（前書き）

オリバーと二人の弟子は、オーベルクという街のヴォルフの宿を拠点とすることになりました。オリバーたちは旅の疲れからか、部屋でぐっすり眠っていましたが、誰かが彼らの部屋に向かって走ってきたようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「3．最初の仲間」

オーベルクに到着した翌朝、オリバーたちはいきなり部屋に飛び込んできたヴォルフに叩き起こされました。

（ヴォルフ）「起きろ！仕事だぞ！」

（オリバー）「な、何？」

オリバーは眠い目をこすりながら起き上りました。

（ヴォルフ）「ここから少し南に行ったところにある村のそばに魔獣が出現したらしい。」

（オリバー）「わ、わかった。ハンス！ペーター！起きろ！」

（ヴォルフ）「弁当の用意は出来ているからな、下で待ってるぞ。」

（オリバー）「…念のため聞いておくが、」

（ヴォルフ）「ああ、安心しろ。俺が作った。」

（オリバー）「…それならいい。」

～～～

（オリバー）「いや…相手の出方を見よう。」

オリバーは何かが隠れた木の影をじっと睨みながら言いました。

～～～

（ペーター）「前に峠で戦ったあの狼のような魔獣がよく出るらしいですね。」

（オリバー）「油断はするなよ。あいつらはすばしっこい。常に相手を視界に入れて戦うようにしろよ。」

（ハンス・ペーター）「はいっ。」

その時、魔獣のものと思われる遠ぼえが聞こえました。

（オリバー）「…あっちだ。行くぞ。」

三人は駆け出しました。しかしオリバーはやはり背後からの気配を感じていました。

（まさか俺たちをここへ誘い込む…？いやしかし、だとしたら、あまりにも遠くからついてきすぎている…）

～～～

（ハンス）「こんなにたくさんいるなんて…。」

（オリバー）「俺がまず魔術であいつらを攻撃する。それが見えたら横から切りかかれ。」

（ハンス）「はい。」

（ペーター）「わかりました。」

オリバーは弟子たちが指示した位置に着いたのを確認すると、高らかに叫びました。

（オリバー）「カースアタック！」

固まって何かを食べていた手前の三匹の野獣が一気に吹き飛びました。オリバーは一気に空き地に飛び出しました。オリバーは野獣が食べていたものを見て、思わず目を覆いたくなりました。

（旅人の格好…オーベルクに行く途中で襲われたのか…。くそっ！）

（オリバー）「カースアタ、うおっ！」

無惨な旅人の死体を見て一瞬気をそらしてしまったオリバーは、真横から襲ってきた魔獣に気がつきませんでした。辛うじてよけましたが、茂みの中に倒れこんでしまいました。

（ハンス・ペーター）「先生！」

（オリバー）「俺にかまうな！カースアタック！」

オリバーは呪文を唱えて魔獣を吹き飛ばし、立ち上がろうとしました。

（くそっ、茂みに足が絡まってる！）

オリバーは倒れた体勢のまま応戦していましたが、素早い動きの魔獣にどんどん追い詰められてきました。ハンスとペーターも数の多さに苦戦しています。とうとう一匹の魔獣が助走をつけて飛びかかってきました。

（オリバー）「カース、」

オリバーが呪文を唱えようとした瞬間、突然後ろから何かが飛び出してきて、短剣で魔獣の喉を切り裂きました。そして驚くオリバーの足元の茂みを短剣で切り払いました。よろめきながら立ち上がると、オリバーは大きな声で唱えました。

（オリバー）「ハンス！ペーター！下がれ！…カースレイン！」

オリバーの指先から真上に黒い閃光が上がったかと思うと、空き地にものすごい勢いで降り注いできました。魔獣たちは次々と倒れました。まだ息のある魔獣にはハンスとペーターがとどめを刺して行きました。

オリバーは荒い息でその様子を見ていました。

（この魔術は…体力のほとんどを使っちまうからなぁ…）

（ハンス）「先生！片付きました！」

（ペーター）「こっちもです！」

（オリバー）「あ、ああ。御苦労さん…。」

（ハンス）「それにしても珍しいですね、先生がわざわざあの危険な魔術を使うなんて…。」

（ペーター）「苦戦してましたしね…。」

（オリバー）「心配をかけて悪かった。あの旅人の食い荒らされた死体を見て動揺してしまった…。俺もまだまだだな。…実は、追いつめられたときにあの子が助けてくれたんだ。」

オリバーが一本の木を指さしました。ぼろぼろの服を着て、短剣を手にした一人の少女がそこにいたのですが、ピクッと震えると木の陰に隠れてしまいました。

（オリバー）「いやぁ、すまない。術を使うつもりはない。顔を見せてくれ。」

オリバーが呼びかけると、少女がほんの少し顔をのぞかせました。それを見てハンスがびっくりしました。

（ハンス）「あれ？昨日宿の外にいた子じゃないか！」

ハンスの大声に、また少女はピクッと体を硬直させました。が、恐る恐るオリバーたちに近づいてきました。

（オリバー）「すると…、今朝から俺たちの後をつけてたのは君だったのか？」

少女はコクンと頷きました。

（ペーター）「何だよー、人騒がせだなー。でもどうして俺たちをつけてきたんだ？」

すると少女はうつむきながら消え入りそうな声で言いました。

（？）「仲間…。」

（オリバー）「…もしかして、仲間になりたいのか？」

少女はまたピクッと体を硬直させましたが、同じようにコクンと頷きました。

（ハンス）「何だよー、それならそうだって、昨日の夜に言ってくれればいいのに。」

（オリバー）「俺たちも一人でも多くの仲間が必要だ。これからよろしくな。俺はオリバーだ。」

（ハンス）「俺はハンス。」

（ペーター）「俺はペーターだ。」

（ローズ）「…ローズ。」

（オリバー）「ローズ、か。いい名前じゃないか。」

ローズはオリバーの言葉にびっくりしたようでしたが、少し嬉しそうな表情を見せました。

（オリバー）「…よし、ここでの仕事も終わったし、もう少し休憩したら長老から報酬をもらってオーベルクに帰るとしよう。あの技は本当に体力を使う…。」

（ハンス・ペーター）「わかりました。」

～～～

そしてヴォルフの宿のカウンターで…、

（ヴォルフ）「…なるほどね、じゃあ、宿代は一部屋分追加だね。」

（ハンス）「ええーっ？」

（ヴォルフ）「…お前たちは夜ローズと一緒の部屋で寝るのか？」

（ハンス）「い、いや…。」

（ペーター）「それは…。」

（ヴォルフ）「同じ部屋に寝るんなら構わないが、二部屋使うんなら話は別だ。」

（ハンス）「とほほ…。」

（ヴォルフ）「報酬もたっぷりもらったんだろ？安くしてやってる分だけありがたいと思え。」

ヴォルフは苦笑いしながら言いましたが、そのあとで少し感慨深げな表情を見せました。

（ヴォルフ）「…それにしても、ローズが人に懐くなんてねぇ…。」

（ペーター）「え?ヴォルフさん、ローズのこと知ってるの?」

（ヴォルフ）「ああ、オーベルクじゃちょっと名の知れた存在だからな。」

（ハンス）「ひ、人に懐くって…、もしかしてローズは人じゃない、とか?」

（ヴォルフ）「バカ言え。あいつは正真正銘の人間だよ。…孤児なんだ、あいつは。」

（ハンス・ペーター）「…孤児?」

ヴォルフがローズの境遇を二人に話し始めました。

（ヴォルフ）「もともとはオーベルクの領主だった古くから続く良

家、ミニエー家の末娘だったんだがな、その頃から対立していたギル大臣に一族を焼き討ちされたんだ。

何とか逃げ延びたローズは当時はまだ幼かったし、さる権力者の命乞いもあって見逃されたんだが、一族が処刑されるときは連れていかれて最前列でその様子を見せられたんだ。ミニエー家の生き残りも何かしらの嫌疑をかけられて最近公開処刑された。

…あの事件があったのももう十三年前の話だ。それ以来、道端で物売りをしながら暮らしていたってわけだ。…だが、街の連中が金や食い物を恵もうとしても、絶対に受け取ろうとしないんだ。

人間不信にでもなってるのかと思っていたが…まさか外から来たオリバーに懐くとはな…。」

（ハンス）「ローズも大変なんだなぁー…ん？ねえ、ヴォルフさん、その十三年前の事件の時、ローズは何歳だったの？」

（ヴォルフ）「確か…五歳か六歳だったかな？今は十八、九ってところか。」

（ハンス）「…俺たちより、」

（ペーター）「…年上だったんだ…。」

少しショックを受けたようなハンスとペーターを見て、ヴォルフはまた苦笑いしました。

（ヴォルフ）「まあ、あの外見はどう見ても十三、四歳だな。…ところでオリバーとローズはどこへ行ったんだ?」

（ペーター）「ローズがボロボロの服着てるから、新しい服を買いに行ったんだよ。しかも先生の自費で。」

（ハンス）「まったく、俺らのは『そのくらい自分で買え』って言うくせにさ…。」

（ヴォルフ）「何を言っているんだよ、もしお前らがオリバーの立場でも、同じことを言うだろ?」

（ペーター）「そりゃあ、たぶん、そうですけど…。」

その時、宿の扉が開きました。

（オリバー）「おーい、帰ったぞ。」

オリバーがローズを連れて帰ってきました。

（ハンス）「何だ、女の子っぽい服を着るのかと思ったら、そうでもないね。」

（オリバー）「俺たちと一緒に冒険するから、動きやすい服がいいんだってさ。あとヴォルフ、言われてたものも買ってきたぞ。」

（ヴォルフ）「ああ、ありがたい。」

（ペーター）「…先生、ローズが俺たちより年上だって知ってました？」

（オリバー）「ああ、さっきローズから聞いたよ。俺よりは年下だがな。」

（ハンス）「やっぱり俺たち、『ローズさん』とかって呼んだほうがいいのかな？」

（ローズ）「別に…いい。ハンスたちの方が先輩だから…。」

（オリバー）「ヴォルフ、ローズの部屋は？」

（ヴォルフ）「ああ、あんたらの部屋の隣だ。…うん、こいつを買ってきてくれたなら、ローズの部屋の代金は三日分タダでいいぞ。」

（ハンス）「ええーっ？」

（ペーター）「何を買ってきたんですか、先生。」

（オリバー）「…解毒薬だ。あとは…察しろ。」

（ハンス・ペーター）「…あ。」

ハンスとペーターはまるで毒のようなリリーの料理を思い出し、硬直しました。

（ヴォルフ）「まあ、何はともあれ、仲間が増えてよかったな、オリバー。…ローズもしっかりとオリバーたちの力になれよ。」

ローズは相変わらずピクッと震えた後でコクンと頷きました。オリバーたちは思わず笑顔になりました。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「3．最初の仲間」（後書き）

記念すべき最初の仲間、ローズがオリバーたちと行動を共にすることになりました。ローズにはすぐにある感情があらわれるようですが…？

次話では心強い二人の人物がオリバーの仲間に加わります。そのうちの一人は、オリバーと過去に面識があったようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオーベルクはリバー王国のほぼ中心に位置しています。そのため、東西南北に延びる街道がだいたい集まってきているのです。ただ、後々に物語の中で出てきますが、首都ではありません。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「4．鉄血の騎士と笑顔の魔女」（前書き）

オリバーの仲間に、新しくローズが加わりました。オリバーたちは情報収集のために今日はオーベルクの街を歩いていました。はたして今日は何が起こるのでしょうか…？

なお、ご指摘があったので、今回のお話は一度台本形式の会話を普通にしてみようと思います。ご指摘を頂けるのは大変うれしいので、可能か不可能かは別にしてもどんどんご指摘していただければと思います。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「4．鉄血の騎士と笑顔の魔女」

ローズが仲間になってから三日後、オリバーは三人を連れてオーベルクの街を歩いていました。街中を流れる川にかかる橋の上で、ハンスがつぶやきます。

「へえ！ここが豪商のヴァルトシュタイン家か…。大きなお屋敷だなぁ…。」

そんなハンスを見ながらオリバーは考え込んでいました。

（この街で仲間になってくれそうな人はもういないか…。まあ、ローズが仲間になっただけでも大きな収穫だ）

「おーい！君はもしかしてオリバー・ローゼンハインじゃないかい？」

オリバーは後ろからした声にびっくりして振り返りました。立派な鎧を着た騎士が、きれいな白馬に乗っています。その姿を見た瞬間、オリバーは顔をほころばせました。

「お前は…パトリックか！懐かしいな！」

「先生、この人は…？」

ハンスとペーターは怪訝そうな顔をしています。

「ああ、俺の昔の仲間だ。名前はパトリック。『鉄血の騎士』とも呼ばれてる。」

「ええっ！？『鉄血の騎士』って、あの勇敢なことで有名な…。先生、そんな方とお知り合いだったんですね！」

パトリックと紹介された男は少し照れくさそうにしました。

「私はそんなにすごい人間じゃないよ。ここで立ち話もなんだし、あそこのカフェで座って話そうじゃないか。積もる話もあることだし。」

～～～

「すると、パトリックさんは先生と一緒に魔獣との戦いで生き残った六人のうちの一人、ってことですか？」

「ああ、そういうことになる。」

「もう何年も昔の話だね。懐かしいものだよ。…しかし、オリバー、君には弟子ができたようだね。」

「ハハッ、いろいろ曰くつきで俺が引き取ることになっただけさ。ハンスもペーターも魔術を身につけようとは思っていないようだし、正式な意味の弟子とは少し違うかもな。」

「君のことを先生と呼んで慕っているんだ、ちゃんとした弟子さ。こんなにかわいらしい女性も君の弟子かい？」

ローズは突然話題に上がったことに驚いて体を硬直させました。

「ああ、いや、ローズは三日前に仲間になったんだ。」

オリバーが説明すると、パトリックは不思議そうな顔をしました。

「三日前に？…どうもいつもとは様子が違うようだね。こんな旅先でわざわざ仲間をつくるなんて。基本的に君は地元から仲間を連れて行くじゃないか。」

「まあ、ハンスとペーターがそうなんだがな。…実は今、極秘の任務を仰せつかっているんだ。」

「そんな大事なことを私に話して大丈夫なのかい？」

「お前が昔の仲間に悪影響を及ぼすようなことをするようなやつじゃないってことはわかってるさ。苦楽を共にした仲間だったじゃないか。実はな…、」

オリバーはこれまでのいきさつをパトリックに話しました。パトリックは真剣な表情でその話を聞いています。

「…そうか、わかったよ。ならば私も手を貸すよ。」

「本当か？」

「どうせ放浪の旅の途中だし、暇はいくらでもあるからね。」

「そうか、お前がいると心強いな。」

ハンスとペーターも大いに喜びました。ただ、ローズは少し不安げな表情を浮かべています。

「心配するな。パトリックは昔からの俺の仲間だ。…ローズもいろんなやつと接してもっと人に慣れた方がいいぞ?」

オリバーの言葉に、ようやくローズは安心したようでした。そして、パトリックにも笑顔を見せました。

「深くは追求しないけれど、なかなか大変そうだね。…私はあそこの宿に泊まっているから、必要な時はいつでも声をかけてほしい。」

「ああ、わかった。」

「…ところで、仲間を探しているんなら面白い話を聞いたことがあるよ。このオーベルクの北のはずれの森の中に、この辺じゃちょっと名の知れた魔術師が住んでる家があるらしい。…私も名前は忘れてしまったけれど…。」

「何だよ、お前にしては珍しく詰めが甘いな。」

「そう言わないでくれよ、情報を教えただけでも大きいだろう？…もし今から行くのなら、私も一緒に行こう。私も少し興味があるからね。」

「…そうだな、よし、早めに動くとしよう。…お前たちはどうする？」

オリバーは弟子たちに尋ねました。

「じゃあ、俺と先輩はもう少し街を歩き回って情報を集めたいと思います。」

「ああ、頼んだ。…ローズはどうする？ハンスたちと一緒に行動するか？それとも、先に宿に帰ってるか？」

ローズは首を横に振りました。

「…私たちと一緒にくるかい？」

パトリックの問いかけに、ローズはコクンと頷きました。

「そうだ、ローズ、その魔術師の名前、知ってるか？」

オリバーからの問いかけにもローズは頷き、言いました。

「イザベル…。」

「あ、そうそう！確かそんな名前だよ。よし、行こうか。」

パトリックは嬉しそうにしましたが、オリバーは少し考え込みました。

（魔術師のイザベル…どこかで聞いたような名前だな…）

オリバーはどこか引っかかるところがありましたが、それが何かは思い出せませんでした。

～～～

です。パトリックは愛馬、フランソワに乗っています。

「この辺りに来ると、かなり緑が多くなってくるなぁ…。」

「賑わっているオーベルクから少し歩くだけでこんなに景色も変わるものなんだね。」

その時、ローズが足をとめました。そして、森の中を指さしました。

「あれが…魔術師の家…。」

木の間に、小さな家が見えていました。

「よし、行こうか。」

パトリックがフランソワの足を進めました。しかし、道を外れて森へ一歩足を足を踏み入れた途端、急にフランソワは怯えて暴れました。

「おっと!?どうどう!おいおい、落ち着くんだ。」

パトリックが何とかフランソワをなだめ、落ち着かせました。

「…ちょっと待て。」

オリバーは森の入口をじっと見ていました。

「…パトリック、フランソワはここにつないでおけ。獣よけの魔力線がここに張られている。」

「本当かい？まったく、面倒なことを…。」

「しかし…このレベルの魔力線を作り出すことが出来るのは相当な魔力を持った魔術師だけだ…。…ああっ！」

オリバーの突然の大声に、ローズがビクッと震えました。

「もしかしたら…。…二人とも、行くぞ。」

「どうしたんだい、オリバー。何か思い出したのかい？」

パトリックからの問いかけにも答えず、オリバーはひたすらに森の

中を歩いて行きました。

〜〜〜

パトリックが聞き返したとき、入口の扉が開く音がしました。

「誰です？」

入口から聞こえた声に、三人は驚いて振り返りました。笑顔の女性がこちらを見ています。オリバーはひざまずいて挨拶しました。

「失礼いたしました。勝手に入った無礼をお許しください。…私は魔術師のオリバー・ローゼンハインです。伝説の魔女、イザベル様ですね？」

女性は微笑んだまま答えました。

「確かに私はイザベルです。ですが…伝説の魔女というのは、私の曾祖母ですね。同じ名前なので…。」

「そうだったのですか…。どうか無礼をお許しください。」

「いえ、今でもときどき間違われます。…それよりも、わざわざこんな淋しいところまでいらっしゃったのには何か訳があるのではないですか？」

「そうでした。実は…、」

オリバーはここへ来たいきさつをイザベルに話しました。イザベルは困ったような笑みを浮かべて言いました。

「協力して差し上げたいのは山々ですが…、私の魔術はまだまだ未熟です。足手まといになるのでは…。」

「とんでもない。森の入口に魔力線を張ったり、道具を操ったりするのは高度な魔術を持ってしないと不可能なことです。それに…この薬草を見たところ…、毒の魔術について相当な知識を持っておられるのでは？」

「…そこまで見破られてしまいましたか。さすがは高名な魔術師、オリバー・ローゼンハインさんですね。」

オリバーはイザベルが自分の名前を知っていたことに大変驚きました。

「…私のことを、知っていましたか。」

「かねがね噂は耳にしていました。…わかりました、私も力を貸し

ましょう。…そうですね、ここは引き払い、あなた方の宿に行くことにしましょう。

それと…もう仲間になったのですから、堅苦しい話し方はやめてくださいね。ローゼンハインさんの方が私よりも年上ですから。…私のことも、イザベルと呼んでください。」

「…わかった、イザベル。では仲間になったことだし、俺のこともローゼンハインじゃなくオリバーと呼んでくれ。じゃあこれから宿に案内するよ。」

「持っていくものはあるかな？もし何かあるならフランソワに載せていけばいいよ。」

「ええ、わかりました。」

イザベルは笑顔のまま答えました。

～～～

「下がっていてくださいね。…ファイアーストーム！」

イザベルが唱えた瞬間、家が一気に燃えました。そして、跡形もなくなってしまいました。オリバーは驚きました。

「…イザベル、炎の魔術も使えるのか？」

「ええ、ほんの少しですけど。」

「すごいな。俺は呪いの魔術の専門だから、他のは使えない。」

「比較的簡単に覚えられるものもあります。機会があれば教えて差しあげますよ。」

「それはありがたい。ぜひお願いするよ。」

～～～

「へえー、イザベルさんを仲間にしたのか。大人しそうなイメージがあったからあえて紹介はしなかったが…薬の調合なんかは裏に使ってない物置があるから、そこでやってくれ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「…ところでハンス、ペーター、何か情報は集まったか?」

ヴォルフと話すイザベルを見ながら、オリバーは二人の弟子に問いかけました。

「何でも、西の方にシーガルンという地方があるらしいです。もともとは別の王国だったらしいんですが、ギル大臣が最近占領した土地らしくて、かなりギル大臣に反感を持っているようです。」

「占領地、ということもあって、税金もかなり搾り取られているみたいですしね…。」

「そうか、それなら仲間も集まりやすいかもしれない。ヴォルフが言っていた剣士とここで会えたら、さっそく行ってみるとしよう。」

すると、ヴォルフが口をはさんできました。

「お前たち、まだキンフィールドには行ってないんだろ？遠回りになるが、シーガルンに行くならキンフィールドを通って行けばいい。」

「キンフィールド…この国の首都か。」

「遠くに塔の牢獄も見えるはずだ。」

「塔の牢獄…、王女様がとらえられているところか…。確か、ここから少し南に行ったところがキンフィールドだな？」

「ああ。そこから西に行けば三日くらいでシーガルンに着く。」

「わかった、ありがとう。」

「よし、では私は先にここから直接シーガルンに行って、いろいろ情報を集めておこう。ここから直接行くことも出来るようだしね。…さあ、もう夜も遅い。私は自分の宿に帰るよ。それじゃあまた明日。」

パトリックはそういうとヴォルフの宿を出て行きました。

「よし、俺たちもそろそろ寝ようか。ローズ、イザベルもお前と同じ部屋に寝てもらうからな。」

オリバーたちもそれぞれ自分たちの部屋に戻り、眠りにつきました。

～～～

・２１歳
・魔術で戦う。
・一人称は「私」
・オーベルクのはずれの森に住んでいる魔術師。同じ名前で曾祖母のイザベル・ローランは「伝説の魔女」と呼ばれている。そのため少しコンプレックスを抱いているのだが、あまり表には出さない。いつも笑顔で礼儀正しい。毒の魔術と回復術が得意だが、炎の魔術も少し使える。実用魔術もだいたい使いこなせる。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「4．鉄血の騎士と笑顔の魔女」（後書き）

勇敢な騎士、パトリックと魔術師のイザベルがオリバーの仲間になりました。そしてギル大臣に反感を持つ民衆が多いシーガルン地方の情報…、旅立ちの時が近づいてきているようです。

次話ではいよいよオリバーたちがオーベルクを出発します。そしてローズにライバル出現の予感…。どうぞお楽しみに！

ちなみに、イザベルの曽祖母の「伝説の魔女」はあらゆる魔術を使いこなし、困っている人々を助けた、ということで有名で、リバー王国のみならず近隣の国でもその話が伝わっているのです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「5．気まぐれ女剣士」（前書き）

パトリックとイザベルを仲間に引き入れたオリバーは、さらなる仲間探しのために西のシーガルン地方への旅を計画していました。その計画も、いよいよ実行されることになったようです。

今回から、前話のように登場人物のセリフを普通にしますので、よろしくお願いします。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「5．気まぐれ女剣士」

その日、ペーターとイザベルと共に山へ薬草を採りに行ったオリバーは、疲れた表情でヴォルフの宿へ帰ってきました。すると、ヴォルフがオリバーに声をかけました。

「おお、オリバーか。ちょうどよかった。前に話してた剣士が来てるぞ。」

「本当か！」

オリバーは中を見回しました。しかし、それらしい姿は見当たりません。一人の女性がリリーと話しているだけです。

「…どこにいるんだ？」

「ほら、あそこにいるだろう。そこのカウンターでリリーと話してるやつだよ。」

「ええっ？」

オリバーは驚きましたが、その女性に話しかけることにしました。

「あのー、」

するとリリーがその女性にオリバーを紹介しました。

「あ、ほら、ビアンカ。この人が今話してたオリバーだよ。」

「あっ、初めまして。あたしはビアンカっていうんだ。」

ビアンカと紹介された女性はオリバーの方を向き直りました。

「あ、ああ。俺はオリバーだ。」

「旅の仲間を探してるんだって？」

「ああ、まあ、そんなところだな。」

「そっか。うん、あたしが仲間になってあげてもいいよ。リリーたちの話を聞いていると、何だか面白そうだしね。」

あまりに軽いビアンカの言葉と口調に、オリバーは少しムッとしました。

「おいおい、俺たちは遊びに行くわけじゃないんだ。これでもこの国を救うために働こうとしているんだから。」

「むー、そういう重い雰囲気、あまり好きじゃないんだよねー。気楽に行こうよ、気楽にさっ。」

「じゃあ、いったいどうして仲間に加わろうと思ったんだ?」

「そりゃあ、気まぐれだよ、気まぐれ。あたしはいっつも気まぐれに生きてるからさー。」

「こんな大事なことを気まぐれで決められてもなぁ…。」

オリバーは期待を裏切られたような気がしてため息をつきました。

「だいたい、こんなに華奢な体で、まともに戦えるの?」

ペーターがビアンカを見ながら少し馬鹿にしたように言いました。
するとビアンカはニヤリと笑ってこう言いました。

「…あんたも剣士みたいだね。ちょっとお手合わせ願える？…ヴォルフ、訓練用の剣を貸してよ。」

「…こうなるから嫌なんだよ。備品を壊すなよ？」

ヴォルフはやれやれといった顔をして宿の奥に入って行きました。

～～～

攻撃を受け止めると見せかけてサッとよけると、一瞬のことに戸惑うペーターの腰に剣をつきたてました。

「痛ッ！」

「本気じゃないんでしょ？ほら、どんどんかかってきてよ。」

「くっそーっ！」

ペーターは剣を振りまわしてビアンカに向かって行きましたが、ビアンカはヒラリヒラリとかわし、ペーターの足がもつれたところでとどめを刺しに来ます。結局ペーターは一度もビアンカに勝てませんでした。

「はあっ、はあっ、もうダメだ…。」

「…どう？オリバーさん。考えてくれた？」

オリバーは少し感心したように言いました。

「なるほど、ペーターも訓練してそれなりの剣士であることは間違いない。それを軽くあしらうとは大したものだ。…だがまだ足りな

いな。ハンス！降りてきてお前も戦ってみろ！」

「はい！」

やる気十分のハンスも練習用の槍を小脇に抱え、一階に降りてきました。しかし、ビアンカは槍使いのハンス相手にも圧倒的な力を見せつけました。ハンスの隙を見てビアンカはすぐに間合いに入り込んでくるのです。

「うう…、強い…。」

「なかなかの体さばきだな…。…よし、ローズ！」

上から様子を見ていたローズはいきなりオリバーに声を掛けられてピクッと震えました。

「お前もビアンカと戦ってみろ。素早さではいい勝負だろう。短剣の代わりにこのスプーンでも持ってやってみろ。」

ローズはコクンと頷くと、一階に下りてきました。

～～～

〜〜〜

「あ、ああ。よろしく。」

「それと、今からオリバーさんのことは師匠って呼ぶから！」

「し、師匠？えっ？えっ？」

突然のビアンカの言葉にオリバーは困惑しました。ハンスとペーターはローズをほめたたえています。

「すげえな、ローズ。」

「あれと対等に渡り合えるなんて…。」

ローズは激しい試合で火照った顔をさらに赤くしました。ハンスとペーターはさらにからかおうとしましたが、その前にヴォルフが言いました。

「…ハンス、ペーター、その辺の壊れた椅子を修理しとけよ。」

「ええっ！？」

「負けた者として当然だろう。」

「…はい。」

オリバーはがっくりと肩を落とす二人を見て笑いながら、ローズに言いました。

「よし、ローズ。パトリックを呼んできてくれ。ある程度人数も集まったしな、さっそく明日の朝出発する。作戦会議だ。」

ローズは頷くと、フラフラしながら宿を出て行きました。もちろん、ビアンカをじっと見ながら。

～～～

「キンフィールドでも一泊した方がいいと思うよ。距離としては大して遠くはないけれど、街の雰囲気を見ておくのも悪くはないと思うからね。」

パトリックが言いました。

「そうだな。そうするとしよう。」

「私もパトリックさんと一緒に行動しましょうか？」

イザベルが言いましたが、パトリックは首を横に振りました。

「いや、私は旅に慣れているからね、私の方は一人で大丈夫だ。」

「キンフィールドも広いからねー、じっくり時間を取ってみた方がいいかもしれないよ？」

ビアンカが提案しました。

「そうだな。では夜明け前に出発するとしよう。…それまでに椅子の修理が終われば、の話だがな。」

オリバーがハンスとペーターを見て言いました。不器用なのか、なかなか手が進んでいません。

「それでは、私は物置で今日採ってきた薬草の仕込みをしてしまいます。何かあった時は呼んでくださいね。」

イザベルが笑顔のまま席を立ちました。

「じゃあ、あたしも帰って旅の支度をしてくるよ。」

ビアンカもフラフラと宿を出ていきました。もちろん、ローズから目を反らさずに。

「ローズは部屋でゆっくり寝ておけ。…疲れただろうからな。俺はもう少しヴォルフたちと話をしておくよ。」

ローズはビアンカが出て行った入口をじっと見ていましたが、オリバーの言葉に慌てて頷くと、階段を駆け上がって行きました。オリバーは微笑ましげにその姿を見ていました。そしてヴォルフに尋ねました。

「ビアンカとはどこで知り合ったんだ?」

「前から時々ひょっこりと顔を出していたんだ。リリーとすぐに打ち解けちまったんだ。自分でも言っていたように気まぐれだが、なかなか腕が立つだろ?」

「ああ。試した甲斐があったよ。」

「…だが俺が驚いたのはローズだ。あのビアンカと対等に戦えるなんて…。しかも短剣でだぞ?」

「お互いに相手の攻撃を避けるのが上手かったからな。…これがきっかけで、ローズも明るくなってほしいんだが。」

「俺が見ている分には、あれでかなり明るくなったと思うがな。お前らといるのが本当に楽しんだろう。羨ましいよ…。」

「…なあ、ヴォルフ。あんたも一緒に来ないか?オットー様の護衛兵だったのなら、腕には自信があるだろう?」

「…言ってなかったか。三年前の事件の時、俺はオットー様を安全に逃がすために敵を引き付けて、肩を切られたんだ。普通に生活する分にはもう何ともないんだが、戦うとなるとな…。」

「そうか…。」

「まあ、オットー様への忠誠心は今でも誰にも負けない自信はあるがな。それに、お前らがオーベルクに戻ってくる時、帰る場所があった方が落ち着くだろ？」

「ははっ、そうだな。じゃあ留守の間は頼んだぞ。」

「安心しろ。お前らがいつ帰ってきてもいいように、部屋は空けておくからな。」

「ありがとう。…ほらお前ら、不器用だな！俺に貸してみろ！」

オリバーはハンスから木槌を取り上げました。

「先生…。俺たち大工仕事なんて教わってませんからね？」

「情けないな、まったく…。こんなもの習わなくても出来るだろう。ほら、木槌の持ち方はこうだ。その方が力が入るだろ？」

「あ、本当だ。…うがあああっ！」

ペーターが思い切り自分の指を木槌で叩きました。

「まったく…世話の焼ける弟子たちだ。」

オリバーは苦笑いしながら言いましたが、その表情はどこか楽しそうでした。

～～～

「気をつけて行けよ。オットー様にもお前らが旅立ったことは伝えておいてやるからな。」

「ああ、ありがとう、ヴォルフ。」

「…しかし、考えたな。薬商人になりすますとは。これでイザベルの持ってる薬草の説明もつくわけだ。」

ヴォルフは感心したように言いました。

「むしろ、イザベルが考えてくれたんだがな。…よし、みんな、行くぞ。じゃあ、またな、ヴォルフ。」

「いつでも戻ってこいよ！」

ヴォルフとリリーに見送られ、オリバーたちはキンフィールドへ向かって歩き出しました。

「ほら、先生！見てください！」

ハンスが指差した方を見ると、山の陰から、朝陽が昇っていました。

「きれいだな。…これが俺たちを祝福してくれてるものならいいんだが…。」

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「5．気まぐれ女剣士」（後書き）

オリバーの仲間に、新たにビアンカが加わりました。その気まぐれっぷりにオリバーたちは振り回されることにはなりますが、頼りになることは間違いないようです。

次話ではオリバーたちがリバー王国の首都、キンフィールドに到着します。そこでオリバーたちはいきなり危機に遭遇するようですが…。どうぞお楽しみに！

ちなみに薬商人の変装をしているときは、イザベルが集団のリーダーということになっています。だから関所を通る時はだいたいイザベルが手続きをします。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「6．キンフィールドの鍛冶屋」（前書き）

オリバーと仲間たちはオーベルクを出発し、リバー王国の首都であるキンフィールドを経由して西のシーガルン地方へと向かうことになりました。そろそろキンフィールドが近づいてきたようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「6．キンフィールドの鍛冶屋」

オリバーたち一行は朝の街道を首都のキンフィールドへ向かって歩いていました。首都と一大商業都市のオーベルクを結んでいるだけあって、人の行き来も盛んなようです。

「もうすぐキンフィールドかぁ！」

「どんな街なのか、楽しみッスね、先輩！」

ハンスとペーターは元気いっぱいです。しかし、一方でどんどん元気がなくなっていく仲間もいました。

「ローズさん、元気がありませんね。このお薬を飲みますか？元気になりますよ？」

イザベルの言葉に、ローズは首を横に振りました。

「そうか…、ギル大臣たち、キンフィールドにいるんだもんね。…パトリックさんと一緒に行った方が良かったんじゃない？」

ハンスが言いましたが、ローズはうつむいたまま答えました。

「先生と離れたくない…。」

すると、ビアンカが脹れっ面をして言いました。

「…もう！あんたねー、もっと元気出しなさいよ！今実際に師匠と一緒にいるんだから、別に元気なくす必要なんてないでしょ！」

ローズはジロッとビアンカを見ました。

「…何？その目は。文句があるんなら、かかってきなさいよ。ほれほれー。」

ビアンカはローズの目の前でひもをひらひらさせると、走って逃げました。すぐにローズはビアンカを追いかけました。

「…まったく…。よし、二人が帰ってくるまで少し休憩しようか。」

オリバーは苦笑いしました。

～～～

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

しばらくすると、二人が戻ってきました。二人とも泥だらけでしたが、ローズの顔はいくらか晴れやかでした。

「イタタタ…。むー、ローズったら、本気で攻撃することないでしょうが…。」

歩きながらビアンカはオリバーにこぼしました。オリバーはビアンカに言いました。

「…楽しんでるな、ビアンカ。」

「えへへ、まあねー。」

「…ありがとうな、ローズに気を遣ってくれて。」

「楽しくないからねー、あの子に元気ないと。」

「それは確かにそうだな。…ところで何で俺は師匠なんだ？」

「気まぐれだよ、気まぐれ。それに何だかそのほうが呼びやすいしねー。」

～～～

ズ、ビアンカは宿で待機だ。」

オリバーの言葉に仲間たちは頷くと、峠を下って行きました。

～～～

オリバーは驚きました。そして少しからかうように言いました。

「そんなに安いのかい？まがいものじゃないの？」

「失礼なこと言うなよ。俺っちはローレンツっていうここじゃちょっと名の知れた鍛冶屋なんだぜ？そこらを歩いてるやつに聞いてみなよ。ローレンツの刃物は最高って口をそろえて言うぜ？信用できないなら、ここに的がある。こいつを投げつけてみろよ。」

「ふーん、自信満々だな。…ローズ、やってみるか？」

ローズは頷くと、短剣を受け取り、的に投げました。彼女が投げた短剣は的のど真ん中に命中しました。

「へえーっ、お嬢ちゃん、なかなかやるねー。」

ローレンツが驚いたように言いました。オリバーがローズにききます。

「…ローズ、どうだった？」

ローズは目をまん丸にしています。短剣の使い心地にびっくりした

ようです。

「使いやすい…。欲しい…。でもまだちょっと高い…。」

「よし！お嬢ちゃんの腕にやられちまったからね、もう二〇カドニーまけてやるよ！」

「買う…。」

ローズは短剣を手に入れました。

「どうも！いい買い物したね！」

満足そうなローレンツにオリバーがたずねました。

「…なあ、この辺にいい宿はないか？」

「宿だって？ああ、それなら調度この先に俺っちの知り合いがやってる宿がある。飯はまずいが、安い宿だぜ。」

「ありがとう。じゃあそこに泊まることにするよ。」

オリバーはローレンツに礼を言うと、その場を後にしました。

～～～

三人は街を歩き、塔の牢獄がある山のふもとにやってきました。たくさんの警備兵がいます。その中の一人がオリバーたちを見つけて叫びました。

「止まれ！ここから先は立ち入り禁止だ！」

「ああ、すみません。…この山には何かあるのですか？」

「ん？旅の者か…。この山の上には罪人を幽閉する牢獄があるのだ。」

「牢獄、ですか…。」

「それも政治犯ばかりだ。ギル大臣に歯向かった者は容赦なくここに収容されるのだ。…お前らもここに入れられたくなかったらさっさと立ち去れ！」

「はは、これは失礼、すぐに退散しますよ。」

オリバーは笑いながら兵士に言い、その場を離れました。

「…それにしても皇女様を政治犯なんて…、ひどい扱いですね。」

ハンスがムッとしたように言います。

「…この牢獄はギル大臣の悪政の象徴だと言われています。ここに収容された人は死ぬまで出してもらえないとか…。」

イザベルが言いました。

「もちろん、収容されているのは…。」

「ええ、ギル大臣の反対派の人たちです。」

～～～

ペーターが窓から外を見ました。

「外に兵隊がたくさんいる！…中に入ってきた！」

「うわ、まずいなぁ…。まさか宿検閲の時に泊まっちゃうなんて…。」

ビアンカが苦い顔をしました。ハンスがビアンカに尋ねます。

「宿検閲？それって何？」

「前にどこだかの宿で反乱計画を立てていた連中が捕まってねー、それ以来、時々抜き打ちで宿を調べることになってるんだ。」

途端にローズが顔を真っ青にしてブルブル震えだしました。ペーターがオリバーに言いました。

「先生、ギル大臣と敵対してたミニエー家のローズがいるってのは、いろいろとまずいんじゃないですか？」

「だが、隠れるにしてもどの扉も開けるだろうし…困った…。」

オリバーが困った顔をしました。その時、イザベルがローズに言いました。

「ローズさん、少しの間ならものすごいにおいに耐えられます？」

ローズはピクッと震えたましたが、コクンと頷きました。

「ではその袋に入ってください。ハンスさん、ペーターさん、ローズさんの入った袋をその扉の中に！それとビアンカさん、この毛布をこちらの袋に詰めてください！」

「わ、わかった！」

準備が整うと、イザベルは毛布の入った袋に向かって叫びました。

「ポイズンラース！」

～～～

兵隊たちがオリバーたちの部屋に乗り込んできました。

「起きろーっ！宿検閲だ！」

「なっ、何ですか、あなたたちは…。」

オリバーたちは飛び起きました。

「これからこの部屋の検閲を行う！全員そこから動くな！」

兵隊たちは部屋の中を探りまわりました。しかし、特に部屋の中に変わった様子はありません。

「…あとはこの戸棚だけだな。」

「あら？そこは開けない方がいいですよ？」

イザベルが笑顔で言いました。

「我々のすることに口出しをするな！」

兵隊は怒鳴ると、扉を開けました。その瞬間、床に倒れこみました。

「うおーっ！」

「ど、どうした！うっ！な、何てにおいだ！」

「だから言ったのに…。それは薬品の材料ですよ。カエルの心臓とか、ネズミの爪とか、トカゲの黒焼きとか…。見てみます？」

イザベルが相変わらず笑顔で言います。兵士たちは顔を真っ青にしました。

「も、もういい！引き揚げるぞ！」

兵隊たちは鼻を覆いながら退散していきました。

「ふう…。あとで宿の人に謝らなければなりませんね…。毛布を一枚台無しにしてしまいましたからね。」

「毛布に毒の魔術をかけてすごいにおいをつくるなんて…。」

「イザベルさんしかできないことですね。」

ハンスとペーターが感心しています。

「ああ、助かったよ。…んっ!?待て!ローズのことを忘れていた!」

オリバーが慌てて戸棚を開け、ローズの袋の口を開けました。ローズはぐったりとしています。

「あらー…、あまりのにおいで、気絶してしまったみたいですね…。このお薬を口に含ませてあげましょう。すぐに良くなるはずですよ。」

「本当に助かったよ、イザベル。」

オリバーは心からイザベルにお礼を言いました。

～～～

皆が寝静まった後、ビアンカはこっそりと宿を抜け出し、夜の街を散歩していました。もちろん、なぜそんなことをしているかというと、たまたまそういう気分になったからです。月明かりが家々を照らしています。空気も澄んでとても静かです。ビアンカはひとつ大きく深呼吸をしました。

その時、ビアンカは目の前の十字路を走って横切っていく見慣れた影を見つけました。彼女はとてもびっくりしましたが、すぐに状況を察しました。

（はっはーん、そういうことね…）

ビアンカはその影を追いかけて走りだしました。

～～～

「どこ行くの、ローズ。」

ローズは泣き出しそうな顔でビアンカを見ています。

「何も言わないで出て行くなんて、ひどすぎると思わない？…まあ何か言ったとしても師匠に止められるだろうし、そもそも無口なあんたが何か言うなんて思えないしね。」

その時、ランプを持った影が通りの角を曲がってきました。

（ヤバい、見回り兵かな？）

ビアンカは身構えました。しかし、その影をよく見ると…、

「おーい、こんな夜中にお嬢ちゃん二人で何してるんだ！…あれ、昼間のお嬢ちゃんたちじゃないか。」

それはローレンツでした。

「調度よかった！ねえ、家に案内してよ。今からこの子を説教しな

きゃならないから。」

「お、おう。」

～～～

「あんたねー、今日のことなんて誰が気にすると思うの？仲間が困ってたら助ける、当たり前のことでしょ？あんただって魔獣に襲われてた師匠を助けたんでしょ？だったらこれで貸し借り無しでしょ。それでも気にするんだったら、他の仲間の誰かがピンチになったらあんたが助けてあげればいいんだよ。そうすればお互い貸し借り無し。…それにさ、その短剣は何のためにわざわざお金を出して買ったの？」

ローズはピクッと震え、腰にぶら下げた短剣に触れました。

「…あたしにはわかる。それは師匠の役に立つために買ったものでしょ。せっかく役に立つための道具を手に入れたのに、それを使う前にいなくなっちゃうなんて、どうかしてるんじゃない？」

ビアンカは呆れたように溜息をつきました。そして言いました。

「…まあ、あたしの言いたいことは全部言ったから、あとはもうあんたの自由にしていいよ。オーベルクに帰りたいなら帰ればいいし。あんたなら一人で上手くやっていけるでしょ？」

すると、ローズはうつむきながら何かを言いました。

「…たい…。」

「ん？何？はっきり言わないとわからないじゃない！」

相も変わらず小さな声のローズに、ビアンカが怒ったような鋭い口調で言いました。するとローズはビアンカを睨むようにして言いました。

「戻りたい…！先生のところに戻りたい…！」

予想していなかったローズの大声にビアンカはびっくりしましたが、すぐに笑顔になって言いました。

「じゃあ約束して。何があっても二度と仲間に黙って抜け出そうとしない、って！」

ローズはしっかりとビアンカの目を見ると、頷きました。

「よし、それならさっさと宿に戻るよ！もしかしたらみんな起きちゃってて心配してるかもしれないしね。」

すると、これまでずっと黙っていたローレンツが口を開きました。

「…なあ。」

「ん？何？」

「…俺っちも旅に連れて行ってくれないか？」

「はあ？」

ローレンツは感慨深げに言いました。

「俺っちも前のヨーゼフ王の時代が懐かしいんだ。あの頃は何でも自由にやれたしな。…ほら、俺っちは鍛冶屋だろ？戦うことはできないが、武器や防具も作れるし、修理も出来る。役に立てると思うんだけど…。」

「ふーん、なるほどね…。じゃあ、一つだけ頼みを聞いてくれる？それならあたしから師匠に話しておいてあげる。」

「頼み？どんな頼みだ？」

「毛布を一枚ちょうだい！」

「そんなことお安い御用だ！…え？毛布？いったいどうして…？」

首をかしげるローレンツでしたが、ビアンカは笑って言いました。

「気にしない気にしない！さあ、宿に帰るよ！」

ローズとビアンカ、ローレンツは布団を抱えて宿に帰ってきました。そして、朝になってオリバーが起きると晴れてローレンツもオリバーたちの仲間になりました。もちろん、この夜のことはローズ、ビアンカ、ローレンツ三人だけの秘密です。

～～～

を夢に見るようになる。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「6．キンフィールドの鍛冶屋」（後書き）

宿検閲の一件でローズの離脱という危機に見舞われたオリバーたちですが、ビアンカの努力で何とかその危機を回避し、さらにローレンツという心強い仲間も増えました。彼は直接戦闘には参加できませんが、物語の間ずっと、まさに縁の下の力持ちといった働きをしてくれます。

次話ではオリバーたちがシーガルン地方への旅を再開します。長い旅を続け、シーガルン地方との境にある峠を登りきったオリバーたちの目に飛び込んできたものは…？どうぞお楽しみに！

ちなみにこの国の通貨単位「カドニー」ですが、特に名前の由来はありません。思い付きです。１カドニーでだいたい２５０円くらいです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「7．遥かなるシーガルン」（前書き）

鍛冶屋のローレンツを仲間に加えたオリバーと仲間たちは、西のシーガルン地方への旅を続けていました。目の前の高い峠を越えればシーガルン地方です。しかし、ビアンカによるとこの峠にはよく魔獣が出没するとのことです。はたしてオリバーたちは無事に峠を越えることが出来るのでしょうか？

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「7．遥かなるシーガルン」

キンフィールドを出発して二日、オリバーたちは西のシーガルンに向けて歩いていました。ハンスとペーターが文句を言っています。

「先生…まだかかるんですかぁー？」

「そろそろ休みましょうよ…。」

「まったく…お前らは体力がないな。ローズでさえも黙って歩いているんだぞ？…とは言え、もうかなり長い間歩いたことも確かだな。よし、そろそろ休憩しようか。」

オリバーはそう言って草むらに腰をおろしました。

「ほら、お前ら武器を貸せよ。少し研いでおいてやる。」

「お、ありがとうございまーす。」

ローレンツがハンスとペーターから武器を受け取りました。

「さて…そろそろシーガルン地方に着くはずだが…。」

「この辺りがもともとの国境線だねー。ほら、正面に山があるでしょ？あれを越えたらシーガルンだよ。」

ビアンカが正面の山を指差しながら言いました。

「うへー、あんな高い山を越えるのか…。」

それを見ただけでペーターはやる気をなくしたようです。

「ビアンカは詳しいな。」

オリバーは感心したように言いました。

「えへへ、あちこち旅するのが好きだからね。

…そうそう、あの峠の辺りは魔獣がよく出るらしいからねー…。しかもけっこう凶暴なやつ。リバー王国軍がシーガルンを占領する時に放った魔獣のうちの何種類かが自然に適応して棲みついちゃったみたいなんだよ。」

「そいつはやっかいだな。峠は常に警戒して越えないと。」

オリバーは厳しい表情をしました。ハンスは心配そうに言いました。

「パトリックさんは無事にシーガルンに着いたんですかね…？」

「ハハ、あいつはそこらの魔獣ごとき相手でくたばるようなやつじゃないよ。…なあ、ビアンカ。あの峠までに、街はあるのか？」

「うーん、確か小さな村があったと思うけど。」

「よし、今日はそこに泊まり、体力をためてから明日峠を越えるとしよう。…よし、そろそろ出発だ。行くぞ！」

オリバーの声に仲間たちは立ち上がり、また歩き始めました。

～～～

ます。オリバーが指示をします。

「…よし、行くぞ。ハンスとペーターは横を、ローズは後ろを警戒しながら進め。」

彼らは急な上り坂をゆっくりと登って行きました。

～～～

ペーターが呟きました。

「ああ…。豊かな土地だな…。」

オリバーが同調したその時、ハンスが突然叫びました。

「あっ！先生！魔獣が！」

「な、何っ！？」

ハンスの声にオリバーが辺りを見渡すと、たくさんの魔獣がオリバーたちを狙っていました。何度か戦った、あの狼のような魔獣です。

「飛びかかってくるまでは絶対に刺激するなよ。あれだけの数だ、下手に突っ込むと囲まれてやられちまう。」

オリバーが魔獣を睨みながら言った時、イザベルが言いました。

「オリバーさん、やっかいな魔獣が出てきましたよ。」

イザベルの指さす方向を見て、オリバーは驚きました。

「陸ダコじゃないか…！あいつはやっかいだ。

…よし、みんな！あのタコは俺とイザベルが相手をする。やつらに剣や槍はほとんど効かないからな！その代わり、そっちの狼どもは頼んだぞ！」

「はいっ！」

一匹の狼が飛びかかってきました。ペーターが一振りで狼を切り裂きました。それを合図に、狼たちが一斉に飛びかかってきました。

「…タコは全部で六匹ですね。」

イザベルがオリバーに言います。

「あんな手ごわいやつを放つなんて、ギル大臣もどうかしてるな。…俺たちを食おうってのか？痛い目見るぞ！カースアタック！」

オリバーの指から黒い光が放たれ、一匹のタコに命中しました。タコはキュウっと縮みました。

「くそっ、間違いなく効いてはいるが、呪いの魔術では効果は薄いな…。」

「あの手の魔獣には毒の魔術は効きません。炎の魔術を試してみましょうか。…まだ専門外ですから、術を使うのに時間がかかってしまいますが…。」

「じゃあ俺が呪いの魔術で出来る限り弱らせておこう。とどめをよろしく頼む。」

「わかりました。まず一度使ってみましょう。ファイアーストーム！」

イザベルに指を差されたタコから炎が立ち上りました。タコは真っ黒に焦げてしまいました。

「ようし、効果てき面だ！次は一番左のやつだ。イザベル、魔力をためておいてくれ。」

「わかりました。」

「それまで俺が弱らせておく！行くぞ、カースアタック！」

～～～

「え？」

「…何でもない。…右、来てる。」

二人のやり取りを見て、ビアンカはおかしそうに笑っていました。

～～～

オリバーの指から出た黒い光はタコに命中しました。

「くそっ…でかい分丈夫だな…。イザベル、急いでくれ！」

「はい…。」

「頑張れよ！カースアタック！」

しかし、ビアンカはイザベルの異変に気づきました。

「イザベル！フラフラじゃない！」

「だ、大丈夫です…。ファイアーストーム！」

タコが燃え上がりました。しかし、炎が消えてもタコは生きています。イザベルは思わず座りこんでしまいました。

「そんな…効かないなんて…。」

「くそっ、こうなったら…！みんな下がれ！…カースレイン！」

オリバーが言い放った途端、黒い光がタコに降り注ぎました。タコは縮んで苦しみにのたうちまわっています。オリバーは苦しい息の下から叫びました。

「め、目だ！目を突きさせ！」

ローズとビアンカがタコに飛びかかりました。そして両方の目を一気に突きさしました。タコは更に苦しんで暴れまわりましたが、やがて動かなくなりました。

～～～

イザベルが苦しそうにしながらも笑顔でビアンカに頼みました。

「ほーい。これ？」

「いえ、それは悪魔の薬です。緑色の紙に包んであるはずです。」

「ああ、これね。」

（悪魔の薬って…何に使うんだ…？）

ハンスとペーターが首をかしげました。

「…よし、武器の手入れも終わったぜ。」

ローレンツがビアンカに武器を渡しました。

「どうもー。」

「俺っちにはこれくらいしか出来ないからな。まあ、切れ味が悪くなったらいつでも言ってくれ。」

「すまないな。」

オリバーもローレンツに感謝しました。

「これでこの峠も少しは通りやすくなってくれればいいんですけどね、先生。」

ペーターが感慨深げに言いました。

「そうだな。少なくともあのバカでかいのを倒したことで、少しはマシになったとは思うが…。」

「終わりよけりゃあすべてよしって話だ。それより見ろよ。もうすぐそこがシーガルンだぜ?」

ローレンツが明るく言いました。

「ああ、第一の目的地に到着だな。まずはパトリックと合流しなければな。とりあえずシーガルンの中心都市であるハングリアに行ってみよう。恐らくそこにパトリックもいるはずだ。…ビアンカ、ハングリアにはここからどのくらいかかるんだ?」

「だいたい二日くらいかな。」

「まだまだ遠いな。」

オリバーが苦笑いしました。

「先生！あそこに小さな町が見えます！」

じっと目を凝らしていたハンスが言いました。

「よし、今日はそこに泊まるとしよう。みんな疲れただろうからな。」

オリバーたちは全身に疲労を感じながらも、心は晴れやかに峠を下って行きました。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「7．遥かなるシーガルン」（後書き）

体力を消耗しながらも、何とかオリバーたちは強力な敵を倒すことが出来ました。目の前にはシーガルンの広大な耕作地帯が広がっています。第一の目的地に着くにはもう一息です。

次話ではオリバーたちはシーガルン地方の中心都市、ハングリアに到着します。そこでオリバーたちは挫折を味わいかけることになるのですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにイザベルは、本文でも言っていたように、炎の魔術を扱えるとは言っても今のところ完全に身につけたわけではないので、あまり連発するとすぐに魔力と体力をほぼ使い果たしてしまいます。また、オリバーの「カースレイン」は魔力を全開放する魔術なので、やはり使用後は魔力も体力もほとんど残りません。

それでは次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「8．ハングリアの訓練師範」（前書き）

長い旅を続けてきたオリバーと仲間たちは、やっとのことでシーガルン地方の中心都市、ハングリアに到着しました。すぐにオリバーたちはある人物と知り合うことが出来ましたが、同時にオリバーたちは挫折を味わいかけることになってしまいます。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「8．ハングリアの訓練師範」

オリバーと仲間たちはシーガルン地方で一番大きな街、ハングリアに到着しました。オリバーはハンスとペーターと話しています。

「さすが、元首都だっただけあって賑わっているな。」

「そうですね。ただ、この街の象徴だった美しい城は取り壊されてしまったらしいですね。」

「古い歴史のある建物もどんどん壊されてしまって、リバー王国風の建築様式に変えられているようです。」

「そうそう。それでシーガルンの民衆の怒りに拍車がかかっている、ってわけなんだ。」

「…ずっと前からいたように話に入ってくるなよ、パトリック。」

パトリックが笑いながら言いました。

「やあ、オリバー。遅かったじゃないか。」

「いつここに着いたんだ?」

「三日前かな。いろいろな情報が手に入ったよ。」

「それは助かる。さっそく聞かせてくれ。」

せかすオリバーに、パトリックは苦笑いしました。

「まあ、落ち着くんだ。この辺りは兵隊もうろうろしているからね。それに、君に会わせたい人もいるんだ。」

～～～

「ああ、前に話してた旅の仲間だよ。」

「ああ、そうかい。…よろしく。ここの師範のレオンだ。」

「俺はオリバー。オリバー・ローゼンハインだ。よろしく。」

「ハングリアに滞在するんなら、ここに泊まればいい。場所はいくらでもあるからな。」

レオンと名乗った男は快活そうに笑って言いました。

「それは助かるよ。」

「街を見て回るのは明日以降にして、今日はここでゆっくり休むといい。」

～～～

ていました。ここは市民兵の訓練場のようです。レオンが笑いながら言います。

「俺の可愛い生徒たちだ。」

「レオンさんは何の武器を使うんですか？」

ペーターがレオンに質問します。

「だいたいの物は扱えるが、一番得意なのは斧槍だな。」

「訓練場を任されてるってことは、相当な腕なんだろ？」

ローレンツも問いかけます。

「ハハッ、魔術師や飛び道具使いには歯が立たねぇだろうが、普通の連中にだったら負けねぇ自信はあるぜ？」

レオンが自信たっぷりといったように言いました。

～～～

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夕食を食べながらレオンはオリバーたちに話していました。

「…というわけだ。以来シーガルンのやつらのリバー王国に対する反感はどんどん高まってきている。」

「リバー王国に？それは少しおかしいんじゃないですか？」

ハンスが怪訝そうな顔をして言いました。

「何だって？」

「ギル大臣に対する反感、っていうならわかりますよ？でもリバー王国の国民の多くはギル大臣に反感を持っています。一緒に手を組んだりしようとは思わないんですか？」

レオンは厳しい顔で言いました。

「…確かに元からのリバー王国の国民もギルに反感を持っているかもしれねぇ。だが、その国民たちは俺たちシーガルンから搾り取られたものすごい額の税金で生活してやがる。

…あんたらもわかってるだろ？ここに入る関所の通行料が他の関所の三倍だって。それなのにここから農作物を運ぶリバー王国の馬車隊の連中は手形さえ見せればタダで通れちまう。…それにな、このシーガルンが攻撃されてる時、リバー王国の連中はみんな見て見ぬふりをしていた。俺たちの土地が汚されていくのをただ黙って見ていただけだ。」

レオンは冷静に、しかし鋭い言葉で言いました。オリバーたちは何も言えません。

「…あんたら、ここで仲間を探そうとしているらしいじゃねぇか。確かに、ここはギル大臣を憎んでいるやつらばかりの土地だ。だが、それと同時にリバー王国を恨んでる連中も多い。

…そこの女の子たちはオーベルク出身？あんた、そう、鍛冶屋のあんただ。あんたはキンフィールド出身？…リバー王国出身のやつらがいるってことで、誰も仲間になってくれねぇぜ？

…ただ、俺は他の連中みたいにそこまで過激なことを言うつもりはねぇ。ここにいる分には好きなだけこの訓練場に泊まるといい。だが、仲間を探すんなら一刻も早くここを出て他の土地に行くべきだ。…これはあんたらを追い払おうとして言ってるんじゃねぇ、お互いを知ったものとしての忠告だ。」

「…忠告には感謝するよ。とにかく今日は疲れた体を休ませてくれ。これからのことは明日になって考える。」

オリバーは肩をすくめながら言いました。

「ああ、そうするといい。」

～～～

「でも…、言いたいことはわかるけど、ちょっと勝手すぎやしないか？見て見ぬふりをした、って言われたって、俺っちたちはこのシーガルンとは違ってもともとリバー王国の土地に住んでたんだ。別に民衆が軍隊を持っているわけじゃない。大臣直属の駐屯兵しかいないのに。どうかしようったって、無理な話だぜ…。」

ローレンツが不満そうに言いました。

「むー、難しい話はあたしにはよくわかんないよ。あたし、夜風に当たってくる。」

ビアンカが立ち上がり、部屋を出て行きました。

「あ、おい、ビアンカ！まだ話は…。しょうがないな、ひとまず解散だ。休みたいやつは休め。」

オリバーがため息まじりに言いました。それを見たローズはビアンカに文句を言いに行こうと部屋を出ました。

～～～

ローズが廊下を歩いていると、ビアンカがある部屋に聞き耳を立てています。ローズが不思議そうな顔をすると、ビアンカが手招きをしました。ローズは文句を言うのも忘れてビアンカと一緒に聞き耳を立てました。中からはレオンと弟子の話声が聞こえてきます。

「レオン先生、僕らは先生があの人たちと一緒に旅に出ても大丈夫です。訓練場の留守は弟子たちで力を合わせて守りますから。」

「だがやつらの中にはリバー王国出身の連中がいるんだぞ？」

レオンの声はどこかバカにしたようです。

「ギルを退けることを考えたら、その程度の我慢は必要なはずです！」

「おいおい、何か変なものでも食ったのか？…第一、どこの馬の骨ともわからねぇような連中に命を預けられるか。オリバーとかいう魔術師も、鉄血の騎士も、本物かどうかさえわからねぇんだぞ？」

そこまで言った瞬間、部屋の中のレオンの眼光が一気に鋭くなりました。

「…おい！そこにいるのは誰だ！」

レオンは槍を抱えると、扉を蹴破りました。しかし、そこには誰もいません。

「おかしいな…誰かの気配がしたんだが…。」

「ネズミか何かじゃないですか？」

（ふうーっ、危なかった…）

ローズのとっさの判断で、何とか二人は物陰に隠れることができていました。

「…これで二人…。」

「生意気なこと言ってるんじゃないの。まったく…。でも、これはちょっと面白いことになるかもね…。」

～～～

二人はオリバーたちのいる部屋に帰ってきました。オリバーが疲れた顔をしています。

「…ビアンカ、頼むからみんなで行動しているときに気まぐれな気分を起こさないでくれよ…。」

「まあまあ、気にしない気にしない！…それよりも師匠。一つ提案があるんだけど…。」

～～～

「おいおい、昨日も言っただろ。ここで仲間を探すのは無理だって。」

レオンが難しい顔をして見せましたが、オリバーは笑って言いました。

「ハハッ、俺たちが仲間にしようとしてるのは…レオン、あんたさ。」

「俺？俺だって？ハハハハ…、笑わせるじゃねぇか。あいにくだが、俺もあんたたちと一緒に行くつもりはねぇよ。」

レオンは大笑いしました。しかし、オリバーも動じません。

「…なあ、あんた、腕には相当の自信があるんだろ？」

「…突然何を言い出すんだ？…まあ、そうだな。」

「じゃあ、こうしよう。俺の仲間のうちの一人と戦って、あんたが勝ったら俺たちは黙ってここを後にするよ。その代わり俺たちの仲間が勝ったら仲間になってくれ。」

オリバーからの提案に、レオンは怪訝そうな顔をしました。

「ああ？…何だよ、そんなことでいいのか？…まあ、俺は何一つ得しねぇが、勝負は損得で決めることじゃねぇしな。いいだろう、その勝負、乗った。…ただし、こちらからも条件がある。街の中心広場でその勝負を行うことだ。」

「民衆にも見せて、勝ち負けに公平な判断を下してもらうためだな？」

「ああ、そんなところだ。」

「わかった、いいだろう。」

オリバーが了承すると、レオンは大声で叫びました。

「おい！試合は三時間後だ！今から街の中にふれ回ってこい！」

オリバーとレオンのやり取りを見ていた弟子が慌てて外に出てゆきました。

～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

三時間後、多くの市民が広場に集まっていました。そのまん中でレオンが槍を振りまわしています。

「頑張ってよレオン先生！」

「よそ者になんか負けるなーっ！」

市民もレオンに声援を送ります。やがて人の群れをかき分けてオリバーがやってきました。

「来たな…。相手はあんたかい？」

「いや、俺じゃない。俺は魔術師だ。さすがにそれは、な。」

オリバーの言葉をきいた市民からの野次が飛びます。

「大きなこと言って、本当に魔術師なのかー！？」

「魔法を見せてみろよー！」

騒ぐ民衆の声に、オリバーはやれやれと肩をすくめると、空を飛んでいるカラスに向かって指を向け、叫びました。

「カースアタック！」

オリバーの指から放たれた黒い光はカラスに命中し、広場に落ちてきました。一人の市民がカラスに手を触れようとしました。

「触るな！」

オリバーが叫んだと同時に、カラスが黒い煙を全身から出しながらその市民に襲いかかりました。

「うわっ！」

市民は目をつぶりました。しかし、目を開けると、彼の体に何の異変もありません。ただ足元に体を裂かれたカラスが横たわっているだけです。そして、その少し前には短剣を持った小さな後ろ姿が見えました。

「…ローズがあんたの相手だ。」

オリバーが静かに言いました。レオンは一瞬驚きましたが、すぐに冷静さを取り戻しました。

「そうかい、じゃああんたは下がっていてくれ。…ローズって言ったかい？ここは俺があんたに有利な条件を提示してやるよ。俺はこの訓練用の槍を使う。あんたは短剣で戦うようだな。本物を使ってもいいぜ。どうだい？」

「さすがレオン先生！」

「余裕あるね！」

市民が騒ぎたてました。しかし、ローズはポケットから何かを取りだして言いました。

「いい…。これで、やる…。」

レオンはそれを見てあっけにとられたような表情を見せました。

「す、スプーン？」

市民は大笑いしました。

「おいおい、あのレオン先生にスプーンで挑むんだってよ！」

「聞いてあきれるぜ！」

「小娘にはぴったりだな！」

ローズはサッと飛び上がると、一人の市民に詰め寄り、喉にスプーンを突きたてました。

「先生からのプレゼント…。ライバルの証…。」

「ま、まあ、いいだろう。お互いに今みたいに急所に刃先を突きつけたら勝ちだ。それでいいな？」

ローズはコクンと頷きました。

「よし、誰か、試合開始の合図をくれ。」

「それでは私がやろう。お互いに準備はできたかな？…よし、試合開始！」

パトリックの号令と同時に、レオンは槍を振りまわしました。市民の感嘆のため息が聞こえます。ローズは間合いを取っていましたが、頃を見計らってレオンに飛びかかりました。レオンは一気に槍を突き出しました。

「…なっ！？」

ローズはひらりと飛び上がったかと思うと、レオンの槍の上に舞い降りました。そして宙返りすると、また先ほどの間合いに戻りました。

「くそっ！バカにしやがって！」

レオンは怒り心頭です。猛烈な勢いで突進していきます。

～～～

「別に戦うのはあたしでもよかったんだけど、ローズの戦い方って独特でしょ？相手もより混乱するかな、って。」

「ローズさんは本当に身軽ですからねぇ…。」

「…ねぇ、イザベル、誰に対してでも敬語だよね。別にハンスとかペーターとか、あの辺のお子ちゃまには普通に話していいんじゃないの？」

「ちょ、ちょっと！」

「お子ちゃまって！」

ビアンカの言葉を聞いてハンスとペーターが騒ぎました。イザベルは困ったような笑顔を見せました。

「別に、今その話をしなくても…。そんなことより、ローズさんを応援しましょうよ。」

「むー…、だってさー、こんなのつまんないでしょ？目の前で！ライバルが！あんなに生き生きと！ライバルの証とか言ったスプーンを使って！戦ってるんだから！」

「ま、まあまあ、ビアンカさん。落ち着いてください。」

～～～

「何してるんだー！」

「武器を拾えー！まだ戦えるだろーっ！」

市民の声にレオンはハッとしてローズを引き離すと槍を拾って身がまえました。しかし…、

「ハイハイ、やめやめ！今のはどこからどう見てもローズの勝ち！」

二人の間に割って入ったビアンカは厳しい目をレオンに向けました。

「あんたねー、負けくらい潔く認めなさいよ。今の状況、どうだったのかわかってるでしょ？本当の命をかけたやり取りなら、間違いなくあんた、ローズに首を切り裂かれて死んでたんだよ？」

レオンはバツが悪そうに頭をかきました。

「あんたが仲間になるのを拒んだのは、別にリバー王国を憎んでいたわけじゃない。ただあたしたちを見くびっていただけ。自分が一番強いと思ってたから。」

ビアンカの言葉にレオンはびっくりしました。

（えへへ、まあ、盗み聞きしてたからわかるんだけどね）

ビアンカは心の中で舌を出しながら続けました。

「…でもね、所詮は訓練場でしか訓練してない。ローズは何度も魔獣と戦ってる。圧倒的な戦力差に勝てるのは経験だけ。…まあ、ローズの戦力があんたに劣るとは言わないけどね。…じゃあ、あとは師匠に任せたよ。よろしくー。」

（やれやれ、いろいろとしゃべりにくくなったなぁ…）

オリバーは苦笑いしました。

「…レオン、」

しかし、レオンはオリバーが言う前に笑顔を見せて言いました。

「ああ、わかってるさ。俺も約束を破るつもりはねぇ。…みんな！俺は今日この場所で自分自身の未熟さを知った！…俺は彼らと一緒に旅に出て自分の力を試し、経験を積んで、そしてあのギルを倒し帰ってくる！…お前たち、俺がいねぇ間訓練場の留守を頼んだぞ！」

「はいっ！」

訓練場の生徒たちが返事をすると、市民は沸き立ちました。

「うおーっ！」

「レオン！レオン！」

「ハア、バカみたい。負けたやつにこんなバカ騒ぎするなんて…。」

ビアンカが口をとがらせました。

「まあ、仲間も増えたことだし、いいじゃないか。」

「パトリックは前向きでうらやましいなぁ…。それより、ローズ？」

ローズは得意げな顔でビアンカを見ました。

「いや、あのね、もちろん試合に勝ったことは褒めてあげるけど…。

…何でライバルの証とか言ったスプーンで戦ったの！？」

ローズはビアンカを見下したように言いました。

「…もう、物足りない…。」

「はあっ！？あたしがライバルじゃ物足りないって言うの！？」

「貸し借り無しだから…何を言っても平気…。」

「はあーっ！？」

新しくレオンを仲間に入れたオリバーたちは、今度は北の地方、ノーザリンに向けて旅立ちました。その途中で何度もローズとビアンカが死闘を繰り広げていたのはまた別の話です…。

～～～

・大きな斧槍を振り回して戦う。普通の槍や剣も扱える。
・２６歳。
・一人称は「俺」。
・ハングリアで市民兵の訓練場師範をしている。一流の槍使い。訓練場では。自分の腕を過信していた部分があった。でも市街地での戦いにはめっぽう強い。逆に自然の中の戦いには慣れていないらしい。仲間の中では一番力が強い。明らかに他の仲間と味覚が違う。口は悪いが意外と世話好き。少し疑り深い。女性メンバーからはなぜかバカ扱い。圧倒的な体力差のローズに惨敗したから、それはそれで仕方ないのかもしれない。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「8．ハングリアの訓練師範」（後書き）

ハングリアの訓練場師範、レオンがオリバーたちの仲間になりました。彼が加わったことによって、オリバーたちの戦闘力も格段に上がりました。彼自身、自分の未熟さを知って反省したので、オリバーも非常に頼もしく思っているようです。レオンは物語の終盤で大きな役割を果たすことになります。

次話ではオリバーたちはシーガルン地方と北のノーザリン地方の境にあるランダール峠に差し掛かります。そこでオリバーたちは思わぬ敵と戦うことになるのですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに、レオンの市民兵訓練場には百人以上の生徒がいます。駐屯兵も多少は危険視しているようですが、レオンたちも大人しくはしているのでそれほどの注意は払っていません。中心広場での試合も、訓練場の生徒の試合、という名目になっているので大して警戒されていませんでした。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「9．ランダール峠の山賊」（前書き）

レオンを仲間にしたオリバーたちは、樹海と山脈に囲まれたリバー王国の北の地方、ノーザリン地方を目指していました。シーガルンとノーザリンの境目にあるのはランダール峠です。オリバーたちはそのふもとの村で旅の疲れをいやしていました。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「9．ランダール峠の山賊」

オリバーたちは西のシーガルンと北のノーザリンの境にあるランダール峠のふもとの村で休んでいました。ハンスとペーターが話しています。

「シーガルンに向かうときの峠よりも登りやすそうだなぁ。」

「この辺りには魔獣もあまりいないようッス。比較的安全に越えられそうッスね。」

「…だといいがな。」

レオンが穀物粥をすすりながら言いました。何とも言えないような気持ち悪い色をしています。オリバーが怪しそうな顔でレオンに聞きました。

「…何だい、それは？」

「シーガルンの名物料理さ。粥を食える木の葉と一緒に煮詰めるんだ。うまいぞ？」

オリバーは勧められるままに口にしましたが言葉では表せないような味がして顔をしかめました。

「あんなに豊かな穀倉地帯なのに、こんなの食ってるのか…。」

「何だよ、失礼なやつだな。」

オリバーの横で、ビアンカも顔をしかめています。

「ローズ、食べなよ。あんたなら食べれるかもよ?あたしには耐えられない…。」

ローズはビアンカを睨みつけましたが、その得体のしれないお粥を口にしました。

「どう?」

「…豚小屋と粘土と洗っていない先生のマントの味…。もういらない…。」

(豚小屋の味って何だ!?)

（どうしてオリバーのマントの味を!?）

仲間は驚愕の目でローズを見ました。

「いいよいいよ、まったく!食いたくなけりゃ俺が食うよ!まったく、こんなにうまいものを…。」

「レオンさんなら、リリーさんの料理も食べられるかもしれませんね。」

ハンスが笑いながら言いました。

～～～

「誰かにバカにされた気がする…。」

～～～

「まあ、山賊に見境なんかないだろう。俺たちも注意しないとな。…それにしてもイザベル、さっきから黙ってその悪魔のようなお粥を食べてるけど、大丈夫なのかい？」

オリバーが心配そうにイザベルに言いました。イザベルは相変わらず笑顔です。

「大丈夫ですよ。『悪魔の薬』を混ぜましたから。」

「…前に聞こうと思ってたんですけど、『悪魔の薬』って何なんですか？」

ペーターが聞きました。

「ええ、使う人自身が『これは悪魔のようだ』と思ったものに混ぜると、中和してくれるんですよ。」

「じゃあ、リリーさんの料理も怖くないですね！」

「いえ…リリーさんのお料理はこのお薬を使っても中和できませんでした。…魔術でも手に負えませんね。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「はっくしょん！」

「お前、風邪なら薬でも買って来いよ？」

「その薬のことでバカにされた気がする…。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夜明けとともに、オリバーたちはランダール峠を登り始めました。

緩やかな峠ですが、木が鬱蒼と生い茂っていて太陽が出ているはずなのにまるで雨が降りそうな曇りの日のようでした。

「…不気味だな。」

すると、突然頭上からギェーッという鳴き声が聞こえました。

「…異常に大きな鳥だが、魔獣じゃない。」

「早く抜け出したいもんだな。」

ローレンツが呟きました。その時、前方から誰かが走ってきました。まるで初めて会った時のローズのようなボロボロの格好をした少女のようです。

「た、助けてーっ！山賊に襲われたのーっ！」

「な、何だって！？」

ハンスがその少女に駆け寄りました。

「ハンス！待て！」

（こんな森の中で少女が一人…罠の可能性が高い！）

オリバーは叫びましたが、もう手遅れでした。少女は隠し持っていた短剣を取り出すと、ハンスの腕を切りつけました。

「うわっ！」

少女はハンスの荷物を奪い取ると、森の中へ走って行きました。

「追いかけよう！」

「待て、パトリック！」

オリバーはフランソワを走らせようとするパトリックを制止し、指を少女の背中に向けると叫びました。

「フィクセイション！」

途端に少女の動きがピタリと止まりました。

「えっ？何だこれ！？あっ…息…が…」

「急げ！取り押さえろ！」

ローズが少女を取り押さえました。オリバーが少女に言います。

「…息はできるようにしてやろう。…さあ、荷物を返せ。」

少女は恨めしそうにオリバーを睨んでいました。

「返さないのか？そうか。フィク、」

「わかったよう！返せばいいんだろう！？」

少女は泣きそうな顔をして言いました。ハンスが少女から荷物を奪い返しました。

「…本当はこんな荒っぽい技を普通の人間相手に使うのは好きじゃないんだがな…。…ほら、見逃してやるからどこへでも逃げろ。」

オリバーが言った瞬間、木の上から矢が飛んできました。

「山賊の待ち伏せだ！」

「殺すなよ！」

オリバーは叫びました。木の上にいるのはどうやら一人だけのよう

です。ローズが短剣を投げつけました。

「ぎゃあああああっ！」

ローズが投げた短剣は木の上の山賊の腕に刺さりました。山賊は地面に落ちると、大急ぎで走って逃げて行きました。

「深追いはするな！」

オリバーが叫ぶと、あちこちの木の陰から山賊たちが現れました。

「ハンス！ペーター！イザベルとローレンツを守れ！」

オリバーは叫ぶと、腰の剣を抜いて山賊に向かって行きました。強力な魔術を人間に使うわけにはいきません。

「ローズ！何をボーっとしてるの！」

ビアンカがローズに叫びます。

「…先生…かっこいい…。」

「はあっ！？…打ち抜かれても知らないよっ。ほら、左！」

「知ってる…。」

～～～

よ…。」

「おっと、忘れてた。…ほいよ。」

少女はフラフラと立ち上がりました。

「あー、もう山賊団に戻れないじゃないかよっ！」

「何でだ？」

「あたいがお前らをこの先の谷に誘い込んだところで囲んで襲う予定だったのに…。…ああ、もう、お頭に殺される…。」

「なるほど、道理で山賊の動きに統制がなかったわけだね。」

パトリックが苦笑いしながら言いました。その時、オリバーの頭にある考えが浮かびました。オリバーはいきなり指先を少女に向けると、叫びました。

「クヴァール！」

「うわっ！」

「お、オリバーさん！何してるんですか！」

イザベルの焦った声が聞こえているのかはわかりませんが、オリバーはまた叫びました。

「クヴァール！」

「や、やめろ！やめろ！」

少女はすんでのところで黒い閃光をかわしました。

「…すばしっこさは超一流だな。」

「こっ、殺す気かぁーっ！」

少女は短剣を振りかざしてオリバーに突進してきましたが、目の前でオリバーに指を向けられるとどうすることもできず立ち止まってしまいました。

「…気に入ったよ、そのすばしっこさ。…どうだ、俺たちの仲間にならないか？」

思わぬオリバーの言葉に、少女は少し戸惑ったような表情を浮かべました。

「…あたいはお前らを襲おうとしたんだぜ？それでもいいのか？」

「頼りになる仲間は一人でも多い方がいいからな。」

少女はため息をつきました。

「…わかったよ。もう山賊団には戻れないし…。よろしくな。あたいはマチルド。」

「オリバーだ、よろしく。」

ビアンカが難しい顔をしているレオンに聞きました。

「…何か不満でもあるの？」

「いや、あいつを悪く言うつもりはねぇんだが、俺たちシーガルンのやつを苦しめていたやつだと思うと、何だか複雑でな…。」

「まあ、もうこいつは山賊じゃないんだ、いいじゃないか。」

ローレンツも笑って言います。

「…そうだな。仲間の輪を乱すようなことは言わねぇよ。」

～～～

「ぎいやあああああああっ！」

「ど、どうした！？」

オリバーや他の仲間たちは声に驚いて慌てて飛び起きました。

「…何してるんだ、マチルド。」

手足を縛られたマチルドが涙を流しながらベッドの中で悶絶しています。そして彼女の鼻には…、

「ははははっ！マチルド、何だよ、その鼻の綿は！」

ペーターが大笑いします。

「はいはい、動かないでくださいねー。」

イザベルが慎重にマチルドの鼻の綿を抜きました。

「…これ、涙薬が塗られてますね…。…うん、私のお薬箱の中からすくい取った跡があります。」

「おいおい、誰だ？こんなことしたのは。」

「…レオンじゃないの？」

ビアンカはレオンをジトッとした目で見ながら言いました。

「人に濡れ衣を着せるな！俺はこんな陰湿なことはしねぇよ！」

「おい、マチルド。誰にやられた？」

マチルドは涙を流しながらオリバーを睨んでいましたが、やがて大きな声で叫びました。

「今度こそは絶対に成功させてやるっ！」

マチルドはそう叫ぶとベッドにもぐりこんでしまいました。いくら呼びかけても、出てこようとしません。

「まったく、何なんだ、いったい…。」

「あっ…！…寝込みと狸寝入りには気をつけろ、ってことじゃない？」

ビアンカはわざとらしいまでに寝息を立てて寝ているローズに気づいて言いました。その寝顔はどこか勝ち誇ったようでした。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「9．ランダール峠の山賊」（後書き）

予想外の出来事から、山賊団の少女、マチルドが仲間になりました。生意気ですが、その素早さは今後のオリバーたちの冒険の中でしっかりと活かされることになります。しかし、それ以上にマチルドが加わったことにより、仲間たちも今まで以上に明るく、賑やかになりました。

次話ではオリバーたちはノーザリン地方の樹海の中を通る街道を歩いて旅を続けています。そんな彼らに突如馬のような魔獣が襲いかかってくるのですが…？そして、作者個人が最も気に入っている仲間も登場します。どうぞお楽しみに！

ちなみに、マチルドが入っていた山賊団は、基本的に抵抗さえしなければ人を傷つけたりしない主義で、実は旅人から強奪した金品を峠のふもとの村人に分けたりしています。ただ、オリバーたちはしっかりと抵抗してきたので戦いになったわけです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１０．北の樹海の狩人姉妹」（前書き）

ひょんなことからマチルドを仲間に引き入れたオリバーたちは、北のノーザリン地方の樹海の中を通る街道を歩いていました。マチルドが加わって、仲間たちもとても賑やかになったようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１０．北の樹海の狩人姉妹」

ランダール峠を越えたオリバーたちは、ノーザリン地方、北の山脈のふもとを通る街道を歩いていました。さっきからレオンとマチルドが口論をしています。

「だから！わかるか？そういう短剣はな、ここをこう持った方がいいんだよ！」

「いちいち文句をつけんなよ！あたいはずっとこうやってきて失敗しなかったんだから！」

「うるせぇ！だいたい山賊の戦い方は卑劣なんだよ！」

「何だって？カッチカチの訓練場流よりもこっちのほうが実践的なんだよ！」

「何だって！？訓練場流をなめるな！」

「そっちこそ、山賊戦法をなめんなよ！」

「…ずいぶん賑やかになりましたね。」

ペーターがオリバーに言いました。

「ハハッ、楽しくていいじゃないか。…そういえばここに来たばかりの頃に農夫を助けたのを覚えてるか？」

「はい。」

「確か禁じられた洞窟の封印が解かれたっていう話をしていたよな。それ以来この国に魔獣が増えた、って…。あれはここの山脈の樹海の中にある、と言っていなかったか？」

「ああ、確かに…。まさか今から行くつもりですか？」

ペーターが不安げに言いましたが、オリバーは笑って言いました。

「いや、時間は比較的たっぷりとある。仲間になったばかりのやつもいるんだ、じっくりと力をためてからの方がいいだろう。だが…いずれは封印しに行かなければならないだろうな。」

「そうですね。」

その時、一番後ろを警戒していたハンスが叫びました。

「魔獣だーっ！」

「…ハンスもまだまだ未熟だが、見張り役には一番向いているようだな。…みんな！戦う準備だ！」

まるで馬のような魔獣です。三匹います。

「ここは私が行こう！」

パトリックは叫ぶと、フランソワを走らせて魔獣たちに突進しました。しかし、馬のような魔獣たちはパトリックのはるか頭上を飛び越えました。

「こんなことだろうと思ったよ。私はおとりだ！あとは頼んだよ！」

ハンスとビアンカが武器を構えて魔獣たちを待ち構えています。しかし魔獣たちは着地したと同時にクルッと向きを変え、再びパトリックに向かって行きます。

「そう来るか！そこまで私に執着しなくてもいいだろうに…。…オリバー！イザベル！今からそっちに誘導するから、魔術で一気に倒してほしい！」

パトリックは叫ぶと、オリバーたちの方に向かって馬を走らせました。魔獣たちもそれを追いかけてきます。パトリックは巧みにフランソワを操ると、オリバーたちの上を飛び越えました。

「カース、」

「ポイズン、」

二人が同時に叫ぼうとした時、どこかからヒュンという音がしました。そして矢が飛んできたかと思うと、魔獣たちの首に刺さりました。三匹の魔獣は地面に倒れこみ、もがき苦しんでいましたが、やがてパッタリと動かなくなりました。イザベルがしゃがみ込んで魔獣を見ました。

「…強力な毒矢ですね。人間相手なら即死ですよ。」

「一体誰がそんなものを…んっ？」

オリバーは矢の飛んできた方を見ると、馬に乗った人がこちらを見

ています。そしてオリバーと目が合うと、馬を走らせてこちらに近づいてきました。

「…怪我はなかったか。」

馬に乗っているのは凛々しい女性です。オリバーが女性に話しかけました。

「君がこの矢を射たのかい？」

「うむ。それは…吾れの子どもたちだ。吾れには仕留める責任があるのだ…。」

女性はそう言って表情を曇らせました。

「子どもたち…？」

「…正しくは、吾れらの子どもたちだな。…紹介が遅れた。吾れの名はアリスだ。この道の先は魔獣があふれていて危険だ。吾れが道案内をしよう。…その前に吾れらの狩人小屋で休んでいくといい。」

～～～

～～～

「さっきの馬のような魔獣みたいなものか？」

アリスは悲しそうな顔をしました。エミリーはうつむいてアリスに聞きました。

「お姉さま…今日は何匹でしたか？」

「うむ、三匹だ…。

…実は、あの馬たちはもともと吾れらのものだったのだ。しかし魔獣に納屋を襲われてしまい、咬まれた馬たちが逃げてしまったのだ。繁殖してどんどん数も増えてしまっている。今では吾れらのところにはたったの二頭しか残っておらぬ…。」

「禁じられた洞窟の封印が破られなかったら、こんなことにはならなかったのに…。」

オリバーはエミリーの言葉に驚きました。

「禁じられた洞窟について何か知っているのか？」

アリスが答えました。

「少しはな。吾れらも伝承でしか知らぬのだ…。四〇〇年以上も前から封印されていたところだ、誰も近寄ろうとはしなかったのだ。…今回封印を解いた兵隊も、誰一人帰ってこなかったという話だ。」

「どうしてその洞窟は封印されていたんだ?」

今度はレオンが聞きました。アリスは洞窟について語り始めました。

「うむ、昔、さる暴君の治世、兵隊の結婚は禁じられていた。しかし中にはその禁忌を破って密かに会う男女が多かった。そこで暴君は違反を犯した女を洞窟に閉じ込めたのだ。女たちは出してくれと七日七晩も泣き叫び続けたという。」

「残酷な話ですね…。」

ハンスが悲しそうな顔をしました。

「うむ。結局戦争は長引き、女たちが閉じ込められてから二年の月日が経った。原因は愛する者と引き離されたことによる男たちの士気の低さだ。

…何とか戦争に勝った兵士たちは女たちが閉じ込められた洞窟を探しまわった。が、気のふれた一人の兵士しか帰ってこなかったのだ。兵士は死ぬまで叫び続けたそうだ。『仲間が引き込まれた』と…。

暴君はこの話を心よしとしなかった。そして兵士を洞窟に派遣し、洞窟の封印を解いたのだ。…途端に突風が吹き荒れ、兵士たちはその風に飛ばされ地面や木に叩きつけられ命を落としたという。その後、国内には災害や飢饉が多発した。その間に力を盛り返した隣国に滅ぼされてしまった、というわけだ。洞窟は再び封印され、四〇〇年間誰も近寄らなかったのだ。」

「ですが最近ギル大臣がまた封印を解いてしまい、今のこのような状況になってしまっているのです。」

「呆れ果てたものだ。少なくともこの樹海にリバール王の秘宝の伝承はないのだ。いたずらに魔獣を増やすだけではなかったか…。」

アリスとエミリーの落ち込んだ顔を見て、オリバーが言いました。

「…俺たちはいずれ、禁じられた洞窟に行こうと思ってるんだ。」

オリバーの言葉に、アリスとエミリーはとても驚いたようです。

「何だと?」

「それは危険すぎるのでは…。」

「そして洞窟を封印し、魔獣がこれ以上増えるのを防ぎたいんだ。…君たちも協力してくれないか?」

アリスは疑わしげな目をオリバーに向けました。

「…貴様は何者なのだ?…確かによく見てみると、貴様たちはただの旅人ではないようだ。持ち物があまりに不自然だ。」

「俺は魔術師のオリバー・ローゼンハイン。リバー王国諸侯のオットー様に王家の復興を依頼されている。」

アリスは馬鹿にしたような目をオリバーに向けました。

「ハハハ、大きく出たな。」

オリバーはそのさげすんだような目に少しムッとしました。

「冗談ではないんだが。」

「信じろというのもなかなか難しい話だぞ？何しろオットー様は三年前の事件の際に亡くなったと聞く。」

「オットー様は生きているぞ！」

ペーターが叫びます。しかし、アリスは信用していないようです。

「だいたい貴様が魔術師というのも疑わしいではないか。確かにそれらしい格好をしてはいるが、ただの見かけ倒しかもしれぬ。」

「先生に何てことを言うんだ！」

ペーターが顔を真っ赤にして立ちあがったその時、入口の方で大きな音がしました。見ると、まるで虎のような魔獣が扉を壊して中に入ってきます。アリスとエミリーが慌てて弓を取りました。

「魔獣か！うぬっ！あいつは手ごわい！毒矢の準備だ、エミリー！」

「はいっ、お姉さま！…ああっ！お姉さま、毒矢がもうありません！」

エミリーが悲痛な叫び声を上げました。

「何だと！？」

するとオリバーが立ちあがりました。

「下がっていてくれ！カースアタック！」

オリバーが呪文を唱えると、虎のような魔獣は一撃で倒れてしまいました。

「あの手の魔獣になら呪いの魔術は効果てき面だ。」

オリバーは再びアリスとエミリーの方を見ました。

「…信用してもらえたかい？」

アリスとエミリーは目をまん丸にしていました。やがて、落ち着き

を取り戻したアリスが言いました。

「なるほど、魔術師としての腕は確かなのだな。…そうだな、お前たちが本物なのか、旅の途中で見極めるのも悪くはないだろう。」

「じゃあ…。」

「うむ、これからよろしく頼む。エミリーもそれで構わぬか?」

「はいっ、お姉さま。」

エミリーも笑顔で答えました。

「それと…先ほどは高慢な態度を取ってすまなかったな。」

アリスは申し訳なさそうに肩をすくめましたが、オリバーは笑って言いました。

「気にしてないよ。」

「もっとも、お前たちが不甲斐ないようなら、吾れらはすぐに抜け

させてもらう。この樹海がわれらの家だからな。」

「おっと、気をつけないとならないな。ヘマは厳禁だ。」

オリバーとアリスは笑いあいました。

「よし、仲間もある程度集まったことだし、一度オーベルクに戻るとするか！」

オリバーの言葉に、仲間たちは喜びました。

～～～

「なるほど。…じゃあアリスはそんなに好かれていないのか？」

「そのようなことはない。だが吾れとエミリーが並んだとしたら、間違いなくエミリーの方に行くだろうな。」

～～～

「…降りようか？」

「いえ…、大丈夫…です。」

～～～

「…どうしたんだ、アリス。顔色が悪いぞ。」

「うむ…吾れはほとんど森から出たことがないのだ…。…街の空気がどうも合わぬ…。特にこの土煙がな…。」

すぐ後ろではエミリーも顔を真っ青にしています。

「う、うー…、お姉さま…、わたくし、もう…。」

「ああっ！エミリーがあまりの人の多さに目を回したぞ！」

レオンが叫びました。マチルドがすかさずはやし立てます。

「ほら、手綱をしっかりと持て！馬をおびえさせるなよ？」

「うるせぇ！わかってる！」

（本当に賑やかになったなぁ…）

オリバーは思わず微笑みながら思いました。

～～～

を歩くのが苦手。でもやっぱり自然の中の戦いには強い。実は姉よりもずっと度胸が据わっている。多分、その面ではパトリックとも同じくらい。どんな敵にも臆することなく立ち向かっていける。尊大な口調で話す姉の反動からか、とても丁寧な口調で話す。姉であるアリスと、優しいイザベルを心から慕っている。愛馬の名前はアンヌ。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１０．北の樹海の狩人姉妹」（後書き）

狩人のアリスとエミリーを仲間に加えたオリバーたちは、いったんオーベルクに引き返すことになりました。この二人は物語の最後まで仲間たちの主戦力として奮闘してくれます。ちなみに、作者は仲間の中でアリスが一番気に入っています。

次話ではオリバーたちがオーベルクに帰ってきます。しかし、オーベルクの街にはただならぬ不穏な空気が漂っていました。オリバーたちはオーベルクに迫る危機を回避しようと作戦を立てることになります。どうぞお楽しみに！

ちなみに、アリスがこういう口調になったのは、まだ幼かったころに樹海から出たときに近くの村で拾った本に登場していた強い王様にあこがれ、その口調を真似しているうちに自然と身に着いたのです。しかし、その村は最近ギル大臣の私兵による略奪で荒廃してしまったようです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「11．動死体の脅威」（前書き）

新たにアリスとエミリーを仲間に入れたオリバーたちは、久しぶりに拠点であるオーベルクに帰ってきました。しかし、何やら様子がおかしいようです。いったい何があったのでしょうか？

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「11．動死体の脅威」

オリバーたちは久しぶりにオーベルクに帰ってきました。レオンがつぶやきます。

「何だよ、オーベルクは商業都市だって聞いたのに、ずいぶん人通りが少ねぇな。これならハングリアの方が賑わってるぜ？」

しかし、オリバーは首をかしげました。

「いや…おかしい。十数日前にここを発った時はもっと賑わっていた…。この短期間の間に、いったい何が起こったんだ？」

「まずはリリーたちの宿に行こうよ。そこで何があったのか聞こうよ。」

「そうだな、それが一番いい。」

ビアンカの言葉に、オリバーたちはヴォルフの宿を目指しました。

～～～

オリバーたちはヴォルフの宿の入り口から中に入りました。すると、ヴォルフの叫び声が聞こえました。

「動くな！…んっ？オリバー！いいところに帰ってきたな！」

ヴォルフはクロスボウを構えていましたが、入ってきたのがオリバーたちだとわかると、喜びをあらわにしました。

「なんだなんだ、ずいぶん物騒じゃないか。」

「いや、すまん。理由があってな、この宿に大変重要なお客様がいらしているんだ。」

「重要なお客様？」

「そこのテーブルに座っていらっしゃる。」

オリバーはヴォルフに言われた方向を見て、大変驚きました。

「…クララ様！」

オットー様の妻、クララ様がそこに座っていらっしゃいました。オリバーが跪くと、穏やかに語りかけました。

「お久しぶりですね、ローゼンハイン殿。…仲間もずいぶんと増えたようですね。」

「はっ、これもすべてオットー様とクララ様のお陰にございます。…オットー様のお体の具合はいかがでしょうか?」

「かなりご回復なさっていますよ。ここ何日かはご自分で畑を耕しておいでです。」

「それは何よりです。…本日、ここへはどのようなご用事で?」

クララ様は穏やかだった表情を一転させ、真剣な表情をされました。

「…実は、このオーベルクの郊外にある墓地が暴かれたのです。死体が掘り起こされた穴は三〇ほど…。」

オリバーはびっくりしました。

「何ですって？」

「更に近隣の農民が森の中を歩く死体を見ています。」

「動死体を扱えるとなると…強力なネクロマンサーがバックにいる可能性が高いですね。…しかし、クララ様がそのことを？」

「私はあの事件の前は、オットー様にお仕えする一種の伝令兵だったのです。…ヴォルフとはある意味同僚だった、ということですね。」

「そうだったのですか…。」

「今でも時々オットー様のためにこのあたりを偵察することがあります。そんな時に今回の事件を知ったのです。」

「そうでしたか…。わかりました。今回の事件、我々にお任せください。我々が必ずオーベルクの街を守って見せます。」

「そうですか、それを聞いて安心いたしました。それでは私はオットー様へのご報告があるので、これにて…。」

クララ様は宿から風のように去って行かれました。

「…物騒なことになってしまっているんだな。」

オリバーは固い表情でヴォルフに言いました。

「ああ。…それにしても、ずいぶんと仲間を増やしてきたな…。大したもんだ。」

ヴォルフは新しく加わった仲間を見渡しました。鍛冶屋のローレンツ、訓練場師範のレオン、元山賊のマチルド、狩人のアリスとエミリー…。

「個性的な仲間ばかりだが、俺たちは必ずオーベルクを守れる。」

オリバーは緊張した様子で、それでも確固とした表情で言いました。

「俺もそう信じるよ。それじゃあ部屋の追加をしなけりゃな…。馬がいるなら、裏の納屋に繋いでおいてくれ。」

ヴォルフも安心したように言いました。

～～～

「パトリックはすでに知っているとは思うが…動死体の弱点は頭だ。逆に、頭以外を攻撃しても何度も復活してくる。

…それと、突属性の武器はあまり効かない。というより、例えば槍などで突いたとしても肉が刃先にまとわりついて抜けなくなることが多い。とにかく斬ることを心掛けろ。

…それと、やつらに炎以外の魔術はあまり効かない。」

「ええっ？」

仲間たちは驚きました。これまで無敵のように思えていた魔術が使えない敵がいるということに驚いたようです。

「俺も剣で戦おうと思う。…そうそう、馬に乗っているなら槍でもある程度有効だ。速さで勢いをつけられるからな。」

「弓矢はどうなのだ？」

アリスが質問しました。

「命中率に自信があるならかなり有効だ。ただし、頭に命中しなかった場合はただ矢の無駄使いになってしまう。」

「安心しろ。俺っちが頭以外に当たっても動死体にダメージを与えられる矢を作ってやるよ。他はともかく矢なら何とかなる。」

ローレンツが言いました。

「そのようなことが可能なのですか？」

「まあ、戦いのときまで楽しみにしていてくれよ。」

心配そうなエミリーとは対照的に、ローレンツは自信たっぷりのようです。

「あたいらみたいに短剣を使う場合は？」

今度はマチルドが質問しました。

「…正直、短剣は動死体相手には一番無効な武器だ。やつらはすぐに再生するからな、首を切り裂いたって無意味だ。…他のやつらの

補助になってもらうかもしれんな。」

ローズとマチルドは残念そうな顔をしました。それを見てイザベルが提案しました。

「オリバーさん、…やって、こう…、…ねっ？」

「…危険だな。俺が判断することは出来ない。だが本人たちがいいというなら許可しよう。」

「わかりました。二人とも、ちょっといいですか？…やって、こう…、…どうですか？」

ローズとマチルドは緊張した表情を見せましたが、はっきりと首を縦に振りました。

「決まりですね。ローレンツさん、銅か鉄のこてを早急に作ってもらえます？二人分。」

「お安い御用だ。すぐに取り掛かるぜ。」

～～～

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その夜、オリバーはなかなか寝付けませんでした。すると、隣の部屋から苦しそうな声が聞こえてきました。

（イザベルたちの部屋か…心配だな。声をかけてみるか）

オリバーはマントを羽織ると、隣の部屋の扉をノックしました。どたばたという音がして、ローズが扉を開けました。オリバーは心配そうに言いました。

「大丈夫か？何だか苦しそうな声が聞こえたんだが…。」

すると、部屋の奥からマチルドがオリバーに突進してきました。

「オリバーか！？よし、今こそこの腕の威力を試すところだ！覚悟しろ！」

「うおっ！？」

オリバーは驚きましたが、ローズが黙ってマチルドを殴り倒してしまいました。

「…きゅう。」

「おーい！うるさいぞーっ！」

下からヴォルフの声が聞こえます。

「ああ！すまん！」

「ご迷惑になってしまいますので…中でお話をしませんか？」

イザベルが困ったような笑顔を見せながら言いました。

「ああ、そうしようか。」

～～～

「お前たち、その腕…そういうことか…。」

ローズとマチルドの腕は紫色に変色していました。イザベルが説明します。

「…短剣の使い手が動死体に対抗するにはこてのような武器をはめて打撃で戦うしかありません。でもこてで動死体に攻撃すると必然的に頭を狙う以上、噛みつかれて感染する危険が何倍も増えます。」

「…だから戦う前にあえて腕を弱い毒におかさせ、アンデッドの毒性を弱めよう、というわけだな。今から訓練させているのか…。」

「でも、それにも限界があります。…私の魔力だと、五回噛まれるまでが限界ですね。」

イザベルが申し訳なさそうに言いました。

「それでも十分すごいじゃないか。」

「いえ…、私の曾祖母なら…。」

イザベルはため息まじりに小さな声で言いました。

「ん？何か言ったか？」

「…いえ、何でもありません。…私も耐える訓練をするとしましょうか…。」

イザベルは部屋の窓を開け放ちました。涼しい夜風がスッと室内に入ってきます。イザベルは周りの安全を確認すると、言い放ちました。

「ファイアーストーム。」

声の大きさに比例した、小さな火柱が登り立ちました。オリバーが心配します。

「おい、大丈夫か？炎の魔術は体力を使うんだろ？」

「…動死体に有効な魔術は炎の魔術だけです。少しでも扱える以上、皆さんのお役に立ちたいですから…。」

「…ありがとう、イザベル。みんなのことを考えてくれてて。…な

あ、炎の魔術の中にも簡単なものはあるんだろ？」

「ええ。このファイアーストームは比較的簡単です。…もちろん体力はかなり消耗してしまいますが…。」

「今度、時間のある時でいいから教えてくれないか？」

「ええ、いいですよ。」

イザベルと親しげに話すオリバーを見て、ローズは少し淋しそうな顔をしました。マチルドがニヤニヤしながらローズを小突くと、ローズは思い切りマチルドを蹴飛ばしました。イザベルはその様子を見て苦笑いしました。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「11．動死体の脅威」（後書き）

クララ様からもたらされた情報により、オリバーたちはオーベルクが危機に瀕していることを知ります。はたしてオリバーたちは動死体とそれを操るネクロマンサーを排除することが出来るのでしょうか？

次話ではオリバーたちが動死体との戦いに臨みます。どうぞお楽しみに！

ちなみに、動死体というものは、一般的に言うところのゾンビをそのまま想像していただければけっこうです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「12．オーベルクの死闘」（前書き）

オットー様の妻、クララ様からもたらされた情報により、オーベルクの街が動死体の襲撃という危機にさらされていることが判明しました。オリバーたちはオーベルクの窮地を救うことができるでしょうか？

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「12．オーベルクの死闘」

オリバーたちが街に着いて三日後、ついに状況が変化しました。偵察に出ていたハンスとマチルドが報告をしました。

「動死体たちが森の中に集まってる。七〇体くらいだったかな。」

マチルドの報告を聞いてオリバーの顔が厳しくなりました。

「クララ様が見たときの二倍以上だな。ネクロマンサーはいなかったか？」

ハンスは首を振りました。

「それらしいやつは見当たりませんでした。まだどこかに身をかくしているんだと思います。」

「今までこんなことはなかった。きっとここを襲撃してくるのは今夜あたりだぜ。」

マチルドも言います。オリバーは一度大きく深呼吸しました。そして仲間たちに指示しました。

「よし、みんな所定の位置に移動しよう。ローレンツとヴォルフはここに残っていてくれ。いざとなればヴォルフのクロスボウもあるしな。パトリックとアリス、エミリーは街の反対側の入口だ。念のためにそこにいて、背後からの攻撃を警戒するんだ。何も襲ってこないようだったら街の外を経由して墓場へ行け。そこで待ち伏せするんだ。馬だから素早く移動できるだろうしな。」

「二人とも、迷ってはいけないよ?」

パトリックが笑いながらアリスとエミリーに言いました。

「うむ、街の中は貴様について行けば問題ない。」

「街の外の地理は覚えました。暗闇でもわかります。」

「残ったメンバーは墓場側の入り口を固める。…最前列はハンスとレオン。その次にローズとマチルド。更に俺、ペーター、ビアンカがいて、最後列にイザベルだ。奥に行くにつれてどんどん攻撃力を高くしていくぞ。」

全員、緊張した面持ちで頷きました。

「…よし、日も暮れてきた。もうすぐ夜だ。みんな、行くぞ！」

～～～

やる気に満ちた二人に、イザベルは何度も念を押しました。

〜〜〜

オリバーが指示すると、二人は雄たけびを上げて突進してゆきました。突くことではあまりダメージを与えられないので、二人は長い槍を振りまわして動死体を切り裂いてゆきます。

「槍での斬撃かぁ…。ハンスはちょっともたついてるけど、レオンはさすがに慣れてるね。」

ビアンカが少し感心したように言いました。

「もともと武器が斧槍だからな、斬撃に特化している。ただ、あれだけ重いものを振りまわすんだ、体力の消耗は著しいだろう。」

オリバーの言った通り、やがて二人とも息が荒くなってきました。

「…そろそろ苦しくなってきたな。ハンス！あとは後ろに任せてひとまず下がるぞ！」

「はい！」

二人は速やかにオリバーたちのもとに戻ってきました。

「よし、よくやった。不利な槍で十体以上も倒すなんて大したもんだ。…よし、次の攻撃だ。ローズ！マチルド！行け！」

二人は頷くと、迫ってくる動死体の列に飛び込みました。片っ端からこてでアンデッドの頭を粉砕してゆきます。二人はたくさんの動死体にひるむことなくどんどん向かってゆきました。

しかし、ついにマチルドが五回動死体に咬まれてしまいました。

「ううっ！…ローズ！悪いけどあたいは先に撤退させてもらうぜ！」

「…不注意。」

「うるせぇなあ！お前は何回咬まれたんだ？」

「まだ二回…。」

「くっ…。と、とにかく応援を呼んでくるからな！」

マチルドはオリバーたちのもとに一瞬で戻ってきました。

「あたいは五回噛まれたからもうダメだ。ローズを助けてやってくれ。」

「わかった。お前は宿に帰って休んでおけ。ペーター！ビアンカ！行くぞ！」

「はいっ！」

「そうこなくっちゃ！」

三人は剣を構えるとローズの周りの動死体に斬りかかりました。

「ローズ！大丈夫？」

「まだまだ平気…。」

ビアンカの問いかけにもローズはすぐに答えました。ペーターも声をかけます。

「きつくなったら俺たちに任せて撤退しなよ！」

「わかった…。」

「いいか！俺たちで出来る限り動死体を倒すんだ！イザベルの合図があるまで持ちこたえろよ！」

四人の猛烈な攻撃により動死体の数は半分くらいにまで減りました。
するとオリバーはかすかに馬のいななきを聞きました。

（パトリックたちが近くに…もうすぐ墓地に着くな）

～～～

「残りはあと二、三〇体というところだ。」

「思ったより少ないですね。さすがは皆さんです。わかりました。…ファイアーストーム！」

最前列の動死体たちが一気に燃え上がりました。これまで見たこともないような大きな炎です。オリバーはイザベルを心配しましたが、イザベルはしっかりと動死体を見据えて立っています。そして続けざまに叫びました。

「ファイアーストーム！」

動死体たちは次々に燃え上がります。その数はどんどん減り、残りはたったの十五体位になってしまいました。

「ファイアー…あら？」

突然動死体たちはクルッと向きを変えると、元来た道を引き返して行きました。

「後ろから追い打ちをかけましょうか？」

イザベルがオリバーに言いましたが、オリバーは首を横に振りました。

「いや、無駄な体力を使うこともない。やつらは間違いなく墓場に向かったはずだ。あとはパトリックたちに任せよう。…みんな、よくやってくれたな！オーベルクの危機を救ったんだ！」

オリバーは笑顔で仲間を褒め称えました。みなとても満足そうな表情をしていました。が…、

「…ローズ？どうしたんだ？顔色が悪いぞ？」

ペーターが言った瞬間、ローズが倒れこんでしまいました。

「いかん！早く宿に運び込むぞ！」

～～～

「くそっ！まさか失敗するとは…。残ったのはたったの十四体か…。」

ネクロマンサーがぼやくと、突如背後から声がしました。

「何を言っているのだ。一体も残りはせぬ。エミリー、行くぞ！」

「はいっ、お姉さま！」

ネクロマンサーが驚いて後ろを振り返ると、森の中から愛馬に乗ったアリスとエミリーが飛び出してきました。

「ローレンツが作った新しい矢の威力を見るがよい！」

アリスは叫ぶと、動死体に向かって矢を放ちました。飛んでいる間に矢は燃え上がり、それで射抜かれた動死体もまた燃えてしまいました。

（矢に燃えやすい油を塗って飛ばす勢いで発火させるとは…ローレンツという男、面白いことをするものだ…）

「エミリー！右だ！」

「はいっ、お姉さま！」

猛然と動死体の中を駆け回るアリスとエミリーを見て、パトリックは苦笑いしました。

（やれやれ…私の出る幕はなさそうだな…ん？）

「そこのネクロマンサー！隠れても無駄だ！出てこい！」

パトリックは木陰に隠れているネクロマンサーを見つけました。

「ひっ！」

ネクロマンサーは小さく悲鳴を上げると、小さな煙と共に消えてしまいました。

（逃がしてしまったか…）

そこへ、アリスとエミリーが戻ってきました。

「パトリック、こちらは片付いたぞ。」

「手際がいいね。」

「やつらは動きが鈍いからな。魔獣を追うよりもずっと戦いやすいものだ。」

「ネクロマンサーは逃げてしまったようですね…。」

「文字通り、煙のように消えてしまったよ。」

パトリックは心底残念そうです。

「仕方あるまい。今後も戦うことになるだろう。捕まえる機会はいくらでもあるはずだ。」

「ああ、そうだね。…とりあえず宿に戻ろう。オリバーたちと合流しないと。」

「うむ。では行くか。…ハッ！」

三人は馬を走らせ、ヴォルフの宿へと向かいました。

～～～

「…動死体は排除できたか？」

「うむ、お前の予想通りだった。やつらは墓場に戻ってきたからな。ローレンツが作ってくれた矢のおかげで相当手間が省けた。感謝している。」

「お役にたてて嬉しいぜ。」

アリスに感謝され、ローレンツは鼻高々です。

「でも動死体を操っていたネクロマンサーは逃がしてしまったよ。」

パトリックはまだ悔しそうです。オリバーは励ますように言いました。

「仕方ないさ、やつらも外道とはいえ魔術師だ。逃げることなんてたやすい。今オーベルクに迫っていた危機を乗り切っただけでも良しとしようじゃないか。…反対側の入り口からはアンデッドは来なかったのか？」

「十体ほど来ました。パトリックさんが一人で蹴散らしてくれましたけれど。」

エミリーが笑顔で言いました。

「いや、私一人の手柄ではないよ。アリスとエミリーもしっかり援護してくれたじゃないか。カトリーヌもアンヌも、素晴らしい馬だね。…とにかく、今回の作戦ではオリバー、君の作戦には一つの狂いもなかった、ということだよ。」

パトリックはようやく笑顔を取り戻してオリバーに言いました。

「だがその作戦が成功したのは、ここにいる一人ひとりが頑張ってくれたからだ。…今日はみんなゆっくり休んでくれ。特に…ローズはな。」

オリバーの言葉に、仲間たちはそれぞれ言葉を交わすと自分の部屋に戻って行きました。パトリックとビアンカも、宿を出て行きました。

～～～

「どうぞ。…イザベルとマチルドか。」

「オリバーさん、今何かなさっていますか?」

「いや?気まぐれに古代の魔道書を翻訳していただけだけど。」

「…もしよろしければ、ローズさんのところに行ってあげていただけますか?」

オリバーは怪訝そうな顔をしました。

「ローズのところ?何か問題でも起こったのか?」

「いえ…、その…、あの、ローズさんは特に疲れてしまっていますので…。」

イザベルが目を白黒させながら言います。

「あ、ああ、そうか…。それじゃあ、顔を出してくるか…。」

オリバーは不思議そうな顔をして本を片手に部屋を出て行きました。

「あの朴念仁、どうしてこうも鈍いかなぁ？」

マチルドが呆れたようにつぶやきました。

～～～

「ん？何て言ったんだ？」

「何でもない…。」

「イザベルは本当にお前に悪いことしたと思ってるみたいだな。」

「…全然気にしていない…。…死ぬかと思ったけど。」

ローズがため息まじりに言いました。オリバーは心配そうです。

「そんなにつらかったのか？」

「…まだ死ねない。…まだ全然先生の役に…、」

ローズはまた小さな声で言いました。

「まだ全然…何？」

「何でもない…。」

オリバーは苦笑いしました。

「…相当疲れてるんだな。今日は早めに寝ろよ?」

「そうする…どこ行くの?」

ローズが立ちあがったオリバーのマントをつかんで聞きました。

「ん?いや、寝るなら一人にしてやったほうがいいかな、と思って。」

「誰かが一緒じゃないと眠れない…。」

「じゃあ、イザベルとマチルドを呼んでくるよ。」

「…たまには違う人がいい。先生とか…。」

ローズは懇願するような目でオリバーを見ています。

「ええ？…しょうがないな。」

オリバーはローズが眠りに着くまで椅子に座って見守っていました。
が、オリバーもいつのまにかそのまま眠ってしまいました。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「12．オーベルクの死闘」（後書き）

動死体たちを退けたオリバーたちは、体力を消耗しながらも間接的ではありますが、初めて魔術師との戦いに勝利することができました。仲間たちもこれで少し自信がついたようです。

次話ではオリバーたちがオーベルク近郊の森の中で訓練をしたり、素材集めをしたりしている話になります。どうぞお楽しみに！

ちなみに、今回動死体を操っていたネクロマンサーは、死体を操ることには特化していますが、オリバーやイザベルのように攻撃魔術を扱うことはそこまで得意としていません。必要最低限の魔術しか身につけていないのです。それでも、一般人にとっては驚異的な存在であることには変わりありませんが。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「13．森の中で」（前書き）

オリバーたちが動死体を排除したことにより、オーベルクに迫っていた危機は何とか回避することができました。オリバーたちは、今日は近くの森に来ているようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「13．森の中で」

キンフィールド城のある一室、ある男が側近の報告を受けていました。

「ほう、ネクロマンサーが敗れたか。」

鋭い眼光に青白い顔、この男が悪政を行っているギル大臣です。

「はい。オーベルクに動死体を突入させる前に撃退されてしまったということです。…召喚して処刑いたしましょうか。」

「まあ、まだいいだろう。やつもこれまでそれなりの功績を挙げてきた者だ。すぐに切り捨てることもあるまい…。しかし、そのネクロマンサーを退けるとは、なかなか腕の立つ者がオーベルクにいたのだな。」

「それが…何でも外部の者の力によるものだという噂も飛び交っております。」

「ほほう、外部の者、か…。」

「捕らえましょうか。」

ギル大臣は笑って言いました。

「…放っておけ。この作戦が失敗したところで私の立場が危うくなるわけではない。」

「はっ。」

～～～

「まだ魔獣がうろついている可能性も高い。気をつけろよ。」

オリバーが注意しましたが、イザベルは笑顔のまま言いました。

「大丈夫ですよ。相手が魔獣でしたら心おきなく魔術を使えますからね。」

（イザベルも最近は随分と大胆になってきたな…）

すでにハンスとレオンは訓練を始めています。

「ほらハンス！もっと体重をかけてどっしりと構えるんだ！それを維持したままあの人形に突っ込め！」

「うおおおおっ！」

「まだまだ軽い！吹けば飛ぶようじゃねぇか！」

ハンスとレオンを見ながらオリバーは笑っていました。するとペーターがオリバーに言いました。

「先生！俺にもお願いします！」

「ああ。…訓練刀を持ったな？よし、ペーター！俺を殺す気でかかってこい！遠慮はいらないからな！」

「はいっ！うおおおおっ！」

～～～

「あたいとローズは大丈夫。ビアンカとイザベルが乗せてもらえよ。」

「それで、いい…。」

ローズも同意しました。

「そうか。ではビアンカ、カトリーヌに乗るのだ。」

「イザベルさん、どうぞ。」

イザベルとビアンカが馬に乗りました。

「乗ったか?乗ったな?では行くぞ。ハッ!」

アリスとエミリーはカトリーヌとアンヌを駆け足で走らせました。ローズとマチルドがそれを追いかけます。二人も風のように走っては行きますが、どんどん距離が離されていきます。

(くっそー、強情張って大丈夫なんて言わなきゃよかった!人間が馬に勝てるわけないだろーっ!)

（馬は速い…）

～～～

「うおぅ!?エ、エミリー!もっと下流で洗ってくれよーっ!」

「えっ、そ、そんなこと言われても…。」

ビアンカは木に登って果物をほおばっていました。アリスが笛を吹くのをやめてビアンカを見上げています。

「ビアンカ!吾れにも一つ投げてはくれぬか!」

「ほーい!」

ビアンカは真っ赤な果実を切り取ると、アリスに投げました。

「うむ、よく熟れている。甘くて美味だな。」

アリスは満足そうです。

「ビアンカ!あたいらにもくれよー。」

ローズとマチルドも見上げています。

「ほいよっ。」

ローズとマチルドは果実を頬張って顔をしかめました。

「何だよこれ！」

「酸っぱい…。」

ビアンカは枝の上で笑い転げています。

「お子ちゃまになんて早い早い！疲れた時には酸っぱいものでも食べておきなっ！」

「何だとーっ！？降りてこーい！」

「降りろと言われて降りると思う？」

「こっちは甘い…。」

いきなりローズが隣に現れたので、ビアンカはびっくりして枝から落ちそうになりました。

「ロ、ローズ!?あんた、いつの間に!?…まあ、せっかくここまで来たんだからね、ここに来たあんたには甘いフルーツを食べる権利をあげる。」

ローズは果物を食べながらコクコクと頷きました。

「くっそーっ!裏切ったなローズ!このやろう!」

マチルドは木の根元に思い切り体当たりしました。

「うひゃっ!?」

その衝撃でローズとビアンカが座っていた枝が折れてしまいました。
二人は地面に落ちてしまいました。

「へっへー、ざまあみろ!」

「むー!もーう怒った!ローズ!行くよっ!」

ローズはコクンと頷くと、ビアンカと二人でマチルドに飛びかかりました。

「ぎゃあああっ！わ、わかったよぅ！あたいが悪かったよぅ！だから二人がかりなんて…やめろおおおっ！」

大騒ぎする三人をアリスは笑いながら見ていました。

～～～

「当然だ…。…クヴァール！」

「ぎゃあああああっ！」

～～～

「うがあああっ！」

今度はペーターが叫びます。

「…ちょうどいい機会だ。お前ら呪いの魔術を見くびっているようだからな。これを機にこの恐ろしさをとことん味わえばいい。」

そう言いながらオリバーは悪魔のような笑みを浮かべてハンスに向き直ります。

「せ、先生！目的が変わって…、」

「問答無用だ！クヴァール！」

「ぐわあああっ！」

「あはははは！クヴァール！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

馬たちに水を飲ませていたエミリーのところに、たくさんの薬草を抱えたイザベルがやってきました。

「エミリーさん、こちらをどうぞ。この薬草はお馬さんたちも喜んで食べますよ。」

「ありがとう、イザベルさん。」

エミリーはイザベルから受け取った薬草をカトリーヌとアンヌに食べさせました。二頭はとても喜びました。イザベルはそれを微笑ましげに見ています。

「すっかりエミリーさんに懐いていますね。」

「いつも世話をしていますからね。私がお姉さまよりも上手くできることといったら、この子たちの世話くらいでしょうか…。」

「アリスさんとエミリーさん、雰囲気が全然違いますものね。」

「お姉さまは私の憧れの人です。…でも同時に、絶対に追いつけない人ですね。」

エミリーは少し残念そうに言いました。

「そうですか？そんなことはないと思いますよ？だとしても、私はそれぞれの良さがあっていいと思いますよ。」

イザベルはいつものように笑顔で言いました。エミリーは何だか心が安らぎました。

～～～

「イザベル、みなと一緒に先に戻っていてくれ。」

「アリスさん?どうしたんですか?」

「少し用事が出来た。安心するのだ、すぐに追いつく。…エミリー、行くぞ!」

「はいっ、お姉さま!」

「ハァーッ!」

アリスとエミリーはものすごい勢いで馬を走らせていきました。

～～～

「は、はい…何があったんですか？」

イザベルが辺りを見渡して言いました。ハンスたち三人が地面に倒れています。ペーターに至っては軽く痙攣しています。

「もう、訓練でへばったの？だらしがないなぁ…。」

「反論する気にもならねぇ…。」

ビアンカがバカにしたように言いましたが、レオンはビアンカの方を向くこともできません。ハンスもマチルドに言います。

「マチルド、先生の寝首をかこうとするたびにローズに阻止されてるらしいけど…それの方が何倍もマシかもしれないよ…。」

「…はあ？」

「そういえばアリスたちはどうしたんだ？」

オリバーが辺りを見渡してビアンカに聞きました。

「何か用事が出来たって。すぐに追いつくって言ってたけど…。」

その時、眩しい夕日を背にして二頭の馬のシルエットがこちらに向かってきているのが見えました。

「どうどうどう！…すまぬ、イザベル。待たせてしまったか？」

「いえ、私たちも今着いたところです。」

笑顔でアリスと話すイザベルとは対照的に、オリバーはびっくりしています。

「そ、それよりそれは何だ！？」

「うむ、たった今エミリーと仕留めてきたのだ。大物だろう？」

オリバーが驚いたのも無理はありません。アリスが乗っているカトリーヌの後ろには大きなシカがくくりつけられていたのです。アリスは得意げです。

「今日の食卓は豪華なものになるぞ。さあ、良い汗もかいたことだ、

早く宿に帰ろうではないか。」

「あ、ああ。そうだな。」

オリバーはまだ驚きを隠せないようです。

「イザベルさん、後ろに乗りますか？」

エミリーがイザベルに声をかけました。

「いえ、私は結構です。あ、もしよろしければこの袋を運んでいただけますか？薬草がたくさん入っていますので…。」

「わかりました。」

エミリーはイザベルから薬草の入った袋を受け取ると、アンヌにしっかりと結びつけました。

彼らの晩餐が豪華なものだったことは言うまでもありません。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「13．森の中で」（後書き）

オリバーたちはつかの間の平和な時間を十分に楽しめたようです。
もっとも、ハンスたちに関しては楽しめたといえるかどうかわかりませんが…。

次話では、オリバーとパトリックが経験した巨大魔獣との戦いの話をパトリックが仲間たちに語ります。しかし、ペーターはどうも納得がいかないようですが…？どうぞ楽しみに！

ちなみに、オリバーがハンスたちにかけた尋問用の魔術は、唱えてから相手に苦痛を与えるまでに数秒の時間差があるので、実際に避けようと思えば避けることも可能です。初登場のマチルドがこれを避けることができたのはそのためです。そのため本来この魔術を使う際は、まず相手の動きを止めてから尋問を開始するのです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１４．一人前の剣士に」（前書き）

今日はヴォルフの宿に、普段はいないパトリックとビアンカも来て一緒に夕食を食べているようです。お酒も入り、中にはすでに気持ちよさそうに酔っている仲間もいるようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１４．一人前の剣士に」

ヴォルフの宿屋は今日も賑やかです。ヴォルフは楽しそうにオリバーに言いました。

「お前らがいると、楽しくていいよ。…だが、またすぐに旅に出るんだろう？」

「ああ、今度は東のロンドランド地方と南のナンジューマ地方に行ってみようと思う。俺の国からオットー様に会いに行く途中も、ロンドランド地方は通っただけだからな。」

「そうか、ロンドランドもナンジューマもいい場所だぞ。土地も豊かだし、暖かいしな。」

ヴォルフは笑って言いました。

「何だよ、オヤジ。それじゃあシーガルンは不毛の地だ、っていうのかい？」

「聞き捨てならぬな、亭主。ノーザリンも豊かな土地であることに間違いはないのだ。」

気持ち良さそうにお酒に酔ったレオンとアリスがヴォルフに文句を言いました。

「ハハッ、別にそういうわけじゃないよ。」

ヴォルフは苦笑いしています。

「仕方ねぇな、少なくともノーザリンよりはシーガルンの方がいいって認めてくれれば許してやるぜ。」

「何を言う。それを言うならノーザリンの方がシーガルンよりも素晴らしい土地なのだ。亭主、そう言え。」

「何だって？ノーザリンなんか、森と山脈しかねぇじゃねぇか。冬は雪に閉ざされちまうしな。」

レオンがアリスを睨みながら言いました。

「泥のような粥を食う者どもに言われたくはないな。」

アリスはすまして言います。これにレオンは頭に来たようです。

「何だと!?よし、表に出ろ!決着をつけてやる!」

「ふむ、よかろう。貴様とはいずれこうなるような気がしていた。貴様のようなバカ者など素手で十分だ。」

「面白いじゃねぇか!俺だって素手でやってやらあ!」

「貴様が素手だと?ならば吾れは片手で十分。」

「減らず口を叩くんじゃねぇよ!お前のその作ったような口調!化けの皮を剥いでやるぜ!」

「作ったも何も、吾れは幼少のころよりこの口調だ。そうだろう、エミリー!」

「は、はい!お姉さま!」

エミリーは困ったように返事をしました。

「くそーっ、ここじゃらちがあかねぇ!さっさと表へ出やがれ!」

「望むところだ。」

二人は睨みあいながら宿の外へ出て行きました。テーブルに取り残されたエミリーはため息をつきました。

「お姉さまはお酒を飲むと気が大きくなってしまいますので…。レオンさんにはご迷惑をおかけしてしまいました…。」

「レオンのことなんて気にすることないって。どっちにしろ、明日になったら二人とも覚えていないだろうしね。…ローレンツもマチルドももう酔っぱらって寝てるし…。パトリックももう一杯どう?」

ビアンカがパトリックにお酒をすすめました。

「…いや、私はもう遠慮しておこう。初めの一杯が飲めればそれで十分だからね。」

「パトリックったら、強いくせに飲まないんだから。…ねえ、パトリック。今何本の指が見える?」

「…二本じゃないのかい?」

「だよねー。…ねえ、イザベル！この指何本？」

ビアンカは隣で顔を真っ赤にしているイザベルに聞きました。

「え、えええっと…、四本…六本…ああ、どんどん増えて…、ビアンカさん、いつの間に魔術を覚えたんです？」

「…飲んだ量が同じ一杯だけの人とは思えないね。」

ビアンカがおかしそうにいいました。

すると、突然ペーターがパトリックに話しかけました。

「そうだ、パトリックさん！パトリックさんは先生と一緒に巨大魔獣と戦った生き残りなんでしたよね？俺の兄さんのことは知ってます？」

「君の？名前は何だい？」

「エミールです。エミール・ヘルマン。先生の親友でした。」

「エミール・ヘルマン…。…オリバー！」

突然パトリックが叫びました。鋭い口調に、オリバーはびっくりしました。

「…ちょっとこっちに来るんだ。」

オリバーはパトリックの剣幕に驚きつつもパトリックの向かいの席に座りました。

「オリバー、君は弟子に話していないのか、あの時の戦いのことを。」

「一応話はしたさ。…だが、知らない方がいいこともあるんじゃないか？」

オリバーは少しバツの悪そうな顔をしました。

「それは甘すぎるのではないかい？ペーターは君の弟子となり、魔獣と戦い、成長したんだ。事実をしっかりと伝えるべきじゃないのかい？」

オリバーは黙っています。

「…反論しないということは話していいということだね。ペーター、君の兄は、命令に反して死に急ぎ、命を落とした上にその後の作戦にも悪影響を与えた大バカ者さ。」

「お、おい、パトリック、そんな言い方はないんじゃないのか?」

あまりに厳しい言葉に、たまらずオリバーが言いました。

「私は事実をそのまま伝えただけだよ。」

しかしパトリックは落ち着いています。ペーターは黙ってうつむいています。ハンスは遠慮がちにパトリックを見ています。

「…ハンスも詳しく聞きたそうだね。どうやら君たちの師匠はろくにその時の話をしていないようだね。私が代わりにくわしく話してあげよう。」

パトリックが話し始めました。

～～～

間を連れて巣穴に突撃していった。残ったのは私やオリバーを含めて十人だけだった。…自信満々で魔力線を解いて中に入って行った戦士たちは、あまりの空腹さで気を荒げ更に凶暴になっていた魔獣に襲われ全滅した。それに気づいたオリバーが慌てて魔力線を張りなおそうとしたが、魔獣はもうすでに巣穴を出た後だったんだ。…仮に出ていなかったにしても、あの当時のオリバーの魔力では封印なんて無理な話だっただろうけどね。

結局私たちは更に凶暴になった魔獣相手にたった十人で戦うことになったんだ。結局何とか勝つことはできたけれど、残った十人のうちでも四人が魔獣に命を奪われ、二人がまともに生活できないほどの重傷、他の戦士たちもどこかしらに傷を負ったんだ。私も背中に爪で裂かれた傷が未だに残っているよ。もっとも、オリバーだけは何故か無傷だったけれどね。

…トミーさんは若い戦士たちをたくさん死なせたということで責任を取って現役を退いたんだ。とにかく、」

「もういい！やめてくれ！」

ペーターが叫びました。

「兄さんは…きっと兄さんは一日でも早く俺たちのところへ帰りたくてそうしたんだ！」

感情的なペーターとは対照的に、パトリックはあくまでも冷静です。

「そんなことは知らないよ。しかし、例えそうだとしても魔獣は私情にかまけて戦って勝てるような連中ではないことは確かだ。」

「じゃあ、何であんたや先生は残ったんだ！あんたたちだってそんなに若かったなら、今みたいな深い考えが出来るわけないだろ！」

「…君はずいぶんと自分の師匠を見くびっているんだな。…まあ、それはいいとしよう。確かに私に関してはその時に思案を巡らせていたわけではないよ。私が思っていたことはただ一つ…命令に逆らうのは騎士として恥だ、ということだよ。」

「じゃあ指揮官が突撃を指示していたら突撃していたのか！？」

パトリックは意志のこもった目で言いました。

「これは私の騎士としての誇りだ。無論一般的には無茶な命令には反対する権利もある、ということが普通なのだろう。」

「もういいよ！」

ペーターはガタンと立ち上がると階段を荒々しく登り、二階へと上がって行きました。

「ふう…。みんな、すまないね。楽しい空気を台無しにしてしまった。お詫びに、今日の飲食代は私が持つことにするよ。」

パトリックが申し訳なさそうに言いました。すると、ハンスが遠慮がちに言いました。

「でも…ペーターには悪いですけど…俺は今まで知らなかったことを聞けてよかったと思いました。先生も教えてくれなかったので…。」

「もう、師匠！隠したい気持ちもわかるけど、やっぱりこういう大事なことを隠しておくのはダメだよ！」

ビアンカが口をとがらせました。

「そうだな…。これは俺のせいだよ。」

「…それで先生、先生はどうして残ったんですか？やはり先生も命令には従うべきだと思ったんですか？」

ハンスがオリバーに聞きました。

「それももちろんだが…、俺はペーターたちを守るために残るしかなかった。」

「それはどういうことですか?」

エミリーが興味深そうに聞きます。

「俺はペーターの兄貴のエミールとは本当に仲が良かったし、あいつの腕を信用していた。だが、もし俺がエミールと一緒に洞窟に入り、二人とも死んでしまったとしたら身寄りのないペーターとその妹は路頭に迷うことになる。だが俺が残ればエミールが死んだとしても俺がペーターたちを世話することができるし、エミールたちが生きて帰ってくればそれはそれで何も問題がない。そう考えたのさ。…実際エミールは早く戦いを終えてペーターたちに会いたがってた。

…俺はペーターの様子を見てくるよ。」

オリバーは静かに階段を上って行きました。

「…ペーター、羨ましい…。」

ローズがポツリと呟きます。ビアンカが不思議そうに聞きます。

「どうして？」

「一人ぼっちになった時のことを考えてくれる人がいて…。」

ビアンカはちょっとだけムッとして言いました。

「何言ってるのさ。あんたはそういいながら自分から人を遠ざけてたんでしょ？それに、今は一人ぼっちじゃない。ほら、仲間がたくさんいるでしょ！」

あきれたようなビアンカの言葉に、ローズはハッとして顔をあげました。たくさんの仲間の笑顔がローズを見ていました。

「…そうだった。…それにもう一人じゃない。」

「でしょー？仲間の一人として、今の発言は聞き捨てならなかったからね！」

ローズはかすかに笑い、ビアンカに言いました。

「でも、ビアンカを仲間と思ったことはない…。」

「…はあっ!?かわいい笑顔でいきなり何を言ってるの!?」

「…先生のこと師匠って呼ぶなんて、なれなれしい…。」

「あんただって弟子でもないのに師匠のこと先生って呼んでるでしょ!?もう頭に来た!表に出なさい!決着つけてやる!」

「望むところ…。」

二人は火花を散らしながら外へ出てゆきました。

～～～

「あっ、先生…。…先生、すみませんでした。先生をバカにするようなことを言ってしまって…。」

「いや、いいんだ。それより俺もお前に黙っていて、」

「…いいんです、先生。」

ペーターは剣を壁に立てかけると、オリバーに言いました。

「あれから怒りのままに剣を振りまわしてました。…でも、時間が経つにつれて、悔しいけどやはりあの人の言っていることが正論としか思えなくなってしまって…。結果的に兄さんは死んでしまったわけですからね。

…兄さんは確かにバカです。でもバカだけど、俺たちのことをいつでも考えてくれてた。それは先生もわかってくれていますよね？」

「ああ、もちろんだ。」

「…俺は強くなって見せます。兄さんや、パトリックさんよりもずっと強くなります。もちろん剣の腕だけじゃありません。心も一緒に強くなって見せます。そして、誰の前でも胸を張っていけるよう

な立派な剣士になって見せます。」

「そうか…。お前になら間違いなくできる。これは六年間兄貴の代わりにずっとお前の面倒を見てきた俺が自信を持って言えることだ。…そしてそれが出来た時はお前はもう一人前の剣士だ。」

（そしてそれを理解してくれたお前は…本当によく成長してくれた）

オリバーは心の底からペーターのことを頼もしく思うのでした。

～～～

ーザリンもどっちもいい場所だよ。それで文句ないだろ?ほら、中に入って飲みなおそうぜ?俺が付き合ってやるから。」

ヴォルフが二人に手を貸すと、二人ともよろよろと立ち上がりました、が、目が合うとまるで縄張り争いをする獣のような目つきで睨みあっています。

屋根の上からはものすごい物音と悲鳴が聞こえてきます。

「ビアンカ!ローズ!いい加減にしろ!…まったく、楽しくなったのはいいが、後片付けをするこっちの身にもなってくれよ…。」

ヴォルフは小さくため息をつきました。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１４．一人前の剣士に」（後書き）

パトリックに反抗したペーターでしたが、結局は彼の言うことを認めざるを得ないということに気づいたようです。そしてそのやりきれない気持ちを剣にぶつけることで、彼自身の飛躍にもつながったようですね。

次話ではオリバーたちが東のロンドランド地方に向けて、また旅を開始します。そして、あの人とも再会することに…？どうぞお楽しみに！

ちなみに、巨大魔獣との戦いのとき、オリバーはそれ以前にもある程度経験を積んではいましたが、パトリックは騎士としてデビューしたばかりだったので本当にこれが初陣でした。にも関わらず、獅子奮迅の働きをしたので、彼自身の評価が急上昇したのです。オリバーと初めて出会ったのもこの時でした。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「15．ロンドランドへの旅立ち」（前書

オリバーと仲間たちは旅の支度を整え、ヴォルフの宿を出発するところです。目指す目的地はリバー王国の東側に位置するロンドランド地方です。ロンドランドへの旅路は比較的近くて安全なので、オリバーたちは戦力を分けることにしたようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「15．ロンドランドへの旅立ち」

朝、オリバーたちは旅支度を整えていました。

「それじゃあオリバー、私たちは先に出発するよ。」

パトリックがオリバーに話しかけます。

「ああ、ハンスとペーターをしっかり頼んだ。お前らもしっかりと腕を磨いてこいよ。」

「必ず先生の期待に応えて見せます。」

「見ていてください！」

パトリックたち三人は最近魔獣がたくさん出現するようになったというシーガルンへ向かう街道沿いの村へ向けて出発しました。

「今回は戦力を分けるんだな。」

見送りに来たヴォルフが言います。

「ロンドランドはあまり遠くない。一週間もあれば行って帰ってこれる。だがそこからナンジューマに行くにはかなりの時間がかかってしまうからロンドランドに行ったらもう一度ここに帰ってくる。パトリックたちならそれくらいの時間があれば簡単にかたをつけてきてくれるはずだ。ペーターもあれ以来パトリックを信用しているし、ハンスも気分転換ができていいだろう。」

「なるほどな。ロンドランドは基本的に安全な土地だ。魔獣に会うこともまずないだろう。…とにかく、気をつけて行け。」

「ああ、わかった。…よし、みんな行くぞ！」

オリバーの号令に、仲間たちは東へと向けて歩き始めました。

～～～

「うむ…努力はしているのだが…。」

「森の中なら初めて行った場所でもすいすい進めるのに…。」

「森の木々は一つ一つがまったく違う形をしている。だが…街の建物はすべて同じに見えてしまう。そう思わぬか？」

「…あたしからすると、木が違う形してるようにはまったく見えないけどね。それこそ全部同じ形に見えるよ…。」

「何だと、不思議なことを言うのだな、ビアンカは。」

～～～

「何だよ、型にはまった訓練場流の話のしすぎで頭でもやられたのか？」

「何を言ってるんだ。古くから占術は戦いの前に重要視されていた。星のまたたき、雲の流れ、獣の不自然な行動。すべて戦いにおいて重宝される。」

マチルドはバカにしたような顔で言いました。

「…まったく、お前みたいに、街の連中は占い師の言うことを鵜呑みにするようなバカだからろくに戦えないんだ。

いいか？それらはだいたい天気の変わり目を現しているんだ。例えば雨が降る、とか、霧が出る、とか、日照りが続く、とかな。占い師なんて言うのはそういうのをちゃんと知っていてもっともらしくお前らに言うんだ。少なくともあたいらのような山賊や、アリスたちみたいな狩人なら生活の中で自然に身につくような知識だぜ。」

「…ふ、ふざけるな！それでも俺が知っている占い師の先生はな、三年も前にハングリアの街に洪水が襲いかかってくることを、」

「それも説明してやるよ。それはそもそもお前らが悪いんだぜ？お前らが山の木をたくさん切りまくったから、…。」

〜〜〜

「実はちょっと考えてみたんだ。ものが爆発する時にはものすごい力が生まれるだろ？だから、それを利用して例えば鉄の球なんかを筒で飛ばしたら、ものすごい武器になるんじゃないか、って。」

ローレンツが興奮気味に言いましたが、オリバーは苦笑いしました。

「おいおい、わざわざそんなもの使わなくても、飛び道具なら弓矢があれば十分じゃないか。」

「まあ、それはそうなんだが…。」

ローズはオリバーとずっと話しているローレンツを、すぐ後ろで少し恨めしそうに見ていました。

～～～

「ええ、森の中の異変も、狩りの獲物もすぐに見つけられます。」

「あ、そうそう、特別にこれをエミリーさんにあげます。薬草を煮詰めてつくったお薬です。アリスさんの分もありますから、渡してあげてください。万が一毒に侵された時はこれを飲んでください。」

イザベルはエミリーに薬を渡しました。

「ありがとう、イザベルさん。」

「いつもあなた方は一番危険なところで戦っていらっしゃるみたいですから、少しでもお役に立とうと…。」

「助かります。休憩する時にでもお姉さまにお渡しすることにしましょう。」

～～～

「もしもし？あなたがたはもしや、ローゼンハイン様のご一行で？」

「そうだよー、へむっ！？」

ビアンカは陽気に答えましたが、アリスがビアンカの口をふさぎました。

「待つのだビアンカ！…農夫、名乗ってしまったからにはもう遅い話だが、なぜ吾れらがオリバーの仲間だとわかる？…貴様、ただの農夫では、」

「待てアリス！」

オリバーは慌てて農夫のもとへ走ってきました。農夫は笑いながらかぶっていた帽子を取りました。

「久しぶりだな、ローゼンハイン殿。」

それは農夫に扮したオットー様でした。

「やはりオットー様でございましたか。ご病気も回復なさったようで、何よりでございます。」

「クララの看病のおかげだ。…なあ、クララ。」

オットー様の呼びかけに、クララ様も近づいてこられました。

「…ローゼンハイン殿、オーベルク以来ですね。」

「クララ様も。お元気そうで何よりでございます。」

「あなた方の近況はクララから聞いている。この前もオーベルクを動く死体から救ったという話だな。」

オットー様が感心したように仰いました。

「頼りになる仲間たちの力で何とか頑張っております。」

オットー様はオリバーの仲間たちを見まわされました。キョトンとしていた仲間たちも、驚いてオットー様の前にひざまずきました。

「オットー様とはつゆ知らず、無礼な発言をお許し下さい。」

アリスは無礼を心から詫びました。オットー様は笑って仰います。

「気にすることはない。この格好をしている間は、余もクララもただの農夫だ。…ローゼンハイン殿、オーベルク方面から歩いてきたところをみると、これからロンドランドへ向かうようだな?」

「さようでございます。」

「うむ、ロンドランドには港町であるトリポート、それに古都であるパカロンという大きな二つの街がある。まずはトリポートへ向かうがよい。」

「ありがとうございます。そのようにさせていただきます。」

「うむ。それではまた会おう。…余も収穫が忙しいものでな。」

「必要とあらばお手伝いいたしますが…。」

「何の、自分自身で収穫するからこそ口にした時の喜びも増えるというものだ。…この暮らしを始めて最初に学んだことだな。」

オットー様は笑って仰いました。

〜〜〜

「いや…そもそもあたいはもう山賊じゃない。…そういうことじゃなくてな、時々お前の弁当から食い物をいくつか盗んでるんだけど、まずくてまずくて…。」

「何だと!?じゃあ時々弁当の中身が減ってるのはお前のせいか!」

「いくら腹が減ってるとは言え、食い物は選んだほうがいいかな…。」

「うるせぇ!だいたいお前もシーガルンの出身だろう!?」

「あたいの生まれはノーザリン側の村だぜ。あいにくなことにノーザリンの食い物は何でもうまいからな。」

レオンとマチルドはまた口論を始めました。一方、エミリーはアリスを心配しています。

「お姉さま、まだ顔色が…。」

「う、うむ…。オットー様へのあの無礼な言葉を思い出すと恐ろしさがこみ上げてくるのだ…。」

「大丈夫だって！オットー様はそんなことで怒るような人じゃないよ、きっと！」

ビアンカが励ます。イザベルが苦笑いをしています。

「ビアンカさんも、もう少し危機感を持ちましょうよ…。」

一方、ローレンツは相変わらず興奮しながらオリバーにまくし立てています。

「…でよ、俺っちは思うんだ。少しでも火薬ってやつが手に入ったら間違いなくすごいことが出来るって！」

「あ、ああ。そうだな。」

（さっきから背後にものすごい殺気を感じる…。ローズも険しい顔をしてるから、きっとそれを感じているんだろう。用心しよう）

オリバーは殺気を放っているのが嫉妬に燃えているローズだとは夢にも思いませんでした。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１５．ロンドランドへの旅立ち」（後書き）

オットー様と再会したオリバーたちは、一路ロンドランド地方の港町、トリポートを目指すことになりました。初めのころに比べると冒険の仲間も増え、オットー様も心の底から安心したようです。

次話ではオリバーたちが港町、トリポートに到着します。今まで海を見たことがなかったアリスとエミリーは目の前に広がる光景をよく理解できないようですが…？そして新たな出会いもあります。どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーとローレンツが話していた「東方世界」というのはあの４０００年の長～い歴史を持っている国をモデルとしています。ローレンツはオーベルクに滞在しているときに買った本でこの国のことを知り、興味を持ったのです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「16．港町の大工」（前書き）

オリバーと仲間たちはリバー王国の東側にあるロンドランド地方への旅が続けていました。途中で再会したオットー様に勧められた通り、オリバーたちは港町のトリポートを目指しました。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「16．港町の大工」

オーベルクを出発して三日目の朝、オリバーたちはロンドランド地方の港町、トリポートに到着しました。港にはたくさんの船が泊まっています。時間も早いので彼らは街のそばの砂浜で休憩することにしました。

海を見たことがなかったアリスとエミリーは、目の前の光景がよく理解できていないようです。

「うーん！何度来てもここの景色は綺麗だなぁ。…アリス、どう？」

ビアンカが気持ちよさそうに体を伸ばした後、アリスに聞きました。

「うむ…、この海というものは、川のようなものか？向こう岸はどこにあるのだ？どこからどこまで流れているのだ？」

アリスが不思議そうな顔をしています。

「それは少し違いますよ。海というのはたくさんの川が集まって出来たものなんです。向こう岸は…私たちの知らない国、ということかもしれませんね。海は世界中とつながっています。」

イザベルが説明します。

「違いが知りたいなら、水をちょっと舐めてみればいいよ。」

アリスとエミリーはビアンカに言われるままに水をすくって飲んでみました。

「けほっ！けほっ！しょっぱい！」

「何と塩辛い…。これでは魚は棲めぬのではないか？」

「それはいずれわかるよ。」

ビアンカはアリスたちの反応を見て楽しそうです。

「湖とも違うのですね…。湖はこのようにしょっぱくありません。」

エミリーがオリバーに話しかけました。

「ははは、そうだな。」

「そうそう、わたくしたちの森の中に、とてもきれいな湖があります。それで、面白いことに注ぎ込む川も、流れ出る川もありません。」

「ほーう、面白いな。よく行っていたのか？」

「わたくしたちがよく狩りをした、水の枯れた谷を登って行った時に偶然見つけたのです。それ以来、いつも狩りの帰りにはそこで休んだり泳いだりしたものですよ。」

「もっとも、こんなに塩辛いのでは泳ぐ気にもならぬがな。…吾れにはあの男たちが信じられぬ。」

アリスが沖の方を見ています。レオンとローレンツは海に入り、銛を振りまわしています。やがて重そうなかごをさげて帰ってきました。

「おーい、大漁大漁！」

「昼飯にしようぜ！」

籠の中には魚がたくさん入っていました。エミリーが籠の中を警戒しながら覗き込みました。

「こんな水の中でも魚が棲めるのですね…。食べられるのですか？」

「何だって？海の魚を食ったことねぇのか？」

レオンは驚きを隠せません。その時、ローズとマチルドが走ってきました。

「おーい！貝をとってきてやったぜ！」

マチルドの声を聞いて、アリスが顔をしかめました。

「なっ、貝だと！？…吾れはあの泥臭さが苦手だ。食糧がなくて追い込まれた時にしか食わぬ。虫よりはましだとは思うがな。」

「それ…川の…。」

ローズがショックを受けたような顔でアリスを見ています。

「アリス、虫なんて食べたんだ…。まあ、食べてみなって。」

ビアンカが食事を二人に勧めます。

「うむ…。」

「はい…。」

～～～

「ははははっ、これで満足されちゃ困るよ。まだまだやることはたくさんあるんだからな。」

「さあ、街に行こうよ。宿を探さないとね。」

ビアンカの声に、仲間たちは街に向かって歩き始めました。

～～～

外国の人は嬉しそうにオリバーと握手をすると、去って行きました。

「…師匠、何を話していたの？」

ビアンカがびっくりしたようにオリバーに尋ねました。

「いや、港はどっちだと言われたから、ここをまっすぐ行けば着く、って。」

仲間たちはあんぐりと口を開けたままです。

「言葉っていうのは少しでも覚えておくと便利だぞ？」

オリバーが笑いながら言ったその時、彼らの前の方で騒ぎが起こりました。

「…何だろう、見に行ってみるか。」

～～～

オリバーたちが大声が聞こえたところにつくと、一人の青年が倒れていました。遠くの方では何人かの兵隊が大笑いしています。レオンが兵隊を見て呟きました。

「あの格好…中央から派遣された駐屯兵じゃねぇか。」

オリバーが青年に駆け寄ります。

「おい、しっかりしろ。大丈夫か?」

「切り傷がありますね…。このお薬を塗りましょうか。そしてこれを飲ませてあげてください。」

イザベルが薬を差しだしました。

「あ…ありがとう、ございます。くそーっ、駐屯兵のやつら…。」

青年が悔しそうにぼやきます。

「何があったのか聞かせてくれ。」

「あ、はい。…申し訳ないですが、家の中まで運んでもらえますか？あそこの家です。そこでお話します。外じゃやつらに聞かれちゃいます…。」

「わかった。レオン、あんたも肩を貸してくれ。」

「ああ。」

オリバーとレオンが青年の肩を支え、家の中に運び込みました。

～～～

「迷惑な連中だな。住民を守るためのはずの駐屯兵が、住民の生活を脅かしているなんて…。」

オリバーは顔をしかめました。その時、家の外から大きな歌声が聞こえてきました。先ほどの兵士たちが戻ってきたようです。オリバーはマチルドに言いました。

「…マチルド、お前、最近昔の血がうずくことはないか?」

「最近はないなー。…でも今日はそうかもしれない。」

マチルドがニヤリと笑って言いました。

「そうだな、今日は暴れてきてもいいぞ。」

「合点だ!」

マチルドは家を飛び出すと、兵隊たちから金貨の入った袋をサッと奪い去りました。

「ああっ!金を盗まれた!」

「ほーら、こっちだこっち！悔しかったらなくなる前に取り返してみろ！」

マチルドは笑いながら言うと、金貨を一軒に一枚ずつ投げ込んでゆきます。

「俺たちをバカにしやがって！痛い目見せてやるぞ！」

「できるもんならやってみなーっ！」

マチルドは楽しそうに兵隊をからかって逃げました。結局兵隊たちは夜までマチルドを追いかけましたが、捕まえることはできませんでした。

～～～

臣はこの街の持つ財力に目をつけました。駐屯兵なんて言ってますけど、やつらはいつも何かと理由をつけて僕らから金を巻き上げるんです。…しかもギル大臣の公認で。」

「ひどいことを平気でするんだなぁ…。」

オリバーがあきれ果てたように言いました。すると、ローレンツがラルフに話しかけました。

「…おい、ラルフと言ったか？この図面はいったい…。」

「あはは、恥ずかしいもの見られちゃったな…。それは僕が駐屯兵に仕返しできないかと思って考えた装置の図面ですよ。」

ラルフは照れ臭そうに言いましたが、ローレンツはひどく感心したようです。

「恥ずかしいだって？何を言ってるんだ。こんな素晴らしい仕掛けを思いつくなんて、お前はなかなかの素質があるぞ…。他にはないのか？」

「あ、はい、奥の部屋にあります。」

二人は奥の部屋へと入って行きました。オリバーが笑いながら言いました。

「…どうやら、仲間がもう一人増えそうな感じだな。こういうサポート型の仲間が増えると大いに助かる。」

「それにしても…、ラルフってやつはどんな図面を書いていたんだ？」

レオンが図面を覗き込みます。

「えーっとね…、水の力で槍を飛ばす機械？なのかな？」

「細かいうえに歯車がたくさんあってよくわかりませんね…。」

イザベルとビアンカは首をかしげています。

「…これは専門家しかわからないところだな。」

オリバーが笑って言いました。そこへマチルドがこっそりと帰ってきました。マチルドはそれにまったく気づかないオリバーに襲いか

かろうとしましたが、ローズに蹴り飛ばされてしまいました。

「ふぇぶっ！」

「…お帰り、マチルド。」

ビアンカが笑いをこらえながら言いました。

「くっそーっ…。何か知らないけど街の人からお礼をもらったから土産を買ってきてやったぜ。人のために働くってのはいいねえ。」

マチルドは担いでいた袋をどさっと床に下ろしました。中にはおいしそうな食べ物がたくさん入っています。

「よくやったな、マチルド。よし、ローズ。奥から二人を呼んできてくれ。とりあえずみんなで食べようじゃないか。」

ローズはコクンと頷くと、部屋を出て行きました。

翌日からラルフがオリバーたちの仲間になったことは言うまでもありません。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「16．港町の大工」（後書き）

オリバーの仲間に、新たにラルフが加わりました。ローレンツと同じように戦闘ん参加することはできませんが、いつも武器の手入れをしてくれます。欠かすことのできないサポート型の仲間です。

次話ではオリバーたちはロンドランド地方の古都、パカロンに到着します。ここで久しぶりにビアンカの気まぐれが仲間を振り回すことになるようですが…？そしてこの街で最後の仲間が加わります。どうぞお楽しみに！

ちなみにトリポートは、ギル大臣が政治を行う前は商人たちの自治がおこなわれていました。中世の関西のS市のような感じですね。しかしギル大臣はこの街を強引に支配下に置き、商人たちから多額の税金を巻き上げて私腹を肥やしているのです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「17．未熟な魔女」（前書き）

ロンドランド地方のトリポートでラルフを仲間に加えたオリバーたちは山を一つ越えたところにある古都、パカロンに向かいました。ここはギル大臣が王様を退けるまではオットー様が治めていた街です。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「17．未熟な魔女」

新たにラルフを仲間に加えたオリバーたちはトリポートから半日かけて歩き、昼過ぎにロンドランド地方の古都、パカロンに到着しました。オリバー、イザベル、ビアンカが先頭になって歩いています。

「初めて来たのに何だか懐かしい感じのする街ですね。」

「さすが古都、といった感じだな。」

オリバーとイザベルが感慨深げに言いました。

「もともとリバー王国とは別の国だったらしいけど、ずっと昔に友好的に一つの国にまとまった。それまではここがこっちの国の首都だったらしいね。」

ビアンカが説明しました。

「ああ。…確かオットー様はロンドランドの旧王家の末裔だったな。」

「うん。とっても位の高い人だもんねー。」

その後ろではローレンツとラルフが話しこんでいます。

「いやいや親方、ここの長さはこのくらいにした方がいいんじゃないですか？」

「おお、なるほど、そういう手もあるか。だとしたら、この軸も調節しなきゃならないな。」

「さっすが親方！」

「…あの二人、すっかり意気投合したのはいいけど、話すことが専門的すぎて意味がわからないや…。」

ビアンカが難しい顔をつくって見せました。

「ハハッ、そうだな。…今回の旅はラルフが仲間になったという大きな収穫を得ることができた。今日はゆっくりとこのパカロンで休んで、明日オーベルクに出発することにしようか。」

「さんせーい！…そうと決まれば、エミリー！アンヌに乗せて！」

ビアンカは嬉しそうに声を上げると、エミリーに声をかけました。

「はい？…ええ、構いませんが…。」

「イザベルはカトリーヌに乗って！」

「はい？…よくわかりませんが、アリスさん、乗せていただけます？」

「うむ、かまわぬが…、いつもはビアンカが吾れの後ろに乗っているではないか。」

「気まぐれだよ！準備できたー？じゃあ行くよっ！ハーッ！」

ビアンカはアンヌのお腹を蹴りました。エミリーはアンヌが急に走り出してびっくりしました。

「ひやっ！？ちょっとビアンカさん！何を！？」

「アリスたちもちゃんとついてきてーっ！はいっ、そこ左！」

「ま、待つのだエミリー！」

二頭の馬は土煙を巻き上げて走り去って行きました。取り残されたローズとマチルドは拗ねたような顔をしています。

「しょうがないな。この辺りにいればそのうちに帰ってくるだろう。…ほら、ローズもマチルドも元気出せ。そこの店で食べ物おごってやるから。」

二人はオリバーにそう言われると、とても嬉しそうにしました。

「ハハッ、まだまだ子どもだな。」

「何だとっ！？」

マチルドはまたレオンと言い争いを始めましたが、ローズはオリバーの後ろにぴったりとくっついてお店の中に入って行きました。

～～～

オリバーたちが宿の中で休んでいると、一人の少女が店の中に入ってきました。店の主人がその顔を見るなり迷惑そうな顔をして言いました。

「おいおい、お前はもう来ないでくれって言っただろう？」

少女は悲しそうな顔で店を出て行きました。マチルドがすかさず主人に文句を言います。

「せっかくの客にあんなこと言うなんて、この店はそんなにはやってるのかよ？」

すると店主は困った顔をして言いました。

「いやぁ、本当はあんなこと言うつもりはないんだけどねぇ、あいつが来るといつも店の中が大変なことになるんだ…。」

「へえー？」

ローズが窓の外を見ると、先ほどの少女が向かいのお店から出てきました。やはり追い払われたようです。ローズは立ち上がりました。

「ローズ?どこへ行くんだ?」

呼びとめたオリバーに、ローズが答えます。

「散歩…。そのうち戻る…。」

「…何なんだよ、俺の仲間はいつの間に放浪癖を身につけたんだ?」

オリバーはため息をつきました。

～～～

「アイスドゥーム！」

少女は大空に向かって叫びました。ローズは思わず目を閉じました。しかし、彼女が目を開けても街には何も起こっていません。ただ、たった今叫んだ少女が氷漬けになっていました。ローズは驚くと少女に駆け寄り、短剣で周りの氷を叩いて壊してゆきました。

「痛いよう！痛いよう！氷が砕けて痛いよう！」

ようやく氷が砕けて少女は動けるようになりました。

「ううっ…。助けてくれてありが…、え？ちょっと待って？もしかしてさっきの私の言葉、聞いてました？」

「さっきの、言葉…？」

ローズが首をかしげました。

「街を、氷漬けにしてやる、って…。」

「…今自分で言ってる…。」

少女は自分自身にショックを受けたようです。

「あーもう、どうしよう！こんなこと街の人に知られたら…、そうだ、あなたがいなくなればいいんだ！覚悟っ！ファイアーストーム！」

少女がイザベルがいつも使う炎の攻撃魔術を使ったので、ローズは体をピクッと硬直させました。しかし…、

「…いやあああああっ！熱い！熱い！熱い！」

少女の服が燃え上がりました。ローズはたまたまオリバーから預かっていた寝袋で叩いて少女の火を消しました。

「また失敗してしまいましたっ…。」

少女はもう泣きそうな顔をしています。ローズは黙っていましたが、何かを思いついたのか、少女の手を引いて歩き出しました。

「え？ちょっと、どこへ連れて行くんですか？離してください！」

「どこだっていい…。…私はローズ。」

「え？名前？…私はモニカです…。」

「別に聞いてない…。」

～～～

アリスが笑顔を見せながらも疲れを隠しきれない表情で言いました。
アリスとエミリーは一日中ビアンカに振り回されくたくたに疲れてしまっているのでした。

「…アリスもエミリーもお疲れさん。こうなるだろうと思ったから、今日は二人用の個室をとってある。」

「かたじけない…。」

「ありがとうございます、オリバーさん…。」

「一晩ゆっくり休んだら疲れも取れるよ!」

ビアンカがケロッとした様子で言いました。

「誰のせいだと思ってるんですか…。」

エミリーはため息をついて部屋を出て行きました。

「…それにしてもオリバーさん、この子はすごいです。」

イザベルがオリバーに話しかけます。

「イザベルは疲れていないのか？」

「少なくともあのお二方よりは大丈夫かと…。」

「そうか…。で、何がすごいんだって？」

「この子の魔力です。…名前はモニカさん、でしたっけ？」

「魔力が？」

「ええ。もしかするとオリバーさんよりも強い魔力を持っているかもしれません。」

「何だって！？」

オリバーはびっくりしました。

「ものすごく強い魔力です。…失敗したとはいえ、魔術の中では最も難しいと言われる氷の魔術の呪文を知っているわけですからね。

失敗したようですが。」

「ああ、それは俺も聞いた。失敗したようだが、ローズの聞き違いでなければ、それもかなり上級の氷の魔術だ。失敗したようだが。」

「そんな、失敗失敗って言わなくても…。」

すでにモニカは泣き出しそうな顔をしています。イザベルが続けます。

「私はこの子が仲間になることには賛成ですよ。大きな力と可能性を秘めているわけですからね。…魔術に関しては私が面倒を見ましょう。それでどうですか？」

「無論、拒むつもりはないよ。まあ、モニカが嫌だといったら話は別だがな。モニカ、どうする？」

オリバーとイザベルはモニカを見ました。

「…皆さんと一緒にいたら、魔術も使いこなせるようになりますか？」

「ああ、イザベルがしっかりと面倒を見てくれるだろうからな。」

モニカは意を決したように言いました。

「…わかりました、ではお願いします。」

モニカが頭を下げると、ローズが嬉しそうにしました。マチルドが怪訝そうにローズを見ています。

「…何だよ、ローズ。ずいぶん嬉しそうだな。」

「…アリスに…褒めてもらった…。」

「はあ？」

「妹がまた一人増えて嬉しいって言って…、頭を撫でてもらった…。私にも妹ができたみたい…。」

「じゃああたいも妹だぜー？お前より年下だし。」

ローズはマチルドを遠い目で見た後、言いました。

「こんな乱暴な妹はいらない…。」

「なっ、何だってーっ!?」

ローズとマチルドはつかみ合いを始めました。そんな二人を見ながらレオンは苦笑いしました。

「やれやれ…。ところでオリバー、ローレンツとラルフの姿が見えねぇが、別室にでもいるのか?」

「…何でもここでしか手に入らない金属があるとかで、夜市に言ったよ。」

「…あいつら、どんどん俺たちの理解できねぇ方向に走っていってるな。」

「まあ、すべて自分の力を発揮するために頑張ってるってことだろ。俺たちも頑張らないとな。」

「そうそう!みんなで頑張らないとね!もう一回街に出てこようかな?師匠!レオン!一緒に来る?」

「…お前は少し落ち着け。」

「むー…。」

興奮気味のビアンカをレオンが押しとどめました。オリバーはその様子をおかしそうに見ていました。

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「17．未熟な魔女」（後書き）

魔術師のモニカがオリバーたちの仲間に加わりました。このモニカが最後の仲間となります。とにかく経験不足でよく魔術を暴発させてしまうようですが、イザベルの言ったように大きな可能性を秘めていることは確かです。

次話では、オリバーたちがロンドランドへの旅を終え、オーベルクのヴォルフの宿に帰ってきました。しかし、そこで待っていたのはボロボロに傷ついたハンスでした。はたして何が起こったのでしょうか…？どうぞお楽しみに！

ちなみにパカロンはリバー王国内ではキンフィールド、オーベルクに次いで大きな街です。オットー様は本当に領民のことを考えて治めていたので、人々はオットー様がいなくなって本当に寂しがっているようです。オットー様はギル大臣に真っ向から対抗していたので、今はパカロンはギル大臣直属の駐屯兵に制圧されているという感じです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「１８．逆襲のネクロマンサー」（前書き）

ロンドランド地方の古都、パカロンで魔術師のモニカを仲間に加えたオリバーたちは再び拠点であるオーベルクに帰ってきました。しかし、どうやら彼らはゆっくりしてもいられないようです。

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「18．逆襲のネクロマンサー」

一週間ぶりにオリバーたちはオーベルクに帰ってきました。街はすっかり活気を取り戻しています。レオンとアリスが話しています。

「やっぱり街はこうじゃなくちゃな。」

「うむ…人が多すぎるのは苦手だが、活気がないのは寂しいものだからな。」

～～～

「ハンスが…？何かあったのか！？」

～～～

ハンスが話し始めました。

「西の村の方は着いたその日に片付きました。すぐに帰ってこられたんですが、二日前に北の村を魔獣と動死体が荒らしまわっているっていう情報を受けて三人で状況を確認に行ったんです。そしたら前に動死体を操って襲ってきたネクロマンサーが気づいたらしく、俺たちを巧みに追い込んでついに囲まれてしまいました。

俺は先生に応援を頼むようにパトリックさんに言われ、動死体たちは突破できたんですが、魔獣にやられちまいましたよ…。

動死体は少なく見積もって百体、魔獣もかなりの数がいました。」

オリバーはハンスの話を聞いて少し考えていましたが、すぐに立ち上がりました。

「…よし、アリス、エミリー、悪いが俺とイザベルを乗せて北の村まで全速力で走ってくれ。動死体を叩きに行く。」

「うむ、わかった。」

「準備をします。」

アリスとエミリーは部屋を飛び出して行きました。

「確かレオンとマチルドも馬を扱えたな?俺たちよりは遅れてもかまわないから、お前らも馬で俺たちを追いかけてきてくれ。ローズとビアンカもそれに乗せてもらうんだ。そして外側の魔獣たちを始末してくれ!」

「よし、馬は俺が工面しよう。知り合いに頼めば二頭くらい貸してくれるだろう。」

ヴォルフも言います。

「ローレンツとラルフとモニカは残っていてくれ。…特にラルフとモニカは、魔獣や動死体のことをハンスとローレンツから聞いておくといい。」

すると、外から大声が聞こえました。

「オリバー!用意ができた!早く乗れ!」

窓の外でアリスとエミリーが待ち構えています。

「わかった。イザベルも準備はいいな？」

「大丈夫です。」

「すぐに追いかけるからな！」

レオンが後ろから声をかけます。オリバーはカトリーヌに飛び乗りました。

「よし、乗ったぞ、アリス！」

「少々荒っぽくなるが、覚悟をしておけ。エミリーも準備は出来たか！」

「はいっ、お姉さま！」

「では行くぞ！ハァーッ！」

二頭の馬はものすごい勢いで街の中を駆け抜けてゆきました。それを見送るとヴォルフも言いました。

「よし、俺も馬を連れてくる。用意して待っていてくれ！」

「頼んだよっ！」

～～～

二人はボロボロでしたが、咬まれてはいませんでした。

「咬まれた時点で、私たちは向こう側の仲間入りだ。」

パトリックが木々の陰から見え隠れしている動死体たちを指さして言いました。

「ついにここまで追いつかれましたか…。」

「逃げ場所はないようだね。」

「俺たちが今するべきことは、ただ目の前の敵に向かって行くことだけです。」

「そうだね。…これが最後の戦いだ。精一杯やろうじゃないか。」

「はい。」

二人は剣を構えなおしました。

「行こう！」

「はいっ！」

二人はもう一度視線を合わせてうなずくと、声をあげて動死体の群れに突っ込んで行きました。

「うおおおおおおっ！」

～～～

「どうどう！」

アリスとエミリーは馬を止めました。

「見ろ、何かを引きずったような跡が森の奥へと続いている…。この奥に動死体たちがいることは間違いない。」

「用心して進みましょうか？」

エミリーが提案しましたが、オリバーは首を横に振りました。

「…どうせ奥に動死体がたくさんいることはわかっているんだ。それならば一気に突っ込んだ方がいい。」

「うむ、わかった。ならば森の中も今の速さで行こう。オリバー、イザベル、頭は常に吾れらよりも低くしておけ。枝に当たって吹っ飛ぶかもしれぬからな。行くぞ！」

アリスとエミリーは二頭の馬をものすごい勢いで森の中を走らせました。狩りの獲物を追うような速さです。時おり魔獣が襲いかかってきましたが、オリバーとイザベルが魔術で倒しましたし、そうでなくてもものすごい速さの馬たちに追いつけることなど出来ません

でした。

～～～

ましたが、何歩か走ったところで後ろから聞こえた叫び声のせいで足が動かなくなりました。

「フィクセイション！」

カトリーヌとアンヌが動死体たちの輪の中に入ってきました。二頭からオリバーとイザベルが降りてきます。

「ファイアーストーム！」

イザベルが叫ぶと、近くの動死体たちが一斉に燃え上がります。

「エミリー！吾れらも行くぞ！」

「はいっ、お姉さま！」

アリスとエミリーも次々と炎の矢を射て行きます。オリバーはペーターとパトリックに駆け寄ります。

「何とか無事だったか！」

「無事…なんでしょうか？」

ペーターが苦笑いしながら言いました。

「冗談を言えるってことは、無事ってことだ。ここまでよく頑張ってくれた。あとは俺たちに任せろ。」

オリバーも剣を抜くと、動死体たちに斬りかかりました。

～～～

一方、遅れて駆けつけたレオンたちも、森の中で魔獣たちと戦っていました。ローズとマチルドも慣れた短剣で戦えるため生き生きしていました。

「魔獣相手じゃ、お前らにはかなわねぇな。」

レオンが少し肩をすくめながらビアンカに言いました。

「経験が違うからね。ほら、来てるよ！」

「おう！」

すると、奥の方で戦っていたローズとマチルドが帰ってきました。

「こっちの方は片付いたぜっ！加勢してやるよ！」

「よーし、みんな、もう一踏ん張りだよ！」

ビアンカもみんなを励ます。

～～～

「これでかたがついた…。…さあ、お前には聞かなければならないことがあるな、ネクロマンサー。オーベルクに続いてなぜ近隣の村も襲った！」

オリバーはネクロマンサーに近づいて言いました。ネクロマンサーは黙ったままです。

「…答える気はないか。ならば尋問が必要だな。まずはその仮面を外してもらおうか。」

オリバーはネクロマンサーの仮面を外しました。そこへ、魔獣との戦いを終えたレオンたちが駆けつけました。イザベルが声をかけます。

「皆さん！お怪我はありませんでしたか？」

「下っ端の魔獣ばっかりだったからねー、戦いやすかったよ。」

ビアンカが威張ったように言いました。

「ちょうどこちらも終わったところです。」

「今から捕らえたネクロマンサーを尋問するところだ。」

アリスとエミリーも嬉しそうに言いました。レオンとマチルドは興味津々です。

「ネクロマンサーを捕まえたって?そりゃあいいや!」

「尋問かあ、面白そうだな!おーい、オリバー!あたいにもやらせろよーっ!」

マチルドは走り出そうとしました。が、ローズが手を出してそれを止めました。

「何だよ、ローズ。」

「先生…様子が、変…。」

オリバーはじっとネクロマンサーを見ています。そして、ついに冷酷な声でこう言いました。

「…尋問はやめだ。死ね。」

オリバーは魔術をかけて動けないままのネクロマンサーに叫びました。その目は冷酷、というより残酷そのものでした。

「カースアタック！…一撃などで殺してやるものか。苦しめ。苦しんで死ね！」

「お、おい待てよオリバー！そいつは貴重な情報源だろ！？殺すなよ！」

レオンが慌てて叫びますが、オリバーは魔術をやめようとしません。

「オルクス！」

ネクロマンサーは動けぬままもがき苦しんでいます。あまりのことに、仲間たちもその場に硬直してしまっています。

「…キラーサンダー！」

最後にが叫ぶと、空から真っ黒い雷がネクロマンサーに落ちてきました。ネクロマンサーは地が裂けそうな叫び声をあげると、消えてしまいました。オリバーは肩で荒い息をしています。仲間たちは茫然としていましたが、やがてイザベルが口を開きました。

「超一級の…いにしえの禁じられた闇の魔術をあんなに使うなんて…。…みなさん！まずはヴォルフさんの宿に引き返しましょう！ここでの仕事は終わりですからね！…オリバーさんも行きましょう。」

オーベルクへの帰り道、宿に着くまでオリバーも仲間たちもほとんど無言でした。

オリバーは仮面を外したネクロマンサーの顔を見た瞬間、何かにとりつかれたように自我を失ってしまいました。はたして何が起こったのでしょうか？

次話ではオリバーが自分の秘密について仲間たちに語ります。はたしてオリバーの過去とは…？そして仲間たちは今までどおりに冒険を続けることができるのか…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーはネクロマンサーを瞬殺しないようにわざと魔術を弱めていました。それだけでもネクロマンサーに対しての怨念が強いということを示しています。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「19．オリバーの秘密」（前書き）

突如捕えたネクロマンサーに対して禁じられた魔術を連発して葬ったオリバー、その目には深い憎しみの念が込められていました。はたしてオリバーとネクロマンサーとの間にいったい何があったのでしょうか？

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「19．オリバーの秘密」

キンフィールド城、ギル大臣が部下の報告を受けました。

「ギル大臣様、ネクロマンサーが死亡いたしました。」

「そうか、処刑の手間が省けたな。ハハハ…。」

ギル大臣は冷酷に笑いました。

～～～

「怨嗟というかさ…、もう自我を見失ってる感じだったぜ？」

レオンが肩をすくめました。ヴォルフはレオンにたずねました。

「そのオリバーはどこへ行ったんだ？」

「さっきからハンスが寝ている部屋にいるみたいだ。…まあ、様子を見に行こうってやつはいねぇだろうがな。」

他の仲間たちも小さな声で今日の出来事を話しています。どの表情も不安げです。

「…とりあえず、みんな疲れただろうから飯でも食えよ。オリバーも黙ったままってことはないだろう。そのうちにわけを話しに下りてくるさ。」

ヴォルフがみんなを落ち着かせるように言いました。

～～～

ヴォルフが言った通り、やがてオリバーはハンスと一緒に階段を下りてきました。仲間たちは黙ってオリバーを見ています。オリバーはカウンターに座ると、ヴォルフに声をかけました。

「…ヴォルフ、まずは水を一杯くれ。」

「ああ。…ほら、水だ。」

オリバーは一気に水を飲み干しました。

「ありがとう。…ふうっ。冷たくてうまいな。」

「当然だろ？」

「さすがだ。…みんな、こっちに集まってくれ。ほら、この魔術師の指輪も外すよ。」

オリバーが仲間たちに言いました。しかし、レオンが静かに言いました。

「…なあ、オリバー。別に俺たちはお前を怖がってるわけじゃねぇんだ。ただお前の話が聞きたいだけだ。指輪ははめていてくれ。」

「ああ、すまなかった。失礼なことをしちまったな。…今までハンスと話をしていたんだ。

…今日起こったことを説明するには、俺の昔話をしなきゃならん。この話を聞いて俺のことを信用できなくなった場合は、仲間を抜けてもらっても一向にかまわない。」

深刻なオリバーの声に、仲間たちも黙って聞いています。

「これは俺がパトリックたちと一緒に魔獣と戦ったさらに前の話だ。俺はまだ十七歳だった。その頃俺は、今のような呪いの魔術師、などという肩書きではなかった。…魔術師たちは俺をこう呼んだ。闇の魔術師、と…。」

「闇の…魔術師…。」

モニカがびっくりしたように呟きました。マチルドがたずねます。

「それってどんなものなんだ?」

「呪いの魔術を扱う魔術師は善悪二つに分かれていると言われてい

ます。…闇の魔術師とは、悪を司る方の魔術師です。」

「今日唱えていた魔術も、その頃使っていたものだ。…当時の俺はあちこちで悪事を働いたが、その後、前にパトリックの話に出ていた魔獣退治の時に指揮官となるトミーさんに倒されてしまった。トミーさんは心を入れ替え、人々のために働くのなら許すと言って俺の命を奪わなかった。俺は感激し、トミーさんのもとで戦うことを決意した。

ある日、闇の魔術師がある村を襲おうとしている、という情報が入った。トミーさんは先遣隊として、俺ともう一人、同じように闇の魔術師から改心した部下を現地に派遣した。俺たちの活躍によって闇の魔術師の撃退には成功した。しかし、そこで事件が起こった。」

オリバーはそこまで一気に話すと、フウッと息をつき、水を飲んだ。

「トミーさんは俺たち二人をその村にしばらく警戒のために残らせた。その間にもう一人の魔術師は村の長老の娘に惚れたんだ。だが娘はその魔術師に見向きもしなかった。なぜなら…俺が自分で言うのもおかしい話だが、その娘と俺は惹かれあっていたんだ。何度も人の目を盗んで密会していた。

それを知ったもう一人の魔術師は激怒した。そして俺に苦痛を味わわせながらも絶対に死ぬことができない魔術をかけ、俺が苦しんでいる目の前で長老の娘を殺し、更に村に火を放ったんだ。やつはそ

れ以来姿をくらました。かけつけたトミーさんたちのおかげで俺も命は救われたが、村人もほとんどが焼け死んでしまった。

親を失った幼い子供はトミーさんの部下が手分けして育てることになった。そして俺が担当することになったのが…ハンスだ。」

みんな驚いてハンスを見ました。

「それにもうわかっているやつもいるだろう。…今日戦ったネクロマンサーこそ、その時村を焼きつくした闇の魔術師だ。

俺にはレオンの声も聞こえていた。貴重な情報源を殺すな、という声がな。だが俺は、自分の中の憎しみを押し殺すことができなかった。その上…決して許されない禁じられた闇の魔術も使ってしまった。それも、自分自身で絶対に使うまいと誓ったのに…。自分の復讐のため、それだけに俺は間違ったことをしてしまった…。

…これが、俺が話そうと思ったことだ。これを聞いて、心穏やかではないやつもいるだろう。仲間を抜けたいとも思うかもしれない。でも…、俺は止めるつもりはないよ。」

オリバーは力なく肩を落としました。

～～～

「結局どうであれ、あたしたちの敵が間違いなく一人消えたんだよ。あたしたちやオーベルクの人を危険にさらした一人の敵がさっ。」

ビアンカが励ますように言いました。

「憎しみで感情を押さえられなくなるのは人間として当然のことだと思うけどな。現場にいたわけじゃないから、そんなことしか言えないが。」

ローレンツが頷きながら言いました。

「少なくとも俺はこんなことでおさらばしようとは思わねぇぜ。俺はあんたを信用してここまでついてきたんだ。その気持ちは今だって変わっちゃいねぇぜ?」

レオンがオリバーの肩をバンバン叩きながら言いました。

「これで弱みを握ったからな、夜の襲撃だってしやすくなるかもしれないぞ!」

マチルドがニヤリと笑いながら言いました。

「少なくともこの度のことで改めて自分自身を知ることができたのだろう?それはお前にとって大きな飛躍になると思うのだが。」

「逆にわたくしたちもオリバーさんのことを改めて知ることができました。今後またこういうことがあっても、今度はわたくしたちが補助できることができるのではないですか?」

アリスとエミリーが安心したように言いました。

「僕は、改めてオリバーさんがすごい人なんだ、ってことがわかりました。それに、ついてきてよかったとも思っています。」

ラルフがオリバーを尊敬するようなまなざしで言いました。

「私と同じくらいの時からそんな危険な魔術を使いこなしていたなんて…。でも今はそれを封印してみんなの役に立っていることがすごいです。オリバーさんは素晴らしい魔術師だと思います。」

モニカが目をまん丸にして言いました。

「みんな…。」

「…俺たちは言うまでもありませんよね！」

「先生はいつまでも俺たちの先生です！」

最後にハンスとペーターが元気いっぱいに言いました。

「おいおい、そんなこと言って、お前ら一生一人立ちしねぇつもりか？」

レオンが笑って言いました。

「ち、違いますよ！」

「ふうーっ、どうなることかと思ったが、問題は無事に解決だな！ようし、今日は俺とリリーのおごりだ。みんな好きなだけ食って好きなだけ飲んで好きなだけ騒げ！」

「はいはい、みんな遠慮なく飲んでね！」

ヴォルフとリリーの言葉にオリバーの仲間たちは大声をあげて喜びました。

～～～

ローズは首をかしげました。

「その気になれば、今だって俺は人を殺す闇の魔術を使おうと思えば使えるんだ。お前らだってやられるかもしれない。」

「…やっぱり今日の先生、変…。」

「えっ？」

「先生が信頼してる仲間を攻撃するなんて絶対にありえない…。少なくとも私はそう思う…。昔どうしていたかより、今どうしているかの方が大事…。」

オリバーは驚いた顔をしましたが、急に笑い出しました。ローズは怪訝そうな顔をしています。

「ハハハハ…。いや、俺は何をバカなことを悩んでいたんだろう。あは、あは、ハハハハ…！」

「やっぱり変…。でも、よかった…。」

（最終的に不安になっていたのは…俺一人だけだったんだな…）

下ではバタンと大きな音がしました。レオンとアリスが宿の外に飛び出しています。なぜかラルフも引っ張り出されています。

「いい加減にしろ！貴様が何と言おうと、ノーザリンが一番住みよいのだ！」

「わかんねぇやつだな！シーガルンに決まってるだろ！」

「…うむ、やはり貴様とは言葉では決着はつかぬようだな。」

「あ、あの、僕は何のために連れてこられたんですか？」

ラルフは戸惑いを隠せません。

「ラルフ！そこで俺たちの勝負を見届けろ！…いくぞ、狩人娘！」

「望むところだ！バカ訓練師範！」

目の前で取っ組み合いをしている二人を見てラルフは、

「僕はロンドランドが一番だと思いますけど…。」

と言いましたが、二人には聞こえていなかったようです。

「ローズ！いつまで師匠といい感じになってるの！ちょっと降りてきなさいっ！」

「お前を倒せばオリバーの寝首をかける！」

ビアンカとマチルドが屋根を見上げて叫んでいます。オリバーは怪訝そうな顔をしました。

「俺の寝首…？何のことだ？」

ローズはびっくりしたようです。

「何も…知らないの？」

「んっ？」

「…何でもない。ちょっと行ってくる…。」

「ハハッ、ライバルとの絡みが恋しくなったか？」

「そんなところ…。」

ローズは屋根から地面にスタンと降り立ちました。それを見てオリバーは微笑みました。

（俺は本当にいい仲間たちを持ったなあ…）

～～～

～悪の大臣～　一章・仲間を探して　「19．オリバーの秘密」（後書き）

オリバーと仲間たちとの間の絆は、オリバー自身が思っていた以上に強いものだったようです。この話で一章「仲間を探して」は終了です。

次話からは二章「リバール王の秘宝」に突入します。オットー様からの依頼の一つ、「リバー王国初代王のリバール王の残した秘宝を探す」ため、オリバーたちの冒険が続きます。そして次々と強力な敵が現れてきます。どうぞお楽しみに！

この後、オリバーや仲間たちの固有能力などを改めて表記しようと思います。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　おまけ（前書き）

ここではオリバーとその仲間たちのステータスや固有技を書いていきたいと思います。

～悪の大臣～　おまけ

～オリバー～

固有技　・呪いの魔術

能力　・魔術
・指揮
・剣
・冷静
・対魔獣
・援護

「呪いの魔術」は、使用する魔術が主に呪いの魔術となる。特有の能力「指揮」は仲間全体の攻撃・回避能力を上げる。短所は体力の減りが他の魔術師に比べ早いこと。

～ハンス～

固有技　・突進

能力　・槍
・警戒
・剣
・慎重
・対人
・勇敢

「突進」は、相手に致命的な貫通攻撃を行う。特有の能力「警戒」は敵の不意打ちの確率を下げる。短所は精神力が低めであるため、異常状態になりやすくなること。

～ペーター～

固有技　・気合の一撃

能力　・剣
・罠感知
・槍
・大胆
・対獣
・根性

「気合の一撃」は、通常の二倍のダメージを与えることが出来る。特有の能力「罠感知」は罠を見つける範囲が広くなる。短所は「気合の一撃」の後、隙が出来て敵に狙われやすくなること。

～ローズ～

固有技　・かばう

能力　・小型武器
・潜伏
・連携
・回避

・先制
・??

「かばう」は、瀕死の仲間をかばって攻撃を受ける。特有の能力「潜伏」は戦闘中敵に狙われにくくなるとともに、ときどき敵に不意打ちをかける。短所は体力値が低いこと。最後の能力はストーリーのネタばれになってしまうので非公開でお願いします。

～パトリック～

固有技　・騎士の誇り

能力　・槍
・騎士
・剣
・騎馬戦
・対人
・勇敢

「騎士の誇り」は攻撃五回につき一回、強力な全体攻撃を行う。特有の能力「騎士」は絶対に精神的な異常状態にならない。短所は「騎士の誇り」の直前直後に戦線を離脱すること。

～イザベル～

固有技　・毒の魔術

能力　・魔術

・応急手当
・冷静
・鼓舞
・対魔獣
・援護

「毒の魔術」は使用する魔術が主に毒の魔術となる。特有の能力「応急手当」は戦闘後仲間の体力を少し回復する。短所は体力値と素早さが低いこと。

～ビアンカ～

固有技　・フェイント

能力　・剣
・反撃
・連携
・回避
・鼓舞
・先制

「フェイント」は敵を不意打ちした際、敵を混乱状態にする。特有の能力「反撃」は攻撃を受けた後に反撃する。短所は小型武器以外の武器を使用する仲間の中で攻撃力が最低であること。

～レオン～

固有技　・斬り払い

能力　・槍
　　・市街戦
　　・剣
　　・大胆
　　・対人
　　・勇敢

「斬り払い」は通常の二倍のダメージを敵に与える。特有の能力「市街戦」は市街地での戦いの場合攻撃力が二割増しになる。短所は森の中での戦いの時に攻撃力が二割下がること。

～マチルド～

固有技　・引きつける

能力　・小型武器
　　・暗視
　　・連携
　　・回避
　　・根性
　　・先制

「引きつける」は仲間が特殊行動に入りそうになった時に敵の攻撃を受ける。特有の能力「暗視」は暗闇で見える範囲が広がる。短所は精神力が低いこと。

～アリス～

固有技　・毒の矢

能力　・射撃武器
・山岳戦
・騎馬戦
・大胆
・対獣
・援護

「毒の矢」は敵を瞬殺もしくは毒のダメージを付与する。特有の能力「山岳戦」は森での戦いの場合攻撃力が二割増しさになる。短所は市街地での戦いの場合攻撃力が二割下がることと、精神力がやや低めなこと。

～エミリー～

固有技　・炎の矢

能力　・射撃武器
・山岳戦
・騎馬戦
・慎重
・対獣
・援護

「炎の矢」は敵を瞬殺もしくは火傷のダメージを付与する。なお、オーベルクでの動死体との戦いの前はエミリーも「毒の矢」が固有技。「山岳戦」はアリスと同じ。短所は市街地での戦いの場合攻撃

力が二割下がることと、攻撃力がやや低めなこと。

～モニカ～

固有技　・氷の魔術

能力　・魔術
・暴発
・連携
・根性
・対魔獣
・援護

「氷の魔術」は使用する魔術が主に氷の魔術になる。特有の能力「暴発」は発動時敵に大ダメージを与えることが出来る。短所は暴発発動時、味方にも多少のダメージを与えてしまうこと。

・剣　剣の扱いがうまくなる

・槍　槍の扱いがうまくなる

・小型武器　小型武器の扱いがうまくなる

・射撃武器　射撃武器の扱いがうまくなる

・魔術　魔術の扱いがうまくなる

・対人　人型の敵に強くなる

・対獣　獣型の敵に強くなる

・対魔獣　魔獣の敵に強くなる

・冷静　精神的な異常状態になりにくくなる

・援護　他の仲間の攻撃命中率が上がる

・大胆　攻撃力が上がるが、命中率が下がる

・慎重　命中率が上がるが、攻撃力が下がる

・根性　瀕死ギリギリで耐える

・勇敢　攻撃を重ねるごとに攻撃力が少しずつ上がる

・連携　ときどき仲間の攻撃と連携して敵を攻撃する

・回避　敵の攻撃の回避率が上がる

・先制　ときどき敵に攻撃される前に攻撃する

・鼓舞　仲間の攻撃力を上げる

～悪の大臣～　おまけ（後書き）

ゲームの解説みたいになってしまいましたが…、仲間たちの能力はこんな感じです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２０．次なる目的地へ」（前書き）

このお話から「悪の大臣」は二章に入ります。オリバーたちはリバー王国の南にある地方、ナンジューマ地方への旅の準備をしているようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２０．次なる目的地へ」

オーベルクの街の外れの小さな宿、その使われていない納屋で二人の魔術師がもう一人の魔術師を見ていました。

「だいぶまともになったな。明日からの旅にもつれていけそうだ。」

「ええ。以前より暴走することも少なくなってきました。まだ若いので、大きな技を使ってもすぐに体力を回復できます。…よくできましたね、モニカさん。」

「ありがとうございます、イザベルさん、オリバーさん。」

オリバーとイザベルに褒められ、モニカは照れくさそうにしました。

「これならパトリックも感心するんじゃないのか？」

オリバーはからかい気味に言いました。モニカはヴォルフの宿に遊びに来たパトリックと少し話をしただけで、紳士的な彼をすぐに憧れのまなざしで見るようになったのです。モニカは顔を真っ赤にしています。

「かっ、からかわないでください！…ひゃあっ！」

「おっと、ちょっとやりすぎたかな？」

「あらー…、またまた氷漬けに…。ファイアーストーム。」

イザベルが放った小さな炎が氷漬けになったモニカを溶かしました。

「…また失敗してしまいましたっ…。」

落ち込むモニカを見てオリバーは苦笑いしながらイザベルに言いました。

「イザベルも、すっかりと炎の魔術を身につけたな。」

「モニカさんの魔術を指導していたら、いつの間にか使いこなせるようになりましたよ。」

イザベルは少しだけ得意げに言いました。

「俺もやってみるか。ファイアーストーム！」

オリバーもほんの少しだけ炎の魔術を身につけていました。炎が消えるのを見届けてからイザベルがオリバーに言いました。

「…そうそう、ローレンツさんたちに頼んでいたものがあるんです。オリバーさん、申し訳ありませんが、受け取ってきてもらえますか？」

「ああ、いいよ。」

オリバーは快くその頼みを引き受けました。

～～～

「二人とも、調子がいいな。」

「僕も親方も、いつでも絶好調ですよ！」

ラルフが胸を張ります。

「ハハハ。…イザベルから頼んでいたものを受け取ってくれと言われたんだが。」

「ああ、これです。…おっと、刃先には気をつけてくださいよ？」

ラルフが注意深く短剣をオリバーに見せました。

「あのイザベルってお嬢ちゃんも、考えるもんだぜ。まさか鉄粉の中に魔術をかけた粉を混ぜて短剣をつくれ、なんてな。」

ローレンツが感心したように言います。

「なるほど…。考えつかなかったが、いい考えだな。うまくいったのか？」

「当たり前だ。見ろ、炎の短剣で壁を焦がしちまった。」

ローレンツが指さした壁には焦げた跡がありました。それからローレンツが言いました。

「悪いんだが、頼んできたのはイザベルだが、こいつはローズとマチルドのものなんだ。届けてくれないか？」

「ああ、いいぞ。」

「こっちが毒の短剣、こっちが炎の短剣です。…一応、混ざりものが入っている分切れ味は少し悪くなっている、ってことを伝えておいてください。」

ラルフが短剣をケースに入れ、オリバーに渡しました。

「わかった。いずれ俺が呪いの魔術をかけたやつもつくってくれないか？」

「お安い御用だ。」

～～～

～～～

「ははっ、すまんすまん。マチルド、ローレンツがこれをお前に届けろって言ってたぞ。」

「ああ、イザベルが言ってたやつか。ありがとよ。」

「いやいや。扱いには注意するようにって。」

「そんなに言わなくてもわかるぞ！」

マチルドは口をとがらせました。

「お前はまだ子どもだからな、オリバーも安心できねぇんだろ。」

レオンがニヤニヤしながら言いました。

「何だとーっ！？」

勝ち誇った顔でマチルドを見ながら、レオンがオリバーに言いました。

「そうだ、オリバー。こいつはペーターのだろう？そこに忘れてた

ぜ？」

「胸当てか。確かにペーターのだ。昨日からないって大騒ぎしていたんだ。しょうがないな、持って行ってやるか。」

～～～

「やれやれ…。そうだ、ローズを知らないか？」

「さあ、知りませんよ。宿にはいないんじゃないですか？」

ハンスが答えました。

「そうか…。それなら先にパトリックと旅の打ち合わせをしてくるとするか…。」

「パトリックさんのところに行くんですか？それなら、これを届けてあげてください。」

ハンスがオリバーに何かの包みを差しだしました。

「薬か？」

「イザベルさんがみんなに、って解毒薬を新しくつくってくれたんです。あと渡していないのは先生とパトリックさんだけだって…。先生の分は机の上に置いてあります。」

「そうか、それなら持って行ってやろう。」

オリバーは薬を受け取ると、部屋を出て行きました。

～～～

ンソワですが、数日前に主人の前にひょっこりと帰ってきたのです。パトリックは涙を流して喜んだそうです。

二人はしばらく談笑していました。

「…さて、そろそろ戻るか。」

オリバーが腰を上げると、パトリックが思い出したように言いました。

「あ、そうそう。この前ビアンカに借りた旅行小説があるんだけど、もしよかったら返しておいてくれないかい？とても面白かったと伝えておいてほしい。」

「ああ、わかった。」

オリバーはパトリックから一冊の本を受け取りました。

～～～

にいるのか知りません。普段ヴォルフやリリーに聞いても首をかしげるばかりなのです。

（まあ、最悪明日の朝に返すか、それかヴォルフの宿に置いておいてもらえばいい…）

しかし、ビアンカは意外とすぐに見つかりました。ビアンカは橋の欄干の上で土笛を吹いていました。オリバーを見かけると、ビアンカはご機嫌な様子で声をかけました。

「よっ、師匠！何してるのー？」

「パトリックのところからの帰りだ。…お前こそ、こんなところで何をしてるんだ？」

「見てわかるでしょ？笛を吹いてるんだよ。」

「何でこんなところで…。しかもそれはアリスの笛だろう？」

「そうそう、返しそびれちゃったんだよねー。宿に帰るんなら、返しておいてもらえる？」

ビアンカが土笛をオリバーに渡しました。

「別にかまわないが…。ああ、そうだ。これ、パトリックが返しておいてくれって。」

「ああ、この本ね、うん、わざわざありがとう。じゃあ、明日からもよろしく！」

「おう。…あ、また住んでる場所を聞きそびれた。」

～～～

「そうか、わざわざすまないな。」

「あれ?オリバーさん、その短剣は何ですか?」

エミリーがオリバーのマントから見え隠れしている短剣を見つけて言いました。

「あっ、忘れるところだった…。これはローズの短剣だった。」

「ローズか。うむ、先刻、お前のことを探していたぞ。」

「本当か。どこにいるかわかるか?」

「部屋にいなかったら…いつもの場所じゃないですか?」

エミリーが首をかしげながら言いました。

「宿にはいるんだな。わかった、ありがとう。」

「いえ…。」

～～～

「先生のは…ないの？」

「俺の？それは、呪いの魔術をこめた短剣、ってことか？」

ローズはコクコクと頷きます。

「いずれ作ってもらおうとは思ったが…欲しいのか？」

「欲しい…。」

「そうか。じゃあ、ローレンツたちと相談するとするか。よし、そろそろ晩飯だ。下に降りようか。」

ローズは頷くと、オリバーと一緒に下に降りて行きました。

～～～

「またしばらく会えないな。寂しくなるよ。」

「ああ、何しろ今回は長旅になる。ナンジューマは相当遠いようだからな。ナンジューマはキンフィールドから遠い分、まだギル大臣の影響力もそれほど大きくないらしい。」

「体に気をつけてね。」

リリーもどこか心配そうです。

「ありがとう。…それじゃあそろそろ俺たちは出発するよ。」

「体に気をつけろよ！」

二人の見送りを受け、オリバーたちは南へと旅立って行きました。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２０．次なる目的地へ」（後書き）

オリバーと仲間たちは南のナンジューマ地方に向けて旅を始めました。しかし、この旅はこれまでにないほどに大変な旅となるようです。

次話ではオリバーたちがナンジューマ地方を目指してひたすら旅を続けます。しかし、そんな彼らに次々と問題が発生します。はたして彼らは無事に旅を続けることが出来るのでしょうか？

ちなみにローズが時間を潰していた屋根は、本当の屋根ではなく、宿の入り口の雨よけのような小屋根で、二階の廊下からそこに行くことが出来ます。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２１．ナンジューマへの旅路」（前編）

オリバーたちはリバー王国の南、ナンジューマ地方に向けて旅をしていました。旅はとても長いものになっていますが、仲間たちの中にはすでに何かがおかしいことに気づいている仲間がいるようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２１．ナンジューマへの旅路」

オリバーと仲間たちは街道を南に向けて歩いていました。

「あれ、モニカ？苦しそうな顔してるけど、大丈夫？」

ビアンカがモニカの異変に気づきました。

「こんなに長く歩いたことがなくて…。足のマメがつぶれてしまいました。」

「パトリックの馬にでも乗せてもらったら？」

ビアンカがいたずらっぽく言いました。

「ああ、かまわないよ。ほら、手を貸すんだ。」

パトリックのことを尊敬しているモニカはすこしまごつきましたが、フランソワに乗せてもらいました。モニカは馬に乗ったことがないのかパトリックにしがみついていましたが、だんだん顔が赤くなってきました。

「広い…背中…。」

それを見たビアンカはニヤニヤしながらローズに話しかけました。

「…おやおやー？ローズ、モニカもあんたと一緒だね。」

「…どういう意味？」

「だってさー、どうやらモニカはパトリックの背中にしがみついて真っ赤でしょ？ほら、ローズだって師匠に、うひゃっ！」

ローズが顔を真っ赤にして短剣を振りまわしています。走って逃げるビアンカを追いかけ、ローズも走りだしました。だんだん遠くなって行く背中を見て、先頭を歩くオリバーは苦笑いしました。

「まったく、旅はまだまだ長いっていうのに、あいつら大丈夫か？」

「いつものことでしょう？」

「どうせもう少し歩いたら二人ともボロボロになって道端に座ってますよ。」

二人の弟子も笑います。しかし、オリバーは何か引っかかるものがあるようです。

「ああ。…うーん、しかし、何だか妙だな…。」

「やっぱりオリバーさんもそう思われます？」

すぐ後ろを歩いていたイザベルが話に入ってきました。

「イザベル、やっぱり気づいたか？」

「ええ…。」

「何ですか…何もわかりませんよ。」

ハンスは首をかしげています。

「俺はわかりますよ、先生。…まだ昼飯を食べてない！」

ペーターが胸を張って言いました。オリバーはあきれたようにため息をつきました。

「バカか。さっき宿で朝食を食べたばかりだろう。」

すると、後ろから笑い声が聞こえました。アリスとエミリーです。二人は少し馬の脚を早めると、オリバーたちに追いつきました。

「オリバー、お前の魔術は徹底されたものだが、弟子の教育はまだまだ不徹底なようだな。」

「はは、みっともない限りだな。」

オリバーは苦笑いしました。

「吾れらも気づいているぞ。…向こうからこちらに来る旅人が明らかに少ないな。」

「さすがだな、アリス。」

「これだけ狭い道なのに、すれ違うためにアンヌたちを道の端に寄せることがほとんどありません。」

エミリーも言います。オリバーは難しい顔をしました。

「もう旅の半分以上は進んでいるんだ。ナンジューマからの旅人が増えてきてもおかしくないはずなんだがな…。」

「ナンジューマで、何かが起こっているのでしょうか…。」

エミリーは少し心配そうです。

「さあな。行ってみなければわからないさ。」

～～～

「いや、俺はロンドランドの者だ。レオポートで仕入れた香草を売るためにナンジューマに向かっていたんだ。

…あんたたちもナンジューマに向かっているのかい？だったら無駄足だ。引き返した方がいいぜ。」

「無駄足？なぜですか？」

今度はイザベルが聞きました。

「この先のナンジューマとの境にある関所が封鎖されているんだ。旅人は中に入れないぜ？」

「何だって？」

オリバーはびっくりしました。

「ここから関所までの間に宿もない。引き返すんなら早めにした方がいいぜ。」

「そうか、ありがとう。…関所が封鎖されてるだって？」

「他の関所にう回はできないんですか？」

ハンスがたずねます。

「ここは一本道だからな…。だが、他の道だって封鎖されていない保証はない。むしろ、すべてが封鎖されている可能性もある。」

「私に任せていただければ、関所を通ることはできますよ。」

イザベルが言いました。

「何をするつもりなんだ？」

「方法は内緒です。」

「…だがみんなの意見も聞く必要がある。…どうもナンジューマには恐ろしい危険が待ち構えている気がする。」

～～～

オリバーたちは仲間たちにこれからの旅について意見を求めました。

「俺は引き返した方がいいとは思うが…みんなが行くっていうんならそれに従うつもりだ。」

レオンが言いました。

「詳しく聞かせてくれ。何で引き返した方がいいと思う?」

「お前と同じ気持ちだからだよ。俺もこの先へ進むと何か危険に巻き込まれる気がする。それも、今までとはまったく違うような危険にな。」

「あたしは進んだ方がいいと思う。」

今度はビアンカが言います。

「…詳しく聞かせてくれ。」

「少なくともあの関所の向こうでは異変が起こってる。もしその異変が人々を苦しめているとしたら…?そうだとしたら、あたしたち

はオットー様からの依頼がある以上、それをみんなに広める必要があると思う。」

「そうか。…よし、多数決を取ろう。正直に手をあげてくれ。引き返した方がいい、そう考えているのは誰だ?」

オリバーの言葉に、レオン、ローレンツ、アリスが手をあげました。

「じゃあ他の全員は進んだ方がいいと考えているんだな?…では今手をあげた三人に聞こう。多数決で俺たちは進むことに決まった。レオンはその決定に従って行動すると言ったが、他の二人にも確認しよう。自分の意思に従って、引き返そうと思っているのは?」

オリバーは三人を見渡しましたが、誰も手をあげませんでした。

「よし、決定だ。全員でナンジューマに向かおう。」

「関所を越えるときは私に任せてください。」

イザベルが言いました。

「わかった。関所での対応は全部イザベルに任せるぞ。」

～～～

「あー、この先では魔獣が大量に発生しているのだ。通行人を危険にさらすわけにはいかん。」

「そうですか…。それでは仕方ありません。引き返しましょうか。皆さん、行きましょう。」

あっさりと引き返そうとするイザベルに、オリバーはびっくりしました。

「お、おい、」

「いいですから。」

イザベルたちは関所から引き返しました。それを見届けると兵士たちが話し始めます。

「まったく、余計なことを口にするんじゃない！」

「申し訳ございません。…あれ？俺たち、いつの間に関所の外に出ていたんだ？」

～～～

マチルドも頭を抱えています。オリバーもまた驚きの眼差しでイザベルを見ました。

「…どうやって俺たちに関所を通過させたんだ、イザベル。」

イザベルは笑って言いました。

「手品のタネは明かさないから面白いんですよ。」

～～～

ビアンカも同調します。

「それはいいんだが…何だか焦げくさくないか？」

「…油のようなにおいもしますね。」

ローレンツとラルフが険しい顔をしています。オリバーはマチルドに指示を出しました。

「…マチルド！ちょっとこの先の様子を探ってきてくれ！」

「あいよっ！」

マチルドは軽やかに走って行きました。

～～～

「何だって!?」

「この先にある村が焼き尽くされちまっているんだ!」

「すぐに案内しろ。」

～～～

「…これは少なくとも魔獣のせいじゃない、人間の手によるものです。山賊に襲われたのか、あるいは…、」

「ちょっと待てよ、弁護するつもりじゃあないけど、この国の山賊はこんなことはしないぜ？目的さえ達成すれば相手の命を取ることなんて絶対にしない。まして村に火をつけるなんてことは絶対にないんだ。」

マチルドが言ったその時、前の方から声が聞こえました。

「おい！生き残りがいるぞ！」

「逃げられたら面倒だ！始末しろ！」

剣や槍を手に向かってきたのは…、

「あれはリバー王国の正規軍じゃねぇか！百人近くいるぞ！まさか軍がこの村を襲ったのか！？」

レオンが驚いたように言いました。

「許せない…。何の罪もない民を圧倒的な力で手にかけるなど！」

エミリーが怒りの炎を目に宿しながら言いました。それはオリバーも同じのようです。

「…俺は今までみんなに人間は殺さないように言ってきた。だが、あの連中は丸腰の人間を手にかけた悪魔どもだ。…あとはわかってるな？みんな、行くぞ！」

パトリック、アリス、エミリーが馬に乗って突撃していきます。その後ろからローズ、マチルド、そしてビアンカにレオンが兵士たちに向かって行きました。ハンスとペーターは魔術師たちを護衛します。

「イザベル！モニカ！俺たちもみんなを援護するぞ！」

一人の兵士が馬の上のエミリーを槍で突き刺そうとしました。

「させませんよ！ポイズンラース！」

イザベルが叫ぶと、兵士が血を吐いて倒れました。毒におかされているようです。エミリーがイザベルに叫びました。

「イザベルさん、ありがとう！」

「気をつけてください！」

一方モニカは一生懸命魔力をためています。オリバーも励まします。

「ほら、モニカ。頑張れっ。」

「ふう。ふう。…行きます！ファイアーストーム！」

モニカが叫ぶと、今まで見たことのないような火柱が立ち上りました。

「うおおおいっ！あたいらを巻き込む気かよっ！」

「袖が燃えた…。」

ローズとマチルドはとてもびっくりしたようです。

「…威力はものすごいが…。」

「コントロールできるようになるまではまだまだ時間がかかりそうですね。」

オリバーとイザベルは苦笑いしました。

「くそーっ、ローズ！あたいらも新しいのを使ってやろうぜ！」

マチルドはまず毒の短剣を引き抜くと、兵士に飛びかかりました。首筋を切り裂こうとしましたが、兵士もすばやく身をかわし、頬のところに小さな傷をつけただけでした。

「生意気な小娘が！串刺しに…うっ？うっ、うわあああああっ！顔が焼けるっ！顔があーっ！」

兵士の小さな傷の周りがどんどん紫色に変色していきます。苦しむ兵士の胸に、マチルドは炎の短剣を突きたてました。

「うわあああっ！熱い！体が熱い！」

兵士は転がりまわっていましたが、やがて動かなくなりました。

「こりゃあすげえや！」

マチルドは二つの短剣をまじまじと見ました。

～～～

モニカがびっくりしています。オリバーが使ったのが禁じられた魔術なのではないかと心配したようです。

「心配するな。これは尋問用の魔術として、呪いの魔術師の間で広く認められているものだ。…威力は絶大だがな。さあ、答えろ！それとも一生この苦痛を味わいつづけるか？」

「俺は王国の兵士だぞ！こんなまやかし程度で、」

「クヴァール！」

「ぎゃあああああっ！わ、わかった！これはギル大臣様のご命令だ！」

「ギル大臣の？」

兵士の言葉に、オリバーはびっくりしました。

「はあ…はあ…、ああ、そうだ。ナンジューマに反乱の計画があるって話だったからな。」

「それは村を襲う理由になっていないな。」

「村に賊がかくまわれてるって情報が入ったからな。」

「ほう、確認はしたのか。」

「そんなことをしてたら賊が逃げちまうだろ?だから一気に焼き討ちにしたのさ。俺はただ言われたからやってただけだぜ?」

「それは嘘…。袋に宝石がたくさん入ってる…。血まみれの…。」

ローズが兵士が手にしていた大きな袋を指差して言いました。

「…村人から強奪した何よりの証拠だな。」

「な、なあ、もう許してくれよ。ほら、全部話したからいいだろ?」

「先生が許しても…私は絶対に許さない…!」

オリバーも他の仲間たちも予想外のローズの大声に驚きました。ローズは炎の短剣を鞘から抜くと兵士に飛びかかり、首を切り裂きました。

「ぎゃあああああっ！」

兵士は叫び声をあげたきり、動かなくなりました。

「ローズ…。」

オリバーが心配そうにローズの顔を覗き込みました。ローズは悔しそうに言いました。

「あの時と同じ…。何も調べないで…。ただ憎いだけで…。何もかも奪った…。あの時と同じ…。」

（自分の家族のことと重ね合わせているのか…）

「…だがこれではっきりした。ナンジューマは今危機にひんしている。俺たちが出てくるのが少し遅かったらしい。…恐らく反乱計画もでっち上げだろう。ギル大臣はこの豊かなナンジューマの地をどうにか自分の思うままにしたいらしい。

…ここで兵隊と戦った以上、俺たちは間違いなく軍に目をつけられるな。旅はより困難になる。今後は兵隊との戦いも増えるだろうが、みんな覚悟しておいてくれ。」

「任せとけって！どうせ危険な目に遭うことは承知の上だ。こうなったらとことん行ってやろうぜ！」

強気のレオンの言葉に、ビアンカはあきれたように笑いながら言いました。

「何さ、あんなに弱気だったのに、すっかり元気になっちゃってさ。ま、その方がいいけどねっ！」

「よし、大至急ナンジューマの中心都市、ダナラスフォルスに向かう。恐らく軍の本隊はそこにいるのだろう。ナンジューマ、そしてリバー王国を救うんだ！」

「おおーっ！」

オリバーの声に仲間たちは一斉に声を上げました。

「ローズも行くぞ。まだまだ救わなければならない人がいる。」

ローズもしっかりオリバーを見つめると、はっきりと頷きました。

オリバーたちは村を焼き払った兵士たちを蹴散らし、ナンジューマで王国軍による大規模な略奪行為が行われていることを知りました。
オリバーたちはナンジューマ地方を救うため、中心都市のダナラスフォルスへと向かいました。

次話ではオリバーたちが神殿都市ダナラスフォルスを解放するため、王国軍と戦います。はたしてオリバーたちはダナラスフォルスを救うことが出来るでしょうか？

ちなみに、リバー王国軍は正規軍のほかに傭兵部隊もいます。しかし、レオンの言ったようにこの村で略奪を行っていたのは正規軍です。より悪質ということですね。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２２．ダナラスフォルス解放戦」

オリバーと仲間たちは軍によって大規模な略奪が行われているナンジューマ地方の神殿都市、ダナラスフォルスに到着しました。偵察に出ていたハンスとマチルドが帰ってきたようです。

ちなみにこの前のおまけで、「騎馬戦」の能力の説明を書き忘れていたので、ここに書いておきます。「騎馬戦」は馬に乗っているとき攻撃力が上昇する、です。

オリバーたちはナンジューマの中心都市、ダナルスフォルスの近くの森に潜んでいました。そこへ、偵察に行っていたハンスとマチルドが帰ってきました。オリバーが二人に尋ねます。

「偵察ご苦労。街の様子はどうだった？」

「兵隊たちの本隊は街の北の丘の上の神殿にいるみたいです。全部で三百人、ってとこですね。」

「街では兵隊による虐殺や略奪があちこちで行われてるし、女たちも襲われている。目の当てられる光景ではなかったぜ…。」

マチルドはしかめっ面をしています。

「そうか、わかった。作戦は夜だ。みんなそれまで打ち合わせをするなり休んだりして、準備を整えておいてくれ。」

仲間たちはそれぞれ木の影に座ったりして体を休めました。すると、ローレンツとラルフがオリバーに話しかけてきました。

「おい、オリバー。お嬢ちゃんが話があるそうだ。」

「ん?…ローズか。何だ?」

ローズは上目でオリバーを見ながら言いました。

「呪いの短剣が…欲しい…。」

「わざわざここでか?すぐに必要なのか?」

ローズは静かに言いました。

「あいつらを苦しませてやりたい…。」

オリバーは厳しい顔をしました。ローズはビクッと震えました。

「…ローズ、お前は今何のために戦っているんだ?

もちろんお前が復讐したい気持ちもわかる。俺もネクロマンサーを見たときには思わず復讐の衝動に駆られた。だから俺が言えた立場ではないのかもしれないがな。だがこの戦いは危機にさらされてい

るダナラスフォルスの人たちを助けるための戦いだ。わかるか？」

ローズは申し訳なさそうに頷きました。オリバーも笑顔を見せました。

「わかってくれたか。素直なところがお前のいいところだな。」

「でも…短剣は欲しい。」

ローズは遠慮がちに言います。オリバーは怪訝そうな顔をしました。

「…どうしてそんなに呪いの短剣にこだわるんだ？」

ローズは少しまごつきましたが、言いました。

「呪いの魔術は先生の魔術…。戦っている時も先生がいるみたいで、安心して戦える気がする…。」

オリバーは大笑いしました。

「変なことをいうやつだな、安心できないなんて。お前もまだまだ

子どもだな。わかったよ、そんなに言うなら協力してやろう。」

「それなら、この粉に魔術をかけてください。」

やり取りを黙ってみていたラルフは安心したようにオリバーに粉を差しだしました。

「わかった。カースアタック！」

オリバーが魔術をかけると、白かった粉は真っ黒に変わりました。更に粉がまるで苦しむ顔のような絵を描いています。ローレンツは思わず身震いしました。

「…恐ろしいもんだな。」

「これでいいんだな？」

「ええ。あとはこれを鉄粉に混ぜて短剣を作ります。戦いにはギリギリ間に合うと思います。」

ラルフが自信たっぷりに言いました。

「わかった、出来たら俺にも見せてくれ。俺はパトリックたちと打ち合わせをしてくるよ。」

「わかりました。」

「…それにしてもお嬢ちゃん、気の毒なもんだな。オリバーもあそこまで鈍いとはな。」

オリバーが立ち去った後、ローレンツが気の毒そうにローズに言いましたが、ローズは首を横に振って言いました。

「もう慣れた…。でもこっちの方が好都合…。」

「親方！準備できました！」

「おう、じゃあやるぞ！…うん、この量なら二本作れるな。」

ローズはオリバーに子どもと言われ少し不満そうでしたが、すぐにニヤニヤしながら近づいてきたビアンカとマチルドを追いかけて走って行きました。

～～～

「ではペアを確認する。市街地で待機するのはハンスとレオン、ローズとマチルド、ペーターとビアンカだ。ローレンツとラルフは逃げ遅れた人を見つけたら、安全な場所に誘導してやってくれ。

…神殿に突入するのは、パトリックとモニカ、イザベルとエミリー、そしてアリスと俺だ。俺たちは馬で一気に神殿に突入し、魔術や矢で兵隊たちを混乱させる。そして外に出てきた兵たちを、市街地でお前らが迎え撃ってくれ。道が狭いようだから、槍を使うハンスとレオンは特に用心しろ。

…合図は火柱だ。神殿の上で、火柱が二回立ち上ったら失敗、すぐにこの場所に帰ってくるんだ。成功した場合は火柱を三回立ち上らせる。その時は全力で神殿に走ってこい。いいな？…よし、作戦の成功を祈る。」

～～～

すると、見張り台に立っていた兵士が言いました。

「…あれ?おい、こっちに向かって馬が走ってくるぜ?東側からだ。」

「見張りに行っていたやつらじゃないのか?」

「それが、一頭しかいないんだ。」

すると、他の見張り台に立っていた兵士たちも次々と騒ぎ出しました。

「おい、西側からも来てるぞ!」

「北からもだ!」

すると、北から来た馬の上から、声が聞こえました。

「カースアタック!」

すると、北の見張り台に立っていた兵士が急に苦しみだしました。

「ぎゃあああああっ！」

「どっ、どうした！苦しみ出したぞ！」

今度は西からも声が聞こえます。

「ポイズンラース！」

「ううっ…。ぐあああっ…。」

「お、おい！急に血を吐いたぞ！」

最後に東からも声が聞こえました。

「アイスドゥーム！」

「か、あっ！」

「うわっ！急に氷漬けになった！」

神殿の北門からオリバーとアリスが、西門からイザベルとエミリーが、東門からパトリックとモニカが突っ込んできました。すっかり油断していた兵隊たちは大混乱です。

神殿の真ん中にオリバーたちは一度集結しました。

「徹底的に暴れまわってやろうじゃないか。」

パトリックが言います。

「うむ。エミリー、矢の準備は出来ているか？」

「もちろんです、お姉さま。」

アリスとエミリーもやる気十分です。

「馬を操るのはお前たちに任せる。俺たちは魔術で行くぞ。」

「わかりました。モニカさん、落ち着くんですよ？」

「頑張ります！」

魔術師たちも気合を入れなおしました。ようやく武器を手にした兵士たちがオリバーたちに向かってきました。

「みんな！行くぞ！」

「オオーッ！」

三頭の馬はバラバラの方向へ走り出しました。アリスとエミリーは巧みにカトリーヌとアンヌを操りながらも正確に炎の矢や毒の矢を射てゆきます。兵士たちはその威力にひるみました。パトリックもフランソワと息の合った動きで突撃していきます。

更に兵士たちを恐怖に陥れたのは、馬の後ろに乗っている魔術師たちでした。呪い、毒、炎、氷の魔術を惜しげもなく使ってきます。

「グレイブ！」

「ポイズンブレス！」

「ファイアーホース！アイスストライク！」

三人の魔術師は、近づいてくる兵隊を馬に寄せ付けません。その結果、パトリックやアリスたちもとても戦いやすくなっていました。

「に、逃げろ！ここは捨てて街に逃げるんだ！南門から逃げろ！」

兵士たちは南門に殺到しました。半分くらいの兵隊が出たところを見計らって、オリバーはモニカに指示を出しました。

「アイスドゥーム！」

モニカが叫んだ途端に、扉のところにいた兵士たちが凍ってしまい、中の兵士たちが外に出られなくなってしまいました。

「降伏するなら、今のうちだぞ？」

「くっそーっ！」

オリバーの呼び掛けには答えず、兵士たちは捨て身の攻撃に出てき

ました。

「やれやれ…どうなっても知らないぞ？グレイブ！」

「ぎゃあああああっ！」

～～～

「た、たった六人で我らを封じ込めようと言うのか！我らは三十人以上いるんだぞ！」

「人数なんて関係ないよ。問題は腕だね。」

ビアンカがニヤニヤしながら言いました。

「くそっ、女だからと言って手抜きはしないぞ！」

「むー…、女だからって手を抜かれるのは気に食わないなぁ。…ペーター、行くよっ！」

ビアンカは不満そうな顔をしてペーターに呼びかけました。

「おおっ！」

二人は兵士たちに斬りかかりました。

「俺たちもやるぞ！」

「はいっ！」

レオンとハンスも槍を手に突っ込んでいきます。

「いいなあ、新しい短剣…。…でもそれはお前専用のだからな。大事に使えよ?」

マチルドはローズの呪いの短剣を羨ましそうに見て言いました。

「当然…。重くなるから、代わりにこれあげる…。」

「おっ、お前の毒と炎の短剣か!ありがとよ!」

ローズとマチルドも兵士に飛びかかりました。ローズがオリバーの魔術が込められた短剣で兵士を切り裂くたび、真っ黒い煙が巻きあがって兵士たちを苦しめます。絶命前に恐ろしい奇声をあげる兵士もいます。短剣の威力は今までの毒や炎のものとは桁違いのものでした。

「…怖い。でも、使いこなして見せる…。」

ローズは口元を引き締め、兵士たちに向かって行きました。

～～～

「はいっ！」

彼らの攻撃が終息した瞬間、わずかに生き残った兵士たちは蜘蛛の子を散らすように逃げてゆきました。アリスはカトリーヌを走らせようとしましたが、オリバーが押しとどめました。

「追う必要はない。…どうだ、街の様子は。」

「広場で戦っているようですが…。兵士たちの動きはバラバラで統率がとれていません。こちらが優勢なんでしょう。」

イザベルが言いました。

「よし、ならばもうこれで十分だ。モニカ、頼んだ！」

「は、はい！ファイアーストーム！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～

広場でハンスが神殿の火柱を見つけました。

「火柱だ！一つ…、二つ…三つ！成功だ！」

「よし！」

六人は一斉に神殿に向かって走り出しました。

「も、もう神殿に戻るのはたくさんだ！」

「逃げろ！もうこんなところにはいられない！」

兵隊たちはみな逃げ出してしまいました。

～～～

たちのこともギル大臣に知られてしまっただろう。これからはもっとつらくなる。みんな、それでも大丈夫か？」

オリバーは仲間たちに声をかけました。

「当然だろ？俺たちだってたったこれだけの人数であんなに多くの兵士の撃退に成功したんだ。」

レオンが満足げに言いました。

「街の人たちも感謝してた。あたしたちのやってることはみんなが応援してくれてることだよ。ちょっとくらい困難があったって平気だって。」

ビアンカも胸を張ります。

「これをわたくしたちの新たなる出発と考えるべきだと思います。これからわたくしたちの敵は魔獣からギル大臣そのものに変わったのです。」

エミリーも力強く言いました。

「今さら退けるか、って話だよ。途中でやめるのが一番悪いことだからな。」

マチルドは頷きながら言っています。

「よし、じゃあみんな、これからは今まで以上に団結して頑張って行こう。必ずリバー王国を救うんだ。」

「オオーッ！」

～～～

「大臣、どうぞお気をお鎮めに…。」

「黙れ！…かくなる上は、魔術師に相手をさせる。プレグーとレジオンをここに呼ぶのだ！」

「はっ！」

～～～

「はっ！」

「…心得ました。」

～～～

ゼンハインはお前ごときには倒せぬ。やつを葬るのはこのレジオンなのだ…）

～～～

ダナラスフォルスの解放に無事成功したオリバーたちですが、すでにもう次の脅威が出現しようとしています。オリバーたちの運命はいかに…？

次話ではオリバーたちの前に闇の魔術師、プレグーが現れます。オリバーはプレグーとは面識があったようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに二人の闇の魔術師の名前ですが、単に「グレープ」と「オレンジ」の語順を並べ替えただけです。とはいえ、彼らの実力と名前の由来は比例しません。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２３．新たな敵」（前書き）

ナンジューマ地方の神殿都市、ダナラスフォルスをギル大臣の兵から救ったオリバーたちは拠点であるオーベルクに帰ることになりました。オリバーはすでに次の目的地を決めているようです。

オリバーたちはオーベルクに戻るため、街道を歩いていました。少し人通りも増えたような感じです。

「ふう…。よし、みんな。今日はこの辺りで野宿をしよう。」

「また野宿かよぉ…。」

レオンが思わずこぼします。

「仕方ないさ。宿に敵兵が押し寄せてくる可能性もあるんだ。無関係の人を巻き込むわけにはいかないだろう。」

「それはもちろんそうだが…。」

レオンはまだ不服そうです。

「ビアンカやアリスたちは野宿には慣れているみたいだな。」

オリバーからの問いかけに、ビアンカたちは得意げに答えました。

「そうだねー。少なくともあたしは旅から旅の生活だから。」

「うむ、その気になれば、吾れもエミリーも木に上にだろうと寝られるな。」

「慣れない頃は、よく落ちたものですよ…。」

「だが、それならあの宿屋にも戻れなくなるんじゃねぇのか？」

レオンは心配そうに言います。

「ヴォルフの宿では、イザベルが多少無理をして防護の魔術線を張ってくれるらしい。少なくとも魔術師以外にはわからないさ。」

「そ、そうか…。そういやイザベルは野宿には慣れてるのか？」

イザベルは笑って答えます。

「はじめはびっくりしましたけど、もう慣れましたよ。」

「イザベルは適応が早いからなぁ…。」

オリバーは感心したように言います。

「そこはちょっとだけ自慢できるところかもしれませんね。」

イザベルも少し得意げです。

「ほらよ、オリバー。肉が焼けたぜ。」

たき火のそばに座っていたマチルドがオリバーに肉を差しだしました。

「おう、ありがとう。…うん、うまいな。何の肉だ?」

「野ウサギです。ついさっきお姉さまと仕留めてきました。」

エミリーが説明します。

「なるほど。初めて食べたよ。」

「大物のシカを狙っていたのだが…結局それだけだった。」

アリスは少し残念そうです。

「これだけあれば十分さ。」

オリバーが笑って答えます。すると、ハンスがオリバーに言いました。

「そうだ、先生。これからの方針はどうするんです?」

オリバーは少しだけ緊張した面持ちで言いました。

「うん…。みんな十分に経験を積んだし、そろそろ禁じられた洞窟を探してみようかと思っている。」

「いよいよですか…。」

ペーターも緊張した様子で呟きました。

「その時はアリスとエミリーの森の知識が必要になってくる。頼りにしているぞ。」

「うむ、任せておけ。」

「間違いなくお力になれますよ。」

～～～

「昔はよくこうやって未来について話していたね。」

「バカなことを言い合って笑ってたもんだ。」

「本当に懐かしいよ…。」

パトリックは笑った後で、少し真剣な表情で言いました。

「…今回のダナラスフォルスの戦い、君は本当にいい表情をしていた。…恐ろしいくらいに。」

「…俺も、自分の中に兵士を殺すことを楽しんでいる自分がいることに気がついた。だから結局、俺にはローズを諭す権限などないのかもしれないな。

…これはもともと闇の魔術師だった俺には仕方のないことなのかもしれない。だが…、これともうまく付き合って行かなければならない。」

「少なくともあの兵士たちは民衆を苦しめることを何とも思っていなかったんだ。情けは不要さ。」

「ああ…。」

少し肩を落としたオリバーをパトリックが励まします。

「…ほら、元気を出すんだ。みんな君を慕ってここまで来ているんだ。君が元気なくしてどうするんだい？」

「ハハッ、そうだな。…闇の魔術師が相手なら、だいたいこういう心の隙を狙ってくる。気をつけないとな。」

そう言った途端、オリバーの目が突然鋭くなりました。

「いきなりどうしたんだい？何かの気配でも感じたのかい？」

「…どうやら俺が言った通りのようだ。俺の五感が正しければ…、非常にやっかいなやつが近くにいる。みんな！起きろ！」

オリバーの大声に、仲間たちは慌てて飛び起きました。オリバーが森の中を睨んでいます。

「てっ、敵ですか!?」

ハンスの問いには答えず、オリバーは森の中に向かって言いました。

「…隠れていないで出てきたらどうだ?闇の魔術師。」

オリバーの声に、木の後ろから真っ黒いマントを着てフードをすっぽりかぶった人影が出てきました。

「…プレグー、だな。」

「ヒッヒッ、お見通しとは恐れ入ったね、元闇の魔術師、オリバー・ローゼンハイン。」

魔術師はフードを取りました。仲間たちはその気味の悪い笑いに、背筋がゾッとしました。オリバーは冷静にプレグーに話しかけました。

「お前がいる、ということは、レジオンもいるのか?」

「レジオンはあんたに愛想を尽かしたよ。ここにいるのは吾輩だけさ。」

「嘘…ではなさそうだな。何の用だ？」

「まあまあ、今日はこのまま帰るつもりさ。今後手合わせをすることになるだろうから、その挨拶にうかがったまでさ。」

「お前が俺たちと、だと？」

「そうさ。じゃあ、吾輩はこれで。」

プレグーはそう言ってオリバーに背を向けました。

「待てっ！フィクセイション！」

オリバーは叫びましたが、その前にプレグーはどこかへ消えてしまいました。

「先生…あれは…？」

明らかに動揺したようなペーターがたずねました。

「闇の魔術師、プレグーさ。」

「どんなやつなんですか？」

ハンスも不安げにたずねます。

「…もしプレグーをギル大臣が雇ったのだとしたら…ギル大臣という男は悪魔の申し子としか言えないだろうな。

俺も若いころに何度も戦ったことがあったが…、見せしめのために女子供三十人の足に穴を開けて鎖を通し、その鎖を熱して死ぬまで踊らせるような男だ。」

「…それはたとえなんだよな？」

冷静に語るオリバーに、レオンは恐る恐るたずねました。

「一点の曇りもない事実だ。俺がやつの手にかかった一人一人の鎖をはずし、丁重に葬ってやった。他にもやつがどんなことをしたのか聞きたいか？」

「い、いや。あの男がととてつもなく残酷な男だということは十分に伝わった。」

レオンはすっかりと怖れをなしたようです。

「…とにかく、あいつは闇の魔術師というものを絵に描いたような男だ。絶対にあいつとは決着をつけなければならない。

…だが、あいつ以上に恐ろしいやつがいる可能性がある。もう一人の闇の魔術師、レジオンだ。

プレグーはレジオンはいないと言っていたが、レジオンは狡猾だ。プレグーが俺たちを追い込んだところでとどめだけ刺しに来る、なんていうことも考えるやつだ。味方さえも欺く男だからな…。」

オリバーは厳しい顔をして言いました。

「ここに来て、強敵が次々と現れてきたようだな…。」

ローレンツも少し不安げです。

「正直、奢っているプレグーはまだ戦いやすい。問題はレジオンが

どう出てくるのかだな。」

「…おいおい、今からどうのこうの言ったってどうしようもないだろ?まずは今の疲れを取ることが重要なのさっ。寝ようぜー。」

マチルドはそう言って目を閉じました。レオンがあきれたように言います。

「まったく、緊張感がねぇなあ…。」

「…だが、マチルドの言うことは正しい。みんなもとりあえず休むんだ。火の番は私とオリバーに任せてほしい。」

パトリックの言葉に仲間たちは気持ちを落ち着けると、また目を閉じました。次第に寝息も聞こえてきます。オリバーがパトリックに言います。

「…俺はこのまま一晩火の番をするつもりだ。お前も寝ていいぞ。」

「いや、私がやるよ。君は気を張りすぎているだろう。君こそ休んで体を休めるべきだよ。」

「いや、いいんだ。今のうちに眠気をたっぷりためて、ヴォルフの宿の固いベッドでぐっすり眠ってやるんだ。」

オリバーが笑いながら言ったその時、ガサリという音がしました。二人が驚いて振り向くと…、

「…ローズ？まだ寝ていなかったのかい？」

パトリックが心配そうに言いました。

「眠れない…。…だから火の番をする…。」

ローズはオリバーの真横にぴったりとくっつきました。パトリックは少し笑うと、言いました。

「…オリバー、やはり私は眠いみたいだ。すまないけれど二人で番を頼むよ。」

「あ、ああ…。」

「さーて、その前にフランソワの様子を見てこようか。」

パトリックは笑いながらその場を立ち去りました。

～～～

「アリス、もしかして君もオリバーを…、いや、あえて触れる話題でもなかったね。」

パトリックの言葉にアリスは恥ずかしそうに笑いました。

「まあ、な。だがローズには到底かなわぬだろうな。そこは吾れも諦めがついている。…貴様は初めて敵と戦った時はどう感じたのだ？」

「私も騎士として駆け出しの頃はそうだったよ。初めて人間の敵を殺した時も、三日間は眠れなかった。」

「皆同じなのだな。吾れもあの村で兵士を殺した時、とてつもない罪悪感にさいなまれた。それ以前に、今考えてみると…ナンジューマに向かう途中、関所で引き返すか否かという話になった時、内心では吾れは戻りたくて仕方がなかった。恐ろしくてたまらなかったのだ。エミリーが確固とした表情で進むことを決めていたため姉としての体裁を保たねばならなく最終的には進むことにしたのだが…。だが、これに耐えねば国を救うことは出来ぬのだろうな…。イザベルも、あのようにいつも笑顔を見せているが内心では恐ろしくてたまらぬと吾れに打ち明けていた…。」

「…君は女性メンバーの中でもまとめ役みたいな位置づけだからね。

」

「複雑な気持ちなのだがな。吾れはどちらかというと新参者の部類だ。なのにこれほど頼られてよいものかと…。」

「そんなことは関係ないさ。失礼かもしれないけれど、君は女性メンバーでも一番年上のようだからね、特にまだ大人になりきっていないローズやマチルドにとってはなくてはならない存在だと思うよ。」

「そのようなものなのか…。頼られている以上は、責任感も生まれてくるな。」

「それをどういう風にとらえるかは君しだいじゃないかな。責任感に押しつぶされるか。」

「それともそれを力に変えるか…。まだやってみなければわからぬな。」

「君なら大丈夫さ。オリバーも君のことをとても頼りにしてるんだ。」

「はは、更に責任感の増すことを言われても困るな。だがオリバー

に頼られているというのは嬉しいことだ。…お前のおかげで何とか眠れそうだ。感謝している。」

「ああ、お役に立てて嬉しいよ。」

二人も笑顔をかわすと、それぞれ木の上と下で目を閉じました。

～～～

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２３．新たな敵」（後書き）

闇の魔術師プレグーがオリバーたちの前に現れました。残忍な性格で、仲間たちもすっかりと怖れをなしてしまったようですが、何とか気持ちを落ち着けることが出来たようです。オリバーのみならず、パトリックも仲間たちをしっかりと励ます役割を担っているのです。

次話ではオーベルクに到着したオリバーたちですが、息をつく暇もなく新たな敵が迫ってくるようです。どうぞお楽しみに！

ちなみにパトリックは周りの誰からも「騎士」と認められていますが、実際のところは馬に乗って戦っているというだけなので、厳密な意味の「騎士」とは異なります。本人も自覚はしているようです。しかし、彼の立ち振る舞いはいつも紳士的で、誰に対しても優しいので騎士本来の理想像には近いのかもしれません。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２４．骸骨兵士」（前書き）

ナンジューマ地方からの旅を終えたオリバーたちは、オーベルクに帰ってきました。無事に帰ってきたオリバーたちを見てヴォルフたちも安心したようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２４．骸骨兵士」

オリバーたちはオーベルクの宿に帰ってきました。ヴォルフが待ち焦がれていたようにオリバーたちを迎えました。

「よく帰ってきたな。ナンジューマはなかなか大変なことになっていたそうだな。」

「ああ…。出来ればすべての人たちを救いたかったが…。ただ、俺たちがここにいる以上、ヴォルフたちにもある程度の危険は覚悟してもらわなきゃならないかもしれない。」

「それははじめから一緒さ。俺だってこれまでに何度も兵士の襲撃を受けてる。…まあ、魔術師からの襲撃は受けたことがないがな。」

ヴォルフは笑いながら言いました。

「オリバーさん、魔力線を張り終えました…。」

イザベルが青白い顔で中に入ってきました。

「ありがとう。まだしばらくはここに滞在するつもりだ。まずは部

屋に帰って、ゆっくりと休んでくれ。」

「はい。」

「…今回の旅はイザベルに世話になりっぱなしだったよ。感謝しないとな…。」

オリバーが笑顔で言いました。

「おい、オリバー。俺っちはラルフと裏で作業をしてるぜ。ちょっとした武器のアイディアを思いついたんだ。」

今度はローレンツがやってきました。

「休まなくていいのか?」

「確かに疲れてはいるが、いい思いつきってのはすぐに行動に移さないとな。それが終わったら休ませてもらうよ。」

「ああ、わかった。…ローレンツたちも、ローズとマチルドの武器を強化してくれた。どれだけ戦力として重宝したことか…。

俺は今回の旅で仲間の大切さっていうのを改めて知ったよ。俺は基本的には単独行動、せいぜい連れて行ってもハンスとペーター程度だ。だがここに来ていろんなやつと知り合うことができた…。もちろん、ヴォルフとリリーもだよ。」

「ハハッ、俺たちは宿に泊めてやってるだけじゃないか。」

ヴォルフが笑います。

「いやいや、前にあんたが言っていたように、帰れる場所がある、っていうだけでも大きな心の支えになる。」

「そう言ってもらえると嬉しいね。」

リリーも笑顔で言いました。

その時、宿の外で大声が聞こえました。

「大変だーっ！隊商が襲われたーっ！」

「…山賊か？しかし、この辺りで山賊が出るなんて話は聞いたこと

がないな。」

「聞いてくる。おい！どうしたんだ！」

オリバーは街に転がり込んできた商人のような男にたずねました。

「た、助けてくれ。北の墓地の方に骸骨の兵士が現れたんだ。」

「なっ、何だって！？骸骨兵だと！？」

「隊商は全滅、でも積み荷は一切盗まれなかった。」

「くそっ…。ありがとう！」

オリバーは宿の中に戻ってきました。騒ぎを聞いて、仲間たちも下に降りてきました。

「骸骨兵はとても危険だ。武器にも向き不向きがある…。疲れているだろうが、ローズとマチルドだけついてきてくれ。あとはここで待機だ。」

「おいおい、イザベルも待機なのか？」

マチルドがびっくりしたように言いました。

「やつらには基本的に魔術は効かない。だが…呪いの魔術の効果は絶大だ。よし、行くぞ！」

三人は宿を飛び出して行きました。

～～～

「そもそも傷をつけられないだろうな…。とにかく打撃で何とか倒してくれ。ただやつらはものすごく素早い。攻撃力も高いから十分用心しろ。俺はここで援護をする。」

「あいよっ。よーしローズ、人暴れして来ようぜ！」

二人は茂みを飛び出し、骸骨兵に飛びかかりました。そして骸骨兵の頭を砕こうとします。

「くうっ、なんて硬さだ！こっちにも反動がくるぜ…。」

「一撃入れたら退却だ！それを何度も繰り返せ！カースアタック！」

オリバーが叫ぶと、骸骨兵の体の一部が砕け散りました。

「くそっ、頭には当たらなかったか！」

「うわっ！」

マチルドの腕から血が出ています。

「マチルド！大丈夫か！」

「安心しろよ！ちょっと切られただけだ！くっそーっ！」

マチルドは骸骨兵の頭を叩き割りました。その瞬間、骸骨兵はバラバラになって地面に崩れました。

「うおぅ！すげぇや！頭さえ砕いちまえば怖くねぇんだな！よーし、次行くぜ！援護してくれよ！」

マチルドは自信をつけたようです。

「おう！カースアタック！」

～～～

マチルドが首をかしげます。

「何がおかしいんだ？」

「はじめは十体いたはずなんだ。だけど残骸を数えたら九体しかいない…。」

「まさか、」

その時、ローズがオリバーを突き飛ばしました。背後に迫っていた最後の骸骨兵がオリバーに斬りつけてきたのです。ギリギリのところで地面に倒れたオリバーはその体勢のまま叫びました。

「カースアタック！」

骸骨兵は魔術を頭部のど真ん中に受け、一瞬で崩れ落ちました。

「…すまない、ローズ。油断してしまった。」

「先生らしくない…。」

「まったくだ。このような骸骨兵ごときに後ろを取られるとはオリバー・ローゼンハイン、貴様弱くなったな？」

どこからか聞こえてきた声に、オリバーはサッと身構えました。

「お、おい！あんなところに人間が！」

マチルドが空中を指差しました。

「…レジオン…。」

もう一人の闇の魔術師、レジオンが宙に浮いてオリバーたちを見下ろしています。オリバーが敵意をむき出しにしてレジオンに叫びます。

「レジオン！この骸骨兵たちはお前の仕業か！」

「私はただここを通りがかっただけだ。恐らくプレグーの仕業だろう。まあ、やつは今頃自分の根城で茶でも飲んでいるのだろうがな。」

「…嘘ではなさそうだな。だが、ここをお前が通りかかっただけというのは嘘だろう。」

「さあ、それは知らんな。ただ一つ忠告しておこう。今の隙だらけの貴様なら、プレグーのような三流の魔術師にもやられてしまうだろうな。…ほら、後ろを振りかえってみろ。貴様の仲間が短剣を片手に斬りかかってくるぞ?」

オリバーはレジオンから目を離さないまま静かに言いました。

「…俺の仲間はそんなことはしない。」

レジオンは興醒めしたというような顔で言いました。

「本当に甘い男になってしまったようだな。私がお前の仲間を操ったとしたらお前の命はもうないのだ。…まあ、いいだろう。私の出る幕はなさそうだ。せいぜいプレグーにでも倒されるがいいだろう。」

レジオンはつまらなさそうにそういうと、サッと消えました。

「待てっ!」

オリバーが叫んだときにはもうレジオンの姿はありませんでした。
オリバーがゆっくり振り返ると、ローズとマチルドもはじめの場所を一歩も動いていませんでした。

「…安心しろ。俺はお前たちが襲ってくるなんてはじめから信じていないから。」

マチルドは少し焦った顔をしましたが、無理に笑顔を浮かべました。
夜の「仕返し」のことを思い浮かべたからです。ローズもジロリとマチルドを見ています。

（結局オリバーのやつを守ってるのはローズってことだよな…）

マチルドは心の中で納得しました。が、オリバーが視線をそらすと、ローズからの文字通りの鉄拳が飛んできました。

「こ、こてははずせーっ！」

～～～

三人が宿に帰ってくると…、

「みんな…。」

仲間たちが武器を構えて宿の前に集まっていました。

「ああっ！師匠たち無事に帰ってきた！」

ビアンカが叫ぶと、ハンスとペーターがオリバーのもとへ飛んできました。

「お前ら、休んでなかったのか？」

「先生たちにもしものことがあったら、すぐに飛んでいけるように準備していたんですよ！」

「俺たちが黙って休んでると思ったんですか？」

「マチルドさん、腕を怪我していますね。それに顔も腫れあがっています。すぐに手当てをしましょう。」

イザベルがマチルドに言います。

「まったく、すばしっこいのだけが取り柄のお前がこんなにやられるんじゃ、相当な相手だったらしいな。」

レオンがからかうように言いました。

「い、いや、斬られたのは敵にやられたけど、殴られたのは…いや、敵に殴られたんだ！いやぁー、あれだけの力で殴られるとは思わなかったぜー。」

背後からの危機を察したマチルドはとっさに言葉を変えました。大騒ぎする仲間たちを見て、オリバーは思いました。

（…レジオン、確かに俺は弱くなったかもしれん。だが俺はあの時なかったものを手に入れた。…心強い仲間たちだ！）

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２４．骸骨兵士」（後書き）

闇の魔術師レジオンはオリバーを惑わそうとしましたが、オリバーはそれを突っぱねました。オリバーと仲間たちの絆はこのようなハッタリではもう崩せないようですね。

次話ではオリバーたちが北の樹海に存在するという禁じられた洞窟探しの準備を始めます。アリスとエミリーは洞窟のありかを示す伝承を知っているようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに骸骨兵を仕向けたのはレジオンの言った通りプレグーです。本当はオーベルクの街を強襲する予定でしたが、それよりも先に隊商を襲ったことによりその存在がオリバーに早く知れてしまったのです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２５．洞窟の手がかり」（前書き）

オーベルクに襲撃寸前だった骸骨兵を倒したオリバーたちは、ヴォルフの宿に滞在していました。そして新しい旅がまた始まるようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「25．洞窟の手がかり」

骸骨兵の襲撃から一週間後、パトリックはヴォルフの宿の前を通りました。

「赤い…、棒か。」

入り口のところに赤い棒が立てかけてありました。これは『今夜会議を行う』というオリバーの合図です。

「また旅支度をするとしようか…。」

～～～

夜、二人が宿の中に入ると、ヴォルフが待っていました。

「よう、お二人さん。オリバーたちは上のいつもの部屋だ。」

「ほいよー。」

「オリバーは何か言っていなかったかい？」

パトリックの問いに、ヴォルフは首をかしげました。

「さあな。ただ、重要な話なのかもな。ハンスとペーターが緊張した顔をしていた。」

「あのお子ちゃまたちはいつもそうでしょ。パトリック、行こうよ。」

「ああ、そうだね。」

～～～

部屋の扉を開けると、オリバーや仲間たちが全員そろっていました。
」

「よっ、師匠！元気にしてた？」

「遅くなってすまないね。」

「いや、気にするな。…今日集まってもらったのは他でもない。今度の旅の話だ。

行き先は…禁じられた洞窟だ。」

オリバーの言葉に、仲間たちの顔に一気に緊張が走りました。

「…問題は、禁じられた洞窟の場所を誰も知らないということだ。今回封印が解かれたのもたまたま兵士が見つけたからだ。その兵士たちも一人も帰ってきていない。ただ、北の山脈のふもとの樹海にある、ということがわかっているだけだ。」

「それならアリスとエミリーが詳しいんじゃねぇのか？何か伝承みたいなものは伝わってねぇのか？」

レオンがたずねます。

「ええ、あります。

…禁忌の扉は五本の指の六本目、その奥の三人の主たちの真中にある、というものです。」

「…何が何だかさっぱりだね。」

エミリーの言葉に、ラルフは首をひねりました。

「うむ…。吾れらも小さな頃に興味を持ち、森の中をあちこち探し回ってみたのだが…少なくとも吾れらの行動範囲内にはそのようなものはなかったな。」

アリスも肩をすくめました。

「とは言え、まずは北の樹海に行かなければならないな。まずはアリスたちの狩人小屋に向かうとしよう。」

「うむ、それがよい。この人数では少し狭いかも知れぬが、まあ何

とかなるだろう。」

「そこで体勢を整え、洞窟探しを始める。現段階ではその言い伝えの言葉だけが手掛かりだがな…。」

「五本の指の六本目…？何なんだよ、さっぱりわからねぇ…。」

レオンが頭を抱えます。

「ない頭で考えるだけ無駄だぜ？もっと本能的に動けよ。」

マチルドがバカにしたように言います。

「いちいち突っかかってくるなよ！」

レオンが腹を立て、結局二人はいつものように口論を始めました。
オリバーは苦笑いしながら言いました。

「とりあえず当面の予定は決まった。出発は三日後だ。それまで各自でしっかりと準備を整えておいてくれ。ローレンツとラルフが武器の手入れをしておいてくれるらしい。必要なやつは二人に武器を預けておけ。」

オリバーはそう言って会議を閉じました。

～～～

「本当に助かるよ。…ラルフ、その本は何だ？」

オリバーはラルフの持っていた本を見ました。

「ああ、ナンジューマに行った時に見つけたんですよ。何でも、遥か東方世界のことを書いた本ですね。」

オリバーはその本を手にとって読みました。

「ほーう…。…お、ローレンツ、カヤクとやらのことも出ているぞ？」

「ああ。だが、俺っちに手に入るような鉱石じゃつくれないらしい…。残念だな。」

ローレンツは心から残念そうです。

「そうか…。…お、おい、何だよこれは！ものすごい、山のような船だな！」

オリバーは思わず声を上げました。

「何でも、東方世界の王様、そこでは皇帝と呼ぶようですが、その人が国内を見て回るために造らせたそうです。しかもその船を通すため、ものすごい大きな運河もつくったらしいです。結局、その王朝はあまりの出費と度重なる遠征でつぶれちゃったみたいですけどね。」

ラルフが説明します。

「…その次の王朝は皇帝とやらが一人の侍女にうつつを抜かしたために内乱がおきて衰退、か…。結局統治者が悪いとどこの国も衰退する運命なんだろうな…。」

オリバーは眉をひそめました。

「だが文明は最先端を行っているらしいな。ぜひこの目で見てみたいもんだ…。」

オリバーとは対照的に、ローレンツは目を輝かせています。

～～～

宿に帰ってくると、イザベルとモニカが話していました。

「あれ？さっきまでビアンカやアリスたちがいなかったか？」

「アリスさんたちは森へ行ったみたいです。ビアンカさんはいつものようにブラブラと外に出て行きましたね。」

イザベルが笑って答えました。

「なるほど。…モニカの魔術もかなり上達してよかったよ。」

「は、はい！イザベルさんとオリバーさんのおかげです！」

モニカが嬉しそうに言いました。

「俺たち以上の魔術師になるのも時間の問題だな。」

その時、マチルドが宿に入ってきました。

「おーい、モニカ！悪いんだけど、こいつに魔術で火を通してくれ！」

マチルドが持ってきたのは羽をむしられたニワトリでした。モニカはびっくりして腰を抜かしてしまいました。

「早くやってくれよ。みんなで食おうぜ！」

「…マチルド、そのニワトリはどうやって手に入れた？」

オリバーの言葉に、マチルドはピクッと震えました。

「あー、いやー、ほら、その辺を歩いてたんだよ！何て言うかな、野良ニワトリ？はぐれニワトリ？」

「…どこで盗んだ？言わなければ尋問の魔術をかけるが…。」

オリバーの低い声に、マチルドは悔しそうに言いました。

「くそーっ！盗んだんじゃねえよ！ほら、この近くに目の見えないじじいがいるだろ？あのじじいの荷物を持ってやったら、その礼にって一羽くれたんだよ！」

「ああ、それなら俺も見てたぜ。それは確かにマチルドがバートじいさんからもらったニワトリだ。」

ヴォルフも言います。

「…疑ったのはすまなかったが、どうして隠したんだ?」

オリバーからの問いかけに、マチルドは目を白黒させました。

「それは…その…、」

「恥ずかしいから…。」

突然どこからか現れたローズが言いました。

「うわーっ!ローズ!お前、後で覚えてやがれ!」

マチルドは顔を真っ赤にして階段を登って行きました。ローズはどこか勝ち誇ったような表情です。オリバーは申し訳なさそうに肩をすくめました。

「やれやれ…。あとでちゃんと謝っておかないとな。」

「その必要はない…。」

「え？どうしてだ？」

「その方がマチルドも、燃える…。そうすれば夜の『仕返し』も防いで…、」

「燃える？『仕返し』？どういうことだ？」

「何でもない…。」

ローズは一瞬しまった、というような顔をしました。

「それよりも早くニワトリを焼こうぜ！モニカ、頼むよ。」

「レオン…どこにいたんだ？」

オリバーの言葉にレオンはガクリと肩を落としました。

「ひどいやつだな…。ずっとそこにいたよ。…さあ、モニカ！」

「え、じゃ、じゃあ行きます。ファイアーストーム！」

レオンにせかされ、モニカは慌てて魔術をかけました。

「ぎゃあああああっ！」

突然ハンスとペーターのお尻に火がつきました。

「ああっ！いけない！アイスドゥーム！」

「ぎゃあああああっ！」

今度は二人の下半身が氷漬けになってしまいました。

「また失敗してしまいましたっ…。」

モニカは落ち込んでいます。

「先生…早く助けてください！」

「痛い！ローズ痛い！氷が砕けてる！もっと優しくやってよ！」

「うるさい…。我慢して…。」

ハンスとペーターは大騒ぎです。

「…とりあえずこのニワトリは俺が焼いておいてやるぜ。」

ヴォルフがニワトリを宿の奥に持って行きました。

「初めからそうすればよかったのに…。」

イザベルがおかしそうに大騒ぎする仲間を見ていました。

～～～

のになりました。カウンターでオリバーとヴォルフが話しています。

「今回の旅は特に大変なものになるようだな。」

「ああ…。闇の魔術師も動いてきている。万が一のことも考えて、あんたたちも用心しておいてくれ。」

「わかった。…そうだ、さっき街に出た時に小耳にはさんだんだが、最近ノーザリンでは小さな地震が何度も起きているらしい。また、山の方から地鳴りも聞こえてくるようだ。ノーザリンの住民たちは神が怒っているんじゃないかと心配しているようだ。」

「不気味だな…。わかった、用心するようにするよ。」

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２５．洞窟の手がかり」（後書き）

オリバーたちはエミリーから洞窟の位置を示す伝承をききました。
はたしてこの言葉が意味するものとは…？

次話ではオリバーたちがアリスたちの狩人小屋に到着します。アリスとエミリーは仲間たちをお気に入りの湖に案内しますが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスとエミリーは定期的にオーベルク郊外の森に行ってシカや野ウサギを狩ったり、木の実を採ったりしてきます。そうすればヴォルフはその日の分の宿泊費は免除してくれます。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２６．北の樹海」（前書き）

オリバーたちはアリスとエミリーが住んでいた狩人小屋に到着しました。ここを禁じられた洞窟探しの拠点とするようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２６．北の樹海」

オリバーたちは懐かしい小さな小屋の前にきました。ノーザリンの樹海にあるアリスたちの狩人小屋です。

「久々に帰ってこられましたね、お姉さま。」

「うむ…。よし、中に入ってくるがよい。」

～～～

「私が魔獣よけの魔力線を張ってきてあげます。魔獣よけ程度だったらすぐにできますから。」

イザベルが提案しました。

「うむ、よろしく頼む。」

イザベルは扉を開け、外に出ました。その途端、

「ポイズンラース！」

イザベルの大声が聞こえました。驚いてオリバーたちが外に出ると…、

「…こりゃあでかい…。」

とても大きな魔獣が倒れていました。

「外に出た瞬間に襲ってきましたから、びっくりしましたよ。」

イザベルが苦笑いして言いました。

「こんな大きな魔獣、この森では見たことがありません…。」

エミリーは少しショックだったようです。オリバーは難しい顔をしています。

「明らかに生態系が狂ってきているな。早く禁じられた洞窟を見つけ出して、封印しないと…。」

「少し休んだらこの辺りの森を案内してやろう。だが、今のように凶暴化した魔獣が出てくる可能性も高い。武器を忘れぬようにな。」

アリスが言いました。

～～～

「しかも、ものすごい量であふれだしているなぁ！」

ハンスとペーターの声に、オリバーたちは湧水のところへ行きました。確かにものすごい量の水が突然地面にあふれ出しています。

「ふーん、不思議だな。こんな平らなところから水が湧き出しているのか。しかも水のない谷がずっと奥まで続いている…。」

オリバーがつぶやきました。それをきいてアリスが言いました。

「うむ、この先の谷は水が枯れているのだ。今日はこの谷の先の湖に案内しようと思う。」

「ああ、前に言っていた湖か。」

オリバーたちは水の枯れた谷を上流の方へ登って行きました。やがて、目の前に大きな崖が現れました。

「この上が湖です。右の斜面を登ると簡単にたどり着けますよ。」

エミリーが斜面を指差しながら言いました。

～～～

浄化は難しそうだね。」

パトリックが厳しい顔で言いました。

「吾れらの湖が…。」

「許せない…！すべては洞窟の封印が解かれたからです！」

アリスは力なく座りこみ、エミリーは怒りのままに叫びました。

～～～

「効いていない！？」

「下がれ！ここは俺たちに任せろ！イザベル！モニカ！行くぞ！」

「はいっ！」

「わ、わかりました！」

オリバーたちは魔獣たちに向かって叫びました。

「カースアタック！」

「ポイズンラース！」

「アイスドゥーム！」

～～～

「手こずらせやがって…。明らかに魔獣たちに宿る魔力も強くなってるな。」

「感慨に浸るのもいいが、あいつらをどうにかしてやれ。」

ローレンツがハンスとペーターを指差して言いました。

「また氷漬けだ！」

「モニカ！いい加減に上達してくれ！」

「待ってろ、今溶かしてやる。…安心しろ、モニカ。少なくともお前はあれだけ危険な魔獣相手にも対等に渡り合えているんだ。」

オリバーは落ち込んでいるモニカを励ましました。

「ありがとうございます、オリバーさん…。」

「よし、そろそろ狩人小屋に戻ろう。アリス、エミリー。また案内を頼むぞ。もう日も暮れそうだ。」

「はい…。…お姉さま？」

「…ああ、すまぬ。」

エミリーはまだ座り込んでいるアリスを抱え起こし、オリバーたちを案内しました。

～～～

「ふうっ、ビアンカか。斧槍の訓練だ。」

「訓練？」

「ああ、ほら、湖で魔獣と戦った時、オリバーたちばかりが戦って俺たちは見ているだけだっただろ？…確かに今の俺たちじゃあそうするしかねぇかもしれねぇ。だから俺自身もっと強くならなきゃならねぇ。そう考えたら寝てもいられなくてな。」

レオンが真剣な目をして言いました。

「ふーん、バカはバカなりに考えてるんだね。」

ビアンカはからかうように言いました。

「うるせぇな。ほら、見ろよ。アリスたちも矢の特訓をしてるぜ。」

ビアンカが森の奥の方に目を凝らすと、アリスとエミリーが真剣なまなざしで矢を射ています。それを見て、ビアンカも思うところがあったようです。

「ふーん…。…ねえ、レオン。ちょっとお手合わせ願えない？」

「あいにく、俺は訓練用の槍を持っていねぇが？」

「あたしだって、これは本物だよ。どーせ怪我したってイザベルが治してくれるって！」

「それもそうだな。よし、それじゃあやるぞ！」

～～～

「そうか…。しっかりと頑張らないとな。…で、ビアンカとレオンはどうしてそんなに傷だらけなんだ？」

「んっ！？あ、いや、朝の散歩に行ったら転んじゃってさ、イザベル、後で傷薬塗ってよ。」

「俺も朝の準備運動をしてたら木のトゲにやられちまってさ…頼むぜ、イザベル。」

「バカの傷は何をやっても治らないと思うぜ？」

マチルドが舌を出しながら言います。

「う、うるせー！」

「やれやれ…、朝から元気だな。さて、いよいよ今日から禁じられた洞窟を探すとしよう。五本の指の六本目、か…。さっぱりわからんが、まずは山脈の端からしらみつぶしに歩いてみるとするか…。」

「そういえば洞窟というよりは縦穴のようなものだ、って言ってましたよね。」

ハンスが言います。

「ああ。つまり、斜面にあるわけじゃないから探すのは余計に難しいかもな。

…よし、出発しよう。まずはランダール峠の方に行ってみよう。」

～～～

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２６．北の樹海」（後書き）

ノーザリンの樹海の魔獣は確実に強さを増しているようです。オリバーたちの洞窟探しも難航しそうです。

次話ではオリバーたちが洞窟探しを開始します。やはり伝承でしかその存在を知ることが出来ない洞窟を探すのはなかなか大変なようです。

ちなみにこの樹海は東西に約５０キロ、南北に約１０キロの範囲で広がっています。山脈の山肌の森も加えるとさらに広い範囲です。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「27．洞窟探し」（前書き）

オリバーたちはランダール峠のふもとの村から樹海に入ることにしました。禁じられた洞窟は樹海のどこかに必ずあるはずです。

オリバーたちは北の山脈の一番端、ランダール峠のふもとの村にやってきました。

「さて、ここから樹海に入ってみるか。」

その時、彼らの横を小さな棺を抱えた村人たちが通って行きました。
オリバーが声をかけます。

「…失礼、誰かお亡くなりに?」

「仕立屋の十歳の一人息子が魔獣にやられたんだよ。親の手伝いをよくするいい子だったのに…。」

「そうですか…。魔獣の被害は相当なものなんですね…。」

オリバーたちは棺を見送ると、樹海の中に入って行きました。

～～～

森の中に入ってみると、小鳥のさえずりがあちこちから聞こえ、大変のどかな雰囲気です。

「いい雰囲気だな…。」

「…だが、見るのだ。ところどころに魔獣の足跡がある。この辺りも完全に魔獣どもに浸食されているらしいな。

…正直、お前たちと一緒に旅をしていなければ、吾れもエミリーも今頃魔獣どもに食い尽されていただろう…。」

アリスがカトリーヌの上から感慨深げに言います。

「…洞窟から出る魔力はどんどん強くなっている。それに比例して、魔獣の強さも増してきているからな…。」

「オリバーさんたちのおかげで、わたくしたちも経験を積めました。あとは…根本を断ち切るだけです。」

エミリーが力強く言います。

「エミリーも本当に頼もしくなったよ。どんなに強い敵を前にしても一歩も引かないからな。」

「わたくしはお姉さまの背中を追いかけてきただけですよ。」

アリスは頼もしくオリバーに返事をするエミリーを見て少し肩をすくめました。その肩をパトリックが黙ってポンと叩きました。アリスは苦笑いを返しました。その後ろで嫉妬の表情を浮かべているローズとモニカに気づかなかったのは不幸中の幸いということでしょうか。

〜〜〜

イザベルが水の様子を見ました。

「おかしいですね。色は変ですが、毒に侵されてはいません。」

「こういう色の川なんですかね？もしくは光の加減でこう見える、とか。」

ハンスが首をかしげましたが、オリバーはハッとした表情で呟きました。

「…これはプレグーの仕業だ。」

オリバーの言葉に仲間たちはギョッとしました。

「思い出したんだ、あいつのやり方を。あいつは自分が近くにいると示す時、周りの自然に何らかの異変を起こさせていたんだ。この川の変色は…恐らくやつが近くにいるということ、それに近いうちに俺たちを攻撃してくる、ということを示している。」

その時、小さな地震が起こりました。

「…じゃあ、今の揺れもその魔術師の仕業ってこと？」

ビアンカがたずねます。

「…うーん、だが地面の揺れを起こす魔術なんていうのは効いたことがないな。古代の歴史書にもそんな記述はなかった…。もしかしたらまったく新しい魔術かもしれんな。」

「ごちゃごちゃ考えるなよ。どうせあたいらは敵を全部倒さなきゃならないんだろ？」

マチルドが短剣をかざしながら言いました。それを励ましと受け取ったオリバーは笑ってうなずきました。

「ああ、そうだな。」

その時、背後から魔獣たちが襲いかかってきました。

「この樹海の中じゃ心の休まる時はなさそうだな！みんな、戦うぞ！」

～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

結局その日、三度も魔獣と戦うことになったオリバーたちは森の中の小さな空き地で野宿をすることになりました。危険な樹海の中で狩りをするわけにもいかないので、オリバーたちはアリスが狩人小屋から大量に持ってきた干し肉を食べることになっています。

「ひーっ、固いなぁ…。」

レオンが干し肉と格闘しています。それを見てアリスとエミリーは笑っています。

「少しずつ噛みちぎって口の中でふやかすのだ。意外と腹もちもいいものだぞ。」

「これだけでかなりの間過ごせますよ。」

「…狩人っていうのはなかなか大変な生活をしているんだな。もっと自由で優雅なものだと思ってたぞ。」

レオンが肩をすくめながら言いました。

「そう言えばアリス、前に追い詰められたら虫を食べたって言ってたもんね。」

ビアンカが大げさに顔をしかめて言いました。

「イモムシはまだ脂肪分もあっていいが…羽虫はおすすめできぬな。もし食べたいのならば床下のカメの中にイモムシの、」

「うわーっ、もういいよっ！聞きたくない！」

真顔で答えるアリスに、ビアンカは顔を真っ青にしました。

「最悪の場合、私たちも食べなければならなくなるかもしれないけれどね。」

パトリックが笑いながら言います。

「や、やめてよパトリック！仮にそうだとしても、黙ってて！」

「心配いりませんよ。今は木の実や草もたくさんある季節です。少なくとも虫を食べなければならないということはないですよ。」

エミリーが笑いながら言いました。

「むー、それならいいけど…。」

オリバーはやりとりを笑いながら見ていましたが、やがて言いました。

「よし、ビアンカとイザベル、最初の火の番は頼んだぞ。」

「あ、わかったよ。」

「了解しました。」

～～～

「わかりました。」

ハンスとペーターは起き上がると、武器を片手に火を挟んで向かい合って座りました。ハンスがたき火を見つめながら言います。

「…ついにこんなところまで来ちゃったんだなぁ…。初めはどうなるかと思ったけど。」

「先生、俺たちを家に置いて一人で出て行った時はあんな恐ろしい魔術師と戦っていた、ってことッスよね…。」

「あの当時は俺たちも未熟だったから、行っても足手まといになるだけだっただろうな。」

「何しろ、先生がボロボロになって帰ってきても、その理由がさっぱりわからなかったッス。」

「ああ。」

返事をした後で、ハンスはペーターにたずねました。

「…なあ、火の勢いが強いと思わないか？」

「…確かに。風もないのに、変ッスね…。」

二人が首をかしげた瞬間、突然たき火の炎がものすごい勢いで燃え上がりました。まるで火柱です。炎の真ん中にはまるで怒った顔のようなものが見えます。ハンスはびっくりしてオリバーを起こしました。

「先生！先生！起きてください！」

「ん…何てこった！」

オリバーは飛び起きました。他の仲間たちも飛び起きます。

「くそっ、カースアタック！」

オリバーは叫びました。が、燃え盛る火柱はどんどん大きくなるばかりです。火柱がまるで腕のように分かれ、オリバーたちに襲いかかってきます。

「うがあっ、熱い！」

レオンは炎を体に受け、思わず叫びました。オリバーがモニカに指示を出します。

「モニカ！早く氷の魔術を！」

「は、はい！アイスドゥーム！」

モニカが氷の魔術の呪文を唱えると、炎はそのままの形で氷漬けになりました。

「炎がそのまま氷漬けに…。」

「すげえな、モニカ！」

ラルフとマチルドが感心しました。しかし、オリバーは厳しい表情を崩しません。

「いや…、こいつは厳密には炎じゃない。本来自然界には存在しない、魔術師が作り上げた魔獣の一種だ。」

「魔獣の…一種？」

レオンがびっくりしたように聞き返します。

「ああ。固定した以上、恐ろしさはもうない。…パトリック、馬の速さを活かしてこの氷に突進し、槍でこいつの体を貫通させてくれ。」

「よし、わかったよ。」

パトリックはフランソワをつないでいた綱を外すと、勢いをつけて突進しました。

「それっ！」

パトリックのかまえた槍は氷を砕き、炎の魔獣の体を貫きました。その瞬間、魔獣がスッと消え、辺りは真っ暗になりました。

「…仕方ない、もう一度火をおこそう。プレグーめ、相変わらず汚い手を使うな…。闇の魔術師はこうやって隙をついて襲ってくる。今この瞬間も警戒を怠るなよ。」

やがて再び火が起こりましたが、もう誰も眠る気になれません。みんなたき火を囲んで身を寄せ合っています。

「オリバー、こんなことをいうのはよくねぇんだろうが…、本当に闇の魔術師に勝てるのか?…これは励ましてほしくて言ってるんじゃねぇ、真剣な質問だ。だから正直に答えてくれ。」

レオンがオリバーに問いかけます。オリバーは少しの間目を閉じて考えていましたが、やがて口を開きました。

「勝てる。間違いなくな。もちろん一人ひとりが相手では勝てない。俺だって勝てない。だが、みんなで力を合わせさえすれば、絶対に勝てる。」

「みんなで力を合わせれば、か…。確かに、そうなんだろうな。

…なぁ、俺のこと、臆病者だと思ってるか?」

レオンが肩をすくめながら聞きました。しかし、オリバーは笑って言いました。

「だとしたら、俺も臆病者さ。」

「…そうか、ありがとう。」

レオンはオリバーの言葉を聞いて安心したようです。しかしその瞬間、木の上から背筋の凍るような気味の悪い声が聞こえてきました。

「ヒッヒッヒッ…。じゃあその仲間が襲ってきたら、驚くだろうねぇ…。」

オリバーがサッと声のした方を向きました。

「プレグー！」

「それっ、どう戦うか見物だねぇ。ヒッヒッヒッ…。」

プレグーは気味悪く笑うとサッと消えました。プレグーがいた木の真下でローズが震えています。途端にオリバーの顔が真っ青になりました。

「ローズ…！まずい！ローズ！正気に戻れ！」

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「27．洞窟探し」（後書き）

恐怖心にかられていたオリバーの仲間たちに追い打ちをかけるように、プレグーがあらわれました。プレグーはローズに何かの魔術をかけたようですが…？

次話ではプレグーに操られたローズが仲間を襲いだします。それに立ち向かったモニカに危機が訪れますが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスが言っていたカメの中のイモムシは緊急時用の最後の保存食です。アリスとエミリーも出来ればこれに口をつけたくありませんが、木の実などが不足しているときはそれを食べざるを得ません。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２８．自分との戦い」（前書き）

禁じられた洞窟探しをしているオリバーたちを突如闇の魔術師プレグーが襲撃しました。プレグーはローズに何かの魔術をかけたようです。

木の下で震えていたローズがやがてゆっくりと顔をあげました。

「ローズ！あんた、大丈夫！？」

ビアンカが心配そうにローズに歩み寄りました。

「ダメだビアンカ！ローズから離れろ！」

「うひゃあっ！」

オリバーが叫んだ瞬間、ローズは突然呪いの短剣を引き抜くと、ビアンカに斬りかかりました。瞳の色が真っ赤になっています。

「完全に操られている！みんな！用心しろ！」

ローズは仲間たちに次々と斬りかかってきます。持っているのがオリバーの強力な魔術を封じ込めた短剣であるため、迂闊に近寄れません。

「あの短剣で傷をつけられたら…きっと死は免れません！」

イザベルも困惑しながら言いました。

「苦しいだろうが我慢してくれ！フィクセイション！」

オリバーが相手の動きを止める魔術をかけました。しかし、ローズには全く効いていません。どこからかプレグーの声も聞こえてきます。

「ヒッヒッ、その小娘には吾輩と同じ能力を備えさせた。そんな程度の低い魔術は通用せんよ。…そうさな、絶命術なら止められるか…。」

「き、貴様ーっ！」

オリバーは怒り心頭です。

仲間たちは必死にローズの攻撃から逃げようとしますが、その中でもモニカは果敢にローズに立ち向かいました。彼女はサッとローズの目の前に立ちました。

「氷の魔術なら動きを止められるかもしれません！アイスドゥーム！」

ローズの下半身が凍りつきました。レオンが喜びました。

「やった！成功だ！」

しかし、ローズは驚くほど強い力で自分で氷を砕いてしまいました。モニカはショックで顔を真っ青にしました。

「これすら効かないなんて…。あっ！」

モニカが草むらに足を取られて転んでしまいました。ローズはそれを見ると、モニカに襲いかかりました。

～～～

オリバーはローズの短剣を自分の腕で受け止めました。

「ぐうっ！」

「オリバー！お前、呪いの短剣で切られて…、」

ローレンツが真っ青な顔で言いました。しかしオリバーは痛みに耐えながら言いました。

「くっ…、心配するな、俺は呪いの魔術を使う以上、ある程度呪いには耐性がついている…。…ローズ！目をっ、醒ませえぇっ！」

ローズは赤い瞳のまま荒い息でオリバーを見ていました。しかし、だんだん正気を取り戻してきたのか、少しずつ青い瞳に戻ってきました。ローズは自分が何をしているのか理解できていないようです。

「…先生…。私は一体何を…。」

「…正気に、戻ったか、ローズ…ううっ…。」

オリバーは笑顔になると、地面に倒れました。

「ヒッヒッ、身を呈して目を醒まさせたか。甘いねぇ、ただ一言、絶命術を唱えればいいものを。」

木の上でプレグーが気味悪く笑っています。しかし…、

「ぎゃあああっ！」

プレグーの腕と脚に矢が刺さりました。アリスとエミリーが顔を真っ赤にしています。

「ふざけるな！貴様、オリバーは闇の魔術を封印したのだ！絶命術などを唱えさせるわけにはゆかぬ！」

「同士討ちをさせようとするなど、極悪非道！」

「ヒーッ！」

プレグーは腕と脚から血を流しながらサッと消えました。

「…オリバー！大丈夫か！」

「お怪我の方が…。」

アリスとエミリーがオリバーに駆け寄ります。イザベルが笑顔で言いました。

「出血が多すぎたようですね。大丈夫、傷はもう魔術でふさぎました。あとは気を取り戻すだけです。」

その時、ローズが落ちていた短剣をサッと取りました。そして自分の喉に突きたてようとしました。

「エクスクルージョン！」

イザベルが叫ぶと、ローズの短剣は遠くに飛ばされました。イザベルはローズに鋭い視線を向けました。

「…バカなことを考えないでください！あなたがいなくなって一番悲しむのはオリバーさんです。今回あなたには自分を責める要素は一切ありません。強いて言うなら、今の行動です。」

イザベルが厳しい口調で言いました。仲間たちは強い口調で話すイザベルを初めて見たので、とても驚きました。でもイザベルはすぐにいつもの笑顔に戻りました。

「…今のことは黙っていてあげます。皆さんも、お願いしますね。」

仲間たちは深く頷くのでした。

～～～

「お前がぶっ倒れている間、みんな武器を持って周りを警戒していたんだぜ？」

レオンが斧槍をかざしながら言いました。

「そうか…すまないな。」

「先生…ごめんなさい…。」

ローズがうつむきながら言いました。しかし、オリバーは笑顔で言いました。

「…ローズ、お前は立派だ。」

オリバーの意外な言葉に、ローズは驚いてオリバーを見ました。

「俺に斬りかかってきた後、お前はじっと俺を見つめていた。初めはプレグーに操られているらしく、瞳は真っ赤だった。だが、お前は自分でその力に勝ったんだ。意志の強い人間じゃないと、自分から覚醒状態から目を醒ますなんて無理なことだ。

…もちろん、操られている以上、そんなことを自分からそうすることはできない。お前の目を覚まさせたのは、お前の心の中にある潜在意識だ。お前の国を救うという気持ちは相当強いようだな。その潜在意識が、闇の魔術師の支配力に勝ったんだ。」

ローズは驚いた表情のままオリバーを見ていました。しかし、顔を真っ赤にすると木の陰に走っていってしまいました。

「潜在意識とやらがオリバーが好きっていう気持ちだってあいつが気づいたら、もうローズはまともにあいつを見れねぇぜ?」

「…気づいてないみたいだけどね。」

ビアンカとマチルドがくすくす笑いながら言いました。

「でもオリバー、俺も確信したよ。力を合わせれば、何だってできるってな。」

レオンがニヤリと笑って言いました。

「そうか、それはよかったよ…。…よし、朝食を摂ったら出発だ。洞窟はまだまだ見つからないからな。」

～～～

「まあ、少しずつでもローゼンハインたちを追い詰めているようだ。ギル様にはよろしく報告しておこう。

…それと、お前はリバール王の秘宝の場所を知っているか？」

「さあ、吾輩にもわからぬ。」

「そうか。…やつだ。」

「何か言ったか？」

「いや、何でもない。」

（まったく、使い物にならんやつだ…）

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２８．自分との戦い」（後書き）

ローズは心の中にある強い潜在意識でプレグーの支配力に勝つことができました。どうやら操る相手が悪かったようですね。

次話では洞窟探しを続けるオリバーたちに徐々に疲れの色が見え始めます。アリスたちの狩人小屋に帰ろうとした時、突如彼らを人食い植物が襲い始めます。どうぞお楽しみに！

ちなみにアリスとエミリーがプレグーに射たのは普通の矢です。とっさのことで毒の矢や炎の矢を射ることが出来なかったのです。もしかしたらプレグーを即死させることも出来たかもしれませんが、少なくとも高慢なプレグーのプライドを傷つけるには十分だったようです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２９．禁じられた洞窟」（前書き）

オリバーたちはノーザリン地方の樹海の中でひたすら禁じられた洞窟を探していました。しかし、広い樹海の中でそれを探し出すのはやはり大変困難です。しかし、地道な作業を続けているといつかは終わりが見えてくるものです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２９．禁じられた洞窟」

オリバーたちが樹海の中を歩き回って、もうかなりの日数が経ちました。何度も狩人小屋と樹海の中を行き来し、魔獣との戦いも、数え切れないほどくぐりぬけてきました。やはり疲れの色は隠せません。オリバーは仲間たちに言いました。

「そろそろみんな疲れてきたな…。よし、今日一日この辺りを探索したら、またアリスたちの狩人小屋に戻ろう。疲れをいやしたらまたこの辺りから探すんだ。」

「賛成です。危険なところには万全の状態で行くのがいいですからね。」

「うむ、ちょうど干し肉も底をついてきた。狩人小屋に帰ればいくらでも作れるからな。」

イザベルとアリスも同調します。

「よし、じゃあ探索はとりあえずここで一旦、」

「うわあああっ！」

「こ、これは！」

突然先頭を歩いていたレオンとマチルドの叫び声が聞こえました。

「どうした！…うおっ！」

そこにいたのは魔獣ではありません。動く植物です。大きな口を開け、オリバーたちを食べようと襲ってきます。

「ファイアーストーム！」

「ファ、ファイアーストーム！」

イザベルとモニカが叫ぶと、植物が一気に燃え上がりました。オリバーは目を閉じて考えています。

「…今まで魔獣は出てきても、魔力に影響された植物なんていうものは出てこなかった…。これは、もしかしたら…、」

「オリバーさん！ちょっと来てください！」

焼け焦げた植物を踏み越えて先に行っていたエミリーが叫びました。

「どうした、エミリー。」

「これを！」

「ん？…ああっ！」

そこには小川が流れていました。そして少し上流の方を見てみると…、

「これが…五本の指か…。」

そこではさらに小さな五本の小川が合流していました。

「うーん、上から見るとまるで手みたいだよ！」

木の上に登ったビアンカが川を見下ろして言いました。

「つまり、五本の指の『六本目』と言うのは…、」

「この小川の中に、更に二つに分かれているものがあるんだろう。それがきっと、五本の指の六本目だ。俺の予想では、きっと両端のどちらかだ。」

オリバーは辺りを観察しながら言いました。

「よし、じゃあまずは右の方に行ってみるとしようか。」

パトリックが提案しました。

「ああ、そうだな。」

～～～

～～～

「これが、三人の主たちだね。」

「あはっ、こいつは確かに主って感じだな。」

ビアンカとマチルドがおかしそうに言いました。川のそばに、三つの大きな巨石が並んでいました。

「…三人の主たちの真中…。つまり、あの真ん中の巨石のところに禁じられた洞窟が…。」

「…先生、行きますか。」

緊張したようにハンスが言いました。

「ここまでたどり着いたんだ。行かなければな。」

その時、これまでになかったような大きな地震が起こりました。山の方から何かが爆発するような大きな音も聞こえてきます。

「…先生…。」

「…構うな、行こう。」

～～～

に叫びます。

「ｋｓｄｉｅｙｏｓｉｍａｏｃｙｖ！ｌｐｄｉｖｍａｍｒａ！」

すると、洞窟の中からの唸り声と風がピタリと止みました。

「…師匠、何をしゃべっていたの？」

ビアンカがたずねました。

「古代語だ。ここの霊たちは俺たちのことを眠りを妨げる侵略者だと勘違いしたらしい。だが、俺たちは再び君らを静かな眠りにつかせるために洞窟の入り口を封印しに来た、と言ったら安心したようだよ。」

「洞窟の中から聞こえてきた唸り声のような声…、何だか聞いていてとても淋しい気持ちになったんです。ものすごく中の霊たちは淋しい思いをしてきたんでしょうね…。」

「愛する者たちと引き離された無念さ、今でも消えることはないのだろうな…。」

イザベルとアリスが感慨深げに言いました。すると、オリバーたちの周りを、やわらかな風が吹き抜けました。まるで彼らの気遣いに感謝しているようです。

「…早く封印してやろう。そうすれば霊たちも安らかに眠ることができる…。」

オリバーは穴に向き直りました。

「ヒッヒッ、そんなことをしてもらっては困るねぇ…。」

背後から聞こえたねちっこい声に、オリバーたちはサッと振り返りました。

「プレグー！」

闇の魔術師プレグーがそこに立っていました。彼はオリバーたちを舐めまわすように見渡して言いました。

「その洞窟を封印してもらっちゃ困るねぇ…。何しろここには底知れない魔力があふれているんだ。吾輩たち魔術師にとって、こんな興味深い場所はないと思わないかい、ローゼンハイン。」

「思わん。俺はこの霊たちを安らかに眠らせてやりたいだけだ。」

オリバーは確固とした表情で言い放ちました。

「まったく、本当に甘くなっちまったねぇ。まあ、安心しなよ。お前たちもすぐにここの霊たちと仲間になれる。そして眠ることなく永遠にここで、」

プレグーが話している途中で、突然大きな音が聞こえました。何と、背後の山が大爆発したのです。真っ黒い煙が立ち上っています。

「か、火山の噴火だ！」

レオンが叫びました。

「ここ何日も続いた地面の揺れは、この前触れだったのか！」

オリバーが唖然とした表情で言いました。

「大変だ！見ろよ！こっちに真っ赤な溶岩が流れてくるぜ！」

マチルドの声に、オリバーはハッと我に帰りました。

「みんな！急いであの巨石に登れ！」

仲間たちは一斉に巨石に向かって走りました。

「エミリー！パトリック！カトリーヌたちを逃がすぞ！カトリーヌたちなら自力で吾れらの狩人小屋まで帰ることができる！」

アリスがエミリーとパトリックに言いました。

「はいっ、お姉さま！」

「わかった！フランソワ、カトリーヌとアンヌについて行くんだ！」

「そうはさせないよ。フィクセイ、ぎゃああっ！」

プレグーは魔術を唱えようとしました。しかし、ずっと息をひそめて草むらに隠れていたローズが音も立てずに飛びかかったのです。プレグーは呪いの短剣でお腹を刺され、のたうちまわっています。さらに、洞窟から強い風が吹いてきてプレグーを取り囲みました。

「吾輩の動きを封じ込めるつもりか！おのれっ！」

「私を操って先生を襲わせた…そのことを後悔して…。」

ローズは目に怒りを宿し、何度もプレグーに短剣を突きたてます。

「ローズ！早く来い！もう溶岩がそこまで来ている！」

オリバーの声にローズが顔をあげると、溶岩がもう目の前まで迫ってきていました。

「ｈａｋｅｎｘｃｈｆｈｘｓｋａｉｎ！」

オリバーが何かを叫びました。すると、風がローズを持ち上げました。そして、彼女の身体を巨石の下まで運びました。

「ぎゃあああああっ！」

プレグーの体が真っ赤な溶岩の中に飲みこまれました。オリバーはローズに叫び続けます。

「早く！上がってこい！」

ローズは巨石に上りました。しかし、もう少しで頂上、というところで足を滑らせました。

「…っ！…あ…。」

「…くっ、足元はちゃんと見ておけ！」

滑り落ちそうなローズの腕をオリバーががっちりつかんでいます。それをビアンカとマチルドが足を踏ん張って支えています。ローズも力を振り絞り、巨石の上に這い上がりました。

「リフリッジエイション！」

モニカが叫ぶと、溶岩で熱せられた巨石が冷やされました。

「闇の魔術師、プレグーは死んだか…。」

パトリックが溶岩を見ながら言いました。

「ああ、やつがいかにやっかいな魔術師でも、さすがにこの溶岩に飲みこまれれば生き残れないだろう…。溶岩は流れが止まればすぐに冷えて固まる。…まあ、もうしばらくは動けないだろうがな。」

「大丈夫、ほら、一応予備の干し肉もあります。しばらくの間は過ごせますよ。」

エミリーが笑って言いました。

～～～

「古代の方法で封印をした。恐らく、これで誰もこの洞窟のことを見つけられなくなるだろう。…この場面を目にした、俺たち以外はな。」

「逆にこの場所を知った吾れらには、この悲劇を語り継いでゆく義務がある、ということだな。」

アリスも言います。

「ああ、そうだな。…これで魔獣がこれ以上増えることはない。魔力も弱まり、魔獣そのものが存在できなくなる可能性もあるな。」

「では、この樹海も！」

エミリーが顔をほころばせました。

「ああ、もうじき元通りになるさ。」

「そうか！そうだ！やったなエミリー！」

「ええ、わたくしたちの森が帰ってまいります、お姉さま！」

アリスとエミリーはまるで子どものように抱き合い、涙を流しながら喜びました。そしてオリバーたちの方に向き直りました。

「それもこれも、すべてみなのおかげだ。感謝する。」

「これ以上の喜びはありません。しっかりと恩返しさせてもらいますよ。」

「じゃあ…、」

「うむ、もちろんだ。吾れらは最後まで力を貸す！」

「まだまだ未熟ですが、精一杯力をお貸しします！」

「アリス！エミリー！ありがとう！」

三人はガッチリと握手を交わしました。

「よし、まずはアリスたちの狩人小屋に帰ろう。そして休んだら、

オーベルクに帰るぞ！」

「オオーッ！」

オリバーの言葉に、仲間たちは大喜びしました。

～～～

（フン、リバール王の秘宝を見つけたところで、あなたにはそれを有効に使うほどの能力はない。秘宝を最後に手にするのは…このレジオンだ）

～～～

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「２９．禁じられた洞窟」（後書き）

オリバーたちは禁じられた洞窟を封印すると同時に、闇の魔術師の一人であるプレグーを葬ることができました。これによって自然界の生き物が洞窟から放出される魔力で変性させられた魔獣はその生命力を弱められることになります。しかし、もう一人の闇の魔術師レジオンはまだ生きていますし、オットー様からの以来の一つであるリバール王の秘宝についての手掛かりはまだ見つかっていません。

次話ではオリバーたちは拠点のオーベルクに帰りますが、到着してすぐに燃える馬のような魔獣がオーベルクの街で暴れ始めます。オリバーは魔術師が作り上げた魔獣と判断したようです。

ちなみにオリバーたちが登った巨石は本当に大きく、その頂上は三十人くらいの人間が楽に過ごせるくらいの広さがあります。ただ、余りにも樹海の奥地なので人に発見されることはまずありませんでした。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３０．つくられた獣」（前書き）

禁じられた洞窟を封印し、闇の魔術師プレグーを葬ったオリバーたちは拠点のオーベルクに帰ってきました。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３０．つくられた獣」

オリバーたちは長い旅を終え、ようやくオーベルクに帰ってきました。街は相変わらず活気づいています。

「おお、オリバー！無事に帰ってきたか！」

宿の主人、ヴォルフも彼らの帰りを心から喜びました。

「禁じられた洞窟の封印に成功した。探すのに本当に手間取ったよ…。」

「そいつはすごいな！で、いったいどんな化け物が中にいたんだ？」

「…忘れ去られた、哀しい霊たちさ。」

～～～

「張っていた気が一気に緩んだのだろう。吾れらも少し休むとしようか。」

「はい、お姉さま。」

アリスとエミリーも部屋に入って行きました。

「だが今回の旅ではリバール王の秘宝に関する手掛かりは何にも見つからなかったな。…俺にはよくわからねぇんだ、リバール王の秘宝っていうのが。」

レオンが言いました。

「あんたはもともとこの国の人じゃないもんね。まあ、あたしも知らないけどさ。ヴォルフ、何か知ってる?」

ビアンカがヴォルフに問いかけます。

「ああ…、実は、王家の人間にもその秘宝が何なのか知っているお方はいないらしい。どこに眠っているのかもだ。ただ、その秘宝は初代のリバール王がとても大事にしていたものらしい。」

「じゃあ、王冠か何かかもな。」

レオンが言います。

「もちろん大きな宝石に決まってるよ。」

ビアンカが言います。

「ものすごい武器かもしれないぜ?」

マチルドも言いました。

「よくわからんが、その秘宝を手に入れたものは、この国を意のままに動かすことが出来ると言われている。」

「それなら、なおのことギル大臣たちに先を越されるわけにはいかないな。早く見つけ出して、オットー様に献上しないと。」

オリバーが真剣な表情で言いました。

「オットー様はもともとロンドランドを治めていた王家の直系の末裔だ。だから王位継承権もあるんだが、あくまでオットー様はヨーゼフ王の二一歳の第一皇女、ヘルガ様に王位を継がせたいらしい。それが正統だと主張なさっておられる。」

ヴォルフが言いました。

「謙虚なお方だな、オットー様は。」

オリバーが感心したように言いました。

「ああ、素晴らしいお方だよ…。」

ヴォルフはまるで自分のことのように誇らしげに言いました。

～～～

「ははっ、まあな。でもアリスには劣るけどな。」

「ええーっ？この前エミリーがあたしが吹いている時にアリスだと間違えたらしいよ？」

「エミリーが寝ぼけてただけじゃないのか？」

「むー、ひどいなあ、師匠は。」

ビアンカは脹れっ面をしました。と、その時、宿の外が急に騒がしくなりました。悲鳴も聞こえてきます。

「…何かあったのか？」

すると、二階からバタバタと音を立ててイザベルが降りてきました。

「オリバーさん、魔獣が街の中で暴れているみたいです。」

「何だって！？」

オリバーは突然のことにびっくりしました。

「一刻も早く街の人を助けに行きましょう。」

「わかった。準備ができたやつから、俺についてきてくれ！」

オリバーはそういうと、イザベルと共に外へ飛び出して行きました。ビアンカも、少し遅れて階段を下りてきたローズたちと外へ出ました。

～～～

マチルドの声に、オリバーは指示を出しました。

「モニカ！お前は燃えている炎を消してきてくれ！ローレンツとラルフもだ！」

「は、はい！」

モニカはローレンツたちと一緒に走って行きました。

「アリスとエミリーは宿の二階から矢で援護してくれ！」

「うむ、わかった。行くぞ、エミリー！」

「はいっ、お姉さま！」

アリスとエミリーは宿に駆け込んで行きました。

「全身が燃えている以上、うかつには近寄れない。間合いが大きい槍使いが大きな戦力になる。ハンスとレオン、頼んだぞ！」

「任せてください！」

ハンスは叫ぶと、一頭の燃える魔獣に突撃していきました。しかし魔獣はその頭上を飛び越え、攻撃をかわしました。

「く、くそっ！」

「うおおおおおっ！」

レオンは大声をあげて魔獣に突撃しました。魔獣はそれに気づくと、また頭上を飛び越えようとしました。

「へっ、かかったぜ！」

レオンは素早く槍を引くと、今度は真上に突き上げました。槍は魔獣のお腹に突き刺さりました。倒れた魔獣を、ビアンカが突き刺しました。

「熱いなあ！…レオンもようやく魔獣とまともに戦えるようになったね。」

「あの時の特訓のおかげだ。」

～～～

ペーターが指さした方向では、オリバーとローズがペアとなって魔獣と戦っています。

「カースアタック！」

オリバーが四頭目の魔獣を倒しました。

「ローズ！行ったぞ！」

ローズが魔獣からサッと遠のきました。しかし、魔獣に気を取られ、そこにいたモニカに気がつきませんでした。

「きゃあっ！」

「っ…！ごめん…。見えなかった…。」

「ローズさん！魔獣が！」

「あっ…。」

魔獣がローズとモニカめがけて突進してきます。

「そこから逃げろ！カースアタック！」

しかし突然のことにオリバーも充分に魔力をためることができず、魔獣に決定的な打撃を与えられませんでした。その苦痛に怒り狂った魔獣は勢いのままローズたちに突進してきます。

「ローズ！モニカ！逃げろ！」

しかしモニカは腰を抜かしてしまって立つことができません。ローズが必死に引っ張っています。

「早く！魔術を！」

ビアンカがオリバーをせかしましたが、オリバーは魔術を唱えられません。

「ダメだ！あの距離じゃあ二人も巻き込んじまう！」

魔獣がローズとモニカに飛びかかりました。ローズはモニカをかばうように立ち、ギュッと目をつぶりました。

～～～

」

「…優しいのだな、エミリーは。さすがにいつも動物たちの世話をしていただけある。」

～～～

たのか！？」

ヴォルフがオリバーに詰め寄ります。オリバーは悲しそうな表情をしました。

「…ある意味、その通りと言えばその通りだ。…望んでいたことではないがな。」

「じゃあお前たちは、」

すると、たまりかねたようにリリーが口を開きました。

「あんた、ちょっと待ちなよ。あんたがまくしたてていたんじゃ、オリバーたちだって話せないよ。

…話してごらんよ。難しいことはわからないけど、今までずっとみんなのために頑張ってたあんたたちのことだし、私たちを苦しめるようなことをわざわざしたとも思えないしね。」

リリーがオリバーに言いました。

「ああ。俺も言い方が悪かったな。…洞窟はしっかり封印してきた。

それと同時に、闇の魔術師の一人であるプレグーも葬った。魔獣の数は、確実に減る。…だが、俺たちが樹海を歩いている時、俺たちはプレグーの襲撃を受けたんだが…。」

オリバーはプレグーがたき火から魔獣をつくりだして襲わせたこと、更にローズを操って仲間を襲わせたことを話しました。

「で、その時の傷がこれさ。」

「ずいぶんざっくりとやられたね。しかも傷口が黒く変色しているねぇ…。」

「それは、ローズの短剣が呪いの魔術を封じ込めたものだからだ。俺にはある程度呪いの魔術に対する耐性が備わっているから普通に刺された痛みしかなかったが、この黒い傷は一生消えないだろうな。」

「なるほどねぇ…。ローズがオリバーを襲うなんて、まず考えられないもんね。」

「闇の魔術師はそうやって油断や混乱を誘い出し、同士討ちをさせることも多々ある。過去にも俺はそうやって何人もの仲間を失った。…それに、まだ闇の魔術師だった頃は何度もその手を使ったしな。」

「で、今そこで暴れてた魔獣も闇の魔術師がつくりだしたもの、ってことなのかい？」

「経験を積んだ魔術師なら簡単にそこら辺にいる動物を魔獣にすることはできる。…俺も闇の魔術を使うことが許されるならできるが、そんなことをするわけにはいかないからな。だが、完全に闇の魔術に傾倒した連中はある程度の素材があれば、それを魔獣に変性させることができる。木の根っこや布切れからでもな。今日襲ってきたのは、恐らく後者だ。」

「つまり、これからの魔獣は自然のものは減るけど、そのかわりにいるのは魔術師がつくった危険なものだ、っていうことかい？」

「ああ、そうだ。…俺も今回の騒動に闇の魔術師が絡んでいるとは思わなかったんだ。だからこの状況も予測がつかなかった…。」

オリバーは肩を落としました。リリーはヴォルフに聞きました。

「…どうだい、これでオリバーたちを信用したかい？」

ヴォルフは申し訳なさそうに言いました。

「すまないな、お前らも頑張ったのに、それをすべて否定することを言っちまって…。」

「いや、確かに魔獣を強力なものばかりにしたのも俺たちだ。必要とあらば俺たちは出て行くよ。そういう場合はアリスたちが二人の狩人小屋を提供してくれる、って言ってたしな。」

「どうかそんなことを言わないでくれよ。お前たちにはここにいてほしいんだ。この街を動死体から救ったり、ナンジューマを解放したことでこの街の連中はお前たちを心の拠り所にしてるんだ。街のやつらの希望を俺の一言で追いだした、なんて、後味が悪すぎるじゃないか…。」

「本当に、勝手なことばっかり言うね、あんたは。…だけどさ、やっぱりここに残ってくれないかな。

私たちもさ、あんたたちが来てから本当に楽しかったんだ。何というかさ、ほら、私たちも仲間の一員みたいにあんたたちの出発前の会議に参加していただろう?だからさ、あんたたちが無事に帰ってきた時は本当に嬉しいんだ。」

「ありがとう、リリー。嬉しいよ。わかった、ここに残るよ。みんなもいいだろ?」

仲間たちも笑顔で頷きました。

「よし、今日は祝勝会だね！宴会の準備をするよ。さあヴォルフ、あんたも行くよ！」

リリーは満足げな顔でヴォルフを引っ張って行きました。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３０．つくられた獣」（後書き）

オリバーたちは凶暴で強力な合成魔獣を何とか倒すことができました。リリーのおかげでヴォルフからの疑いも晴れたようです。

次話では狩りから戻ったアリスとエミリーが、魔獣の骨が大量に転がっている場所を見つけたとオリバーに報告します。オリバーは何人かの仲間を連れてその調査に向かいますが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに今回合成魔獣をけしかけてきたのは闇の魔術師であることにはかわりありませんが、レジオンではありません。果たして誰でしょうか…？

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３１．死の使い」（前書き）

闇の魔術師によってつくられたと思われる魔獣がオーベルクの街で暴れたりと、オリバーたちを取り巻く環境は相変わらず危険なものとなっています。そんな中でも仲間たちは自分の力を最大限に活かせるように頑張っているようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３１．死の使い」

ある日、イザベルがこれまで見たこともないほどたくさんの薬草を抱えて宿に帰ってきました。オリバーはびっくりしました。

「ずいぶん採ってきたんだな。」

「ええ、森の中に薬草がとってもたくさん生えている場所を見つけたんです。これでまたいろんな種類のお薬が作れます。」

「へえーっ、この花なんか、綺麗な色してるなぁ。」

オリバーが一輪の花を手に取ろうとしました。

「あっ！触ってはいけません！」

イザベルが大慌てで花を取り上げました。

「うおっ！…どうしてだ？」

「このお花はアリスさんたちに頼まれて毒矢用に採ってきたもので

す。触っただけで死んでしまいますよ。」

「…どうやって採集したんだ？それに、今つかんでいるし…。」

オリバーは心配そうにイザベルを見ましたが、イザベルは笑って言いました。

「オリバーさんが呪いに対して耐性があるのと一緒で、私にも毒に対して耐性があります。…恐らくモニカさんも、氷に対して耐性があるのではないでしょうか。」

「なるほど…。得意な魔術には自然と耐性がつくという文献を読んだことがある気がする…。」

「ええ。では私はこの薬草を調合してきますね。」

「ああ、わかった。」

（俺が呪いの魔術に耐性がついたのには、原因があるんだけどな…）

オリバーが心の中で苦笑いすると、今度はビアンカが宿に入ってきました。

「よっ、師匠！元気？」

「あれ？ビアンカか。珍しいな、呼び出してもいないのに来るなんて。」

「今日はリリーに用事があったんだよ。小説を貸してって言われたから。」

ビアンカは本をパタパタさせました。

「ふーん。…なあ、ビアンカ。前から聞こうと思っていたんだが、お前はオーベルクにいるときはどこで寝泊まりしているんだ？」

「ああ、特に誰にも言ってないもんね。ほら、いつもあたしが座ってる橋があるでしょ？そのそばの店だよ。」

ビアンカは珍しく面倒くさそうに言いました。

「そのそばの店、って、まさか、豪商であるヴァルトシュタイン家のか？」

「そうそう。あたし、そこの三番目の娘なんだよね。」

「何だってーっ!?お前が豪商の娘だと!?」

オリバーは驚きのあまり声を大きくしました。ビアンカはあまりこの話題には触れて欲しくないらしく、早口で続けました。

「女ばっかり続いて、しかもあたしのすぐ後に弟が生まれたからあたしくらいの立ち位置となるともうどうでもいいらしくてさ、だからあっちこっち旅してたんだ。まあ、この方が気楽だからあたしは気に入ってるけどね。あ、リリー!小説持ってきたよ!」

「あっ、ありがとう!」

ビアンカはリリーと立ち話を始めました。そこへ、今度はアリスとエミリーが帰ってきました。また大きなシカを仕留めてきたようです。アリスが得意げにヴォルフに言いました。

「亭主、シカを仕留めてきたぞ。料理してくれぬか。」

「はいよ。いつもすまないな。」

「あ、オリバーさん。今帰りましたよ。」

エミリーがオリバーに話しかけました。

「お疲れ。狩りの後は表情が生き生きとしているな。」

「やはり森の中を駆け回るのは気分がいいからな。」

アリスが満足げに言いました。

「あ、そうそう。オリバーさん、実は森の中で魔獣の骨が大量に転がっている場所を見つけたのですが…。」

「魔獣の?…恐らくは洞窟を封印したことによって魔力を保てずに力尽きたんだろう。一応明日、手が空いているやつを連れて見に行ってみるか。道案内を頼んでもいいか?」

「わかりました。」

二人は快諾しました。

「そうそう、イザベルが毒矢の材料を採集してきたらしい。今裏の物置で調合しているはずだから、行ってみるといい。」

「そうか。では行ってみるとするか。」

二人は宿を出て行きました。

～～～

イザベルも薬の調合に忙しい。ローレンツとラルフも作業場にこもりっきりだからな。ビアンカはいつもの場所にいなかったから探すのも面倒だし。」

オリバーが説明します。

「そう言えばモニカはいないんですか？」

「パトリックと一緒に行かせてやったよ。たまには気を遣ってやらないとな。」

オリバーが笑いながら言いました。

（他人のことには気が回るのに…）

（どうして自分のことには気づかないかな…）

～～～

「あれ？ここは一番初めに魔獣を倒す依頼を受けた森じゃないか？ほら、ローズが仲間になった…。」

「ああ、確かに！まだこんなところに魔獣がいたんスね…。」

ハンスとペーターが驚いたように言いました。

「もうすぐ着くぞ。…うむ、ここだ。」

アリスがカトリーヌの足を止めました。そこには大量の魔獣の骨が山のように転がっていました。

「…魔力がなくなれば魔獣の生命力は低下する。しかし、封印したのはつい何日か前だ。この短期間でこんなに風化するなんて不自然だ…。」

オリバーが首をかしげたその時、骨の山が突然ガラガラと音をたてました。そしてオリバーたちの背よりも三倍は大きい獣のような形になりました。

「な、何ですか！？」

「下がっていろ！」

オリバーは指先を骨獣に向け、エミリーも素早く矢をつがえました。すると、骨獣がオリバーに話しかけました。

「待て。あなたを襲うつもりはない。…あなたは魔術師、オリバー・ローゼンハインであるか？」

「…そうだ。俺は禁じられた洞窟を封印し、魔力を弱めた。お前たちが死んだのは、そのためか？」

オリバーはゆっくり腕を降ろしながら言いました。

「確かにあなたの行動によってわれらは衰弱した。しかし、われらが死んだのは違う者にとどめを刺されたからだ。」

「違う者？誰だ？」

「『死の使い』だ。」

「なっ、何だって！？」

オリバーはびっくりしたようです。骨獣は続けます。

「われらは『死の使い』の遊びによってこのような姿にされた。その深い恨みからこのような形となってあなたに話しかけることができたのだ。

…われらからの願いだ。『死の使い』を葬り去ってほしいのだ。残忍な方法で、われらをこのような姿にした『死の使い』を…。」

「…俺たちもいずれ戦うことになる。安心してくれ。約束は果たそう。」

「ありがたい…。」

骨獣はオリバーの言葉に感謝すると、ガラガラと崩れ、それっきり動かなくなりました。

「先生…。『死の使い』っていうのは何なんです？」

ハンスがオリバーにたずねます。

「レジオンの別名だ。」

「レジオン、って、あたいとローズが見たやつか？」

マチルドもたずねます。

「そうだ。…この話は宿に帰ってしよう。他のみんなにも知らせなければならないことだしな。」

～～～

人を含め、五十人余りが処刑されたよ。人々は恐怖におののいている。…魔術師が裏で動いていた、という噂もあったな。」

「マウント…家…。」

ローズは呆然とした表情でパトリックを見ました。

「それは…本当？」

「当主の幼い子どもも一緒に、根絶やしにされたよ。むごいもんだよ、まったく…。…おや？ローズ、どうしたんだい？」

ローズは言葉も出せずにその場に座り込んでしまいました。

「…マウント家は、ローズのミニエー家の最後の生き残りが生い立ちを隠してロンドランドに住んでいたものだ…。」

ヴォルフが気の毒そうな顔でローズを見ました。

「もう…本当に家族は私だけ…。」

「…ローズ、つらいだろう。部屋で気を落ち着かせてきてもいいぞ。」

オリバーはローズの肩に手を置いて言いました。しかしローズはしっかりとオリバーを見て言いました。

「一人だけわがままは言ってられない…。」

（強くなった…。ローズは本当に強くなった…）

オリバーはパトリックの方に向き直りました。

「パトリック、その魔術師の噂を聞かせてくれ。どうも引っかかるんだ。」

「何でも、魔術師が市民を十人さらい、そのうち五人を殺し、残った五人を恐怖に陥れたところで尋問したらしいんだ。」

仲間たちは思わず身震いしましたが、オリバーは首をかしげています。

「…レジオンにしてはぬるいやり方だな…。別人かもしれん。」

「げえっ、そんな残忍なことをして、まだぬるい手段なのか？オリバー、そろそろ話してくれよ。レジオンってやつのこと。」

マチルドがオリバーに頼みました。

「ああ、わかった。…俺たちがこの前戦ったプレグーと、今国内で動き回っているレジオンは昔から二人で行動していた。プレグーはこの前見たように相手を操ったり混乱を誘ったりして、その様子を見て楽しむことから『悪魔の使い』、そしてレジオンは人の命をまるでおもちゃのようにもてあそぶことから『死の使い』と呼ばれていた。

前にプレグーが熱した鎖で女子供をなぶり殺しにした話はしたと思う。だがレジオンはそれ以上に残酷なことをした。

やつは昔、討伐に来た魔術師や剣士たち五十人を生け捕りにした。そして術でその討伐者たちの妻や姉妹、母親など女の肉親ばかりを集め、目の前で痛めつけた。」

「だったらプレグーの方が残酷な気がするが…。」

レオンが呟きました。

「…まだ終わりじゃない。レジオンは地面に大きな穴を掘ると、中に毒虫やヘビ、サソリなんかをたくさん入れた。そして女たち同士、素手で戦わせたんだ。そして負けた女たちを穴の中に放り込んだ。勝った者は勝ったもの同士戦わせ、また負けた者を放り込む。最後に残った者は洗脳した兵士と戦わせ、最終的に全員を穴の中でなぶり殺しにしたんだ。その様子を最後まで見せつけたところで、討伐者たちも全員闇の魔術で殺された。」

「同じ魔術師として…許せないことです。」

モニカが顔を真っ赤にしています。

「確か、あの東方世界のことを書いた本にその処刑方法が書いてありました。レジオンという魔術師は東方世界のことに傾倒しているのかも…。」

ラルフが言いました。

「なるほど、それは知らなかったな…。とにかくレジオンという魔術師は危険だ。しかし、俺たちは必ずレジオンも倒さなければならない。レジオンがギル大臣の手駒の一つである以上、戦いは避けら

れないだろうからな。みんなも覚悟してくれ。」

～～～

「何だか深刻な感じだね。ほら、話してみなよ。」

「うん…。私の一族をわざわざ魔術師まで使って探させる、っていうことは、あいつは本当に私たちが邪魔になってきているということ…。そのうちに私も狙われる…。」

イザベルとビアンカは、正直に頷きました。

「でも…私は負けない…。最後に残った私が頑張らないと、みんなが悲しむ…。先生のもとで、私は私自身の手で…。」

ローズはそこまで言うと、言葉を詰まらせました。

「…泣きなよ、ローズ。あんた、今まで無理してたからね。師匠に弱いところ見せたくないからってこらえていたんだろうけど。」

「無理は禁物です。じゃないと精神が参ってしまいますよ。ここで吐き出すのも大切です。」

イザベルとビアンカが言いました。ローズはうつ伏せになって震えていました。声は押し殺していますが、かすかに嗚咽も聞こえます。

「最後まで強情だね。…まあ、あんたらしいけどさ。」

「見守ってあげましょう。」

～～～

ローズが顔をしかめると、ビアンカはおかしそうに笑いました。

「あははっ、さっき台所の調味料を適当に混ぜたからねー。」

「…許さない。」

ローズはビアンカに飛びかかりました。ビアンカも応戦します。それを見てイザベルは安心したような表情を見せました。

（元気になってくれましたね…。よかった…）

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３１．死の使い」（後書き）

一族の中でたった一人の生き残りとなってしまったローズですが、自分の中でしっかりと決意を固めているようです。闇の魔術師レジオンの残虐行為、そして別の魔術師の影も…。脅威はまだまだ取り除かれていないようです。

次話ではビアンカがオリバーのもとにある一冊の古い本を持ってきます。オリバーはそれを読み始めたとたん部屋にこもって出てこなくなってしまったようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにレジオンの「遊び」の内容は、リバール王の秘宝が見つからないストレスを発散するために魔獣を集め、残虐な方法で殺す、という内容です。具体的には…残虐すぎてここでは書けません。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３２．古代の文献」（前書き）

魔獣の数が減ってきたとはいえ、それでも時々あちこちの街や村に出没する魔獣は一般の人々にとって脅威であることには変わりません。今日もオリバーたちはオーベルク近くの村で魔獣を退治し、報酬をもらって帰ってきたようです。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「32．古代の文献」

オリバーは近くの村での魔獣討伐の依頼から帰ってきた後、ハンスにお説教をしていました。

「お前はもっと視野を広げなければならない。お前は気合だけで敵に向かって行く傾向があるな。気合だけで勝てるなら、苦労はない。レオンをみてみろ。初めは魔獣と戦うことに慣れていなかったが、今では自分なりに対策をたてて適応している。それなのにお前はいつも攻め一辺倒だ。一度他のやつらの戦い方をしっかりと見ておけ。」

「はい…。」

「槍での戦い方はレオンを、敵との駆け引きはビアンカを参考にしろ。」

その時、部屋の扉がノックされました。

「どうぞ。」

「よっ、師匠！元気？」

入って来たのはビアンカです。

「ビアンカか。ちょうどよかった。ハンスに敵との駆け引きを教えてやってくれないか？ハンスときたら攻め一辺倒だから…。」

「あたしが？」

「お前は退き方もうまいからな。お前の思うようになっていいから、頼まれてくれないか？」

「いいよ。どうせやることがなくて暇だしね。…そうそう、師匠に見せたいものがあって来たんだ。」

「俺に？何だ？」

ビアンカは一冊の本を取り出しました。

「昨日家の書庫を整理してたらこんな本を見つけてさ。何でもリバー王国の初代の王様であるリバール王に仕えてた魔術師についての本らしいんだ。参考になることが書いてあるかな、って思って。で

も、何だかよくわからない文字で書かれてて読めないんだよ。ちょっとは解読した跡があるんだけどね。師匠なら読めるかな、って思ってさ。」

「ふーむ…、古代語だな。魔術師の名前は…エーベル・ブラッハーか…。初めて見る名前だな。よし、読み解いてみるか。少し集中して読んでみるよ。ビアンカはハンスのことを頼んだ。」

「ほいよー、了解。ハンス、行くよっ。」

～～～

「飯も食いに来ないほど熱中してるのか…。ローズ、これを持って行ってついでにオリバーの様子を見てきてくれ。」

ヴォルフの言葉にローズはコクンと頷くと、料理の乗ったプレートを運んで行きました。

～～～

～～～

「何…するの？」

「難しいことは考えなくていいよ。とにかくハンスを不意討ちしてくれれば。」

「ハンスが…よけられなかった時は？」

「遠慮なくボコボコにしちゃって。」

ローズはしばらく考えていたようでしたが、やがて頷きました。

「わかった…。やる…。」

「嫌だあああああっ！誰か助けてくれーっ！」

「皆さん元気ですね…。」

イザベルが笑いながら言いました。すると、アリスが声をかけました。

「イザベル、これからエミリーと森に行こうと考えているのだが、来ぬか？」

「そうですね…。じゃあモニカさんも連れて行って大丈夫ですか？私もビアンカさんたちを見ていると、久しぶりにモニカさんの訓練をしてあげようと思いまして…。」

「うむ、かまわぬ。その間吾れらは狩りでもするとしよう。」

「いいですね、モニカさん。」

「あ、あの…。これからパトリックさんのところにお邪魔しようと思っていたんですけど…。」

モニカが遠慮がちに言いました。イザベルがモニカに語り出します。

「…いいですか、モニカさん。こういう状況を考えてください。あなたとパトリックさんがペアになって魔術師と戦っています。しかしパトリックさんはあなたをかばって魔術師の攻撃を受け、落馬してしまいました。あなたは当然パトリックさんを援護しようとします。でも魔術が暴発してしまい、誤ってパトリックさんを氷漬けにしてしまうんです。あなたはもっとしっかり魔術を訓練しておけばよかったと…、」

「いやああっ！イザベルさん！そんな、あまりにも現実的すぎて、手が震えています…。」

モニカは真っ青な顔をしています。イザベルは満面の笑みで言いました。

「…行きますね？」

「はいっ！」

～～～

ヴォルフがマチルドに果物をあげました。

「よしっ！」

「餌付けされてる…。」

ローズが喜ぶマチルドを見て言いました。

「あたいを犬みたいに言うな！」

「でも本当に遅いよな。昼飯の時とかどうだったんだ？」

レオンがリリーに聞きました。

「朝持って行った食事がそのまま置いてあったよ。水は飲んだみたいだけどね。」

「…いいんじゃないか？お前ら先に食っても。せっかく作ったシカのシチューが冷めちまうしな。」

ヴォルフが苦笑いしながら言いました。結局その日もオリバーは姿

を現しませんでした。

～～～

「…それはよかった。」

「あん？」

「オリバーが食事も口にしないほどに熱中して本を読んでいる時は、有用な手掛かりを見つけた時なんだ。きっとそのうち何かいい報せがあると思うよ。」

「ふーん。…で、お前は何で来たんだ？」

するとパトリックは真面目な顔に戻りました。

「最近ノーザリンで魔術師の動きが活発化しているという噂が流れていてね、それを伝えようと思ったんだ。」

「それはこの前のローズの一族を根絶やしにするための行動か？」

「いや、それは私も考えたよ。でもどうやらノーザリンでのミニエー一族狩りは三年前に終了しているらしい…。もしかしたらリバール王の秘宝を探しに行ったのかもしれないね。」

「だがアリスたちは北の樹海にはリバール王の秘宝の伝承は伝わっ

てねぇと言っていただろう？」

「うん、そうなんだよ…。とにかく、そのことを伝えなきゃならないからね。オリバーが降りてくるまで私はここにいるよ。」

パトリックはそう言って椅子に腰をおろしました。

「ああ、そうしてくれると助かるぜ。何しろ暇だからな。そうだ、チェスはできるか？」

「まあ、人並みにはね。」

「よし、やろうぜ。」

～～～

「うふふ、ビアンカさんにはかないませんよ。」

イザベルとビアンカが笑いながら話しています。ハンスとモニカは顔面蒼白です。

「あれ、パトリックが来てるなんて珍しいな。チェスか？」

マチルドが声をかけました。

「ちょっと話しかけないでくれ。今集中しているんだ。」

「戦績はどうなんですか？」

ラルフが聞くと、ヴォルフが苦笑いしながら言いました。

「レオンの一六連敗中さ。」

「くっそーっ！どうして勝てねぇんだ！」

「結局バカは何をやってもダメだ、ってことだな。」

マチルドがバカにしたように言います。

「ご主人、今日はあまりいい獲物はありませんでした。果物はたくさん採って来たのですが…。」

エミリーがヴォルフに果物の入った袋を渡しました。

「昨日のシカ肉がまだ残ってるからな。その果物はデザートにでもしよう。」

その時、二階でバタンという音がしました。足音も聞こえます。

「…おっ、いよいよオリバーのお出ましだな。」

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「32．古代の文献」（後書き）

部屋にこもりきって古代の文献を読みふけっているオリバーでしたが、パトリックの言葉通りならそれは何か重要な手掛かりを見つけたサインです。事実、その言葉通りだったようです。

次話ではオリバーが古代の文献を読んで分かったことを仲間たちに話し、そしてリバール王の秘宝のありかに見当をつけます。また、ギル大臣はオリバーたちを捕らえるためにある優秀な衛兵隊長をオーベルク近郊に派遣します。どうぞお楽しみに！

ちなみにパトリックは謙遜してはいますが実はチェスの達人です。ですから決してレオンが弱いわけではありません。ただし、太刀打ちできないほどの実力差であることも間違いはないようです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３３．いにしえの魔術師」（前書き）

ビアンカが持ってきた本を読むなり自分の部屋にこもってしまったオリバー。パトリックによれば、それは何か重要な手掛かりを見つけた証拠だというのですが…？そしてついにオリバーが仲間たちの元に姿を現すようです。

二階から本を小脇に抱えてオリバーが降りてきました。頬は痩せこけ、目元には真っ黒い隈ができ、目も真っ赤に腫れています。彼はかすれ声で言いました。

「パトリックもビアンカもいるのか。ちょうどよかった。明日ノーザリンに向けて旅立つぞ。」

「ノーザリンだって！？」

パトリックから魔術師の噂のことを聞いていたレオンは驚きました。

「師匠、何かあの本からわかったの？」

ビアンカがたずねます。

「ああ、あの本にはまさしくリバール王の秘宝のことが書いてあった。

リバール王の秘宝というものは二つあるらしい。文献でわかったのは宝剣だ。初代の王、この国の名前の起源となったリバール王が使

っていたものだ。しかし、もう一つの秘宝に関しては具体的な記述はなかった。同じところに隠されているということは間違いないんだが…。」

「なるほど、リバール王はバラバラだった国を統一してリバー王国を建てた。その秘宝で国を動かせる、というのはそういうことだったのか。」

ヴォルフが納得したように言いました。

「その隠し場所は北の樹海の中にある地下王宮の跡だ。」

オリバーの言葉にアリスがびっくりしました。

「何だと!?しかし樹海にはそのような伝承はない。ましてや地下王宮など…。」

「伝承は消されたのさ。」

「消された…?一体どういうことですか?」

エミリーもよく理解できていないようです。

「そうだな…、じゃあローレンツ。リバール王はどのような人物だと言われている?」

「リバール王は今にも滅ぼされそうな小国の没落貴族だったが、忠実な家来を従えて徐々に国をまとめ、リバー王国を建国した後も善政をしいた。この国のやつなら誰でも知っている話だぜ。」

「だがそれは間違っているらしいことがこの文献に書いてある。リバール王は国を統一した後、大きな国を治めるという重圧からやがて精神が不安定になって疑心暗鬼になり、別荘として使っていた地下王宮にこもって、これまでつき従ってきた家来や民衆を大勢殺したらしい。」

「何だって!?じゃあどうしてその話を今は誰も知らないんだ?」

マチルドがたずねます。

「そこでこのエーベル・ブラッハーという魔術師が出てくる。エーベルはリバール王が若いころからずっと王につき従っていた。だが王のすることは黙って見ていられなかった。しかし王を諫めても相手にしてくれない。そこで、王が死んだ後に国中に魔術をかけたんだ。」

「国中に？一体どんな魔術ですか？」

イザベルもたずねます。

「記憶操作術さ。エーベルはリバール王の悪政を国民の記憶からすっかりと取り除いたんだ。そして恐怖の象徴だった地下王宮への入り口を隠したらしい…。恐らくはこのことを広めたくない気持ちがある一方、事実をねじ曲げたことを悔いて古代語で書いたんだろう。そうすれば一般の人は読めない。」

「何でそんなものがあたしの家にあったのかな…。」

ビアンカが首をかしげました。

「どうやらお前の実家はこの頃から王家の財政を支援していたらしいんだ。最後の方にそれを感謝する一文が書いてあったよ。」

「むー…、何だか複雑だけど、まぁいっか。」

パトリックがオリバーに報告しました。

「オリバー、街で聞いてきた噂によると、ノーザリンでは最近一週間ほど前から魔術師の動きが活発化しているらしいんだ。もしかしたらその魔術師も情報をつかんだんじゃないかな？」

「な、何だって！？…こうしちゃいられない。すぐにでも出発しよう！」

すぐにでも立ち上がろうとするオリバーでしたが、レオンが押しとどめました。

「…まあ、待てよオリバー。お前三日間寝てねぇんだろ？まずはたくさん食って寝ることの方が大切だ。考えてもみろよ。その魔術師が地下王宮とやらの位置を知っているんなら、一週間もうろうろしねぇはずだ。きっとそいつもまだ位置まではわかっちゃいねぇはずだ。」

「バカの割にいいこと言うな。でもレオンの言うとおりだぜ。まずは体力つけろよ。」

マチルドも同調します。

「少し急げば樹海の入り口まで五日で着く。まずは休むのだ。」

アリスも言いました。

「…すまない。俺はいつもみんなに迷惑をかけてばかりだ。」

「お互い様ですよ。実際にオリバーさんがこの文章を読み解いてくれなかったら僕らは何もできなかったんですからね。」

ラルフが励ますように言いました。

「じゃあ、悪いが一晩ぐっすり眠らせてくれ。明日の朝に出発だ。ヴォルフ、悪いんだが、」

「心配するな。弁当を作っておいてやるよ。」

「ああ、頼んだ。」

その時、入り口で声がしました。

「…どうやらオットー様の判断は間違いではなかったようですね。さすがローゼンハイン殿。」

「クララ様…！」

入り口にはオットー様の妻、クララ様が立っておられました。オリバーと仲間たちは一斉に跪きました。

「クララ様。どのようなご用件で…。」

ヴォルフがクララ様にたずねました。

「ローゼンハイン殿にオットー様からの伝言です。リバール王の秘宝を手に入れたらオットー様はロンドランドのパカロンで反乱軍を指揮します。それの決起と同時に塔の牢獄に幽閉されているヘルガ王女を救出してほしい。そのため秘宝を見つけたらオットー様のもとへ来るように、と。」

「なるほど…。わかりました。我々は明日の朝に出発いたします。必ずや秘宝を手に入れてまいります。」

「くれぐれも気をつけるのですよ…。」

クララ様は微笑むと、宿を出て行かれました。

「では私は物置でお薬の調合をしますね。矢に塗る毒もつくらないと。」

イザベルが笑顔で席を立ちました。

「よし、これから武器の手入れをしてやるよ。みんな武器を貸せ。叩きなおしてやる。」

ローレンツとラルフも腕まくりをして宿を出て行きました。

「…あ、そうだ。モニカには用がある。ちょっと部屋まだ来てくれ。」

「へ？あ、はい！」

モニカはフラフラしているオリバーと一緒に二階に上がって行きました。

「さてと、あたしたちも旅支度をしてくるとしますか！」

「ああ、そうだね。」

パトリックとビアンカも宿を出て行きました。

「吾れらも納屋に行ってカトリーヌたちに餌をやってこよう。急ぐ旅になりそうだからな。」

「はいっ、お姉さま。」

アリスとエミリーも納屋へと向かいました。

「あたいはもう寝るよ。ローズ、お前はどうする?」

「眠くない…。いつものところに行く…。」

「俺たちも寝ようぜー。」

「そうッスね、先輩。」

ハンスとペーター、ローズとマチルドも階段を上って行きました。

「…結局俺が取り残されるんだよな…。」

レオンがため息をつきました。リリーが笑います。

「果実酒でも飲むかい？私でよかったら付き合うよ。」

「ああ…、すまねぇ…。」

レオンはカウンターに座りました。

～～

その頃、キンフィールド城では、一人の女魔術師がギル大臣と話していました。

「ギル様、只今ノーザリンから帰ってまいりました。」

この女魔術師の名前はレイ、ギル大臣の側近の一人です。

「ふむ、レイか…。レジオンはリバール王の秘宝探しに躍起になっているようだが？」

「まだ見つけられそうにありませんわ。」

「うむ…、ローゼンハインとか言う魔術師も、最近は動きをつかめていない…。しかし何かがあってからでは遅いな。こちらも手を打っておくとするか…。衛兵隊長マティアス！マティアスはどこにいるか！」

ギル大臣が声を上げると、真っ黒な鎧に身を包んだ一人の兵士が中に入ってきました。

「これに…。」

「おお、マティアス。すぐに衛兵の小隊を率いてオーベルクに向かうのだ。レジオンの報告によるとオリバー・ローゼンハインはオーベルク近郊に潜んでいる可能性が高い。オーベルクに駐在し、怪しい人物は徹底的に調べ上げるのだ。見つけ次第捕らえるのだ。」

「心得ました…。」

「数々の手柄をあげてきたお前なら、造作もないことだろう。」

衛兵隊長マティアスは小さく会釈をすると、その場を後にしました。

「…私はあの男を信用できません。旧王家時代からの衛兵隊長、いつ謀反を起こすやら…。」

「心配は無用。マティアスは主人の命令には絶対に従う。…どのような命令にもな。」

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３３．いにしえの魔術師」（後書き）

リバール王の秘宝のありかがついに明らかになりました。北の樹海にあるという地下王宮です。しかし、オリバーはその地下王宮の位置をまだ仲間たちには明かしていません。それには何かの意図があるようですが…？そして、ギル大臣は衛兵隊長のマティアスをオーベルクに派遣しました。彼は今後の物語の中でも重要な存在となります。

次話ではオリバーが地下王宮があると目星をつけた場所に到着します。はたしてその場所に地下王宮、そしてリバール王の秘宝は眠っているのでしょうか？どうぞお楽しみに！

ちなみにビアンカの疑問を補足すると、リバール王が挙兵した際、唯一財政的に支援してくれたのがビアンカの実家であるヴァルトシュタイン家だったのです。当時のヴァルトシュタイン家は小さな商家だったのですが、このことがきっかけで代々続く豪商となったのです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３４．地下王宮」（前書き）

オリバーが読み解いた古代の文献には、リバー王国初代王リバール王の秘宝は北の樹海の中にある地下王宮跡にあるという記述がありました。オリバーたちはそれを手がかりに北の樹海にまた戻ってきました。

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３４．地下王宮」

六日前にオリバーたちはヴォルフの宿を出発しました。いつものようにヴォルフとリリーが見送りました。

「いよいよだな…。」

ヴォルフも緊張しているようです。

「後のことは頼んだ。必ずリバール王の秘宝を見つけ出して帰ってくるよ。」

「その秘宝がある地下王宮とやらだけど…、本にも具体的な場所は書かれていなかったらしいけど、場所に見当はついているのかい？」

リリーが心配そうに聞きました。

「ああ、まだみんなにも言ってはいないけどな。確信がある。気になっている場所があるんだ…。」

～～～

そして今、オリバーの隣でアリスとエミリーが怪訝そうな顔をしています。

「その気になる場所というのが、ここだというのか。」

「この辺りには森しかありませんよ。第一、いつも私たちはこの辺で狩りをしていました。」

オリバーたちはいつかの湖のほとりに来ていました。アリスとエミリーがよく狩りで疲れた体を休めたというあの湖です。美しいはずの水面は相変わらず毒々しく変色しています。

「まったく、誰に聞かれても言わねぇで、結局はここかよ。何だかがっかりだぜ…。」

レオンが拍子抜けしたように言いました。

「オリバーさん、あの文献に何かこの湖のことが書いてあったんですか？」

イザベルもどこか心配そうです。

「いや、あくまで樹海の中にあった、としか書いていなかった。…だが俺には確信がある。モニカ！頼む！」

「は、はい！」

モニカは大きく息を吸い込むと、叫びました。

「エバポレーション！」

途端に湖が一面炎に覆われました。熱い蒸気が立ち上ります。

「伏せろ！顔を覆え！」

オリバーたちは地面に伏せました。彼らの体を熱気が包みます。

～～～

「うわっ！湖がなくなってるぜ！」

「また魔術が暴発したのか！？」

しかしモニカは興奮したようにオリバーに言いました。

「オリバーさん！これでいいですか！？」

「ああ、大成功だ！」

モニカの問いかけに、オリバーは大喜びで頷きました。

「湖を…蒸発させたのですか…？」

魔術に精通したイザベルでさえも、さすがにあっけにとられたようです。

「何を言っているのですか！」

エミリーが血相を変えてオリバーに詰め寄りました。

「わたくしたちの湖を干上がらせておいて、何が成功なのですか！」

「ま、待つのだエミリー！」

アリスが慌てて押しとどめましたが、エミリーはそれを振り払いました。

「あんな姿になっていたとはいえ、わたくしたちが愛する湖には変わりないのです！それなのに…。」

エミリーが涙ぐみながらオリバーに詰め寄った時、ビアンカが叫びました。

「し、師匠！みんなも！あれを見てよ！湖の底！」

仲間たちは湖を覗き込みました。

「そ、そんな…！」

「信じられない！」

「湖の底に…あんなものが！」

湖の底に降りる斜面には魔獣の骨がたくさん転がっていました。そして一番深いところには…、

「地下王宮の入り口に…間違いないな。」

オリバーが深く頷いて言いました。大きな石でふさがれた、明らかに人の手によってつくられた地下への入り口がありました。

「思った通りだ。この湖はあの地下王宮への入り口を隠すためにエーベル・ブラッハーがつくった人工の湖だ。」

「ま、待つのだ！だとしたら、どうしてここだと見抜いたのだ！？」

アリスが信じられないといった表情で言いました。オリバーが淡々と語り始めました。

「一番初めにここに案内されてきた時にいくつか疑問に思うところがあったんだ。

まずはこの下の方にあった湧水だ。森の平らなところからあんなに大量の水が湧き出しているというのも変な話だ。

二つ目、そこからこの湖まで続いていた枯れた谷だ。本来、谷は川の流れが山を削って出来るものだ。あれだけ大きな谷は相当な水量がなければ形成されない。でも仮に、もともとあの湧水の量の水が流れていたとしたら、自然に出来たといってもおかしくはない。

第三に、この湖の形状だ。両端は山肌が落ち込んでいるが、今登ってきた方とその反対側は崖になっている。反対側の崖の向こうもまだ枯れた谷が続いているようだしな。

水が流れ込んでこない川、というのは普通火山の火口なんかに水がたまって出来るものなんだが、ここは火山だという痕跡がない。土も火山灰ではないようだしな。

恐らくここはあの入り口を隠すため上流と下流に崖をつくって囲むようにし、そして水を満たしたんだろう。もとは川だったはずだ。

…二人の大切な場所をなくしてしまったことは本当に申し訳ない。だが、きっと事前にこの計画を話してもきっと許してくれなかっただろ?」

オリバーが頭を下げました。エミリーは短く息を吐きました。

「この現実を見せられて、反論しろという方が無理です。…早く下へ降りましょう。…オリバーさんには驚かされてばかりです。…その代わり、どこかでちゃんと埋め合わせはしてもらいますよ。」

「ああ、もちろんだよ。」

～～～

オリバーが静かに言いました。すると、後ろの方で悲鳴が聞こえました。

「きゃあっ！」

モニカが足を滑らせたのです。

「うわっ！」

ハンスとペーターもそれに巻き込まれました。彼らは斜面を転がって行きます。オリバーとパトリックが駆け寄りました。

「三人とも、大丈夫かい？」

「足元には気をつけろ、って言っただろう…。」

「イテテテ…。うわっ、こうやって見ると、この大きな石だなぁ…。」

地下王宮への入り口をふさいでいる石はとても大きなものでした。

「うっすらですけど…石の表面に何か書いてありますね。やっぱり古代語でしょうか…。オリバーさん、読めます？」

石を眺めていたイザベルが言いました。

「見せてくれ。」

オリバーは石の表面に描かれた古代文字をじっくりと眺めました。

「…みんな、下がっていてくれ。出来るだけ離れるんだ。」

仲間たちは言われるがままに後ろに下がりました。

「ｕｅｏｍｅｂａｋｌｘｎｑｎ！！ｒｌｐａｑｖｓ！」

オリバーが古代語で何かを唱えました。すると、入り口をふさいでいた大きな石がガラガラと崩れ、地下への入り口がぽっかりと穴を開けました。

「あっ、先生！」

オリバーはその崩れてきた石に巻き込まれました。しかし、土煙が消えるとオリバーが何もなかったかのようにそこに立っていました。石はまるでオリバーを避けるかのように崩れていました。

「…安心しろ。エーベル・ブラッハーは俺たちを歓迎してくれている。」

「あの石には何と書いてあったんですか?」

イザベルが興味深そうにたずねました。

「『この入り口を見つけた者はリバール王の秘宝を心から必要とするものであろう。苦労してここを見つけたことを称え、扉を開ける呪文を授け、汝を加護しよう』とあった。」

「すげえや!古代の一流の魔術師が味方かあ!」

マチルドが興奮して叫びました。

「何百年も経った今でも魔力を残せるなんて…、このエーベル・ブラッハーという魔術師は強大な魔力を持った魔術師だったんですね…。」

「同じ魔術師として、憧れます…。」

イザベルとモニカは目を輝かせています。

「よし、中に入ろう。ハンス、ペーター、持ってきたランプに火をともせ。」

「はい。」

火がともると、彼らは中に入って行きました。

～～～

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３４．地下王宮」（後書き）

エーベル・ブラッハーが隠した地下王宮の入り口を見事にオリバーは見つけることができました。あとは中に入ってリバール王の秘宝を見つけるだけです。

次話ではオリバーたちが地下王宮の中を進みます。そしてその一番奥にあったものとは…？どうぞお楽しみに！

ちなみに湖を蒸発させる魔術は、モニカの強力な魔力を持ってしなければ成功しないものでした。オリバー自身は何度かに分けなければ湖の水すべてを蒸発させることはできないと考えていましたが、モニカは一度で完全に蒸発させたので大喜びでした。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３５．リバール王の秘宝」（前書き）

オリバーの鋭い観察力で、かつていにしえの魔術師エーベル・ブラッハーによって封印された地下王宮の場所が判明しました。あとは中にあるという二つのリバール王の秘宝を見つけるだけです。

ちなみにこのお話で第二章「リバール王の秘宝」は最後となります。次話からは第三章「最後の戦い」をお楽しみください。

ランプを持ったハンスとペーターを先頭に、オリバーたちは慎重に地下王宮の中を進みました。

「すごいな…。宝石や金貨がたくさん転がっている…。」

「これだけでもものすごい価値ッスね、先輩…。」

「でも初代の王様の宝剣と比べられるほどのものだ、もう一つの秘宝、っていうのはこんなもんじゃ済まないんだろうな。」

すると、突然マチルドが叫びました。

「おい！ハンス！足元に気をつけろ！」

「えっ？うわっ！」

ハンスは落とし穴に落ちました。

「イタタタ…。」

オリバーが穴の中を覗き込みました。

「大丈夫か?今ロープを下ろしてやる。」

「はい…。」

ハンスはロープを這い上がってきました。

「注意力不足ッスねぇ。」

ペーターがハンスを見てニヤニヤ笑っています。しかし、またマチルドが叫びました。

「おいペーター!頭!」

「え?うわっ!」

ペーターの頭にサソリが乗っていました。ペーターは大慌てです。

「マチルド、お前、暗闇でも目が利くのか？」

オリバーが驚いたように言いました。

「まあなー。夜に隊商を襲ったりもしてたから、普通のやつらよりは見えると思う。」

「それはすごいな。…よし、先頭はマチルドだ。ランプをマチルドに渡せ。ハンスは後ろを警戒するんだ。」

「とほほ…。」

「どんどん俺たちの影が薄くなっていくよ…。」

「黙って言われたとおりにしろ。悔しかったらお前らももっと頑張れ。」

ハンスとペーターは肩を落としました。

「おい、オリバー。ここはどっちだ？二手に道が分かれてるぜ？」

マチルドがオリバーにたずねます。

「今までの構造を考えると…、右だな。」

「師匠は本当に博識だねぇ。」

ビアンカが感心したように言います。

「少しでも役に立てて嬉しいよ。」

～～～

イザベルが言いました。

「ああ、頼む。」

イザベルは一番近くにあった燭台に火をともしました。すると、他の燭台にも一斉に火がともりました。イザベルは感嘆の息をもらしました。

「…ものすごい魔力です。」

「おい！あれを見ろよ！」

先頭のマチルドが指さした方向を見ると…、

「あれが…リバール王の宝剣…。」

パトリックが呟きました。宝剣は銀色にキラキラと輝いていました。柄の部分には宝石がちりばめられています。

「美しい…。」

ビアンカはため息をつきました。オリバーが静かに歩み寄り、宝剣を手に取りました。その瞬間、宝剣はまばゆい光を放ちました。その光は部屋全体をさらに明るく照らし出しました。そして徐々に剣は輝きを失い、やがて元のように戻りました。オリバーはそれを見届けると静かに言いました。

「…ここでの用事は終わった。帰るとしよう。」

「なっ、何だって!?おいおい、もう一つの秘宝を見つけてねぇじゃねぇか。」

レオンがびっくりしたように言いました。それに呼応するように、オリバーたちの背後から鋭い声が聞こえてきました。

「その通りだ!ローゼンハイン!二つ目の秘宝は一体どこにあるというのだ!」

仲間たちが声のした方を振り返ると、レジオンがものすごい表情でオリバーを睨みつけていました。

「レジオンか。…二つ目の秘宝のことを知っているということは、お前もあの文献を読んだのか。」

「いかにも。王宮の古い書庫で見つけたのだ。だが第二の秘宝とおぼしきものがどこにもないではないか！最深部のこの大広間にあったものもその宝剣だけではないか。いったいどこに第二の秘宝があるのだ！」

「…ここさ。」

オリバーの言葉に仲間たちは驚きました。

「ほう、二つ目の秘宝もお前たちが手に入れたというのか。」

「違うな。…壁画を見てみろ。」

オリバーの仲間たちもレジオンも、壁画を見渡しました。

「…壁画がどうしたというのだ。リバール王の画ばかりではないか。」

「よく見てみろよ。リバール王の周りを。」

「先生、これは…リバール王の家族、ですか…？」

ハンスがオリバーに聞きました。

「そうだ。…リバール王の第二の秘宝、それは愛する家族さ。」

「ば、バカな！」

レジオンは信じられないといった表情をしました。

「どの壁画でも、リバール王は家族に囲まれている。それも言葉で言い表せないほど幸せそうな表情をしている。

国民のみならず、ずっと付き従ってきた忠臣ですら信じられなくなったリバール王が唯一心を休めることができたのは、この家族と過ごした時間だったのだろう。」

「バカな…。そのようなバカなことが！」

レジオンは完全に動揺しているようです。

「もらったあーっ！」

その瞬間、物陰に隠れていたマチルドがレジオンに飛びかかりました。

「エクスクルージョン！」

しかしすぐにレジオンは我に帰り、魔術でマチルドの短剣を吹き飛ばしました。そしてマチルドに指先を向けました。

「そのバカげたことが事実ならば宝剣を持ち帰るまで！まずはお前から地獄に送ってやろう！憎（ツォン）、」

レジオンが聞きなれない言葉を叫ぼうとしたその時、レジオンの背後からやはり隠れていたローズが飛び出してきました。ローズが突き立てた短剣はレジオンの背中から体に深く刺さりました。

「へへっ、あたいはおとりさ！」

「う、呪いの、力を、込めた、短剣…。もう、一息の、ところで…。」

レジオンは静かに床に倒れこみました。ローズはレジオンにたずねました。

「死ぬ前に答えて…。マウント家を根絶やしにさせたのは誰…。」

「ギル…大臣の…直属の…魔術師…レイ、だ…。」

「それだけ聞ければ十分…。家族をバカげたものなんて、何もわからないくせに…。」

ローズは短剣をさらに深く突き立てました。レジオンは苦しんでいましたが、やがて動かなくなりました。

「…気の毒なやつだ。」

オリバーがポツリとつぶやきました。

「え？」

「これほどの強大な魔力、人のために役立てていれば、こんな無惨な最期を迎えずに済んだものを…。」

「天罰ってやつさ。」

レオンが仕方ないといったように言いました。

「それにしても、何だか感慨深げですね…。過去に何かあったんですか？」

イザベルがたずねました。

「ああ、俺の体に呪いの耐性を埋め込んだのはこのレジオンだ。

…一度、俺が闇の魔術師だった頃に決闘したことがあったんだ。だが互いに決着はつかず、相討ちで終わった。その時に俺を襲ったレジオンの魔術によって俺の体は死ぬまいと拒絶反応を起こした。苦しみは三日間続いた。そして苦しみが収まった時、俺の体は呪いの魔術に耐性がついていた、というわけさ。

…あの頃のレジオンは人に危害は加えても殺しはしなかった。だが歳を重ねるにつれその心は歪み、やがて『死の使い』と呼ばれるまでになってしまったんだ…。

時間は人を変える。良いようにも悪いようにもな。問題はその時間をどう過ごすか、だ。」

オリバーはフウッと息をつきました。

「さあ、帰ろう。そしてオットー様に報告だ。この宝剣も献上しなければな。」

オリバーと仲間たちは地下王宮を後にしました。

～～～

～悪の大臣～　二章・リバール王の秘宝　「３５．リバール王の秘宝」（後書き）

オリバーと仲間たちは無事にリバール王の秘宝を見つけることができました。そのうち宝剣のほうはもって帰ることができたようですが、少なくともう一つの秘宝に関しては今のオリバーたちには持って帰ることができなかったようですね。

このお話で第二章の最終話となります。次話ではオーベルクに戻ろうとしているオリバーたちの前にある人物があらわれます。はたして一体誰でしょうか…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーとレジオンの関係ですが、過去の二人は絶対に相容れないライバル、といった感じでした。しかし、オリバーも言っていたように当時のレジオンは危害は加えても人を殺しはしませんでした。オリバーの言葉に当てはめると、時間の流れによってオリバーはいい方向に変わり、レジオンは悪い方向に変わってしまった、というわけです。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い「３６．衛兵隊長」（前書き）

北の樹海の中に隠されていた地下王宮の中で、オリバーたちはリバー王国の初代王リバール王の宝剣と「もうひとつの秘宝」を見つけ、さらに闇の魔術師であるレジオンを葬りました。オリバーたちは宝剣をオットー様のもとに届けるため、街道を南へと歩いていました。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い「３６．衛兵隊長」

オリバーたちはオーベルクに向かって街道を歩いていました。リバール王の宝剣はイザベルの薬草袋の中に隠してあります。

「最近は旅の途中で魔獣と出くわすこともほとんどなくなりましたね。人々も安心しているみたいです。」

ペーターが嬉しそうにオリバーに言いました。

「ああ、そうだな。だがまだギル大臣という大きな恐怖が残っていることには変わりない。気は抜けないな。」

オリバーはいったん緩めた頬をひきしめなおしました。

「先生！」

突然ハンスがオリバーを呼びました。

「どうした？」

「あそこの村から火の手が上がっているようです。」

オリバーが目を凝らすと、確かに遠くの方に黒い煙が見えます。

「…本当だ。よし、マチルド。探ってきてくれ。」

「あいよっ！」

マチルドは風のように走って行きました。

～～～

～～～

「衛兵隊長様がこのような場所で何を?」

「粛清だ。」

「粛清?」

イザベルはびっくりしました。衛兵隊長マティアスは粛清を受けている兵士たちをまるでゴミを見るような目で見て言いました。

「あの監視兵どもは村で略奪を働いていたのだ。見過ごしてはおけぬ。」

「それはそれは…、ご苦労様です。」

「それにしても…薬商人にしては不自然に重装備だな。人数も多い。」

マティアスはイザベルやオリバーたちをジロジロ見ました。

「リバー王国は魔獣たちがあふれていて危険だという噂を聞いたので…。大事な品物を台無しにするわけにはいきません。しかしここ

まで魔獣に出会うこともなかったので安心していたところです。」

イザベルが笑顔で言いました。

「魔獣なら数が減ってきている。何でもオリバー・ローゼンハインとかいう魔術師の一行が魔の洞窟を封印したらしいからな。」

「そうでしたか…。ではその魔術師はこの国の救世主ですね。」

「だがやつは王国の兵士たちを大勢殺した。私はその男を捕らえるために派遣されてきたのだ。」

イザベルは驚きましたが、何とか平常心を保ちました。

「旅の者に話しても仕方のないことだったな。さあ、さっさと立ち去れ。」

「はい。…皆さん、行きましょう。」

一行はそこを離れました。そこへ、兵士の一人がマティアスに報告に来ました。

「隊長、粛清完了しました。」

「ご苦労。」

「…今の旅の者、怪しいように感じるのですが…。」

「私もそう思う。」

「ではなぜ荷物の取り調べをしなかったのですか?」

「今はこの兵たちの粛清をしていた時だ。丸腰の者に手をかけるなど、人の道を外れた行為だからな。」

～～～

…パトリックとモニカ、お前たちは宿に行ってヴォルフに今回のことを報告してきてくれ。俺たちは街を避けて直接オットー様のもとへ行く。あとを追いかけてきてくれ。」

「わかった。では先に行かせてもらうよ。」

パトリックはフランソワの足を速めました。モニカがしっかりとその背中にしがみついています。

「ビアンカ、ここから市街地を通らずにロンドランド方面への街道に抜けられる道はあるか？」

「むー、ここからだと市街地を通らないとダメだね。引き返すにしても、もう一度あの衛兵たちと会うことになっちゃうし…。」

ビアンカが困った顔をしました。すると、アリスとエミリーが言いました。

「ならば森の中を通ればよい。吾れらはあの辺りの森は把握できている。」

「最近よく狩りに行っていましたからね。」

「よし、じゃあ道案内を頼む。」

～～～

「大丈夫…初めから覚悟してる…。それに私は先生を信用してる…。」

いつもは冷やかすビアンカとマチルドも、今日に関しては何も言いません。

「ローズ…。…そうだ、ローレンツ。あの衛兵隊長について知っていることはあるか？」

オリバーがローレンツにたずねました。

「ああ、キンフィールドじゃちょっとした有名人だ。あのマティアスという男は旧王国時代からキンフィールド城の衛兵隊長だった。ヌワール家という名門の軍人一家出身で、あまりにも腕が立つものだからギル大臣も殺さずに捕虜にして衛兵隊長の地位も保全したんだ。」

「それじゃあこれまで一般市民の虐殺なんかもしてきたんですか？」

ラルフが嫌悪感をあらわにして言いました。しかしローレンツは首を横に振りました。

「いや、今日見たとおり、略奪や虐殺をおこなっている兵士はマティアスに見つかると必ず粛清される。」

「国民の味方かと思えば、師匠を捕えろという命令には従う。むー、よくわかんない人だなぁ…。」

ビアンカがしかめっ面をしました。

「命令には忠実な男だからな。略奪や虐殺は命令のうちに入っていない、っていうことだろう。…逆に言えば、命令であればどんな命令にも従う、という男だ。マティアスの指揮力と戦いへの知識があれば、この国の地方の一つや二つ、簡単につぶせるさ。」

ローレンツが肩をすくめながら言いました。

「何とかして戦うことは避けたいもんだな…。魔術師たちとは違って何も無理に戦わなければならない相手ではない。」

緊張したようなオリバーに、エミリーが頼もしく言いました。

「今まで何度も苦難を乗り越えてこられたのです。心配はないでしょう。…さあ、街道に出ましたよ。」

オリバーたちは森を抜け、街道に出てきました。見慣れたロンドランドへ向かう街道です。後ろにはオーベルクの街並みも見えます。

「ふう、まずは関門突破だ。あとはパトリックたちと合流してオットー様のところに行くだけだな。」

「そのパトリックも今到着したようだな。」

アリスが言いました。彼女が言うように、遠くから二頭の馬が走ってくるのが見えました。一頭はパトリックとモニカを乗せたフランソワです。そしてもう一頭には…、

「ヴォルフ！リリー！お前たちも来たのか！」

「衛兵たちの監視が厳しくなったからね、私たちもオットー様のところに行くことにしたよ。」

リリーが嬉しそうに言いました。

「オットー様に会うのも一年半ぶりだ…。懐かしいな。ところで、リバール王の秘宝が見つかってよかったな！」

ヴォルフも興奮しています。

「ああ。…だが詳しい話はオットー様のところに着いてからだ。さすがにこんなところで物騒なことを話すわけにもいかないからな。…さあ、いよいよ俺たちの戦いも大詰めだぞ。オットー様のところへ急ごう！」

～～～

～悪の大臣～　三章・最後の戦い「３６．衛兵隊長」（後書き）

二人の闇の魔術師を葬り去ったオリバーたちの前に、衛兵隊長マティアスがあらわれました。彼は今後のストーリーに大きく関わってくる重要人物です。

次話ではオリバーたちがオットー様と再会します。オットー様は反乱軍を指揮するため、かつて自らが治めていたロンドランド地方の古都パカロンに向けて出陣します。どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーが予測した通り、この時オーベルクの街には見回りの衛兵たちがたくさんいました。もしオリバーがオーベルクの街に姿を現していたら間違いなく取り押さえられていました。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「37．オットー様の出陣」（前書き）

オリバーたちはオーベルクの市街地を避け、森の中を抜けてロンドランド地方への街道に出ました。ヴォルフたちとも合流し、オットー様に会うために街道を東へと歩き始めました。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「37．オットー様の出陣」

すっかり日が暮れた夜、オリバーたち一行はオットー様の古い隠れ家の前にきました。オリバーが声をかけます。

「失礼します、オリバー・ローゼンハインです。オットー様にお目通りを願います。」

すると、中からクララ様が扉を開けました。

「お待ちしていました、ローゼンハイン殿。オットー様もお待ちかねです。どうぞ、中へ…。」

～～～

「ちょうど椅子の修理も終わったところだ。まだまだ大工仕事は慣れんよ。…では話を聞かせていただこう。」

オリバーは洞窟を封印した後のレジオンとの戦い、そしてリバール王の秘宝のことを話しました。

「これがその宝剣でございます。お受け取りください。」

オットー様は差し出された宝剣を受け取ると、まじまじとご覧になられました。

「これが…リバール王の…。美しい剣だ。

…だがリバール王にそのような秘密が隠されているとは余も知らなかった。愛する家族の存在が秘宝の一つか…。」

感慨深げなオットー様にオリバーが言いました。

「オットー様にはクララ様がいらっしゃいます。」

オットー様はそれをきいて笑っておっしゃいました。

「ヴォルフとリリーも家族のようなものだ。二人とも、ここまでよく来てくれた。」

オットー様はヴォルフたちの方を向き直りました。

「オットー様…。どこまでも、お供いたします。」

「再会できて嬉しゅうございますわ。」

ヴォルフとリリーはひざまずきました。オリバーたちはそれを見て笑顔を見せましたが、ローズだけは表情がすぐれずうつむいています。オットー様がそれにお気づきになりました。

「…ローゼンハイン殿、あの者の表情がすぐれぬようだが…。」

「ええ…。あれはローズと申します。一族をギル大臣によって滅ぼされてしまい、今ではたった一人の生き残りです。」

「と、いうことはまさかミニエー家の…。」

オットー様は驚いたように目を丸くされました。

「ええ、そうです。末娘で処刑は免れたそうですが…。」

「苦労したのだな…。気の毒に…。」

すると、ローズが顔をあげました。そしてオットー様に話しかけました。

「オットー様…。レイという魔術師を知っておられますか…?」

その話し声はどこか気品の見え隠れする声でした。オリバーは感心しました。

(貴族の末娘だっただけあるな…)

「うむ、知っておる。…ギル大臣の右腕の女魔術師だ。残虐なことをよく好む。国民たちの苦しむ姿を見て楽しむ、悪の魔女という表現が正しいのだろうな。」

「だからプレグーやレジオンを召し抱えたのか…。」

オリバーがうなりました。

「ギル大臣の悪政も、実はレイがさせていることが多いという。無論、ギル大臣にもその傾向はあるのだがな。」

ローズは真剣な顔でオットー様を見ています。

「ではミニエー家のことは…、」

「ミニエー家の莫大な財産を狙うレイと、ミニエー家を出世のための障害と考えていたギル大臣の思惑が一致した、ということだな。その事実を知る者は余の他はすべて殺されてしまった。」

「感謝いたします…。」

ローズは頭を下げました。

「つまり、そのレイという魔術師を倒さなければ国を救ったことにはならない、というわけですね。」

オリバーが緊張したように言いました。

「そういうことになる。…あなた方には本当に面倒をおかけしてしまう。」

オットー様は申し訳なさそうにおっしゃいました。

「とんでもございません。それよりオットー様もパカロンで兵を挙げるとか…。」

「恥ずかしながらも余はロンドランドの旧王家の直系の末裔、前パカロン城主でもある。余を慕ってくれる民衆も多い。ましてこの宝剣で民の心も引き付けられる。怒れる民衆の力は恐ろしい。派遣されてくる兵も撃退できるであろう。」

パカロン出身のモニカはさっきから夢を見ているかのような表情をしています。オットー様が生きていらっしゃったことがまだ信じられないようです。

「マティアスが来なければいいけれど…。」

レオンが心配そうにつぶやきました。

「む？マティアスを知っておるのか？」

オットー様が驚いた顔をされました。

「ええ、実は…、」

オリバーは衛兵隊長、マティアスのことを話しました。オットー様は困った顔をされました。

「あの男は本当に命令に忠実な男だ。命令によって善にも悪にもなる。…高名な騎士であるティボー殿ならば気持ちもわかるのではないかね？」

「はっ…。お察しいただけましたか…。」

パトリックがひざまずきます。

「ともかく余は明日の明朝、クララとヴォルフとリリーを連れ、パカロンへ向かう。そして頃を見て挙兵する。キンフィールドの兵の注目がこちらに向いたところで塔の牢獄の中のヘルガ王女を救出し、余のもとへ連れ帰ってきてもらいたい。」

「心得ました、オットー様。必ずや王女様を連れ帰ります。ですが決行までには時間があります。我々もパカロンまでお伴をさせていただきます。」

「それは心強い…。ぜひともお願いしよう。」

～～～

「今さら気品なんて必要ない…。」

「おい、静かにしろ。オットー様が来たみたいだ。」

レオンが二人に注意しました。扉が開き、ヴォルフとリリーが出てきました。そして後ろからオットー様とクララ様が続きます。四人とも立派な格好をしています。

「ヴォルフ！リリー！何だか宿での格好を見慣れすぎていて違和感があるなぁ…。」

「一応これが正装さ。宿の奥にしまっていたんだ。オットー様、クララ様、どうぞこの馬にお乗りください。」

ヴォルフはここまで自分が乗って来た馬にオットー様たちを乗せました。

「感謝するぞ、ヴォルフ。…ローゼンハイン殿、出発するとしよう。」

「はっ！アリス、エミリー、オットー様たちを両脇で護衛してくれ。

」

「うむ、光栄なことだ。」

「わかりました。」

アリスとエミリーはカトリーヌとアンヌを歩かせ、オットー様たちの横に行きました。

「ローゼンハイン殿、本当に心強い仲間たちを集めたのだな。」

「頼もしい仲間ばかりです。」

～～～

「オットー様が生きていた！？」

「そばにいるのはひょっとしたら禁じられた洞窟を封印したオリバーとかいう魔術師じゃないのか？」

「国を救うためにオットー様が帰っていらしたんだ！」

「きっとパカロンに向かっているんだろう。」

「俺たちも行こう！オットー様と一緒に行くんだ！」

オリバーやオットー様の後を、大勢の民衆が農具やナイフを持ってついてきます。ハンスとペーターが興奮しています。

「見てくださいよ先輩！すごい数の人ッス！」

「みんなギル大臣たちに不満を持っているんだろうな…。」

～～～

やがてオットー様を先頭とした行列はロンドランド地方の中心都市、古都パカロンに到着しました。慌てて街の入り口に出てきた数人の守備兵も、アリスとエミリーがあっという間に蹴散らしてしまいました。大歓声の中、オットー様は街の広場で馬の足を止めました。イザベルが魔術を唱えます。

「エクスペンション！」

これでオットー様の声が広く遠くまで聞こえるようになりました。オットー様は民衆に向かって宣言しました。

「皆の者！余はオットー・フランツだ！パカロン城主、ロンドランド旧王家の末裔、オットー・フランツだ！国難を憂い、悪政を憂い、冥界より甦って参った！」

民衆の大歓声が起こりました。オットー様は続けます。

「余はリバーの民を苦しめるギル大臣を倒し、リバーの旧王家を復活させるため、偉大なる魔術師、オリバー・ローゼンハイン殿に協力を依頼した！

ローゼンハイン殿は勇敢な仲間と共に略奪の的になっていたダナラ

スフォルスを解放し、禁じられた洞窟を封印して魔獣たちの力を弱め、更には二人の闇の魔術師を倒して古くから言い伝えられているリバー王国の開祖、リバール王の秘宝を探し当てたのだ！見るがよい、これがその秘宝、リバール王が使っていた宝剣だ！」

オットー様は銀色に輝く宝剣を高くかざしました。民衆たちは声の限りに叫んでいます。

「われらが同士、ローゼンハイン殿に祝福を！声援を！」

「うおおおおおっ！」

「オットー様の人望の篤さには驚かされるばかりでございます。」

オリバーが感激したように言いました。オットー様は笑って言いました。

「どうやら民はまだ余を信じてくれているようだ。…さあ、これからパカロン城に案内しよう。一休みするとよい。」

～～～

オットー様はオリバーたち一行をパカロン城に案内されました。

「私たちも一休みした後、キンフィールドへ向かいます。警備の厳しいオーベルクは通らず、少々遠回りして向かうこととといたします。」

「ヘルガ王女様は塔の牢獄の最上階に幽閉されておられます。警備も厳重かと…。」

「中もとても狭いと聞いた。槍は使いづらいかもしれない。」

クララ様とヴォルフも厳しい顔で言いました。

「吾れらも狭いところで矢は使えぬ。」

アリスが肩をすくめます。それを聞いてオリバーは少し考えた後で言いました。

「アリスとエミリーは牢獄の周りで馬を走らせて兵隊をかく乱させるんだ。ハンスとレオンは入り口の守備をすると同時にモニカを守るんだ。モニカはまだ魔力をコントロールしきれていないから、狭い牢獄内で暴発すると大変なことになる。必要とあらばイザベルに

も外に残ってもらうが…。」

「大丈夫です。いつまでもイザベルさんに頼りっきりになっていては成長できません。外での魔術は私に任せてください。」

モニカが力強く言いました。

「モニカもすっかり頼れる存在になったようだね。」

パトリックに言われ、モニカは顔を赤らめました。

「ではオットー様、私たちもそろそろお暇し、キンフィールドへ向かいます。」

オリバーがオットー様に言いました。

「わかった。余も五日後に挙兵する。ヘルガ王女をくれぐれもよろしく頼んだ。」

オットー様も緊張しておられるようです。

「しっかり頼んだぞ、オリバー。」

「お前もな、ヴォルフ。オットー様をしっかりと支えて差し上げてくれ。」

オリバーとヴォルフはがっちりと握手を交わしました。

～～～

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「37．オットー様の出陣」（後書き）

オットー様がパカロン城入りし、ギル大臣への反撃準備も着々と整ってきました。民衆の大歓声に、オットー様自身もとても安心したようです。

次話ではオリバーたちがオットー様の挙兵とタイミングを合わせてヘルガ王女様が閉じ込められているキンフィールドの塔の牢獄を奇襲します。はたして無事に王女様を救い出すことが出来るでしょうか？どうぞお楽しみに！

ちなみにローズとオットー様ですが、オットー様はミニエー家の末娘が生きているということは知っていましたが、お互いに面識はありませんでした。実際、ローズのミニエー家とオットー様のフランツ家はそこまで親密な関係であったわけではありません。もちろん、ギル大臣への反抗勢力としての交流はありましたが。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「３８．塔の牢獄」（前書き）

オリバーと仲間たちはキンフィールド近郊の森の中に潜んでいました。キンフィールドの街はオットー様の挙兵の話で持ちきりです。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「３８．塔の牢獄」

キンフィールドの街がにわかに騒がしくなりました。兵士たちがオロオロしています。

「大変だ！ロンドランドで反乱だ！」

「死んだはずのオットー・フランツが生きていたらしいぞ！」

「ええい、静まれ！我らの小隊は只今からパカロンに出撃する！オットー・フランツの反乱を鎮圧するのだ！」

「はっ！」

兵隊たちは軍備を整え、街を出てゆきました。

「よーし、戻ろうぜ、ハンス。」

「うん。」

その様子を、物陰からハンスとマチルドがうかがっていました。

～～～

「今まで村で略奪をやっていたような連中とは違い、ここの守備兵はかなり屈強なはずだ。ちょっと気を抜いただけで命取りになると思え。…モニカ、やるんだ。」

「はい！ファイアーストーム！」

モニカが叫ぶと、ものすごい火柱が立ち上りました。火柱が消えると、そこに門番の姿はありませんでした。

「いくぞっ！」

ローズとマチルドを先頭に、オリバーたちは牢獄の中に突入してゆきました。

「よしっ、入り口は死守するぞ！」

「はいっ！訓練の成果を見せてやりますよ！」

ハンスとレオンが槍を構えて牢獄の入り口に立ちました。

「む、兵たちが集まってきたようだ。エミリー！一暴れするぞ！」

「はいっ、お姉さま！」

アリスとエミリーは弓をつがえたまま馬を走らせ、兵隊たちの中に突っ込んで行きました。

「アイスストライク！」

モニカが叫ぶと、馬の上の二人を狙う兵に大きな氷の塊がぶつかります。それをくぐりぬけてきた兵隊も、

「通さねぇぜ！」

「うおおおっ！」

ハンスとレオンの気迫の前に倒されてしまいます。

～～～

をひたすら上へと登ってゆきます。中で待機していた兵隊たちもオリバーたちを登らせまいと立ちはだかります。

「邪魔だよっ！」

「どいて…。」

ローズとマチルドは兵隊たちの間を縫ってどんどん先に進んで行きます。

「大人しく道を開けるんだ！」

「邪魔だ邪魔だ！」

「もう、元気なんだから…。あんたたち、こんなところで体力使うんじゃないよ！」

剣を持ったペーター、パトリック、ビアンカも進んで行きます。

「カースアタック！」

「ポイズンラース！」

オリバーとイザベルもペーターたちを援護します。

「俺っちもできることなら手伝いたいところだが…。」

ローレンツが肩をすくめました。

「でも僕らには最後の大仕事が残っていますよ、親方！」

ラルフが興奮した様子で言いました。

「ああ、そうだな！」

すると、少し前で戦っていたペーターの声が聞こえました。

「先生！突破しました！この先でローズたちが別の兵隊と戦っているみたいです！」

「すぐに行くぞ！ローレンツ、頂上まであとどのくらいある？」

「まだ三分の一も登っちゃいないよ。」

「中にこれほど兵隊がいるとは思いませんでしたね。」

「ああ、とにかく行こう。ローズ！マチルド！大丈夫か！」

「あたいらは平気だぜ！」

マチルドが元気よく答えました。

「傷だらけで言われたって説得力ないね！」

ビアンカが笑っています。

「ここを乗り切るまで我慢してください！一段落ついたら手当てしてあげますから！」

イザベルが言いました。

「さすがだぜ！」

オリバーたちは少しずつ上へと登って行きました。

～～～

で組み立てられた簡単な投石機が作動しました。城外の兵士に向かって大きな石が投げ飛ばされます。

「す、すごい…！」

「神の兵器だ！」

民衆たちは驚嘆の声をあげます。ヴォルフはさらに声を張り上げます。

「違う！これは俺たちの仲間がつくったものだ！俺たちの同士がつくったものだ！俺たちの力で、俺たちが戦って、俺たちが勝つんだ！」

「うおおおおっ！」

そこへ、城内からオットー様が出ていらっしゃいました。

「ヴォルフ、皆頑張っておるか。」

「はっ！皆勢いづいています！」

「よし、余も加勢しよう。」

オットー様はそう言って腕まくりをされました。

「みんな聞いたか！オットー様が直々にみんなと一緒に戦ってくださるそうだ！」

「うおおおおおっ！」

オットー様は投石機に乗せる大きな石のところへ行かれました。

「これを皆で運ぶのか？」

「はいっ！」

「よし、皆で力を合わそう！行くぞ！」

「おおっ！」

オットー様は民衆たちとともに最前線で戦いました。パカロン城の

戦いは戦力的にも精神的にも籠城軍の圧倒的優勢な戦況で進んでいました。

～～～

～～～

飛んできた槍は真っ黒に焦げ、地面に落ちました。

「パトリックに見せてやりたいぜ！」

「後でモニカの活躍を教えておいてあげるよ！」

ハンスとレオンが冷やかしました。

「そ、そんな！あっ！アイスストライク！大丈夫ですかエミリーさん！」

エミリーに襲いかかろうとしていた兵士に氷の塊がぶつかりました。

「ありがとう！大丈夫！」

～～～

「鍵穴はこれだな？ラルフ、頼んだぞ！」

「わっかりました、親方！」

ローレンツに言われ、ラルフは針金を鍵穴に突っ込み、中を探るようにしました。やがて、カチャッという音がしました。

「開いた！」

ローレンツとパトリックが二人がかりで重い扉を開けました。

～～～

「魔術師、オリバー・ローゼンハインです。オットー・フランツ様からの依頼でヘルガ王女様の救出に参りました。」

お姫様は困惑したような表情を浮かべられました。

「そんな…信じられませんわ。フランツ殿は亡くなったと…。」

その時、ローズがスッとオリバーの前に出ました。

「王女様…。私もここに…。」

「あっ…あなたはローズ！どうしてあなたがここに！」

お姫様はローズを見てびっくりしたようです。

「先ほどの言葉通りです…。王女様の救出に…。」

「…古いお友達のあなたの言うことを信じないわけにはいきません。助けに来てくださってありがとうございます。」

「ご無事で何よりです。しかし、ゆっくりもしていられません。早くここから脱出しましょう！」

「待ってください！ここの牢獄に閉じ込められている十人の中には悪いことをした人は一人もいません。みんな無実の罪を着せられて捕らえられたのです。きっとここに残された人々はギル大臣に処刑されてしまいます。」

「素晴らしいお方だ…。わかりました。急ぎましょう。ラルフ、また頼んだぞ。」

「わっかりました！」

階段を降りながら、ラルフは今までと同じように鍵を開け、中の囚人たちを救出しました。

「よし、全員救出した！外のみんなを助けに行くぞ！」

オリバーは仲間たちに呼びかけました。

～～～

しかしオリバーたちが外に出ると、もうそこに敵兵はいませんでした。オリバーはレオンのところに駆け寄りました。

「レオン！敵兵は！？」

「喜べ！ついさっき撤退して行ったぞ！」

レオンが嬉しそうに言いました。

「そうか！よくやった！…王女様、今から我々はあなたをパカロンのオットー様のもとへお送りします。」

「それならばこの牢獄の裏手に警備兵たちの馬をつないである納屋があったはずです。その馬を使いましょう。案内いたします。」

～～～

「私も昔から乗馬はたしなんでおりました。馬の扱いには慣れています。」

そう言って王女様は一頭の馬にお乗りになられました。

「われわれもパカロンへ向かいます。ギル大臣を倒すため、少しでもお力になりたい！」

囚人として捕らえられていた元貴族たちも馬にまたがりました。

「よし、アリスはビアンカを、エミリーはイザベルを、パトリックはモニカを乗せてやれ！あと馬に乗れるのは俺とレオンとマチルドだな？他の乗れないやつはどこかの馬に乗せてもらえ！」

オリバーも一頭の馬にまたがりました。その後ろにローズが乗りました。

「王女様と一緒に乗らなくていいのか？古いお友達なんだろう？」

オリバーが言うと、ローズは肩をすくめました。

「いくら何でも恐れ多い…。」

「そ、そうか。まあ、そうだよな…。」

オリバーが先頭となって馬の隊列はパカロンに向けて走り出しました。

～～～

か心を開いてくれませんの。ローゼンハイン殿のことは本当に信用していているようですけれど。」

ローズはオリバーの後ろで恥ずかしそうに顔を赤らめました。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～

城を囲んでいた兵士たちは疲労のため、一旦街を見渡せる丘の上に撤退していました。

「隊長！囲いを破って城に向かって走って行く馬の隊列が見えます！」

「な、何だと！？」

隊長格の兵士が報告を聞いて驚きました。すると、別の兵士が飛び込んできました。

「た、隊長！大変です！昨夜塔の牢獄が襲撃され、囚人たちが解放されたそうです！」

「何っ!?それではあの馬はまさかヘルガ元王女…。」

～～～

「ローゼンハイン殿！心から、心から感謝する！」

「お役に立てて光栄です。ですが、最後の大仕事が残っていますよ。」

オリバーが笑って言いました。

「うむ。そうであったな。

…皆の者！ローゼンハイン殿がキンフィールドの塔の牢獄からヘルガ王女様を救いだしてきてくれた！われらは旧王家復興のため、最後の大仕事をしなければならない！キンフィールドへ進撃し、リバー王国を再建するのだ！」

「うおおおおおおおっ！」

オットー様が叫ばれると、民衆たちは一気に沸き立ちました。

～～～

～ヘルガ・ディートリヒ～

・「王女様」

・２１歳。

・リバー王国の王女様。ギル大臣のクーデターの際、父であるセザール王を殺され、王女様自身は塔の牢獄に死ぬまで閉じ込められることとなった。ローズとは小さな頃によく遊んだ仲。民衆のことを第一に考えて政治をしていた父、セザール王を心の底から尊敬している。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「３８．塔の牢獄」（後書き）

オリバーたちは無事に塔の牢獄に閉じ込められていたヘルガ王女様を助け出し、パカロンに送り届けることができました。外の世界に出られて王女様も大変嬉しそうです。

次話ではオットー様のもとにノーザリン地方のレバリー城主、アルベール様が援軍としてやってくることになります。しかし、マチルドやアリスたちによると、アルベール様はいろいろと曰くつきの人のようなのですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみに王女様をはじめ、塔の牢獄に捕らえられていた人たちは死ぬまで出してもらえないことになっていたとはいえ、食事などは三食きちんと与えられていました。とは言っても、それぞれの部屋には窓もなく、あるのは薄暗いかがり火だけなのですから、とても健康的な環境とは言えません。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「３９．聡明なレバリー公」（前書き）

オリバーと仲間たちは塔の牢獄から無事に王女様を救出しました。
オットー様はその功績をたたえ、オリバーたちに十分すぎるほどのもてなしをしています。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「３９．聡明なレバリー公」

オリバーたちはヘルガ王女様を救出した後、パカロン城に滞在していました。彼らはその功績により、超一級の賓客としてもてなされていました。

しかし、オリバーはそれらの処遇をあまり楽しめていませんでした。彼は一人でお城のバルコニーに出てパカロンの街並みを見ていました。もうすぐ日が暮れようとしています。オリバーはフウッとため息をつきました。と、誰かがオリバーに声をかけました。

「元気がありませんね、ローゼンハイン殿。」

「これは…クララ様。」

オリバーは跪きました。

「どうぞ、お気になさらずに。…何か考えごとですか?」

クララ様が優しい口調でたずねられました。

「いえ、そういうわけではないのですが…。…どうも、このように

もてなされることには慣れていないもので…。」

「意外ですね。数々の依頼をこなしてきたローゼンハイン殿のこと、あちこちからもてなされているものと思っておりましたが…。」

「今までの依頼は確かに困難なものもあったとはいえ、基本的には個人的な利益を追求するための依頼が多かったのです。しかし、今回は違う。オットー様の国を憂う気持ちに、私は本当に感動いたしました。」

「オットー様は民衆たちのことをよく考えていらっしゃいますからね。」

「ですが私がこれまでしてきた仕事は汚れ仕事が大変多かったのです。権力者に頼まれ、無実の者を失脚させたり、邪魔な者を暗殺したり…。

やはり私が元々闇の魔術師だったことを知り、裏の仕事を頼む権力者も多いのです。そのような依頼を受けた時には弟子たちを連れていくことはできませんでした。ですからあの者たちはまだまだ経験不足で…。」

オリバーは哀しそうな笑みを浮かべました。しかしクララ様は穏やかな表情のままです。

「…オットー様がローゼンハイン殿に依頼をしたのは、三年前にグラン王国を荒らしまわり、民を苦しめていた巨大魔獣を倒したという話をきいたためなのですよ。」

「はは、あいつは確かに苦労しました。あまりに危険な相手で、まだハンスとペーターを連れて行くわけにはいかなかったので、一人で行ったのですが…。人々の喜ぶ顔が見られてよかったと思いました。

とはいえ、やはり今までの依頼を考えると…、」

肩を落とすオリバーに、クララ様は一転して真剣な表情で問いかけられました。

「…ローゼンハイン殿、あなたは良い依頼と悪い依頼、どちらをこなすのが好きなのですか？」

オリバーは驚いたような表情をしましたが、はっきりと答えました。

「当然、良い依頼です。」

「ではこの度のオットー様からの依頼、ローゼンハイン殿から見て良い依頼なのですか?それとも悪い依頼なのですか?」

「もちろん、良い依頼です。」

すると、クララ様は笑顔に戻っておっしゃいました。

「では気に病むことはありませんよ、ローゼンハイン殿。あなたは好きな依頼を受けることができて、私たちもそれによって救われるのです。」

オリバーはハッとしたような表情を浮かべました。

「…そうでしたね。ありがとうございます、クララ様。少し気分が楽になりました。」

「私たちも心からローゼンハイン殿を頼りにしています。どうか最後までよろしくお願いしますね。」

「もちろんです、クララ様。」

オリバーはすっかりと自信を取り戻したようです。

「さあ、城内に戻りましょう。夕食の準備が出来ていますよ。」

「わかりました。」

オリバーとクララ様は一緒にお城の中に入って行きました。

～～～

「はっ。」

～～～

「突然お城の屋根に上ったかと思うと角笛を吹きならしたり、家臣に何も言わずにお城を抜け出して街で豪遊したり、おかしな話が絶えません。」

「そんなお方が加勢なんて…、気が進まないなぁ…。」

ペーターはつぶやいた後、ローズがみんなを睨みつけていることに気がつきました。

「ローズ…？どうしたんだ？」

「アルベール様は素晴らしい人…。悪口は許さない…。」

ローズは頬を膨らませています。マチルドが信じられないといった顔をして言いました。

「何言ってるんだよ？あんなバカ領主を素晴らしいなんて、ローズ、おかしいんじゃねえのか？」

「もう…いい…。」

ローズはプイッと不機嫌そうにそっぽを向くと、部屋を出て行って

しまいました。

「…でもよ、バカ領主、とか言われてたとして、たくさんの兵隊を率いてくるなんて変じゃねぇか？普通なら兵士もついてこねぇだろ？」

レオンが怪訝そうな顔をして言いました。

「それは確かにそうだね。兵士というものは指揮をする者の能力が高くなければついてくるものではないしね。」

パトリックも同調しました。

「どのみちもうすぐご到着されるんだ。お前らも会うことになるだろうし、その時に判断しろよ。」

ヴォルフが言いました。

「ああ、そうだな。」

「あたし、心配だからローズのところに行ってくるよ。」

ビアンカがオリバーに言いました。

「よろしく頼む。」

「ほいよー。ハンスも来る?」

「あ、うん。行くよ。」

〜〜〜

「いったい、アルベール・アズナヴール様という方はどのような方なんだろう…。」

そこへ、リリーがやってきました。

「オリバー、パトリック、そろそろアルベール様が大広間にいらっしゃるよ。あんたたちも大広間に来な。」

「ああ、わかった。」

～～～

「まったく、信じられねぇぜ。だいたいお前、あのバカ領主と何か関係でもあるのか？別にお前、ノーザリン生まれじゃねえだろ？」

「シーッ、アルベール様がお見えになりましたよ。」

イザベルがたしなめました。大広間の扉が開き、立派な服を着た男性が家来を連れて中に入ってきました。と、オットー様が立ち上がられました。

「アズナヴール殿！久しいな！」

「フランツ殿！ようやく時が来たのだな！」

二人は大広間の真ん中で肩を抱き合って喜びました。アルベール様が連れてきた家来はにこやかに二人を見ていますが、オットー様の家来はポカンと口を開けてその様子を見ています。クララ様やヘルガ王女様も不思議そうに二人をご覧になっています。やがてアルベール様は王女様の前でひざまずきました。

「…クララ王女、遅ればせいたしまして申し訳ございません。レバリー城主、アルベール・アズナヴール、只今参上しました。」

「アズナヴール殿…。失礼なことを言うようですが、あなたはお気がふれてしまったと…、」

ヘルガ王女様は戸惑いを隠せないようです。オットー様が笑っておっしゃいました。

「私が説明いたしましょう。わが友人アズナヴール殿は気が触れたふりをして戦力を集めていたのです。」

王女様は大変驚かれました。

「何ですって?」

「そうすればギル大臣から目をつけられずに済みます。…とは言え、本当は徹底抗戦をするつもりだったのですが…。」

アルベール様は申し訳なさそうにおっしゃいました。

「と、言いますと?」

「本当はフランツ殿をかくまい、すぐにでも兵を挙げようと思ったのですが、あまりにギル大臣の兵の動きが早かったもので…。やむ

を得ず、早急な挙兵を諦めたのでございます。」

「そうでしたか…。ともかく、駆けつけてきていただいて感謝いたしますわ。レバリー公の直属軍はつわものぞろいと聞いております。大変心強いですわ。」

王女様は心からアルベール様にお礼を言いました。

「必ずやお役に立ってご覧にいれましょう。」

そう言ってアルベール様はオリバーの方をご覧になりました。

「…あなたがこの国の救世主、オリバー・ローゼンハイン殿か。かねがね噂には聞いておる。」

「もったいなきお言葉…。」

オリバーはひざまずきました。

「よくぞフランツ殿の挙兵を助け、ヘルガ王女を救ってきてくださった。これからは共に頑張ろうではないか。」

「はっ。」

アルベール様はそう言ってオリバーと仲間たちを見渡されました。
そしてローズと目があった時、アルベール様は大変驚かれました。

「おや、もしやミニエー家のローズ嬢かな?」

ローズは慌てて頭を下げました。

「大きくなられたな…。ローゼンハイン殿の手助けを?」

ローズは頷きました。

「そうか…。しっかりとローゼンハイン殿を助けるのだぞ。」

「はい…。」

アルベール様は満足そうに頷くと、大広間を出て行かれました。

「まさか気が触れた振りをなさっていたとは…。」

「驚きましたね…。」

アリスとエミリーは驚きを隠せないようです。

「あの方の家来を見ると、中央の役人だったやつもちらほら見えたぜ?うまく手なずけて自分の元に引き込んだんだな…。」

ローレンツが感心したように言いました。

「聡明なお方だ…。」

オリバーは心から感服したようです。

「そ、それじゃあローズとバカ…じゃなくってアルベール様はどんな関係なんだ!?」

マチルドの言葉に、ローズはまたプイッとそっぽを向いてしまいました。代わってハンスとビアンカが説明しました。

「あー、何でもさ、ローズの命乞いをしてくれたのは、あのアルベ

ール様だったらしいんだ。」

「確かに、アルベール様のアズナヴール家とローズのミニエー家は仲が良かったはずだからね…。」

「そうだったのかよ…。ごめんよ、ローズ。」

マチルドが申し訳なさそうにローズに謝りました。

「もう、いい…。とにかくアルベール様は素晴らしい人…。」

ローズは自分のことのように誇らしげに胸を張りました。

～～～

「それもそうですが…、確かアルベール・アズナヴールはミニエー家の末娘の命乞いをしていましたが…。」

レイが言いました。

「そうだ…！今までは気が触れているとはいえ大きな力を持っていることには変わりないアルベール・アズナヴールのことがあって手出しは出来なかったが…、やつが反旗を翻した以上、ミニエー家狩りに終止符を打つことも可能になったわけだな！」

「そのことで、面白いことがわかりましたわ、ギル大臣。以前ダナラスフォルスから逃げ帰ってきて処刑した兵士の記憶を見てみたのですが…、ミニエー家の末娘、ローズ・ミニエーによく似た女が兵士と戦っている様子が見えましたわ。」

「なるほど…、ミニエー家の末娘が私に恨みを抱いてオリバー・ローゼンハインに与したか。ハハ、面白い。

ようし、明日、その旨を発表することとしよう。捕まえた暁には大衆の前で処刑し、オットー・フランツたちへの見せしめにするのだ。」

「では明日にでも国中におふれを出しましょう。」

「それと…、明日、私の手持ちの精鋭軍をナンジューマに向かわせる。目指すはユーラン砦だ。」

「ユーラン砦…、ホセ・アルフォンソの三人の娘がたて籠って抵抗をし続けているところですね？」

「これまで攻めあぐねていたが、この機会だ。総力を持ってつぶしにかかろうと思う。」

「しかし、マティアスを派遣する必要はないのですか？以前マティアスは『自分ならアルフォンソ三姉妹を戦わずして休戦することが出来る』と申しておりましたが…。」

「こんな時に悠長に停戦交渉などできぬ。オリバー・ローゼンハインもオットー・フランツのパカロン城にいるということが分かったのだ。オットー・フランツがユーラン砦へ救援に向かうようなことがあれば、その隙にパカロン城を攻撃させよう。」

～～～

～アルベール・アズナブール～

・「賢い領主」

・３８歳。

・ノーザリンのレバリー城主。レバリー公と呼ばれることも。オットー様とともに早くからギル大臣の対抗勢力として君臨していた。クーデターの際にはわざと気が触れた振りをして時が来るまで力をためていた。また、過去に行われたミニエー家狩りの際にはまだ幼かったローズの命乞いをした。そのためローズにはとても慕われている。彼が指揮するレバリー歩兵団は最強とも謳われた。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「３９．聡明なレバリー公」（後書き）

レバリー城主、アルベール様がオットー様のもとに援軍として駆けつけました。賢いアルベール様と強力な歩兵団は心強い味方です。

次話ではギル大臣が国中に「ミニエー家狩り」＝「ローズの抹殺」を指示するおふれを出します。それが原因でひと騒動起こるようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアルベール様は「レバリー公」という肩書で、レバリー城に住んでいますが、ノーザリンには大きい街は実際のところレバリーくらいしかなく、アルベール様は実質的にノーザリン地方全体を治めている状況です。だからアリスたちもアルベール様について知っていたのです。ちなみにオットー様が治めていたのはパカロンとその周辺の小さな街や村だけです。

では次話をおたのしみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４０．ミニエー家狩り」（前書き）

アルベール様がオットー様に加勢したことで、すっかりとアルベール様にだまされていたギル大臣は激怒しました。そしてかつてアルベール様が命乞いをしたローズを捕える旨のおふれを国中に出しました。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４０．ミニエー家狩り」

キンフィールドの街に、一枚の立て札が立ちました。

〈ミニエー家の末娘、ローズ・ミニエーを捕縛してきたものには賞金として十万カドニーを与えるものとする。ギル大臣〉

「じゅ、十万カドニーだってよ…。」

「すごい大金だ…。」

「金…金…。」

～～～

「はっ。」

伝令兵はオットー様に一礼すると、その場を去って行きました。

「ローズを捕えろだなんて…、もしギル大臣に捕えられたら命はありませんわ。」

ヘルガ王女様も心配そうなお顔をされています。

「フランツ殿、ローゼンハイン殿たちにも伝えた方がよいのではないか？」

アルベール様も心配そうです。

「うむ…。ヴォルフ、ローゼンハイン殿たちに伝えてきてくれ。」

「はっ。」

ヴォルフは一礼すると大広間を後にし、オリバーたちのいる部屋に行きました。

～～～

「そういうことはギル大臣に言ってくれよ。俺だってお前らがそんなことするなんて思っていないさ。」

「問題は…人間なんて、私たち仲間以外にも大勢いる、ってことだね。」

パトリックは困った顔をしてため息をつきました。ローズはプイッとそっぽを向くと、部屋を出て行きました。

「あ、待ってよ、ローズ！…むー。イザベル、あたしたちもついて行こっか。」

「ええ、そうですね。一人にするのは少し心配です。」

イザベルとビアンカも部屋を出て行きました。

～～～

「よう、オリバー。どこへ行っていたんだ？」

レオンが声をかけました。

「ああ、ここの兵士に護衛してもらって市に行ってみたんだ。みんな安心して商売をしているようだな。さすがはオットー様だ。」

「一時的とはいえ、王女様もいらっしゃるからな。」

「そう言えば、そろそろ王女様たちとの会食の時間ですね。」

エミリーが言いました。ペーターが喜びました。

「やった！今日もたくさん食べるぞ！」

「お前はもう少し節度というものをわきまえないか。…あれ、ローズがいないな。イザベルもビアンカもいない。」

オリバーが辺りを見渡しました。すると、モニカが言いました。

「さっき出て行きましたけど…、もうそろそろ帰ってくるんじゃな

いですか？多分リリーさんのところにでも行ったんだと思いますけど…。」

「しょうがないな…。じゃあ先に広間に行くとするか。」

～～～

オリバーはアルベール様とお話をしています。

「ローゼンハイン殿はミニエー家のローズ嬢と共に行動されているようだが…、彼女からミニエー家狩りの話は聞いているかね？」

「いえ…、ローズは内気で少し他人としゃべることを苦手としているようなので…。詳しい話は存じません。アルベール様はよくご存じかと思います。願わくは、お聞かせいただけないでしょうか？」

「わかった。ではお聞かせしよう。

…ことの発端は十三年前、ギル大臣によるミニエー家の焼打ち事件に始まる。余はまだ二十五であったのだが、当主である父が死んだため、アズナヴール家を継いでいた…。

その日、ミニエー家はギル大臣からの呼び出しを受け、一族を連れてキンフィールドへ向かった。だがキンフィールドに着いて、翌日の王様への謁見を前に彼らが宿泊していた宿に火が放たれたのだ。一族の大半はそこで焼け死んだ。

生き残ったのはローズ嬢、ローズ嬢の母上、ローズ嬢の伯父上とその三人のご子息のみだ。ローズ嬢は母上に連れられてミニエー家と親交の深かった余のアズナヴール家に助けを求めてきた。余は二人をかくまったのだが…、やがてそのことがギル大臣に知られてしま

った。ギル大臣は余を城に呼び出し、二人を差し出さなければ武力でアズナヴール家を滅ぼすと言ってきた。余は国賊になることを覚悟でギル大臣と戦うことを決めた。

だがその夜、密かにローズ嬢の母上が余の屋敷を抜け出し、ローズ嬢の命乞いをするためにギル大臣の元へ向かったのだ。だがギル大臣は全く取り合わず、次の日の昼間のうちに母上を処刑してしまったのだ。

そこで余は方針を変えることにした。余はミニエー家の残された財産をすべてギル大臣に差出し、これでローズ嬢の命だけは救うように懇願したのだ。目の前に積み上げられた財宝に目を奪われたギル大臣はそれを了承した。だがそれでも用心したギル大臣は、着の身着のままローズ嬢を屋敷から放り出すことも条件とした。まだ幼かったローズ嬢だが、その話を聞くと何も言わずに余の屋敷を出て行ったのだ…。

他に生き残ったローズ嬢の伯父上と三人の息子のうち二人はしばらく国外に亡命していたのだが、三年前の事件の際、ヨーゼフ王の力になろうと出陣してきたのだが、魔術師に捕らえられ、しばらく監禁されたのちありもしない嫌疑も追加された上にオーベルクで公開処刑された。そして三人の息子のうち最後の一人は身分を隠してパカロンに住んでいたのだが…、ついこの前素性が知られてしまい、処刑されてしまったのだ。」

「それがマウント家、ということですか…。」

ラルフがため息をついて言いました。

「でも、どうしてその頃ヨーゼフ王はギル大臣の暴走を止められなかったんだろう？」

レオンが首をかしげました。すると、今度はオットー様がおっしゃいました。

「それはまだヨーゼフ王が王位についていなかったためだ。その頃も今ほどではないが、国が荒れていた。理由は病気で衰弱なさっていたヨーゼフ王のお父上がなかなか王位を譲らず、ギル大臣に国務のすべてを任せきりにしていたためだ。しかしお父上が亡くなるとヨーゼフ王が王位に就き、ギル大臣の動きを上手くけん制し、国内に善政をしいたのだ。

余もアズナヴール殿も、ヨーゼフ王の後に一人娘でいらっしゃるヘルガ王女をしっかりと補佐するようにと言われていたのだが…、ここまで時間がかかってしまい、非常に申し訳ない気持ちでいっぱいなのだ。」

その時、外から騒ぎ声が聞こえてきました。

「何だ？何かあったのか？」

マチルドがスープ皿から顔を上げて首をかしげました。その時、伝令兵が広間に駆け込んできました。

「ご報告いたします！パカロン市街で人が襲われたとのことでございます！」

「物騒だな…。もうすぐキンフィールドへの兵を挙げるというところで、面倒ごとにならなければよいが…。」

オットー様が迷惑そうな顔をしました。その時、伝令兵がもう一人走ってきました。真っ青な顔をしています。

「ご、ご報告いたします！パカロン市街で襲われたのは、ミ、ミニエー家のローズ様です！」

「な、何だって！？あいつ、街に出ていたのか！？」

オリバーは驚きました。

「そして襲ったのは…兵士です。パカロンの…。」

今度はオットー様が血相を変えて立ち上がられました。

「何だと!?余の兵士がローゼンハイン殿の仲間であるローズ嬢を襲撃したというのか!その兵はどうなっているのだ!」

「捕らえられているようでございます!」

「余が直々に向かう!案内せよ!」

オットー様は部屋の奥にあった剣をとり、真っ赤な顔でおっしゃいました。

「私たちもお供いたします!」

オリバーたちも立ち上がりました。

～～～

た。しばらく歩くと、黒山の人だかりができているところがあります。

「どけ！どくのだ！オットー・フランツ様のご到着だ！」

伝令兵が声を張り上げ、人だかりの中に道ができました。

「んっ、お嬢ちゃんたちがいるぜ。」

ローレンツが指を差しました。輪の中心で、ローズがへたり込んで座っているのが見えます。そのそばには市民に抑えつけられている一人の兵士の姿が見えます。オリバーはローズの横にいるイザベルとビアンカに厳しい声で言いました。

「…状況を説明しろ。」

「説明も何も、街を歩いていたらいきなりこの兵士が襲って来たんだよ。きっと、十万カドニーに釣られたんだろうね。」

ビアンカが口をとがらせて言いました。

「ローズさんも怪我をしたんですけど、とりあえずは何ともないで

すね…。」

イザベルは困惑しながら言いました。

「ぎゃあああああっ！」

突然後ろで大きな悲鳴が聞こえました。オリバーが振り返ると、オットー様が血の滴り落ちる剣を握りしめられています。

「余の兵に…、裏切り者などいらぬ…！」

ローズはそれまで怯えた表情で兵士を見ていましたが、少し安堵したような表情を浮かべました。その瞬間、ローズにオリバーの雷が落ちました。

「ローズ！どうして勝手にこんなところをうろついていた！」

オリバーの剣幕に、ローズはキュッと体を縮めました。

「お前もギル大臣の立て札の話は聞いただろう！？自分のおかれている立場というものがわかっているはずだ！もちろんお前を野放しにした俺たちにも問題はあるがな。…だがお前が勝手な行動を取ら

なければ、少なくともこんなことにはならなかったはずだ！オットー様にもご迷惑をおかけしてしまったんだぞ！違うか！」

ローズはもう泣きだしそうな顔をしています。それを見たオットー様がたまらずにオリバーに声をおかけになられました。

「…ローゼンハイン殿！…もうよい。兵士を統括するものとして、今回のことは余にも責任がある。余に免じて、ローズ嬢を赦してやってはもらえぬか？」

「オットー様…。わかりました。

…ただしローズ！お前がしなければならないことはわかっているな？」

ローズはまだ泣きそうな顔をしていましたが、おずおずと立ち上がると、オットー様に言いました。

「申し訳ございません、オットー様…。」

オットー様は笑顔を見せてローズにおっしゃいました。

「余に謝ることはない。それよりも、アズナヴール殿にこのことを包み隠さず話すことだ。アズナヴール殿ならしっかりとあなたのことを叱ってくれることだろう。

…さあ、もう城に戻ろうではないか。ヘルガ王女も心配されておられるだろう。なあ、ローゼンハイン殿。」

「…はい、わかりました。」

オリバーは疲れた顔でオットー様につき従って歩き出しました。ローズはまだうつむいていましたが、ハンスとペーターに肩をポンと叩かれて、二人に支えられるようにして帰って行きました。

～～～

「アルベール様は笑って一言だけ、『せっかく残っている命、無駄にしてはいけない』って言われた…。王女様は私の顔を見てお泣きになられていた…。」

「そうですか。…ごめんなさいね、私たちももう少ししっかりしていれば…。」

イザベルが申し訳なさそうに謝りましたが、それを聞いたマチルドが言いました。

「何言ってるんだよ。イザベルもビアンカも悪くないぜ。悪いのはローズだけさ。」

「…実際、その通り…。」

ローズは肩をすくめました。

「だが、気に病むことはないぞ。オットー様もアルベール様もお許しくださったわけだ。オリバーとて、お前を大切に思っているからこそあのような厳しい言葉を吐いたのだ。今後はお前自身が気をつければ良いだけの話だ。まずは元気を出すことだな。」

「でも、今後は私たちもローズさんの周りには十分注意しなければなりませんね。またいつどこでこのようなことがあるかわかりません。」

アリスとエミリーが励ますように言いました。

「ギル大臣のおふれはローズさんを捕まえることを目的としています。だからいきなり遠くから矢が飛んできたりすることはないと思います。近くに注意しておけば大丈夫だと思いますよ。」

モニカも続けます。

「みんな、ありがとう…。」

ローズは嬉しそうに微笑みました。

「よっしゃあ、それでこそローズだぜ！」

マチルドが満足そうに言いました。他の仲間も嬉しそうです。しかし、ビアンカはしかめっ面をしています。エミリーがそれに気づき、たずねます。

「どうしたのですか、ビアンカさん。」

「何か…、いる…。邪悪な何かが…。」

ビアンカはサッと扉の方へ走りました。

～～～

三人は逃げようとしましたが、一歩遅かったようです。

「ふふふー、はい、三人とも。もう手遅れだね。」

ビアンカが薄笑いを浮かべています。

「うっ…。」

「ふむ、貴様ら。覗き見をするとはなかなかいい度胸を持っているではないか。」

ビアンカの後を追ってきたアリスが、まるでゴミを見るような目で三人を見ています。

「い、いや待て、これには深ーいわけが…。」

「わけってどんなわけ？悪いけどね、あんたたちが前からずっと覗いてたことくらい知ってたんだから。」

ビアンカが言うと、レオンたちは真っ青な顔になりました。

「えへへ、本当はカマかけただけなんだけどね。さぁ、これで言い逃れできないよ！問答無用！引き込めーっ！」

ビアンカが号令をかけました。

「うむ。エミリー！手を貸すのだ！」

「はいっ！お姉さま！」

「違う！そこは違うぞエミリー！いくらお前が慕う姉でも、逆らっていい命令もあるんだぞ！」

レオンが焦って言いましたが、エミリーは目をギラギラさせています。

「これが逆らっても良い命令だとお思いですか？いえ、むしろ自らやるべきでしたね。」

ハンスとペーターも顔面蒼白です。

「いやだぁーっ！先生、助けてーっ！」

「今さら遅い！さあ、男なら観念しろ！」

「ぎゃあああああっ！」

それからしばらく、彼女たちの部屋から三人の男たちの悲鳴が聞こえ続けたということです。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４０．ミニエー家狩り」（後書き）

何とかこの日の騒動はおさまったようですが…、結局このメンバーではいい話ではまとまらないようですね。しかし、ギル大臣の目がオリバーたちにしっかりと向けられていることは間違いないようです。

次話ではナンジューマ地方にあるユーラン砦からオットー様のもとに救援を要請する使者がやってきます。オットー様はそれを受けて騎馬軍団を率いて出撃します。どうぞお楽しみに！

ちなみにローズを襲った兵士ですが、オットー様の挙兵には従っていたのですがだんだん恐ろしくなって脱走の機会をうかがっていました。そんな時ギル大臣のおふれが目に入ったので、ローズを捕えてギル大臣に献上し、ギル大臣の配下に入れてもらおうと考えていました。オットー様はこれ以降いっそう兵士の統率には気を使うことになります。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４１．三姉妹の砦」（前書き）

ローズの襲撃事件の二日後の真夜中、寝室で寝ていたオットー様のもとに伝令兵が駆け込んできました。どうやら緊急事態のようです。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４１．三姉妹の砦」

真夜中、オットー様の元へ、伝令兵が駆け込んできました。

「オットー様！ご報告いたします！ナンジューマ地方、ユーラン砦のアルフォンソ三姉妹の元より使者が参りました！しかし、傷ついて絶命寸前です！」

オットー様はベッドから飛び起きました。

「何だと？すぐに大広間に通すのだ！余もすぐに向かう！」

～～～

オットー様は使者に歩み寄りました。

「救援の要請に参上しました…。我々のユーラン砦は突如ギル大臣の兵士による強襲を受け、大変苦戦しております。」

オットー様は驚かれました。

「難攻不落のユーラン砦を守るアルフォンソ三姉妹の兵は強く勇敢だと聞く…。それでも苦戦しているのか。相当切羽詰まった状況であるようだな。わかった。すぐに援軍を出そう。」

「ありがたき…幸せ…。」

そう言って使者は倒れこみました。伝令兵が駆け寄りましたが、首を横に振りました。

「自身の使命を全うしたか…。手厚く葬ってやれ…。

…皆の者、余の軍が誇る騎馬軍団の出陣用意だ！向かうはナンジューマ地方のユーラン砦！」

オットー様が指令を出しました。

～～～

で殺された。その三人の娘が砦にこもってずっと抵抗を続けていたんだ。

三人とも父親の血を忠実に受け継いでいて、兵士の動かし方がとてもうまいんだ。それを救援するとなると…、本当に危険な状況なんだろう。」

「そうなのか…。よし、俺たちもオットー様の手助けをして差し上げよう。ヴォルフ、俺たちも何人か選抜して行く。オットー様にその旨を伝えてきてくれ。」

「わかった。お前らがいると心強いな。」

ヴォルフはオットー様の元へ走って行きました。

～～～

アズナヴール殿、城の守備とヘルガ王女のことをよろしく頼んだ。」

「任せるのだ、フランツ殿。」

オットー様とアルベール様は固い握手を交わしました。

「では参ろうか。皆の者！出陣だ！」

「おおーっ！」

エミリーがオットー様に言いました。

「オットー様、私たちは先頭集団に入ります！」

「うむ、任せた！」

アリスとエミリーがカトリーヌとアンヌを操り、隊列の先頭集団に混ざりました。

「パトリック、お前たちは最後尾を頼む！」

オリバーがパトリックに言いました。

「任せてくれ！」

パトリックとレオンを乗せたフランソワは隊列の一番後ろにつきました。騎馬軍団は一路ナンジューマへと南下して行きました。

～～～

「敵の数は…千人以上です…。ギル大臣は手持ちの主力部隊をぶつけてきたようです…。」

苦しそうに答えたのは次女のディアナ・アルフォンソです。彼女の怪我が三人の中で一番重いようです。

「無理はしないでください。」

フロレンシアが心配そうに言いました。

「矢を五本受けても死なないなんて…さすがは父上の娘ね。」

アブリルが笑って言います。

「姉上だって、矢を受けたではありませんか。」

「大丈夫、大丈夫。それよりも、そろそろ使者がパカロンに着いたと思うけど…。」

アブリルが心配そうに言いました。

「オットー・フランツという人間は義理固い人物だと聞いています。きっと救援に駆けつけてくれるでしょう。」

「そして彼が駆けつけてきてくれた時が…、私たち姉妹の最期の時…。」

アブリルは今度は緊張した表情になりました。

「覚悟は…出来ています。」

「アルフォンソ家は十分に武勇伝を残しました。これを最期の締めくくりとすることにしましょう。」

ディアナとフロレンシアも何かの決意を固めているようです。

「ええ。…フロレンシア。兵をここに集めなさい。私たちの最期の作戦を伝えることにしよう。」

「はい、姉上。」

～～～

「えっ!?それはどういうことなんですか?」

オリバーの馬の後ろに乗っていたハンスが驚いた顔をして言いました。

「つまり、どんな場面でも死ぬ覚悟は出来ている、ということだ。逆にそういう覚悟を決めて戦うからとても強い。彼女らは今までに一度も負けたことがないそうだ。」

「ではオットー様に加勢してくれるとしたら、心強い戦力となりますね。」

「そうだ。だからこそ、今は持ちこたえてほしい…。」

オットー様は祈るように空を見上げました。空は次第に明るくなってきていました。

～～～

見えてきました。

「砦はたくさんの王国軍に囲まれています。千人はいるでしょう。」

「砦の中の兵士も必死で抵抗しているようです。」

先頭集団にいたアリスとエミリーがオットー様に報告しました。

「まだ助けられるな。よし、進撃だ！」

～～～

アブリルは驚いたと同時に、満足そうな表情を見せました。

「うん、私たちの意思を受け継いでもらうに値する人物だね。たったこれだけの時間でそれだけの数の兵をそろえて駆けつけてきてくれるんだから。」

「姉上、それではそろそろ行きましょうか…。」

「そうだね。…よし、そこに積んである武器を城の外に投げ捨てろ！そして門をすべて開け！」

アブリルは兵士たちに指示を出しました。

～～～

「止まれ！止まるのだ！」

オットー様が兵士たちに命令し、騎馬軍団の動きがピタリと止まりました。

「…様子を見る。」

その様子を三姉妹が見ていました。

「ものすごい統制力です…。」

「父上が見込んでいただけある…。よし、ディアナ、フロレンシア、行こう。」

「はい。」

～～～

に詰め掛けていた兵士たちが、姉妹を取り囲みました。

「お前たちはアルフォンソ三姉妹だな？」

敵軍の隊長が問いかけました。しかし三姉妹は何も言いません。

「降伏しに出てきたのか？」

三姉妹はやはり何も言いません。その間に兵士たちが完全に三姉妹を取り囲みました。

「おい！何か言ったらどうなんだ！」

敵軍の隊長は声を荒げました。すると、長女、アブリルがニヤリと笑って言いました。

「攻撃開始！」

途端に砦の中から兵士たちが敵兵に向かって突っ込んできました。敵兵は大混乱です。取り囲まれていた三姉妹の姿はあっという間に血に染まり、見えなくなってしまいました。

「そ、そんな…。」

「一瞬のこの混乱を誘うためだけに、自分たちを犠牲にするとは…。」

レオンとパトリックが茫然としています。しかし、オットー様はすぐさま決断しました。

「…この数少ない機会に、余の軍も便乗せよ、ということか…。皆の者！総攻撃だ！」

「うおおおおっ！」

オットー様の命令で、騎馬軍団も敵兵に突っ込みました。前からは決死の覚悟で向かってくる砦の兵士、後ろからは勢いよく突っ込んでくるオットー様の騎馬軍団、ギル大臣所属の兵といえども寄せ集めの兵士が多かったため、戸惑う兵士がほとんどです。

～～～

す。しかし、砦の兵士も半分ほどになってしまっていました。オットー様たちは砦の中に入りました。

オットー様はその時砦の兵たちをまとめ、攻撃を指揮していた兵士、ガスパール・カルデイロに聞きました。

「…三姉妹はどうしてあのような作戦をとったのだ?」

「勝ちを求めるなら、より確実な方法をとるべきだ。それがあの方々の方針でした。それにあの方々は、あなた方なら我々の意思を間違いなく受け継いでくれる、そう思ったようですね。」

「つまりは、余ならギル大臣に間違いなく勝てる、と?」

「恐らくはそう思われたのでしょう。そうするためにはあなた方には必ず勝っていただかなくてはならなかった。だからあなた方が戦いやすいよう、敵兵の混乱を誘うため、自ら命を…。」

そこまで言ってガスパールは言葉を詰まらせました。周りの生き残った兵士たちも涙を流しています。

「下々の兵士にでさえ、あの方々は良く気をつかってくださった…。本当に、本当に素晴らしい方々だった…。」

オットー様はガスパールの肩に手を置き、言いました。

「…このような時にこのようなことを言うのもおかしな話ではあろうが…、これからはパカロンに来て余のもとで戦ってはくれぬか？アルフォンソ三姉妹の遺志は、必ず余が実現させて見せる。」

すると、ガスパールは立ち上がって言いました。

「あの方々からも、生き残った者はあなたのもとで戦うように言われています。ぜひパカロンに連れていってください。」

他の砦の兵士たちも一斉に立ち上がりました。

「心強い戦力が増えましたね、オットー様。」

オリバーがオットー様に言いました。

「うむ、そうだな。…アルフォンソ三姉妹、あなた方と一度会って話がしてみたかった…。あなた方の最期の戦いも、あなた方の勝ちだ。あなた方は生涯で一度も負けなかったのだ…。」

～～～

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４１．三姉妹の砦」（後書き）

オットー様は素早い行動で、アルフォンソ三姉妹は命を落としたとはいえ、砦の救出には成功しました。ユーラン砦の兵士たちは今後貴重な戦力としてオットー様たちを助けていくことになります。

次話では先にパカロンに戻っていたパトリックが、オットー様のもとに帰ってきてパカロン近くのシュバルツ平原でアルベール様の軍と衛兵隊長マティアスが率いる軍が戦っているという報告をします。この戦いは今までで一番大規模な戦いとなるようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにアルフォンソ三姉妹がとった「最期の作戦」ですが…、正直、作者自身もこのような戦法が有効なのか、また、卑怯であると判断されないだろうか、と、考えてしまうことがありました。ただ、三姉妹が降伏の意を明確に示していたわけではないので、捨て身の作戦の一つ、と考えてはいますが…。間違いなく言えることは、ギル大臣の戦力は大幅に減少した、ということですね。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４２．シュバルツ平原の戦い」（前書き）

ユーラン砦の兵士を救出したオットー様率いる騎馬軍団はパカロンへ帰る途中です。アルベール様や王女様に報告するためパトリックが先にパカロンへ帰っています。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４２．シュバルツ平原の戦い」

オットー様の騎馬軍団とユーラン砦の残存兵はパカロンに向けてゆっくりと歩みを進めていました。

「よし、このあたりで休憩を入れるとしよう。夕方にはパカロンに帰れるだろう。」

オットー様がヴォルフに言いました。

「はっ。休憩だーっ！」

ヴォルフの声に、隊列は足を止めました。

～～～

方になら小隊を任せてもかまわぬくらいなのだが…。」

しかし、アリスとエミリーは申し訳なさそうに言いました。

「有難きお言葉ではございますが…、私たちはやはり街での暮らしに慣れることが出来ませぬ。すべてが終わった暁には、またノーザリンの樹海に帰ろうと考えております。」

「あの樹海のあたりにはギル大臣の迫害によって親を失くした子どもたちがたくさんおります。その子どもたちの世話をしてあげようと考えております。」

オットー様は心から残念そうにしました。

「そうか…。残念だが、あなた方の意思に逆らうわけにもゆくまい。だが立派な志をお持ちのようで、余も感服した。余も出来る範囲で協力させてもらおう。」

「もったいなきお言葉…。」

その時、遠くから馬のいななきが聞こえてきました。エミリーが不思議そうな顔をしました。

「あら…？これは、フランソワの声…。」

「えっ？エミリー、声だけでわかるの？」

ハンスがびっくりしたように聞き返しました。レオンは怪訝そうな顔をしています。

「だがパトリックは報告のために一人で先にパカロンに帰ったはずだ。どうして戻ってくるんだ？聞き間違いじゃねぇのか？」

「聞き間違えだなんて。馬の鳴き声は一頭一頭違うのです。それにいつもフランソワたちに餌を与えていたのはわたくしですよ？」

エミリーが少しムッとしたように言いました。

「じゃあアリスのカトリーヌにも？」

「もちろん。」

ハンスの問いにエミリーは胸を張りました。

「うぬ…、いつもいつもすまぬ…。」

アリスは申し訳なさそうに肩をすくめました。

やがてエミリーの言葉通り、パトリックがフランソワを走らせてきました。厳しい表情をしています。後ろにはイザベルとモニカが乗っています。オリバーはびっくりしました。

「イザベル！モニカ！」

オットー様も驚かれたようです。

「ティボー殿！いったい何事だ？」

「大変です。ギル大臣の兵がパカロン方面へ攻めてまいりました。」

「何だと！？」

パトリックの報告に、オットー様は思わず叫びました。

「アルベール様がノーザリンとパカロンの歩兵部隊を率いてシュバルツ平原で迎え撃っている、とのことです。」

「シュ、シュバルツ平原!?そんなところまで敵兵が攻めてきているのか!?」

今度はヴォルフが大声を上げました。ハンスがたずねます。

「シュバルツ平原って、どこにあるんですか?」

「パカロンの目と鼻の先だ。そこを突破されたらあとは城にこもって戦うしかない。」

「それに、兵を率いているのはキンフィールドの衛兵隊長、マティアスだという噂も…。」

オットー様はパトリックの言葉を聞いて、さらに厳しい顔をされました。

「マティアスだと!?…これはすぐに向かわねばならないな。ヘルガ王女はどうしておられるのだ?」

「パカロン城に残っておられます。守備兵も、百人ほど…。」

「俺の仲間は？」

オリバーがパトリックにたずねます。

「ローズ、マチルド、ローレンツ、ラルフが残っているよ。出ているのはペーターとビアンカだね。」

「ローズ嬢がいれば、ヘルガ王女の気持ちも幾分か楽であろう。…よし、ヴォルフ。お前はユーラン砦の兵たちを率いて後から追いかけて来い。」

「はっ！」

オットー様の言葉に、ヴォルフは力強く答えました。

「レオン、あんたは俺が乗っていた馬に乗ってくれ。俺とイザベルはカトリーヌとアンヌの後ろに乗せてもらう。」

オリバーはレオンに言いました。

「わかったぜ。じゃあハンスは俺の後ろに乗れ。」

「よし、準備ができ次第、直ちにシュバルツ平原へと向かう。騎馬軍団、出撃準備をせよ！」

オットー様が指令を出しました。

〜〜〜

シュバルツ平原ではアルベール様に率いられたロンドランド・ノーザリン連合軍とギル大臣の兵が一進一退の攻防を続けていました。

「うむ、さすがは国中に名をとどろかせている衛兵隊長マティアス・ヌワール。強い…。」

アルベール様が思わずつぶやかれました。

「アルベール様！第三隊が崩されました！」

しかしアルベール様は冷静です。

「慌てるな！備えは何重にもしてある。速やかに他の隊に合流させよ！」

「はっ！」

～～～

込むと囲まれてしまうぞ！」

「はっ！」

～～～

「ありがとう、ビアンカ！」

「気合を込めた攻撃は確かにものすごい威力になるけど、あんたの場合その後に隙ができるからね。」

「ご、ごめん…。」

ガックリと肩を落とすペーターを見て、ビアンカは苦笑いしました。

「…しょうがないなぁ。ほら、背中はあたしに任せなさいよ。どうあがいたって、力はあんたには勝てないからね。」

「あ、ああ！よし、どんどん行くぞ！」

「すぐ調子に乗るんだから…。」

（師匠たち、早く着いてくれないかな…）

ビアンカはいつも一緒に戦う仲間がいなくて少し心細く思いました。

～～～

～～～

「ハハ、そうだったな。すまんすまん。で、何をしに来たんだ？」

「オットー様たちの騎馬部隊がパカロンの街を抜けて、まっすぐシュバルツ平原に向かったようだぜ。」

「じゃあ、すぐにここに敵兵が押し寄せてくることはなさそうですね、親方。」

ラルフが少し安心したように言いました。しかし、ローレンツは口元を引き締めました。

「いや、こういう時こそ俺っちたちが頑張らなきゃならない時だ。さあ、武器の手入れを続けるぞ。」

「わっかりました、親方！」

「へへっ、ここは心配しなくても大丈夫そうだな。」

マチルドが満足そうに言いました。

～～～

一方、ローズはリリーのところにいました。侍女長であるリリーはお城の召使たちに指示を出しています。

「その道具は向こう！それはあっち！」

てきぱきと指示を終えたリリーはローズを見ました。

「…何だい、ローズ。青白い顔してるじゃないの。休んできたらどうだい？」

ローズはうつむいたまま首を横に振りました。

「心配だねぇ…。大丈夫だよ。さっきマチルドから報告があってね、オットー様たちが今街中を通り抜けたんだってさ。シュバルツ平原にもうすぐ着くらしいよ。」

「でも…嫌な予感が、する…。」

ローズはそうつぶやき、天井を見上げました。

～～～

「うぬ！兵力を分散させていたか！」

オットー様は唇をかみしめました。すると、オリバーが言いました。

「オットー様！私たちはあの射撃隊の背後に回り込み、攻撃をかけます！」

「おお、ローゼンハイン殿！どうかよろしく頼む！」

オリバーは仲間たちに向き直りました。

「パトリック！アリス！エミリー！頼んだ！」

「よし！わかったよ！」

「うむ、行くぞ！」

「しっかりつかまっていてください！」

三人の魔術師を後ろに乗せ、三頭の馬は戦線から離れて行きました。

～～～

「うおおおおおっ！」

ハンスとレオンは槍を構えると敵兵の中に突撃して行きました。

「あははっ、元気だね。ようし、あたしたちももう一頑張りしようか！」

「おおっ！」

ペーターとビアンカももう一度敵の中に突っ込んで行きました。

～～～

「頑張りましょう。」

「パトリックは敵兵の中を駆け回って混乱させると同時にモニカをしっかりアシストしてやってくれよ。」

「ハハッ、なかなか難しい注文をつけてくれるね。」

パトリックは苦笑いしました。オリバーはニヤリと笑いました。

「フフッ、信用しているからこそさ。」

「任せてくれよ。」

二人のやり取りを見ながらアリスとエミリーが笑っています。

「何だか悔しいですね…。わたくしたちが信用されていないようで。」

「うむ。ここで一手柄立てれば信用度も好感度も上がるかもしれぬ。行くぞ、エミリー！」

「はいっ！お姉さま！…え？好感度？」

「うおっ！？」

「ひゃあっ！？」

アリスとエミリーがものすごい勢いで馬を走らせたため、オリバーとイザベルは振り落とされそうになりました。パトリックはそれを見て笑いました。

「ハハッ、張り切ってるな、二人とも。よし、モニカ。私たちも行こう！」

「はいっ！準備はできています！」

「よしっ！」

パトリックとモニカもフランソワに乗って丘を駆け上がりました。

～～～

射撃兵の一人がオリバーたちに気づきました。

「見ろ！たった三騎で突っ込んでくるぞ！」

「受け取れっ！」

アリスが毒矢を放ちました。

「ぎゃあっ！」

更にオリバーが叫びました。

「グレイブ！」

途端に、弓を構えていた兵士が数人、バタバタと倒れました。

「ま、魔術師がいるぞ！」

「慌てるな！射殺せ！」

「そうはさせない！」

一番後ろから丘を登ってきたパトリックが、勢いをそのままに兵士の中に突っ込んで行きました。敵兵は大混乱です。逃げ出そうとする兵士もいます。

「戦いを前に逃げ出すなんて。兵士失格ね。」

エミリーが地面に向かって炎の矢を放ちました。草が燃え上がり、兵士たちの逃げ道をふさぎました。エミリーは見下したような目で言い放ちました。

「…逃げられないヨ？」

（エミリーさんが…時々恐ろしい…）

「イザベルさん、早く、魔術を！」

エミリーがイザベルに言いました。

「は、はい！ポイズンブレス！」

逃げ場を失って右往左往していた兵士が次々と血を吐いて倒れます。毒に侵されているのです。イザベルが薄笑いを浮かべて言いました。

「地獄に堕ちてしまいなさイ。」

（イザベルさんが…時々恐ろしい…）

「さあ、あちらにも敵兵がたくさんいるようです。エミリーさん、行きましょう。」

イザベルがエミリーに言いました。

「は、はい！ハァーッ！」

エミリーはアンヌのお腹を蹴りました。アンヌはものすごい勢いで駈けて行きました。

～～～

一方、歩兵団のところに更に心強い援軍が到着しました。

「ヴォルフ・ザックスと、誇り高きユーラン砦の兵士が到着したぞ！さあ、マティアスの兵を蹴散らそう！」

「皆の者、かかれ！」

ガスパールが声を張り上げました。

「うおおおおおっ！」

アルフォンソ三姉妹の忠実な部下、ガスパールに率いられたユーラン砦の兵は死を恐れない勇敢な兵ばかりです。彼らは雄たけびをあげ、敵兵に突撃して行きました。

～～～

「ぐあああああっ！…くそっ！マティアス隊長ーっ！」

モニカの魔術を受けた一人の兵士が絶命間際に放った矢は、オリバーの右腕をかすめました。

「くっ…。」

オリバーの腕から出る血を見た瞬間、アリスは真っ青な顔をしました。

「オリバー！大丈夫か！」

「大丈夫、かすっただけだ…。」

「傷は大丈夫ですが、出血量が尋常ではありません。矢じりが特殊な形をしていたようですね…。」

イザベルがオリバーの傷を見て言いました。

「…さすがは衛兵隊長マティアス直属の兵士、勇猛な兵士ばかりだ

…。…んっ？あれを見ろ！」

仲間たちはオリバーが指差した方向を見ました。一人の兵士が馬に乗り、猛然と丘を駈け下って行きます。その一直線上には…、

「あれはアルベール様の本陣です！」

「単騎で突っ込もうというのか！」

アリスとエミリーが叫びました。パトリックが言いました。

「あれは私たちが止める！君たちはここの残存兵を頼む！」

「任せた！」

パトリックは敵兵の後を追い、猛然と丘を下りました。

「モニカ！魔術を頼むよ！」

「はいっ！アイスドゥーム！」

モニカが叫ぶと、兵士は足元から徐々に氷漬けになって行きました。

「くそっ！でもこの距離なら！」

敵兵は馬上から最後の力を振り絞って大きな弓を引いて最後の矢を飛ばしました。その矢は一直線にアルベール様に向かって飛びました。

「アルベール様！」

「ぐっ！」

矢はアルベール様の体を貫きました。

「余もここまでか…。あとのことはフランツ殿に任せることとしよう…。」

アルベール様は無念そうに目を閉じました。

「アルベール様！アルベール様！」

～～～

ランツは生きているし、敵兵の数もまだまだ多い。その上我らは射撃隊を失った。ここでこれ以上戦うのも危険だ。

それに、アルベール・アズナヴールを失ったということは敵にとっても大きな損失だ。これ以上こちらも無駄に戦力を減らすことはない。撤退するぞ。」

「は、はっ！そうでした！…ようし、撤退だ！」

マティアスの兵はクルッと向きを変えると、撤退して行きました。

～～～

ヴォルフが報告しました。

「そうか…。やはり一筋縄では行かぬ相手であったな。」

オットー様が唇を噛んだその時、伝令兵が駆けつけてきました。

「も、申し上げます！只今の戦闘で、アルベール・アズナヴール様がお亡くなりに…。」

「な、何だと!?アズナヴール殿が…。」

「重大な、損失です…。」

オットー様も、ヴォルフも、周りの兵士たちもしばらく茫然としていました。やがてオットー様がおっしゃいました。

「…ともかく、戦いには勝ったのだ。パカロンへ引き揚げるとしよう。」

「はっ…。パカロンに帰るぞーっ！」

ヴォルフの声に、オットー様たちの軍も少しずつパカロンへと引き揚げて行きました。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４２．シュバルツ平原の戦い」（後書き）

これまでで最大規模の戦闘に勝利したオリバーたちやオットー様たちですが、敵兵の最期の一矢によってアルベール様が命を落としてしまいました。これはマティアスが言った通り、かなりの痛手となってしまいました。

次話ではオットー様の軍勢がパカロンへと凱旋します。アルベール様のことを心から尊敬していたローズはアルベール様の訃報に茫然としてしまいます。そしてある決意をするようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにオットー様たちの軍勢の損失状況ですが、騎馬部隊はヴォルフからの報告があった通り三割失われ、歩兵団も四割も失われてしまいました。一方マティアスの軍勢は射撃部隊を壊滅させられて先に撤退したとはいえ、全体の二割ほどを失うにとどまりました。一応はオットー様の勝利ということにはなりますが、その代償はとても大きなものでした。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４３．ローズの相談」（前書き）

シュバルツ平原での戦いで、アルベール様が交戦中に命を落としてしまいました。痛手を負いながらも、オットー様たちはパカロンへ凱旋してきました。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４３．ローズの相談」

ローズとマチルド、ローレンツとラルフがパカロン城のバルコニーから夕暮れの街を見下ろしていました。

「戦いは…どうなっているんでしょうか…。」

ラルフが心配そうに言いました。

「少なくともオットー様たちの軍が負けた時にはここにはマティアスの兵が押し寄せてきているはずなんだ。負けてはいないさ。」

ローレンツが自分に言い聞かせるように言いました。

「そうそう。きっと大丈夫さっ。なっ、ローズ。」

励ますようにマチルドが言いましたが、ローズはずっと青白い顔で不安げな表情を浮かべています。ローレンツもローズを気遣っています。

「…心配なのはわかるが、あんまり気にしすぎると精神的に参っちまうぜ?寝室で休んできたらどうだ?」

ローズは青白い顔のまま首を横に振りました。

その時、遠くから軍楽隊の奏でる音色が聞こえてきました。明るい曲調です。

「おおっ！こりゃあ戦勝祝いの音楽じゃないか！心配することはなかったぜ、ローズ。オットー様の軍の大勝利だ！」

ローレンツの言葉に、ローズはようやく顔をほころばせました。しかし、その瞬間、遠くに聞こえる音色が暗く悲しいものに変わりました。

「うおぅ？急に音楽が変わっちまったぜ？」

マチルドがびっくりしたように言いました。

「親方、これは何の音楽なんですか？」

ラルフの問いかけにローレンツは黙ったままです。険しい表情をしています。

「親方？」

「私は、知ってる…。これは哀悼の音楽…。」

ローズがこれまでにないほど不安そうな顔をして言いました。

「つまり、今回の戦いで命を落とした兵士を弔っている、っていうこと？」

ラルフも不安げにたずねました。

「…その中でもこの音色は、位の高い人物が戦死した時に奏でる音色だ。」

「な、何だって！？」

ローレンツの言葉にマチルドは思わず声を上げました。突然ローズが立ち上がりました。そして、部屋から駆け出そうとしました。それをローレンツが呼びとめました。

「待てよローズ！…オリバーに言われただろ？今は兵士を迎えよう

と街に人があふれている。そんなところに行くのは危険じゃないのか？

あの時はイザベルとビアンカがいたって危なかったんだ。俺っちたちじゃ、お前を守ってやれることは出来ないぜ？まずはオットー様たちが城の中に入ってこられるまで待てよ。」

ローズはハッとしたように立ち止りました。そしてローレンツたちのところへ戻ってきました。

～～～

まず傷だらけのレオンを先頭に、ハンス、ペーター、ビアンカが入ってきました。

「ハンスもペーターも、盛大にやられたもんだな。」

マチルドが冷やかすように言いました。

「まったくだよ。今まで戦ったこともないような強い相手だった…。」

「生きているって、素晴らしい…。」

「何を言ってるんだか。でも実際に手ごわい相手だったよ…。」

ビアンカが少し青白い顔で苦笑いしながら言いました。ローレンツはびっくりしたようです。

「ビアンカ、お前も怪我を…。」

「アハハッ、あたしはまだ大したことないよ。…問題はあれかな。」

その時、ローズがサッと走り出しました。

「あ、おい、ローズ！」

「大丈夫、大丈夫。…まあ、ローズがすっ飛んで行ったのも無理はないよ。」

カトリーヌの上で、傷ついたオリバーが蒼い顔をしていました。アリスが走ってくるローズに気づきました。

「む、ローズか。…よし、少々悔しいが、後はお前に任せるとしよう。吾れもかなり疲れてしまったからな。オリバー、降りられるか？」

「ああ、ありがとう。」

「先生…。」

ローズは心配そうにオリバーを見ました。

「ハハッ、確かに血はたくさん出ているが、心配するほどではないよ。傷は浅いし、イザベルもすぐに治療してくれるらしいしな。」

「お前たちはまだ被害が少ないようだな。」

ローレンツが馬上の仲間たちを見上げて言いました。

「うむ。事実、怪我をしたのはオリバーだけだ。」

「もちろん、手ごわい相手であることには変わりありませんでしたけどね…。」

アリスとエミリーがため息をつきながら言いました。

「無事だっただけ良かったじゃないか。…それはそうと、さっき哀悼の軍楽隊の音を聞いたんだが…、どなたかお亡くなりになられたのか？」

ローレンツが言うと、エミリーが暗い顔をしました。

「ええ、実は…、」

すると、エミリーが話す前に誰かの大声が聞こえました。

「あああああああああああああっ…！」

ローレンツたちは驚いて声のした方を見ました。ローズが体を震わせてうずくまっています。オリバーはその横で悲しそうな顔をしてローズを見ています。エミリーが声を落とし、ローレンツに言いました。

「…亡くなられたのは、アルベール様なのです。」

「何だって…。」

オリバーと仲間たちは、心配そうにローズを囲みました。ローズは起き上がる気配も見せません。その横を、真っ黒い棺が通り過ぎていきます。

「とにかく、傷ついた方々には治療が必要ですから、私についてきてください。そうですね…マチルドさん、ローズさんを静かな場所に連れて行ってあげてください。」

イザベルが言いました。

「あ、あいよっ…。」

マチルドはローズの腕を肩に回すと、お城の中に入って行きました。

「…師匠、行こうよ。」

「ああ…。」

オリバーは心配そうにローズの後ろ姿を見ていましたが、ビアンカに促され、イザベルに着いて行きました。

～～～

しっかりと遺志を継いでみせる。必ずだ。」

オットー様はアルベール様の棺の前で口元をキリリと引き締めて誓いました。

～～～

「あ、はい！イザベルさん、ローズさんが…。」

「はい？どうしたんですか？」

すぐにイザベルがやってきました。ローズが言います。

「イザベルに相談したいことがある…。誰にも聞かれたくない…。上がってきて…。」

イザベルは困った笑顔を見せました。

「何を言っているんですか。私はローズさんのように身軽ではありません。そんな高いところには行けませんよ。」

すると、ビアンカが言いました。

「じゃああたしたち、師匠たちのところに行くよ。そうすれば二人っきりになれるでしょ？」

「そうですね…。そうしましょうか。」

モニカも賛成しました。

「ありがとう…。」

ローズがお礼を言いました。

「よし、じゃあ師匠たちの部屋に行こっか！」

ビアンカが他の女性メンバーを連れて、部屋を出て行きました。ローズがスタッとバルコニーに飛びおりました。

「それで、相談というのはなんですか？」

ローズがイザベルの耳元で何かを話しました。イザベルは目をまん丸にしました。

「…不可能ではありません。でも大変ですよ？」

ローズはしっかりとイザベルを見据え、頷きました。

「かまわない…。出来るのなら…。」

「…わかりました。では早速明日の夜から始めましょうか。」

～～～

「マティアス！何という失態を犯したのだ！」

ギル大臣は顔を真っ赤にしてマティアスを罵倒しました。

「…お言葉ですが、大臣。我らの軍はレバリー城主のアルベール・アズナヴールを葬り去りました。」

「お黙りなさい、マティアス！あなたはパカロンを攻め滅ぼすことも出来ず、オリバー・ローゼンハインを捕縛することも出来ず、戦闘を放棄して逃げ帰って来たのです！」

レイもギル大臣の傍らで喚いています。

「もうよい、お前に難しい命令を出すのはやめだ。お前はただ、オリバー・ローゼンハインを捕らえればよい。ただそれだけでよい！さあ、もう下がれ！」

「はっ…。」

マティアスは終始無表情で広間を去りました。

～～～

兵士はマティアスにまくし立てますが、マティアス本人は目を閉じたままです。

「…今後の行動には何ら影響はない。」

「た、隊長！しかし三姉妹の長女、アブリル・アルフォンソ様はあなたの、」

すると、マティアスは眼光を鋭くしました。

「…そのことはここで言うな。」

「も、申し訳ございません。しかし、それでもあなたは…、」

「…私が今するべきことはオリバー・ローゼンハインの捕縛、『ただそれだけ』だ。」

マティアスは確固とした表情で言いました。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４３．ローズの相談」（後書き）

アルベール様の死で深い悲しみにくれたローズは、何かを決意したようですが…？そしてマティアスの心にも何らかの変化が見られた可能性があります。今後どうなっていくのでしょうか？

次話では減ってしまった兵士を補うため、ハンス、マチルド、アリス、エミリーの四人が代役としてパカロン城の見張り台に立つことになります。ハンスとマチルドにはなかなか厳しい役目のようですが…？どうぞお楽しみに！

ちなみにパカロン城ではオリバーたちは男女一部屋ずつ大きな部屋を与えられています。オットー様は専属の召使もつけようと提案しましたが、さすがにオリバーも辞退しました。

では次話をお楽しみに！

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４４．見張り役のお手柄」（前書き）

シュバルツ平原での戦いでオットー様たちの軍勢は一時的に大幅に数を減らしてしまうことになりました。城内の警備にも一苦労しているようです。そこでオットー様はオリバーに何やら頼みごとをしたようです。

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４４．見張り役のお手柄」

ハンスとペーターが部屋で話をしていました。

「最近、ローズとイザベルさんが夜な夜な別室にこもって何かしてるらしいッスね。」

「へぇー。ビアンカなら知ってるんじゃない？」

「それが、ビアンカも知らなかったッスよ。」

「へぇー。いったい何をしてるんだろうな。」

ハンスはあまり興味がないようですが、ペーターは何やらニヤニヤしています。

「フ、フフッ、もしかしたら、夜に二人っきりで部屋にこもってすることなんて…、」

「はいはーい、マセガキさん、ストップ。妄想はそこまでだよ。」

「ぎゃあああああっ！」

ビアンカが思いっきりペーターの首を絞めています。

「苦しい！ビアンカ！苦しいって！」

「…ビアンカ、ここに何しに来たの？」

ハンスが冷めた目でペーターを見ながらビアンカにたずねました。

「いやぁー、バカなガキんちょを成敗してやろうかと、」

「真面目に答えてよ…。」

ハンスがため息をつくと、ビアンカはつまらなさそうに頬を膨らませました。

「むー…つまんないなぁ。いやさ、師匠が呼んでたんだよ。師匠のところに行って。大広間にいるはずだよ。」

「俺だけ？」

「うーん、あんただけじゃないと思うよ。マチルドとアリスとエミリーも呼んでた。」

「ふーん…。まあいいや、行ってくるよ。」

ハンスは部屋を出て行きました。

「よろしくねー。あたしはもう少しペーターとスキンシップを図るよ！」

「す、スキンシップって…ぎゃあああっ！」

～～～

アリスとエミリーは助け船を得た、というような表情を見せました。

「うむ、ハンスか。ちょうどよかった。大広間へ行こうとしていたのだが、迷ってしまったのだ。」

「俺も大広間へ行くから、一緒に行く？」

「ありがとう、助かるよ。」

感謝する二人を見て、ハンスは苦笑いしました。

「街中だけじゃなく、建物の中も苦手なんだね。」

「うむ…。どの曲がり角も同じに見えてしまうのだ…。」

「間違えてクララ様のお部屋に行ってしまった時は本当に焦りましたね…。」

（この二人を歩かせるのは本当に危険だ…）

ハンスは引きつった表情を見せました。

〜〜〜

オリバーに小言を言われ、アリスは心の底から落ち込んでしまったようです。オットー様が笑っておっしゃいました。

「いや、余のことは気にせずともよい。頼みがあるのは余の方なのだ。

…今回のシュバルツ平原での戦いで、余の兵は大きな損害を被った。城を警備する兵も大きく数を減らしてしまったのだ。そこでローゼンハイン殿に協力を頼んだのだ。」

「お前たち四人、少しの間見張り台での夜の見張り役をしてくれないか？俺の仲間の中じゃ、お前たちは見張りに特化していると思うんだが…。」

「うむ、もちろんだ。当然引き受ける。汚名返上の良い機会だ。」

アリスが真っ先に答えました。他の三人も異存はありませんでした。オットー様はたいそう喜ばれました。

「おお、ありがたい。ではさっそく、今夜からよろしく頼みたい。見張り台は西と東、二つの塔にある。二人ずつ入っていただければ十分なはずだ。」

「わたくしとお姉さまが西側の塔に入ります。」

アリスが言いました。

「じゃあ、あたいとハンスは東の塔に行くぜ。」

マチルドも言いました。

「よろしく頼んだぞ。四人とも。」

「本当に助かる。」

オリバーは四人を励まし、オットー様は心から感謝されました。

～～～

突然マチルドが言いました。ハンスは怪訝そうにマチルドを見ました。

「何で？」

「だってよぅ、キンフィールドは西側にあるんだぜ？つまり敵がくるのは西側ってわけだ。東側なんて、トリポートに通じる街道しかないんだぜ？つまらねぇよ。」

「そう言うなって。何も起こらないなら起こらないでいいだろ？」

「そうだけどよぅ…。」

それでもマチルドは不満そうです。

結局、何事もなく夜が更けて行きました。

～～～

次の日もハンスとマチルドは東側の塔に立ちました。

「マチルドはさぁ、女の子なのに本当に口が悪いよなぁ。」

ハンスの言葉にマチルドはムッとしたように答えました。

「しょうがねぇだろー？あたいは物心ついた頃から山賊団にいたんだからよ。」

「ふうん。両親はいないの？」

「直接は知らねぇんだけど、あたいの生まれた村はギル大臣の私兵の略奪のせいで焼き払われたらしいんだ。それで山賊団に拾われたんだ。」

「あ、う。」

思わぬマチルドの過去に、ハンスは目を白黒させました。しかし、マチルドは大して気にしていないといった風に言いました。

「だからよ、お前とおんなじってわけだよな。」

「あ、そ、そういうことか。」

ハンスはそれを聞いて少し安心したようです。

「…でもよぅ、お前だって年上に対する口のきき方がなってねぇよなー。」

「え？」

「あたいはお前より年上だぜー？ローズもビアンカもモニカもお前より年上。と言うか、お前が一番年下なんだぜ？」

マチルドが威張ったように胸を張りました。

「いやぁー、何かさぁ、少なくともマチルドは年上って言ってもそんなに年上って言う感じが…。」

ハンスの言葉に、マチルドは思わず立ち上がりました。

「な、何だってーっ！？ビアンカとかはともかく、あたいのことは敬えよっ！」

「な、何だよ！マチルドだって誰に対しても乱暴な口のきき方してるじゃないか！」

「うるさい！うるさい！うるさーい！」

「な、殴ることないだろ！」

～～～

「ここまで声が聞こえてくるぐらいですものね…。」

～～～

「…ぐぅ。」

ハンスはいびきをかいています。

「…すぅ…。」

マチルドは寝息を立てています。

と、そこへ、彼らと同じようにオットー様に頼まれて夜の城内の見回りをしていたガスパールが見張り台に顔をのぞかせました。

「む…？こらーっ！お前たち、何をサボってるんだ！」

～～～

「あ、す、すみません。」

ハンスは素直に謝りましたが、マチルドは口をとがらせました。

「うう、だってよぅ、何もすることがなくて退屈なんだよぅ…。」

「甘ったれるな。アリスとエミリーはキッチリと見張りの役目をこなしているぞ?…そんなに眠いなら、ずっと寝たままでいられるようにしてやろうか?」

オリバーが薄笑いを浮かべながら言いました。ハンスとマチルドの頬を、冷や汗が一筋流れました。

「え、そ、それって…、」

「さあ、どうとるかはお前らしだいだな。フフフ…。」

オリバーは不敵に笑うと、二人の方へ指先を向けました。

「ま、マチルド!早く行くぞ!」

「あ、あいよっ！」

ハンスとマチルドは大慌てで部屋を飛び出して行きました。オリバーはとてもおかしそうです。

「おいおい、脅かしすぎじゃねぇか？」

レオンが苦笑いしています。

「ハハッ。…まあ、確かにまだ大人になっていないあの二人に夜通しの見張り役はつらいかもしれないがな。とは言え、自分自身でやることを承諾したんだ。責任は持ってもらわないとな。」

～～～

「いや、先生も本気で使うつもりはないと思うけど…。だいたいマチルドもいまだに先生の寝込みを襲撃したりしてるんだろ？」

「だって、オリバーが丸腰同然になる時なんて、寝てる時くらいだろ？それでようやく勢力伯仲ってやつだぜ？」

「…まあ、何を言ったって結局ローズに防がれてるわけだけどさ。」

ハンスが言うと、マチルドは困ったように首をかしげました。

「…あいつ、いったいどうやってあたいの気配を感じ取ってるんだろう…。あたい、気配を殺すことだけは自信あるんだけどなぁ…。」

「気配を殺すのなら私も得意…。」

「うわあああああっ！」

突然背後に現れたローズを見て、マチルドは飛びあがりました。

「ロ、ローズ！何でここに！」

ハンスもびっくりしたようです。ローズは少し勝ち誇ったような顔をした後で言いました。

「先生に二人を見張るように言われた…。」

「あれ？イザベルさんと何かしなくていいの？」

「今日はお休み…。イザベルが…。」

「ふーん。…見張り役を見張るのって、絶対おかしいよな…。」

ハンスが納得いかないような顔をしましたが、

「黙って見張る…。」

「う、うん…。」

ローズに一蹴されました。

結局その日も何事も起こりませんでしたが、ハンスとマチルドは居眠りをしようとするたびに目を爛々と輝かせたローズに蹴飛ばされ

ていました。

～～～

ハンスは慌ててマチルドの口をふさぐと、大広間から退散しました。
オットー様はそれを見てたいそうおかしそうにされました。

～～～

「静かだなぁー。星空も綺麗だし。山の中で見る星空も綺麗だったけど、こうやって静かな街を見下ろして、それから上を見上げると星空が広がってるってのもいいなぁ…。」

マチルドはのんきに言いましたがハンスは少し顔をしかめました。

「…静かすぎる。」

「ああ、そうだよなー。何でもないお前の声が大きく聞こえるぜ。」

「そうじゃないよ。…鳥の声なんかが全然聞こえないんだ。」

「へぇー。鳴きすぎて今日はお休みしてるんじゃねぇの?」

マチルドの言葉に、思わずハンスは吹き出しました。

「何だよ、マチルドに似合わず可愛いこと言うじゃないか。」

「うっ、うるせぇよ!」

マチルドがハンスを蹴飛ばしました。

「痛ッ！…ん？ねえ、でもやっぱりおかしいよ。ほら、あの丘の上を見てみなよ。風の音が全く聞こえないのに丘の上の木があんなに揺れてる。」

それを聞いてマチルドがバカにしたように言いました。

「丘だって？何言ってるんだよ。あの丘は草ばっかりで木なんか生えていないだろ？…え、ちょっと待て！」

暗闇でもある程度目の効くマチルドは見張り台から体を乗り出すと、じっと丘の方に目を凝らしました。

「や、ヤバいぜ！あれは木なんかじゃない！兵隊だ！」

マチルドが顔を真っ青にしています。

「何だって！？じゃあ、トリポート方面から攻めてきたって言うのか！」

「ハンス、お前は報告に行って来いよ！あたいは鐘を鳴らす！」

「わかった！」

ハンスが見張り台を飛び出すと、マチルドが見張り台に備え付けてあった鐘をけたたましく鳴らしました。眠っていた兵隊たちは慌てて起き上がり、出撃の準備を始めました。

～～～

「敵がトリポートに攻め込む直前に何とか到着することができた。このパカロンだけではなく、トリポートも同時に救うことができたのだ。礼を言おう。」

ハンスとマチルドは慌てて跪きました。

「褒美を取らせなければならぬな。…クララ。」

「はい…。」

クララ様が奥から重そうな小箱を持って来られました。

「受け取るがよい。遠慮はいらぬぞ。」

ハンスが小箱を開けてみると、中にはびっしりと金貨が詰まっていました。ハンスとマチルドはびっくりして尻もちをついてしまいました。

「お手柄だぞ、二人とも。」

オリバーも鼻高々です。

「吾れらも手柄を立てたかったが…、残念だな。」

「仕方ありません、お姉さま。」

アリスとエミリーが苦笑いしましたが、オットー様は二人にもおっしゃいました。

「いや、アリス嬢とエミリー嬢も本当にご苦労だった。すぐには無理だが、追って褒美を取らせよう。」

「ありがたき幸せ…。」

アリスとエミリーも顔をほころばせました。

「四人とも、本当に助かった。…兵の数もそろいつつある。余の兵団が復活した暁には、いよいよキンフィールドへ進撃しようと思う。その時はまたよろしく頼むぞ。」

「はっ！」

～～～

「俺が敵兵の気配を察したんだ！だから俺がもらうべきだ！」

「その敵を確認したのはあたいだぜ？あたいがもらったって何も悪くねぇだろ？」

二人は取っ組みあって騒いでいます。

「はぁ…。ガキんちょばっかり…。」

イザベルとビアンカはおかしそうに二人を見ていました。

～～～

～悪の大臣～　三章・最後の戦い　「４４．見張り役のお手柄」（後書き）

ハンスとマチルドが暗闇にまぎれていた敵兵を発見したことによってパカロンとトリポートの街が救われました。オットー様は二人に本当に感謝しています。

次話ではレオンが、ローズとイザベルが誰にも詳細を話さずに部屋にこもりきって何かをしていることに対して不満をもらします。そのことをパトリックとビアンカがオリバーに相談するようです。どうぞお楽しみに！

ちなみにオリバーや他の仲間たちもガスパールのように交代で城内の夜間警備をしていました。もちろん見張り役よりも負担は少ないですが…。

では次話をお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9426w/

悪の大臣

2011年11月22日04時03分発行